KAIZO

改造

六月號

1926



夏の訪れ

…夏の御買物は三越…

[illegible]

若葉の緑濃に輝しい夏は訪れました三越では夏の御用意品として、涼しくて美しい中形浴衣、夏洋服、夏帽子、夏座蒲団、蚊帳、簾、團扇など品が良くて値の廉いものを澤山に取揃へました。何卒御用命を願上ます

東京市駿河町

三越呉服店

改造六月號目次

書齋の人に
おすゝめする

サクラビール

と
良きサンドヰッチ

簡素なうちに
消化し易き榮養と
淨血の強き藥効



帝國麥酒株式會社





改造六月號目次

國語を

花魁春駒の、

奈良に居て

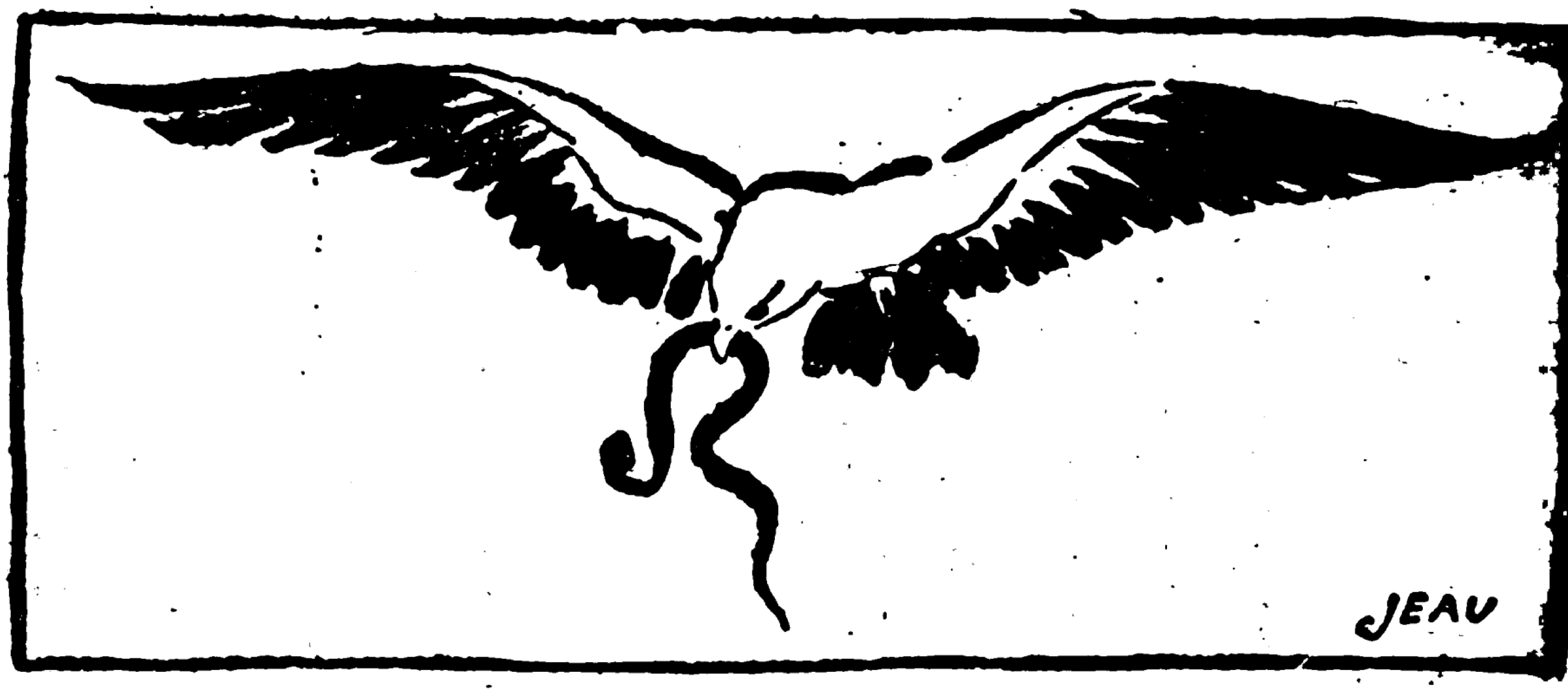
藝術の社會的[illegible]



……佐佐木茂索 著

……佐藤春夫 著

……廣津和郎 著



（六月號）

ジョンブルの一觀察

英國總罷業問題が單に彼等坑夫達の生活權の確立のためであるか、若くは政治的權力への第一步であるかは玆に論ぜない。ただ彼等自身の問題は、彼等自身で片付けやうとして國際的援助に俟たぬ氣魄と沈着振りは著しく認めねばならぬ。歐洲大戰爭の後をうけて、今回の物的損害のみでも我大震災以上であらうと思はれるのに、彼等が大事の前に悠容たる熊度は我々の學ぶべきもので、大震災當時殆んど發狂狀態にあつた我大和魂が必ずしも國粹論者の云ふやうにジョンブル魂に優つておるとも云へぬ。ジョンブルは道を行くにも默々としており、日曜は朝から教會でのどかな半日をおくる。彼等の國はもう古色蒼然の形があり、彼等は人として老境に入つた如くである。やたらに寔式儀禮ばり、家庭のまどゐにも正裝するさまを見ては彼等こそは遊閑階級の第一人者であるかの觀がある。すべてのことに地味で、鷹揚で、品格を尙ぶ彼等こそは將に保守的の典型のやうでもある。しかし彼等は一且こうと思ひ出すと生命——財產——のすべてを投出して革新への犧牲とはなり得る。そしてそれを實行するのがいかにも無造作に見える。彼等は亡び行く骸骨にはあらで眠れる獅子のやうなところもある。ヤンキイのやうに濶達で、新しさ、鋭さには充ちてはいないが、マドロス・パイプを啣へつつ悠然と岸壁に立つ彼等勞働者を見ればいかにも「愚直」そのものである。去つてパアリアメントの絹帽をのぞけばそこには「陰鬱」と「沈滯」と「狡猾」とが交錯する。

しかしその「陰鬱」や「愚直」を裏づけるものはウエストミンスターの鐘の聲である。古き教衣をまとへる大僧正のその姿である。新しき今回の階級戰の勝叭を相する前に亡び行く宗教——と思はれるこの宗教的信仰の偉大なる存在をも無視することは出來ぬ。英國の勞働運動が大戰後いちじるしく左傾し、勞資階級の對立が片唾をのましむるものあるにかかけらず徹底的鬪爭の未だ期待されぬのはこうしたジョンブルの統が根をはやしておるからだ。しかし這般の爭議がたとへ勞働者側の慘敗に歸するやうなことがあつても決して永久的に勝負があつたと云ふではなく、その以後に將來さるべき勞働者側の逆襲の日のあるべきを豫見すべきである——に次いで世界勞働運動に如何なる大波紋を惹起すべきかに想到せばそこに今世紀における勞資階級戰の視野がひろびろと展開されてくる。

戰後英國の步める道

——經濟的變化を中心として觀る——

在倫敦　蠟山政道

英國が歐洲戰爭の終結後、七年を經たる今日までの間、如何なる道を步み來つたか。主として經濟事情の變化を中心として、それを調べることによつて、今後の同國が如何に進み行くであらうか、それより我々の學ぶべき點は何邊に存するか、等に就いて若干の考察を遂げんとするのが、本文以下數編の趣旨である。英國を撰び、且つ戰後七年てふ時期を中心としたるは、特に英國が我々に敎ゆる所多しと云ふ譯ではなく、偶一九二五年の春、その國土を訪れ、親しくその事情に接し得たと云ふ偶然の事由に基くのである。勿論この偶然の事情のみを以てしては、この年を觀點として同國の戰後經營を觀察するの果して必要にして妥當なりや、又その廣汎な、從つて漠然たる論題を如何なる方法によつて觀察するか、等の疑問に對しては、充分なる理由とはならぬであらう。

これに對しては固より適當なる理由を有し得ない。最初より偶然の機會を與へられた過ぎないであるからして、か

ゝる觀察の意圖を最初より抱いてゐた譯ではない。しかし乍ら、私自身の特定の研究を進めて行く間に、この偶然なる時期そのものの意義の重大なる事に氣がつき始めたのである。又、その反省を爲さしめた動機及びそれに從つて試みた觀察の意義については、不充分ながら多少客觀的內容が存することの自信を持ち得た。たゞ、最後にその觀察の結果をして、偏跛な主觀的記述たらしめない危險に對しては、單なる事實報道を目的としない關係上、私は何等の確信を持たぬのである。從つて私自身の思想傾向そのものの內容によつて、色づけられるであらうことは、私の當初より豫期してゐる所である。たゞ、それの根據とする所の必ずしも、漫然たるものでなく、相當の共通性あるものたらしめようとして、私は最近の英國における思想的傾向に對しても、自己の力の許す限り、考察して見たのである。そして、自己の判斷に從つて、採用すべきものは採用し、捨つべきものは捨てた。

右の如き次第故、私は本文に入るに先ち序論として、三箇の記述を試みる必要を感ずる。その一は、觀察の時期に就いてである。本文がそれに當る。その二は、觀察の意義に就いてである。それに於いて、私は歷史的意義と政治的意義とを考察しようと思ふ。その三は、觀察の方法に就いてである。そこでは、私は餘りに廣きに亘ることの困難なると、且つ無用であることよりして、主として個人主義經濟思想と社會主義經濟思想を最近までの發展の姿において對比しつゝ、私自身の方法として如何なるものを採るかを示したいと思ふ。本論において取扱ふとする問題は、凡そ次の如き問題である。(一)產業能力──利潤、賃銀及市場、(二)金融政策と國民生活、(三)農業改革の意義、(四)炭坑業の改造等である、或は標題の命名は變化するかも知れないが、その言はんと欲する目的は、右の標題によつて推察し得る範圍を出でぬ。

英國が、如何に這般の大戰時に於いて、異常の經驗を嘗め、豫期せざりし、人間力と生產力の發生を經驗し同時に大なる創痍を蒙つたかに就いては、他の諸交戰國も同樣であるが、敢てここにその記述を要せぬであらう。又戰爭直後、内亂にも比すべき社會的混亂を見たることも多く語るを俟たぬ所であらう。しかし、今やその大戰の記憶や混亂の波浪も、次第に遠ざのき、收まり來つた、若し人ありて、その一九二〇年の事情と、それを支配せし思想を以て、その將來をトするの根據としたならば、餘程の達眼を有する人にあらざれば、多くの過誤を犯したであらう。けれども、今日は甚しく事情が變化した。若し又、一九二二年の當時にありて、今日を豫斷し、又將來を語つたとしても、尙且つ多くの訂正を要することとなつたであらう。しかし乍ら、今日においては、その間僅か二、三年の距りに過ぎぬけれど、著しくその困難なる事情が薄いだ。大戰てふ震源によつて惹き起されたる大地震も、過去七年間に起れる大小幾多の餘震によつて、漸くその動搖の波動を平靜ならしめたのである。勿論今後と雖も、尙幾多の餘震の繼續を見るであらう。しかし、それは今日の事情を根本的に覆すが如きものではあるまいと思ふ。これ、今日を基點として過年の經過を眺め、その間に發生し來れる要素を點檢し、近き將來少くとも二十世紀の第二の四半世紀を支配するであらうと想像される諸問題並びにそれを解決すべく提出されつゝある諸政策を吟味せんとする企圖の必ずしも不當にあらざるべし、と主張する所以である。

戰時における統制經濟が解體されんとした時、この原理が如何なる程度まで平時の經濟に應用さるべきか、と云ふ問題は、一九一九年の秋より一九二〇年にかけて、大に爭はれた。しかし乍ら、不幸にして、目前に迫り來れる實際上の

緊急問題とヴェルサイユ條約を支配した勝利國の反動思想と更に戰時に疲れる一般的な苦惱と困憊とは、相合して、戰前の事態に一向ら復歸せんとする輿論を形成し、この統制經濟の中より何物を採用し、改造の資料たらしむべきかを冷靜に考究すべき餘地を與へなかつた。政府の任命せる改造省及び諸種委員會の調査報告、大新聞の發表せる改造意見、その他私設の團體の作成せる研究資料等は空しく高閣に連ねられた。しかし乍ら、これらの改造意見が新なる空氣の下に再び顧みられる時が、今や到來しつゝあるのみならず、この當時においても、全然空しく捨てられたのではなかつた。そこには甚だ不徹底な、妥協的のものではあつたが、幾多の新らしき立法と行政施設が試みられたことを注意する必要がある。なぜなら、今日議論されつゝある諸問題は、多くその當時行はれたる立法及び行政施設の不充分な點を出發點としてゐるものが甚だ多いからである。その主要なるものを列擧して見よう。一九一九年の勞働爭議仲裁法（Industrial Courts Act, 1919）は正に戰時經濟時代の繼承物であつて、それは一九一五年の軍需品法（The Munition Act, 191 ）によつて設定された强制仲裁機關が、同法の廢止によつて統制經濟の解體されたにも拘らず、事實上その存在を繼續しつゝあつたものを改めて永久的の合法機關としたのである、これによつて、國家は、勞働省を通して、資本家團體及び勞働組合と密接なる關係を結ぶに至つた。一八九六年の勞働爭議調停法（The Consiliation Act, 18.6）によつて或る程度の調停は、これまでと雖も試みられて來たのであるが、戰爭中からして一方勞働組合の全國的組織が進展し他方資本家側によつて組合の事實上の公認が行はれるようになつて、同法による調停では、その効力無き產業が多くなつたので、多大の權限を賦與されたる仲裁法が生れるに至つたのである。勞働組合と國家との關係を見る場合に注目すべき立法及び行政施設の一つである。（Cole, Organised Labour, 1924 參照）

これと關連して同じく擧ぐべきものは、一九二一年の鐵道法（The Railway Act）である。一九一八年の總選擧の時

に、陸相チャーチルは、個人的意見ではあつたが、政府は鐵道國有を斷行する意思を有すると洩した位であつたが、大會社への其の後このこと無くして止んだことは記すまでもない。しかし戰時統制經濟の下にあつた大小幾多の鐵道が、三個の大組合に集中合併によつて、戰後においてはその面目を一新したことも事實である。これに對抗する勞働者側も新らしき立法の必要は生じ、その結合が行はれ、兩者の關係は、戰前の事態を以ては律するを得なくなつた。かくして新らしき立法の必要は生じ、單なる一九二一年の同法となつた譯である。それによつて設置された『全國賃銀局』（The National Wage Board）は、單なる爭議の調停、仲裁機關たるよりは、寧ろ賃銀の全國的決定に參加する國家機關と云ふべきである。同法の內容及び賃銀局の權能等に就いては簡單ながら左記の小冊子が便利である。（F. Lawley, Socialism and Railways, 1936）

更に農業に關する戰後の立法及び行政施設に就いて語る必要がある。農業は戰時に際して、不當に保護獎勵され、戰後に至つて不當に輕視される運命を有する。今回の歐洲戰亂における農業事情と雖も、この例に漏れるものでない。しかし乍ら、同時に歷史は文字通りに繰返すものでない。國內產業及び國際經濟の趨勢と相關連して、新なる方向を執らねばならぬ。今や英國の農業はその分岐點に立つてゐる。而して、戰事に際して執られたる保護獎勵の政策は、その生產政策（The Corn Production Act, 1917）價格、市場の統制政策（Orders of Food Controllers）總て時を異にしてであるが撤廢された。それに代つて、農業生產の存續と發展とを可能ならしむる立法の必要は、戰時の經驗よりして痛切に感ぜられてゐた所であり、寧ろ過度に見做された點もあつた。一九一九年ロイド・ジョーヂは、農業經濟調查委員會を設けて、その獻策を求めた。一九二〇年の農業法（The Agricultural Act）は、その成果と見てよい。この立法において注目すべきことは、一八七五年の農業借地法（The Agricultural Holdings Act）に始まつた借地權保護の立法は殆んど完成に近づいたと云ふことである。他方、自作農創設の目的を以てする小農地法（The Small Holdings Act）

も、一九二三年に改正されてこの方面への助長政策も一層進展されたのである。即ち日本流に云へば、小作權の確保も完成し、自作農設置の方策も充分完備したのである。（この二制度は或る程度まで矛盾する）然るにも拘らず、これらの立法は英國の農業問題に對して、毫も根本的の對策とはならないことが同時に明白になつたのである。換言すれば、問題は農業土地制度の社會政策的施設によつて、改善せらるべく餘りに遠大な所にあることが次第に明瞭となつた。農業生産者が從來その統制の及ばざる所に、彼等の困難の原因が横つてゐることとである。例へば、農業生産物への信用又は金融の道は、地主、商人（仲買）、高利貸等金融業を職とする方面にあらざる者によつて、種々なる形において、不當に又は不充分に供給されてゐるに過ぎず、又土地銀行の制度も大陸の諸國に比して殆んど問題にならない程未發達の狀態にあつた。又産業組合制度も、その消費組合の發達に比して、多くの困難の故に戰後に至つて漸く發達し始めた程度である。しかも一般市場における競爭の激甚なるに對しては、今後と雖もその急速なる發達を所期し得ないのである。

かくて、政府の注意がこの信用及び價格市場の問題に向つて集中されるに至つたことは極めて自然である。即ち、一九二一年の農業信用法（The Agricultural Credits Act）は、極めて不徹底なる程度であるが、この方面への立法の第一歩と見做し得る。今年の議會において、他の諸政黨の徹底的な改造案の喧傳されるに促され、その對案として、保守黨政府の提案せる議案の一は、この「信用法」を一層擴張し、新なる農業信用機關の設置を試みんとするものなのである。その詳細に就いては、ロイド・ジョージの專ら宣傳しつゝある自由黨の農業改革案や勞働黨内における二、三の對案等と比照して、後篇において論じようと思ふ。とまれ、問題の範圍が局部的でなく、生産、信用、價格の諸方面を統一的に取扱はねばならぬことが分明となつた。この意味において、戰後の英國農業問題は、戰前のそれと全く面目を一新しつゝある。

最後に擧げたいと思ふのは、炭坑業問題である。昨年七月全國を内亂を陥れる危險に迫つた罷業問題も、政府の補助金支出によつて、今年の五月まで一時的に解決を見、その間委員會の設置によつて、今やその報告の提出を英國の朝野を擧げて待つてゐるのである。その補助金額が、既に平均一ヶ月二百三十萬磅に上つてゐること丈けを見ても、容易に事態の重大なることが知れる。炭坑罷業問題は、戰前よりの常習的な古い問題であつて、敢て取りたてて論ずるまでもないが、今回の問題の裡面に潜む意義を考ふるときは、それは從來度々繰返され、戰後に於いても一九一九年のサンケー報告を生んだ罷業や、その後繼續的と言つてよい程行はれた罷業の場合に比して特別の注意を拂ふ必要がある。それには三つの點を考察する必要がある。第一は外國市場に於ける英國炭の需要の絶對的減少である。各國炭坑業の發達、水力電氣の發達、石油エンヂンの利用等による石炭消費量の減退である。第二は、生活程度の向上による生産費の増加の爲め、競爭價格を維持し得ざることによる。英國炭の相對的減少である。第三は、炭坑業の盛衰が他の運輸業及び一般の製造業に及ぼす影響とその異れる生産部門間に存する相互關係に於て占むる斯業の地位である。これらの諸點を考察に入れて、この問題を研究する時、その將來に於ける解決方法は、現代經濟問題の究明に思を潜むる者にとつて深甚の興味を湧かすに足るものがある。如何に實際上の解決を見るかは、近き將來が語るであらうと思ふが、注意すべきは傭主側及び坑夫側、この兩者に對する政府及び一般輿論の態度は、今や經濟組織の根柢に觸れたる斯業の運命を見て不知不識の間、各異れる意見を持しながらも、一箇の共同意識に導かれつゝあることである。なぜなら、それは各階級に超越した國民問題たることが認識されてゐるからである。しかも國民の名において一階級の他階級の壓迫は、もはや不可能の時代となつてゐる。從つて眞にその存在に値する職能と力量を有する者及び方法のみが、最後の勝利を占めるであらう。それは階級の故ではなくして、一國の國民經濟の最もよき運用者たるが故である。一九一五年に制定された英國炭坑業

問題は、資本主義制度に代るべき制度——それが如何なる名によつて呼ばれやうとも——の機構、組織、技能等の諸相を我々の眼前に展開する大規模な出發點たる意味において、特筆大書するに値しよう。委員會の報告の發表を俟つて更に評論の機會を持ちたいと思ふ。

讀者よ、右に擧げた諸方面における最近の諸問題とそれらの當面せる傾向を斷片的な、孤立的な現象と見做されないことを希ふ。そこには從來個人利益の追求の場面と見做され、自由競爭の修羅場と承認され來つた經濟社會に徐々として新らしき統一的な社會的秩序が生れつゝあることを示してゐるのである。それは、國家統制と簡單に說明せらるべく、餘りに複雜である。從つて、それの論理的歸趨を國家社會主義とか、集産主義とか、十九世紀において主張された社會主義理論の描ける姿と見ることは事實に甚だ遠ざかることになる。又サンヂカリズムやギルド・ソシアリズムの偏局的意見を以てしては、一層說明に困難である。これらの社會思想は、その爲すべき使命を果して、今や全くその姿を沒し去つたと云つても過言でない。その行方を尋ねることは、正に歷史家の任務に屬する。爭ひ難き現象は、大産業とその相互關係とが、私人の利潤追求の目的物ではなくして、國民的職能たる公共事業の性質を現し來りたることである。このことを承認せずしては、數億圓の金を、恰も國防費や教育費に投ずるが如く、假令重要産業の危機を救ふために投ずることゝは云へ、一般納稅者が之を甘受するの理が解けないであらう。それは資本家の利潤補助の爲めではなくして、巨大なる內國市場の消費者たる勞働者階級の賃銀の削減を避け、その購買力の減退を防がん爲めなのである。これを根據とせずして、勞働黨が政府案に贊成するの理由、他の産業部門の資本家代表者の之に應ずるの理由は、適當に理解せられない。しかも同時に、この方法が最も拙劣なる窮策である以上、これを永久的方策とすることは不可能であり、從つて根本的改造を企てねばならぬことに輿論の一致する所以である。而して、それは今日より將來に向ふ間道で

る。

然るに、頭を回らして、過去を顧みるならば、この趨勢は産業內における個人、或る特種の國民部分に、既に業に出現せられ、一九二五年はその問題に對しても、一の紀念すべき年であつた。それは外でもない。所謂社會政策の發達完成それである。一八〇二年のランカシャア紡績業に施されたる少年勞働者保護を目的とする法令を出發點とする工場法の發達とその內容を見る時は、過去一世紀間における工場組織とその規律は、この立法及び行政のみの觀點より見ても、著大なる變化である。この變化を前提とせずしては、カール・マルクスが資本制經濟の矛盾を說く場合の觀點となした社會的必要勞働の概念も、何等の具體的內容を持ち得ないのである、なぜなら、資本家生産の下における集合勞働又は團體勞働の眞個の意義は、それが前資本家生産と根本的に區別される點として、屢々論者によつて指摘せられる如く、道具を持たざる即ち生産資本より離れたる勞働者によつて營まれるといふ消極的意義にのみ存するのでは無くして、寧ろそれが一個の規律と秩序とを以て統一的の作業を營ましめられると云ふ積極的意義に存するが故である。自由契約と利潤追求を目的とする資本家生産が、その胎內にかくの如きその本質と矛盾する組織を必然的に生み出すことを覯破したることは、マルクスの天才的頭腦の功績である。又十時間勞働法を以て名ある工場法（一八三三―四七年）の通過に對するマルクスの意見も亦注目に値する。しかるに、彼の『資本論』に於ける餘剩價値論の前提その他を誤解し、又は彼の多面的性質の結果たる社會革命論丈けを取立てて、かくの如き初期の工場法に對してすら妥當なる意義を認めたる彼マルクスの崇拜者達が、社會政策の意義を稀薄にし、恰も社會主義と根本的にその原理を異にするものであるかの如く考へ、その點において保守的な資本家と同様の錯誤に陷つてゐることは、最近の社會思想界を混亂たらしめた悲しむべき現象である。社會政策はその社會的歷史的意義より云ふならば、社會主義の出發點であり、その發達の極

杯なのである。その論理的意義より云ふならば、社會主義組織の有機的部分なのである。その反對の例を取るならば、帝政時代において社會政策的施設を充分に發達せしめ得ざりし勞農ロシアの如き、名を社會主義國と冠する國が、その低劣なる勞働組織及び條件の改善の爲めに、資本家國家と同樣なる施設の實現に多くの力を頒たざるを得ないことからも知られるのである。この意味において、現在の英國が、如何なる政府の下にありても、その工場法の完成に、その階級的利害を超えて、その力を盡しつゝあることは、我々の學ぶべき點である。不幸にして、昨年は問題多端の爲め、その提出が延期された。しかし乍ら、社會保險の分野において、我々は、その最後の階段たる『孤兒寡婦年金法』の公布を見るを得た。かくて、一九〇九年の『養老年金法』に始まりたる社會保險の一大系統は完成したのである。かくて、一千萬人以上の人々とその家族は、生まれて死ぬまで、或は疾病の爲め、或は失職の爲め、或は老年の爲め、或は家族的不幸の爲め、憐を親族に、或は救を故舊に乞ふことなく、權利として生活を支ふるの資を社會に要求し、路頭に饑ゆることなくして、その生を營むを得ることとなつたのである。これが爲めに個人と產業と國家とは、相協同して、その費用を負擔するの義務を負ふたのである。狂熱的なる革命論者は云ふかも知れぬ。斯くの如き微細なる變化は、社會組織の根柢を毫も動かすものでないと。何んぞ圖らん。斯くの如き表面上些少なる變化こそ、實は社會組織を不知不識の間に根本的に變化せしめてゐるのである。例へば、產業革命なる語の意義は、それが突然に大なる變化を起したと云ふ譯ではなく、長い間かかつて積り積つた變化を結果より見て云ふのである。ハモンドの如き歴史家の研究が、新にせられるに從つて、產業革命の眞個の意義が、次第に闡明せられて來るのは、これが有力なる證左であると思ふ。十八世紀の末葉における機械生產の發現を以て、これの起原又は動因と見做してゐる間は、產業革命なるエポツクを世界史上の地位に据えることは不可能である。若し、將來の史家が社會主義の時代なるものを、世界史的問題として取扱ふ時が來

るならば、必ずや現代の人々が見て以て不問に附してゐる事實に、多くの意義を見出すことであらうと思ふ。[illegible]史の場合に言へる事は、今日中世國家より近代國家の發現時代に、個人的自由を目的とする自然法を根據としたデモクラシー論に就いても言へることである。ホッブス及びルッソーの描いた理想、その實現の過程を主張した論理等を思ひ合せると、前者に誤りは無くて、反つて後者に誤りがあつたことを史實が示してゐるのである。しかも、その論理が決して空想的理想的な爲めではなくして、反つて現實的實證的であつたのである。革命的理想家の共通點は、彼自身が偉大なる理想家であるに拘らず、常に理想を否定し、現實を重んずる主張を爲すことである。デモクラシーの根據となつた自然法は、今日から見れば、極めて現實性を缺いてゐるが、當時は非常なる現實主義であつたのである。このことは、社會政策を無視してゐる革命的社會主義の運命にも當嵌るのではあるまいか。今後百年の後における唯物史觀の社會思想史における運命を考へると甚だ興味がある。しかし、今の場合かうした議論をしようと云ふのでは無い。私は、更に一九二五年を中心とする英國經濟界における事件に就いて、敍述の筆を運ばねばならぬ。

二

戰時及び戰後の經濟界に發生し、その影響する所、最も著大なりし問題として、貨幣價値の動搖を擧ぐるに就いては何人も異論はあるまい。殊にドイツ、東欧諸國及びロシアに於けるインフレーションの實際社會に及ぼせる結果に就いては、その國の人々は勿論、多くの旅行者によりてその實狀が語り傳へられた。そは程度を異にする丈で、總ての國の等しく經驗せる所であつた。しかし、若し貨幣價値の問題が、インフレーション時代のそれに限られてゐたならば、假令それ自身が或る國に又或る階級に深甚の影響を與へたとするも、同時にこれによつて利得し、又は困難を回避し得た

國もあり階級もあつたのである。從つて、この時代にのみ立脚して、やがて來れるデフレーション時代の事情をも併せ論ずることは、貨幣理論の專門家と雖も困難を覺えたであらう。僅か數ヶ月の間に百萬以上の失業者を出すに至つた如近獨逸の事情の如きは、金融政策と勞働問題との關係に就いて、物價騰貴に惱み乍らも失業者數の比較的少かりしインフレーション時代のそれ以上に、多くの問題を提出してゐるのである。要するに、この二箇の時代を共に觀察するにあらざれば、この貨幣問題の眞相を握ることは出來ない。殊に、インフレーションの國と然らざる國との貿易關係は、この人爲的關係の存在する限り、常住の狀態として論ずることはできない。如何なる貨幣政策も人爲的であるには相違なきも、一定の共通的基礎の備はらざる場合には、殊にその程度が甚しい。ドウズ案施行一年の今日とそれ以前の時代とは、僅か一年の相違であるが、今日においては、その基礎が備り來たつと言へる。要するに、通貨の膨脹及び物價の騰貴を中心とする貨幣政策の問題は、通貨の縮少及び物價の下落によつて惹起せられる結果と共に一貫して研究するに非れば、妥當なる解釋は得られぬ。而して、今漸くその結果が現はれつゝある。伯林高等商業學校教授ボン(Bonn)が、一九二四年に、レートン(Layton)を主宰とする「失業問題調査會」に寄せたる「通貨膨脹(インフレーション)の結果」なる論文に於て論ぜる事項は、一九二五年の秋以後殊に顯著に現れつゝある(Is Unemployment Inevitable? 1924; Les leçons de l'inflation allemande, L'Europe Nouvelle, 2 Janvier 1926參照)

同樣の問題はロシアにおいても見られ得る。一九一七―二一年までの所謂戰時共產主義時代は流通政策の上から見れば貨幣なき實物經濟時代であつた。實際は總ての通貨の流通を消滅せしめ得なかつたけれど、政府の豫算面に現れたる貨幣額は年々減少し、殆んどその理想を實現し得たるに近かつた。一般に流通せる通貨量も、一九二一年七月一日には二千九百萬ルーブルであつて、三月革命の前夜に流通せる總額の百分の一にも足らず、一萬分の四十三と云ふ數量に減

少してゐたのである。この間經濟價値の計算單位に依然としてルーブルを基礎とせるものであつたのであるが、一九二〇年七月二十五日の人民委員會の命令は、個人の現金所有を最低賃銀單位——それの二十倍は約戰前の金ルーブル二十に相當する——以下に限定し、それ以上は强制的に政府の支拂局に預金せしめたので、貨幣經濟は全く消滅したと言つてよい。しかし乍ら、勞働單位を以て流通の尺度にしようとする積極的の企圖は遂に實現できなかつた。その中に、貨幣の消滅と共に戰時共產主義も退却するの外無きに至つたことは、こゝに語る要がない。新經濟政策への轉換から再び貨幣の流通を見たことは云ふまでもないが、この新らしき要求に應ずる通貨に就いて、獨逸の場合と同じインフレーションの問題が生じ來つたことは見易き所であらう。遂に印刷機を無制限に使用することは禁じられるに至つたが、それ以前に二度までも減價政策が行はれた。しかもその價値の下落を防ぎ得ざるに至つて、遂に新らしき尺度を求めざるを得ざるに至つたのである。一九二一年より一九二二年の末及び三年にかけて金本位貨幣チエルボネッツの出現に至る過渡期において、このコンヴエンショナルな本位制度に歸らさらんとして、他の種々なる尺度を模索した跡を檢する時、多くの興味ある問題を發見する。しかし乍ら、我々の研究に値するは、以上二箇の時期におけるが如き、孤立經濟の場合においてのみ可能なる政策でなくして、兎も角その價値が他國の經濟と何等かの連鎖を有する基礎に立つに至つた後の問題である。換言すれば一九二三年一月以降ロシアが如何にしてチエルボネッツの金價値を維持し、その購買力の安定を圖りつゝあるかの問題である。曾つて歐洲の穀倉と云はれたロシアの小麥が英國その他の市場に現れる爲めには、どうしても再び國際經濟の仲間入りをしなければならぬ。それが爲めには貨幣價値を外國なみに維持する必要があるロシアの工業と農業との間に横る最大の困難は、農產物の價格[illegible]ストリしむることなくして、如何にして外[illegible]ンダ、ヒイシラ[illegible]の問題であらう。ロシア通貨問題に就いては、財政省[illegible]した。昨年の[illegible]

られんことを乞ふ。（L.N. Yurovsky, Currency Problems and Policy of the Soviet Union, 1925.）

一九二五年に至つては、英國も文字通り金本位制度に立ち歸つた。最も戰前の如く金貨流通制度ではないが、寧ろ多くの國と步調を揃えた。既にこの制度に歸れるもの、オーストリー、ハンガリー、スウエーデン、オランダ、ヒインランド等あり、ベルギー及びイタリーもその方針を決定した。昨年の春藏相チヤーチルの聲明によつて、英國の金本位復歸を斷行してから後、その是非については、議論紛々として絕えない。果してケーンスの謂ふが如く、對內價値の比較的差額が直ちに又比例的に、輸出品の價格に影響を現すものなりや否やは遽に肯定し得ないとするも、それが爲めに一時的には英國の輸出貿易は大なる障碍を蒙つたことは爭ひ難き所である。失業問題及び炭坑業問題と關連し、この問題は、勞働黨の正面的反對は勿論、銀行家及び資本家の間にも多少の反對を見たことは事實である。しかし乍ら、金本位復歸の問題自體は、既に一九一八年及び一九年のカンリツフ委員會の報告に基ける貸出制限の斷行より始まつたものと見るを得べく、一九二〇——二一年の恐慌以後は益々デフレーションの政策を繼續し來つたのである。偶米國のデフレーションと時を同ふしたが爲めに、その對外價値は互に相殺されて、その效果が顯著に現れなかつたまでなのである。從つて、ただ一九二五年の春を撰んだことに就いて、その是非が起り得るに過ぎぬ。又若しこの制度が、今日の國際經濟からして唯一の本位制度であると認められるならば、それへの復歸それ自體は最早爭ひのない問題である。ただ問題ありとすれば、國內の生活狀即ち物價狀態の改善に對する方策を講ずること無くして、これが斷行を試み、一向ら且つ直接に賃銀下落を齎らすことを敢てしたことに存しよう。反對批評は主として、この二點に關連して試みられたのである。殊に、後者の問題がより根本的である。倫敦大學教授グレゴリーの如き復歸に對する無條件贊成論者の缺點は、この點を深く顧ることとなく、單に國際貸借關係の必要や時期の當否やに就いてのみ多く論據を置くことであると思ふ。（E.G

regory, The Return to Gold,1925)。しかし乍ら、ケーンスの重要視するが如き賃銀及び物價との關係より生ずる問題を國民政策上考慮することは、單なる金解禁の問題に局蹐するものでなく、既に業に多大の失業者を出せる戰爭直後殊に一九二〇—二一年の恐慌後のデフレーション政策をも含めて論ずべき性質のものである。彼が、昨夏『チャーチルの經濟的結果』(The Economic Consequence of Mr. Churchl, 1925) なる小冊子において論ぜる事柄は、彼の貨幣問題(TheiMoneytary Problem,1924) において論述せる理論の實際に適用せられたる批評と見るべく、豈獨りチャーチルの結果とのみ限定すべきものではない。それは、現代の英蘭銀行及び五大銀行とそれに關係する限りにおける大藏省の國民經濟における職能に關して、根本的の省察を施すに至るべき性質の議論である。金解禁の問題は、たま〳〵この問題に對して、學者は勿論一般世人に金融政策の國民經濟における重要なる職分を有することを深く認識せしむる機會を與へたる意味において注目すべきものであつたと思ふ。

殊に我々の注意すべきは、勞働黨のこの方面に對する研究と活動とである。彼等は過去五年におけるデフレーションによつて嘗めた苦き經驗を基礎として、徐々としてこの問題に對する政策樹立の必要を感じて來た。一九二〇年の『生計費問題の調査』における勞働黨本部の意見においては、極めて受動的な立場からして、金融政策の彼等の賃銀及びその購買力に及ぼす影響を述べてゐるに止る。それに對する方策を樹立する力と暇とが無かつた。又その重要性についても、問題が極めてデリケートであり且つテクニカルである爲め、はつきりそれが呑み込めなかつた様子であつた。然る所へ、バアーミンガムにおける獨立勞働黨支部の選出候補者であるオスワルド・モズレーと云ふこの道のエキスパートの意見が次第にその研究の積むにつれ、具體的内容を具へて來たので、彼はその意見を支部の意見として、一九二三年あたりから、獨立勞働黨の年次大會へ提出した。しかし多くの人の耳を傾けしめなかつたやうである。しかし、彼等勞

働黨幹部の意見として、モズレーの意見そのまゝではないが、それが採用せられるやうになつてから次第〱に漸く認められるやうになつた。昨春四月のグロスター大會に幹部意見として現れた時、モズレーは大にそれの説明に努めた。私は丁度その大會に間に合ふやうに渡英できたので偶々滯英中であつた賀川氏と一緒に行つて見たがその時でも大會の空氣はかういふ地味な（しかし實は大きい問題であるが）、景氣のいいといふ譯のもので無い者に對しては、餘り討論に參加する者も無く、至つて平凡であつた。反つて、タイムスあたりの保守黨の新聞に、多くの批評や反駁の寄書が旺んであつた。それが驚くべし、僅か九ケ月の間に、勞働運動のあらゆるランク・アンド・ファイルの頭にまでしみ込むやうになつた。それには、獨立勞働黨の機關紙『ニュー・リーダー』の主筆ブレルスフォードの筆の力に依る所多い。彼は毎週折りに觸れ、事に當つて、この政策の總ての産業政策の鍵であることを説いたのであつた。モズレーも亦パンフレットを著して、その私案の具體的内容を解説した。この研究と宣傳の力によつて、遂に勞働黨そのものの意見にその趣旨を採用させる所まで、漕ぎつけた。昨秋十月のリバプール大會に幹部意見として提出され、シドニー・ウエッブが、その説明者に當つた。ウエッブの説明は極めて貧弱であつた。長年同黨の智嚢として功勞多い彼も、寄る年波のせいか又この問題に對する特別の研究が彼に無かつたせいか、議論頗る精細を缺いてゐた。（因に彼はこの大會を期として幹部の地位から退いた）。之に反して、この提案のオリヂネーターであるモズレーが獨立勞働黨を代表して、この提案のセコンダーとして立つたが、彼のこの日における演説は、前に陳べた獨立勞働黨大會におけるそれに比して全く別個の感があつた。全く滿場を傾聽せしめた。それには、代議員の方に頭が出來てゐたことと、彼の創意と不斷の努力に對する黨員の敬意の感情が手傳つてゐた爲めであると私は思つた。ともあれ、この時から全體の黨の意見となつた。今年のに、獨立勞働黨の一議員であるマックストンが、プラベート・ビル（個人の提案）として、中央銀行國有案を提出す

事になつてゐる。必ず勞働黨全部の支持を受けることと思ふ。勿論議會そのものは通らないことは受合だらうが、ここまでやつて來る經過を考へると無限の興味がある。かういふ性質の問題は、單に黨の政綱として、その名前丈けを掲げるだけでは何の意味もなさない。その意義、他の政綱條項との關係、その具體的內容が或る程度までその支持者たる一般大衆の理解を得ないでは、實行の點から考へても無效である。始め個人の創意から生れ、それが地方支部の意見となり、更に一段上の團體の意見となり、遂に最後に黨全體の意見となるといふ段取りをして始めて、練りに練つた、しつかりした意見となる。これが爲めには、政黨の組織がデモクラチックであり、聯合體になつてゐないでは不可能である。中央委員の意見丈けが、直接に黨員に示されると云ふやうな中央集權的な單一組織では、意見も研究も發生し成長する暇がない。エキスパートと一般大衆との有機的協同も成立しないのである。從つて、實際の場合になつて、泥繩的の政策が出來て、一般の黨員は猿眞似をするの外無い始末となる。モズレーの如きは、何等勢力もない、若い智識階級の一人に過ぎないのであるが、その下の方からだん／＼上の方に意見が認められて行くことが出來るのは、彼の屬する政黨の組織が宜ろしきを得てゐるからである。政黨の政策が如何にして練られて行くかに就いて、その黨の組織との關係を考へる重大な點の一つと考へる。

序ながら、これと同じ經驗を見たから、かういふ問題に關心を有たるゝ讀者の參考にまで一寸誌して置かう。それは金融政策とは直接の關係は無いが、共通の思想から生れた、最近における英國勞働黨の重要政策となりつゝあるものである。それは原料品輸入の國家統制政策である。彼等は、國家による大規模なる原料品の購入（Bulky purchase of raw materials by state control）と呼んでゐる。社會主義が市場問題にその注意を向け、これの研究に指を染めたことの遲かつた例證の一つであるが、それは不思議のやうで不思議ではない。その理論的要因に就いては後篇に述べよう

と思ふから、ここでは略することにする。しかも戰後に至つて、英國勞働黨の悩み、殊に一九二三年の內閣組織の經驗から得た苦しみはこの市場關係殊に對外關係を有する市場に對して、彼等が全く無能力者であると云ふ點にあつた。これに對する確固たる成案を持たないでは、幾度政權を握つた所で何の爲す所もないことが分つたのである。そこで獨立勞働黨の幹部は多くのエキスパートの力を借りて研究し始めた。所が、それと同じ頃、ランズベリーが一九二三年のプリマウス勞働黨大會に、この政策を勞働黨の綱領に加へることを提議した。その理由は極めて個人的經驗に基くもので、何等の研究に基礎を置くものでなかつた。それは、彼が戰爭中管理してゐた、彼の選擧區たる倫敦イースト・エンドの救貧法委員會における經驗からである。當時その管理に屬する學校の兒童の食料配給において最も困難を感じたことは、その價格の騰貴と動搖とであつた。しかるに、偶々彼の學校に、政府の管理せる食料品の配給を受ける學校が合併せらるゝこととなつた時、その食料品價格が三倍も異ふことを發見したのであつた。そこで、彼は倫敦の食料管理局に談判して、非常に安價な食料を得ることに成功したのである。當時の食料管理の實際に就いては、茲に述べる餘裕がないが、兎に角この事實が彼の頭に、獨り戰時に際してのみならず、平時においても採り得る方策の存することを刻ましめたのである。そこで、彼は黨の政策として考究することを提議したのであつた。ランズベリー自身は、今日黨の幹部の一人であるが、その性質がマグドナルドなどとは合はない爲め、いつも左翼の不平組の大將に押されてゐる好々爺であつて、實際政策を組立てるやうな頭腦の所有者ではない。この問題は主として獨立勞働黨の幹部とそのエキスパート(その中には戰時食糧省で有力な地位にあつたワイズやロイド等がゐる)によつて、研究練磨されて、今日では、獨り同黨の確立政策たるのみならず、勞働黨全體の採用する所となつてゐる。ただ後者の態度の頗る明快を缺いてゐることとは、今年議會のキングス・スピーチ修正案に對するスノーデンとダルトンの演說を比較すると分る。しかし、議會の

場合は極めて實際的な實行的な議論に限られてゐる爲めであると思ふが、黨としての政策として承認されてゐる。一の證左は、昨夏その第一回大會を開いた大英帝國勞働黨會議に英國勞働黨の提案として、之が提出されてゐることを擧げ得る。ランズベリーがその說明の任に當つてゐた。この案の創案者としての名譽の意味であらうと思ふ。(Report of First British Commonwealth Labor Conference 1925.) 私は、この問題が實行上非常に困難な問題であつて、容易に行はれ難いものであるとの感想を抱く者であるが、ここまでやつて來た經路に興味を有つ、初め個人の經驗から力說され、エキスパートの研究と調査とによつて組立てられ、やがて一般黨員の承認を得て黨の綱領となると云ふ經驗は極めて示唆に富んでゐる。その實例として金融政策に於けるモズレーの事例と共に紹介したまでである。尤も、これには政黨の首領連は、反對で、マクドナルドのやうな保守的な地位にある者は之を好まないやうだ。因にモズレーが、そのパンフレットにおいて紹介してゐる意見及び計畫は、極めて大膽なもので、且つ中央銀行制度のみの問題でなく、一般に信用制度を消費者信用なる合言葉によつて改革、創造せんとするものなのである。(Oswald Mosley, Revolution by Reason An Account of the Birmingham Proposals, 1925) その內容に就いては、後篇に論評したいと思ふが、計畫が大規模だけに、その理論上及び實際上の缺陷があることは爭はれぬ。銀行營業者達はその駁論に忙しい。最近創刊になつた『銀行』なる雜誌に、ロイドバンクの理事ベーンが、反對論を書いてゐる。(Banker, Vol I. Number 2)

金融政策は、從來その直接關係ある實際家と貨幣銀行論の學者とのみによつて論ぜられ　如何にもむづかしい理論のやうに見做され、一般大衆の與り知り得ざる領域であると考へられて來た。然るに、右の勞働黨內における趨勢に見える如く素人の勞働者まで貨幣數量說などを議論するやうになつた最近一、二年間の事態は、或る意味において劃時代的の前兆であると思ふ。若し夫れ、前段に述べた產業改革及び失業問題において、いつもこの問題が引合に用ひられて來た

ことと思ひ合せると、ここに漸く英國の社會主義は、始めて政綱らしい政綱を持ち得る時期に到達したといふべきである。理論的把握力において、大陸諸國の社會黨などに比して極めて拙劣である彼等は、彼等自身の經驗と調査とが充分熟しない中は體系の整つた綱領などを掲げ得ないのであつた。しかるに、最近における豐富なる經驗の積まるゝに從つて、漸く產業界の全體とその相互的有機關係を見渡し得るやうになつた。今後の彼等の政綱は、學問的にも興味ある材料となるであらうと思ふ。

三

翻つて、最後に英國の國內問題と密接な關係を有し、これを左右すること甚だ多い國際關係の進展狀況を一瞥しよう。なぜなら、この狀況を見ずしては、この論文の書れたる時期の意義は充分說き盡されないと思ふからである。英國の產業が外國貿易によつてその大半を維持されてゐることは周知の事實である。勿論その國內市場の重要性を無視し得ないけれど、兩者は因果關係を有するものであつて、切り離し得ないものである。從つて、その販路たる世界各國の狀況は、直ちにその市況に影響し、純粹に國內市場を目的とする產業にも影響を有つのである。英國は世界の工場であると言はれて來た。この名稱は、十九世紀の七、八十年代からして、獨逸及び米國の產業的勃興により、更に今次の歐洲大戰を機會とする世界各國の產業的自立政策によつて、文字通りの適用は困難となつた。しかもその役割の大小に變化ありとするも、英國自身にとつてその產業の性質は依然として外國貿易中心たることに變化は無い。從つて、世界市場の盛衰は、やがて彼等の盛衰である。英國の外交政策は、商業政策であるの理は、戰後の今日と雖も依然として變りは無い。眞の問題は、歐洲戰爭によつて如何なる變化が、此の海外市場に發生したかである。その生產力の變化如何。そ

の購買力の程度如何。その關税その他の商業政策の設定如何。これらの諸事情を明瞭に了解することによつて、彼等の外交政策は勿論一般の産業政策の基礎は定まるのである。私は、その間に著大なる變化ありと見る。從つて、この變化に處せんとする英國今後の外交及び産業政策の順應性は實に注目に値すると思ふ。海外貿易局(The Oversea Trade Department)が、數年に亘る世界各國事情の調査は、今や數十卷の多きに亘り、この事情調査の一歩はすでに築かれた。これらの資料を基礎とし、各方面の專門經驗家によつて更に總括的に研究し、その對策の立案を委囑されたバルフオーア委員會は、昨年六月その報告第一卷を公表した。この浩瀚なる報告は更に發表さるべき續卷と相俟つて、この政策樹立に役立つものであるが、彼等の用意と努力、一般國民のこれらの報告を讀む熱心と興味とは實に大國民の態度として相應しい。「英國の行詰り」てふ冷評が太西洋の彼岸より頻りと傳り來る時、オブザアヴアーの主筆ガーヴィンが『我々ブリトンは困難に處してのみ緊張する』と豪語したのは、必ずしも負け惜しみの言葉とのみ見られない。

さもあらばあれ、國際事情及び政局の變化、その眞相の如何を決定することは甚だ困難である。歐洲戰爭及びその總局たるヴエルサイユ條約が歐洲諸國の政治及び經濟に與へたる變化、殊に後者の遂行が如何なる經路をとつて進行したかを見る丈けでも一通りの苦勞ではない。或る國に對しては、一九二〇年において、その施行を見たものがある。或る方面においては數年延引せられ、漸く一九二三年に至つて、ともかくもその遂行が見られたといふ有樣である。ヴエルサイユ條約の施行丈けでも、一九二四年以前においては、海のものとも山のものとも決し兼ねたる狀態であつた。(この點に關しては幸に英國國際事情協會 British Institute of International Affairs の委囑によつてトウインビー教授の調査研究に成る Survey of International Affairs. 1920-23. 1925 がある。參考に値する)若し夫れ、ヴエルサイユ條約そのものに包含されてある不合理、無智貪婪、反動思想等に基く歐洲政局の不安定は、條約の遂行によつて一層之

の惡しき結果を齎らしたることは云ふまでもない。これは、條約の精神とは根本的に異なる新らしき國際主義の精神によつてのみ是正される外はない。この精神の曙光は、一九二四年の聯盟總會における「ジエネバ・プロトコール」の通過によつて現れた。しかし乍ら、歐洲諸國の政治は、マクドナルドやエリオの如き理想主義の政治家によつてのみ率ゐられてゐるのではない。これに對する反動は、英國に現れ、又佛蘭西に現れた。しかも、歐洲政局の現狀は、放任を許さない。何等かのまとまりをつけねばならぬ。この必要から生れたものが、チエンバーレン及びストレーゼマンの作とも見られるロカルノ條約である。この半煮の歐洲パクトも、新らしき國際政局への出發點として、各方面から迎へられたやうである。若し、斯くの如き程度のものが、反つて國際平和への礎となるものであるならば、その現實的價値は認められねばならぬであらう。この意味において、又一九二五年は、奈翁戰爭後におけるエ・ラ・シヤペル條約の如き地位を占むるであらう。而して、これによつて獨逸の國際聯盟加入、米國の國際司法裁判所參加、軍縮會議、及び國際經濟會議の開催が、實現せられるならば、その效能や極めて大なるものがあらう。しかし乍ら、この礎を置ける人々の精神にして斯くの如きものである以上、右に陳べた效果が障碍なく又豫期の如く發現するや否や甚だ疑しきものがある。見よ現に私の筆をとりつゝある今日、佛蘭西は獨逸への反對投票に備える爲、聯盟理事會の永久會員を增加するの尻押しをしてゐるとか、そのくだらなさ加減を發揮してゐるのではないか。伊太利のムッソリニーは、抵抗力もなき獨逸に向つてチロール問題を以つて、或は小亞細亞への發展を策して無智なる國民の虛榮心に媚びんが爲め、時代遲れのナポレオン時代の再來を放言してゐる有樣ではないか。若し夫れ、ハンガリーにおける軍職關係者を中心とするフラン紙幣僞造事件、これに對する小アンタント諸國の蠢動、徒にトルコと事を醸する因を爲すアイラク委任統治問題に對する英國保守黨政府の帝國主義政策等數へ來れば、眞の國際平和の精神は未だ地上に現れてはおらぬ。けれども、理想的立場から

のみ論じてゐたならば、この世の事は一凡云はぬに若かぬ。苟しくも、現實の歩みを觀察して、そこに假令牛歩の如きものなりとするも、多少にても進歩を認めようとする者にとつては、ロカルノ條約とその精神とは、保守黨の新聞紙が擔ぎ廻る意味においてではなく、一九二五年を機會として、戰後の國際政局に一箇のランドマークの樹てられたことを認める意味において、これを重要視しても差支ないと思ふ。

右の大體觀を前提として、次に述ぶべきことは、現在の歐洲各國の政局である。一言にして云ふならば、今日の歐洲各國において統治の任にある政府の性質は、全くまち〳〵であつて、その間共通な傾向が容易に見出され得ない。さういふ内政事情が國際經濟の問題として、狹くしては英國の經濟に、如何なる影響を持つかと云ふことが一箇の問題となる。その中最も極端なる形態を持つてゐるものは、勞農ロシアの共産主義と伊太利のファシズムと北米合衆國の個人主義である。政治思想の上から、又その對外政策の上から、問題になり易いのは、この三國であるが、國際經濟關係としては、その内政上に現れてゐる關係とは全く別箇の觀がある。即ち國際貿易群の單位としての國家又は國民は、その内政上の面相と異る部面を有することは、今日の國際經濟を全體として見る時に、我々の注意せねばならぬ點である。若し國際政治なるものが、單なる對外政策の外に存立し得とすれば、その内容は極めて複雜なものとなる。即ち國際政治の立場より云ふと、勞農露國の共產主義も、伊太利の國粹主義も又米國の個人主義も、その國際經濟の單位としての自己の地位を保持せんが爲めに、自國民に強制せられ又はその承認を得てゐるものではないか、と考へられるのである。從つて、何故にその内政上の政策が維持されてゐるかは、その國々の歴史的、社會的、經濟的の諸原因の説明すべきものであつて、それが直に國際政治に現れるものではない。今日の諸國家は、その間微妙の相違があるだけで、國際場裡においては、大體同じ國家主義を基調として、その上に協調を試みてゐるに過ぎないと言へる。この問題に、私自身現

在抱いてゐる解釋で充分說明し得ないと思ふが、適當な解說を試みた意見も他に多く見當らない。更に附言すれば、右に擧げた三國のやうに餘り世人の視聽を惹かないし、それの研究も語學の關係からか、餘り發表せられないけれど、今日世界中で最も强固な基礎と行政能力とを持つてゐる政黨に、スウエーデンとデンマルクの社會黨がある。スウエーデンの社會黨內閣が一人敢然として聯盟理事會にあつて國際平和主義に忠實である爲めに、トルコも英國との紛爭事件において公平なる友人を得、今度の永久委員增加問題もものにならないだらう、と言はれてゐる。このスカンヂナビヤの二國が社會黨政府を戴き、又白耳義及びオーストリアにおいて社會黨は他國に比して割合に勢力がある。後者の一國に、ヴアデーベルトやオツトウ・バアウアのやうな統率力と經綸の才とを持つた首領がゐることは、非常な重を爲す所以である。しかし、この事實は、資本家政府の場合と殆んど何等の相違をも國際政治の重心に與へてゐない。それは、これらの諸國が政界の大勢に影響の無い小國である爲めか、又はその政策が極めて穩和である爲めであらう。勿論そうであるに違ひなからうが、今日の國際政治を支配してゐる原理には、單純に一國政府の主義主張から演繹できない要素があることも承認しなければならぬと思ふ。この結果を事實の上より見ると國際政局が英國の經濟に與ふる影響如何の觀察の試みに對しては、その各國政府の性質が如何なるものであるかは、重大な要素を爲してゐないと云ふことになる。獨逸や佛國の如く、小黨分裂の國では、尙更らさうであつて、或る有力な一政黨の主義政策が、國際政治を動かすやうになることは、目下の處期待できない。この間の理論的說明を充分試みる丈けの用意が無いが、今與へられてゐる問題に對しては、個々の國の政府及び內政事情の相違は之を重要視する必要は無く、——勿論恒常的な外交通商關係が杜絕又妨碍されてゐるやうな場合は別問題である——寧ろその如く相違せる各國が相集つて織り出す國際政治の大勢の方が、注意すべき事項となる、と私は考へてゐるのである。

關つて、右の如き國際關係を念頭に置き、今英國の立場に歸つて、その産業的發展の核心たる世界市場の開拓に對して、如何なる政策が顯著に現れてゐるか、を見る必要がある。英國の産業的立場より見ると、世界は大體四大部面に分たれる、歐洲は最早數國ではなくして一國である。次ぎは米國である。第三は印度を除ける極東亞細亞である。最後は大英帝國領である。南米は寧ろ北米合衆國と同じ部面に入れるより寧ろ最後の部面に入れる方が適當であらう。これらに對する英國の立場は夫々異る。いま、それを解說することは、無用である。それは、經濟地理學の問題であつて、今私の當面の問題に直接關係はない、

私の今問題とせんとするのは、この四大部門の何れに對して、英國の現在及將來の重心が存するかと云ふことである。歷史は既にその重心が次第に變化して來たことを示してゐる。勿論、その重心の何處に存するにせよ、その何れに對しても夫々の關係は存するのであつて、一部門に偏局すると云ふことは在り得ない。例へば、植民地時代の米國と今日の米國とは、英國に對して根本的に異つた地位に立つてゐる。しかも、米國との關係は、その重大なる點において異る處は無い。歐洲に對してもそうである。奈翁戰爭當時の歐洲は、英國の或る工業品及び原料に對して、恰も今日の印度の如き地位を有してゐた。然かし、今日の事情は、その內容が一變した。けれども、その事は、今日の歐洲の市場は英國にとつて重大な關係を有たぬと云ふ結論にはならぬ。これ丈けの事實を念頭に置いた上、その貿易關係の重心——その構成要素は種々に分れよう——が何處に存するかを見るならば、そは疑も無くその帝國領內に存するのである。輸出輸入の單なる量的關係からでなく、自國の資本、勞働の消費が一定量の商品に最も多量に投ぜられた事を標準とした る質的關係から見て、その他部門との比例を失してゐるのである。例へば米國からの輸入綿とエチプトからの夫れとは量の點からのみ見るべきでなく、これに投ぜられた資本の性質、それを運營する經營の國籍等は、英國の立場よりすれ

[illegible]か、他において失へる處、或は守勢を維持しつゝある處を補ふに、積極的に發展せんとする口を、英國の資本主義が、之を大英帝國領内に求め、ここに主力を傾注せんとしつゝあるは見易き處であらう。つまり人と自然とのエキスプロイテーションである。前者に重きを置く時、資本主義的帝國主義の名之れに當り、後者を理由とする時科學的帝國主義の名之れに當る。保守黨が後者の名を撰び、勞働黨が前者の名を以て呼ぶことも自ら容易に知られ得る事理である。

大英帝國政策の問題は、本國たる英國と其の廣く大英帝國と呼ばれつゝある範圍に入り來る、種々なる法律的地位を異にしたる地方との關係である。その關係を横の關係とすれば、更にその兩者内における資本家對勞働者の縦の關係が交錯する。しかも兩者は劃然と分ち得ない。例へば自治領の運動は、本國資本家の頤使に甘んぜざらんとする資本家の運動であると共に、有色民族排斥の勞働者の運動でもあり得る。又昨年の議會において暴露したるが如く英本國に於いてすら、その特惠關税政策は、輸出業を主とする資本家の利益であるのみならず、安價なる食糧が得られると云ふ理由で一部の勞働黨議員も賛成した。斯くの如く、その目前の利益のみから言へば、その利害關係極めて複雑であつて、何が帝國政策たるべきやは判斷出來ない。保守黨政府の熱心に主張する大英帝國經濟會議は、各自治領の必ずしも喜ばざる所であると共に、勞働黨の大體における反對がある。然らば、勞働黨側においては、明確であるに反して、甚だしく不明瞭であり、且つ消極的である。大英帝國勞働黨會議の如き僅かに昨年成立したばかりであるのみならず、極めて低調のものである。或る意味において大英帝國内の關係は、將來の國際政治の縮圖のやうなものである。そこには、目前の利害を念とする限り、階級と階級との關係のみを考慮する限り、到底一致の出來ない關係にある。なぜなら、同じ階級の利害が反する點が存するからである。資本家と資本家、勞働者と勞働者とが、同じ商賣敵であつたり、賣手と買手と

の關係であつたりするからである。か丶る間から、如何なるものが發展し行くか

ードが、黨の幹部に反抗する意味で政府案に贊成した約二十人ばかりの勞働黨議員（その中にはトマスの

ゐたし、クライドの連中やランズベリーのやうな急進家もゐた）に對して、痛烈な批判を下した言葉は、大に考ふべき事柄である。曰く『彼等はプロレタリアートの經濟に忠實であつたかも知れぬ。然し乍ら彼等はプロレタリアートの論理を失つてしまつた』と。勞働者階級のパンの値を安くしようとする經濟は、その儘に勞働者階級の倫理となり得ぬ。階級の利益は、必ずしも階級の道德であつてはならぬ。この經濟と倫理との協同の行はれない限り、大英帝國政策は、何れの側においても、他の側の贊同が得られぬであらう。大英帝國の將來は、寔に研究に價するが、又同時に困難な問題である。モスコウの口眞似ばかりしてゐる英國共產黨が、恰もジヤガイモか何かの樣に、Smash the Empire! と言つてゐる標語を、その儘傳えてゐる方が、反つて厄介で無いかも知れぬ。

いま玆に更に歐洲への問題を概觀して、本文を終ることにする。歐洲への對策として、保守黨及び勞働黨の政策に著しき相違のあるのは對露問題である。その他の諸國に對しては、勿論相違があつても、程度の相違である。しかし、對露問題に至つては、性質上の差異がある。保守黨は、露國の現實に有する購買力を標準として、その市場としての價値を定めようとする。戰前最も多かつた時は一九一三年で、約一千八百萬磅の對露輸出があつた。それが一九二四年には五分の一に減つて、三百八十萬磅となつた。帝國領内における輸出額の二億二千五百萬磅なるに比しては、その七十分の一の割合にしか當らぬ。然らば、その必要とする小麥その他を幾何購入してゐるかと云ふと、戰前一九一三年に二千八百萬磅たりしもの、一九二三年には五百四十萬磅、約六分の一強に減つてゐる。從つて對露貿易の現狀を以てすれば、資本家階級がこれに對して極めて冷淡な態度を執ることは見易き理である。然らば、その將來の可能性に對して、

保守黨政府は如何なる態度をとつてゐるであらうか。この點において勞働黨とその態度を異にするのである。換言すれば、露國の人口は約一億三千萬あるに拘らず、その英國に對する購買力は、南亞聯邦やマレー半島の約半額なのである。これは一に信用の缺乏に由るのである。若し彼等に資金供給の道を啓すれば、その増加の可能性のあることは明白であり、彼等も亦、切にそれを要求してゐるのである。勞働黨はその立場よりしてその內閣に在りたる時、二千萬磅の信用貸付を行はんとした。これが總選擧の最大の項目であり、その結果がヂノヴイエフ書簡事件等の爲め、勞働黨の失脚となりたることは周知の事實である。その後保守黨政府となりても、依然その政策は改まらず、昨年ラツカシヤア紡績機械購入の申込（勿論長期信用付）ありたる時、工場主も失業問題に苦しめる折柄であるから、その申込を受諾したいのは山々であつたのであるが、長期の信用付である以上、政府の保障が無い限り、銀行が金を貸さぬ。これに對して、勞働黨は『貿易促進法』に依つて、その信用賦與を主張したが、政府の頑として容れぬ結果俄に立消となつた仕末である。

かゝる事態にあつて、勞働黨は依然對露關係の進展に熱心である。他方勞働組合會議は、大陸の組合（アムステルダム）の反對にも拘らず、全露勞働組合との提携に奔走しつゝある。又第二インターナショナルの後身たる社會及び勞働インターナショナルにおいても、昨夏マルセーユに開かれたる大會の空氣を見るも、勞農露國に同情あり、且つ公正なる態度をとつたものは、英國の獨立勞働黨の代表者とオツトウ・バウアーの率ゆるオーストリー社會民主黨の代表者のみと言つてよい。斯樣な事情は如何にして說明せられるか。勞農ロシアがプロレタリーアトの國家として始めてこの世に出現したるに對する階級的同情からであるか。勿論それもあらう。しかし、これのみによつては、解き得ぬ。なぜなら、他國の社會黨が不熱心なるに對して、彼等のみ獨り、しかく熱心なるの理由は充分に解き得ぬからである。卿し

ろ、その主義思想より言へば、勞働黨及び勞働組合の中にはロシアの共產黨そのものの政策には、反對なる者が多數なのである。昨夏スカーバラにおける勞働組合會議における對露問題の討論を見た時、私の感じたことは、かゝる單純なる思想的同情を以て毫もその眞相は把めぬ、と云ふことであつた。次ぎに考へられることは、一昨年あたりより屢々露國側の勸誘と費用の提供とありたるを機として、英國の勞働組合や勞働黨の視察團が彼地に出掛け、實地にそれを見聞し、その報告書を發表したことである。その報告書の內容に就いては、種々な批評があるが、觀察の當否はあつても、少くとも虛僞のものでないことは、その組合側視察員が歸國して、報告演說會を開きたる時、眞に彼地におけるコムレードの業績を擧げつつ、プロレタリアートの時代的先驅者たる彼等の光榮と苦惱とに就いて、滿腔の同情と感激とを披瀝したと云ふことが、當時の新聞記事にあることからも察せられる。即ちこれらの視察と報告とによつて、その理解と同情とが進んだことも確かに一因であると思ふ。しかし、このことは、廣く觀察すると、未だ以て、何故に英國勞働黨の對露親近策の生じたりしやの問題を答ふるに足らぬ。なぜなら、歐洲社會黨の中、露國に對して、最も公正なる意見と態度とを把持してゐるオーストリア社會黨のオツトウ・バウアーが、この視察委員派遣に對して反對した理由である。彼はその演說中で、共產主義に學ぶべきことの少きこと、その政策の歐洲社會黨の分裂を來したる弊害を擧げてゐるに過ぎぬのである。恐らくは、歐洲各國の社會黨の態度がこれであらうと思ふ。即ち、歐洲各國の社會黨にとつては、ロシアに行つて視ることは、專らその政策や施設に關してゐるのである。一言露國との交易關係に觸れて居らぬ。これ今日においては、歐洲各國殊に獨墺諸國の如きは、國における信用、資金の缺乏してゐることは、露國と同じ狀態にあるのであつて、その交易關係を一時の犠牲において將來の開拓を試みると云ふやうな餘裕が無いのである。しかるに、この點については、英國の勞働黨及び勞働組合の立場は異なるのである。我々は、右の兩委員の報告と共に、デリー・ヘ

ヂルドが時々發表するその露國號の附錄を注意する必要がある。如何に彼等の關心が露國の農業、林業、鑛業その他の輸出品業と國民購買力及び生活程度の增進なる點に横つてゐるかが判明する。私は以上の二理由と共に、この點を擧げることによつて、英國勞働黨の親露政策の眞相が把めると思ふ。即ち、英國にとつての最大問題は、市場の開拓であるこれは資本家たると保守黨たると、勞働者たると勞働黨たるとを問はない共通點である。分れる所は、如何なる市場を如何に開拓するかにある。大英帝國は既に保守黨の御株として取られてゐる所であり、且つ極めて複雜なる問題である。しかるに、露國は丁度それと反對である。保守黨は、これに對して毫も觸れようとしてゐない。しかるに、勞働黨から見れば、相手はプロレタリーアトの國であつて、極めて簡單なる關係である。そこに利害の錯綜が無い。斯くの如き事情は、現實政策又は選擧戰における題目として極めて恰好ではあるまいか。而して、それによつて自他を利益することを得れば、英國産業そのものの發展となる。現實政治家たらずとも、勞働運動者たらずとも、容易に考へ得る、名實共に具りたる政策である。私はかく解する。ただ目下の問題は、少數黨の勞働黨によつて、その實が如何にして現れるかである。自己は金の無い立場にあり、相手は、富有になるポシビリテイはあつても、プロバビリテイの少い現狀にある。何れにしても、今後に於ける勞働黨の親露政策は、保守黨の帝國政策と共に、英國現在及び將來における對外政策の二大眼目であると思ふ。因に、一九二四―二五年の歐洲事情の大觀をするのに極めて恰好な、且つオーソリテイのあるハンド・ブックを茲に紹介して置かう。

(The European Year Book for 1926 Edited by M. Farb-man, Ramsay Muir and H. F. Spender.)

(一九二六、二、一五)

其二　觀察の意義

一七四八年にモンテスキューは、その『法の精神』を著して、その中に、彼が先年英國を訪問して、ウオールポール治下の政治狀態を觀察した時の印象を力強く表現し、自由を基調とする政治道德と權力分立の原理とを主張した。それ以後、米國獨立の憲法、佛蘭西革命の憲法等に多かれ少かれ彼の議論が採用され、後年の政治學及び公法學に主要のテーマを提供したことは、爭はれぬ事實である。彼の主張が、後代の憲政發達の事實によつて、その多くの內容が裏切られ、今日では彼の觀察そのものに誤りがあり、その推論にも謬りのあることが明白になつてゐるけれど、當時に於いて思想家としての彼の影響の大なりし事亦爭ふべくもない。

一八四八年に、エンゲルスはマルタスと共同して、『共產黨宣言』を著して、國際勞働運動の原理と戰術とを主張した。彼等兩人の意見の因つて來れる所は、モンテスキューのそれが必ずしも英國の事實に限られてゐない如く、廣く當時の歐洲の事情及び諸國の歷史的事實の觀察に基いてゐるのであるが、當時の英國チャーチスト運動の情勢が、彼等に多くの確信と論理とを提供したことも亦否み難き事實である。而して、この『宣言』に盛られてゐる思想が、やがて彼等の祖國獨逸の社會民主黨を動かし、後には露國の社會民主黨を指導し歐洲戰爭を因として發生せる革命に、多くの中心原理を提供したことは殊に詳說を要しないであらう。『共產黨宣言』の中心思想を何に求めるかは、人によつて異るであらうが、階級鬪爭說と集產主義とは、その根本を成すものと思ふ。この思想は、その目的とする社會主義的社會の實現が、モンテスキューの主張せるデモクラシーの場合と異りて、歷史の進行に遲れてゐるが爲めに、この史的事實に正

つて、その當否を判定し得る點に達してゐない。總て思想と論理とは、その究極の妥當性と離れて、作用し影響を持ち得るのである。なぜなら、如何なる思想と雖も、部分的に又一時的には眞理であり得るからである。又これに動かさる社會も極めて複雜であつて、そこに意識の統一した社會なるものはあり得ないからである。『宣言』の思想に多くの誤謬の存することは、後年に於いて著者自ら認め、今日までの史的事實によつても立證し得られる所であり、將來益々その時の經過によつて明白となるであらう。けれども、これが社會主義運動の文書として、又經典として重んぜられてゐることは、今日に於いては蔽ふべからざる事實である。

　この百年を距てて世に現れた二つの偉大なる著述の内容を論究することは、今私の企てんとすることでは無い。私の敢て、ここに引例した所以のものは、その孰れもが、近代英國の社會的事實に、その根據の一部分を求め、その不完全なる觀察にも拘らず、偉大なる論理をそこより導き來り、後世の人をして、その思索に便益を與ふると共に、同時にその獨立の思索を妨げ、多くの弊害を釀したことである。惟ふに人は自ら觀察し、判斷し、そして思考するよりも、他人の觀察と結論とを鵜呑みにする先天的の傾向を有する。最少の努力によつて最大の效果を求めんとする經濟の理法は、人間の思惟をも支配してゐるのである。總て科學は、その結果を簡單なる概念と法則とに表現することによつてその目的を到達する。自然科學に於いて然かるのみならず、社會科學に於いても同樣である。しかも、それが宣傳となり、豫言となる時に、そこに理智と感情と信仰とが結合して、偉大なる勢力となる。近時我國に於ける所謂社會科學なるものが、若き學徒の間に、一箇の情熱にも似たる空氣を伴つて、傳播したる現象はその好箇の例證である。研究と宣傳とを區別したり、理論と行動とを分離することは、本來不可能なことである。それは、人間本然の傾向であると共に、思想が活物である限り、當然の事柄なのである。その傾向自體に非議すべきものは存在しないのである。問題は、その理論

なり宣傳なりの成立する根基に就いて、自覺と反省とを缺く時に、その思想の流布に弊害が伴ふ點にある。その最大なるものは、既に一言したる如く、獨立の思索を妨げ、創造の餘地を失はしめることである。我々凡人の陥る缺點はそこにある。それを反面より言へば、懐疑的精神の職分ある所以なのである。アナトール・フランスが、科學の最大の惡は、人をして考へることを止めしめることである、と言つたのは、その意味であらう。個人主義的資本主義に對する懐疑に出發した社會主義的思想が、その發達の未熟なる今日、自ら科學の名において、はやくも一箇の獨斷と化し、その信徒に對しては經典となり、自らの發達を止めしめる危險に逢着しつゝあるは、一箇のアイロニーと言はざるを得ぬ

斯くの如きは人間思惟の運命であらうか。或は然らん。前回において、私は一九二五年を中心として見たる英國に於ける經濟問題及びそれに關連する立法及び行政の一端を叙述して、これらの諸問題を研究することによつて、今後近き將來に於ける趨勢をトし得ることを記述した。私は、それが多くの人の贊同を得るものとも思はぬし、又それを欲せぬ。なぜなら、それより一箇の理論的體裁を伴へる結論を導き、實際行動の指針を構成することは、極めて困難であるからである。—モンテスキユーやマルクスの有したる如き偉大なる論理的頭腦を幸か不幸か持ち合せて居らぬ。けれども、自己の見解に基く論斷と自己の欲求に根ざす主張を避けることも亦不可能である。この意味において、その論斷と主張との生じ來れる觀察に對して、私の抱ける意義を説明して、その一般的普遍性を有せざる、限定的のものなることを確め斷つて置く必要がある。その觀察の意義の有する妥當性の範圍内に於いてのみ、私は自己の論斷と主張の肯定せられることを望むのである。私と雖も、人間思惟の運命を信ずる以上、社會主義思想の科學化の避け難きものなることを知る。又科學そのものの人類に對する文化的意義を認むる以上、一日も早く、この時代の來らんことを望む點において人後に落ちるものでない。然し乍ら、私は今日までの社會主義思想に對して、斯くの如き價値を認め得ないのである

る。私は寧ろ、今日の我々の任務は、過去の既成思想に捉はるゝこと無く、又徒に先人の構成せる論理的範疇を註釋し、又は事實の世界に當嵌める丈けに努むることを止め、今少しく廣き視野に立つて、複雜なる事實の動きを觀察し、論理の創造に今少しく餘裕を與へることに存することを悟るのである。私一箇の狹き經驗より云ふのであるが、我國近時の社會思想界における二大傾向たるカント哲學に影響されたる社會科學とマルクス思想に傾倒せる社會科學、何れも從來の個人主義的資本主義と國家主義的官僚主義の奴婢たりし我國の社會科學に對して、新生面を展開せしものであつて、我々は等しくそれが恩惠によつて、自己の思索を成長せしめ來つたことは云ふまでもない。しかし、その何れもが、お互に他を非難し合ふにも拘らず、極めて非現實的であつて、現實の社會と新らしき世界の動きに盲目であることに變りは無かつたやうに思ふ。茲に於いてか、反動は生じ來つて、今度は斯くの如き思想の研究を全然捨てて、統計や歴史や政策の事實的記述を一向に重んずる傾向が生じ來つたと云ふ。勿論それは當然の事であらう。私は、それに對して、多大の賛意を表したいと思ふ。殊に、それが從來我國社會科學の最大の缺陷であつた我國自身の材料を取扱ふ者が多くなつて來たことは、最も喜ぶべき事である。けれども、この傾向が極端化して、哲學的概念的思索そのものを否定するに至るならば、それは又大なる弊害を殘すことになりやしないか。反動より反動に移ること無く、多方面の學問的分業が、相互に他を利用し、調和と協同とを全ふするにあらざれば、到底社會科學はその發達を期し得ないのである。論理的思索を伴はざる事實的記述は、學問の素材に過ぎぬ。日本の事實は今後益々國際的關係を有するに至る。日本の研究が外國の研究を忘ることになれば、それは反動的逆轉と云ふの外は無い。私は總ての研究が、その前提の有する意義の範圍に於いて、各個の獨立した價値を有するものと思ふ。即ち、それの觀察せる事實を如何なる觀點又は動機によつて、意義づけるか、によつて、その結論には一定の價値が與へられるのである。從つて、その結論の獨斷化を避ける爲

めには、その意義を反省する必要がある。その論理の如何は、その結論を導くインスツルメン要とそれの取捨撰擇に對しても反省の要あることは云ふまでもないが、本篇に於いては、專らこの觀察の意義に就いて述べようと思ふ。

二

前回に於いて、觀察の時期として私の述べたことは、一九二五年を中心として見たる英國の經濟問題の趨勢として、着目すべきことは、資本主義的社會秩序内において、新なる秩序が徐々として生れつゝあり、その秩序の何たるかは、從來の如何なる社會主義思想によつても、妥當に説明し得ぬ構造を有する、と云ふことであつた。單に言へばこゝに組織されたる大社會が生れつゝあると云ふことである。而して、その組織の内容を説明するのに、如何なる中心點を求むべきか、と云ふ點に至つて、私の考へたることは、多くの社會主義思想の何れもが反面の眞理を有するに止まり、又重大なる問題を逸し居り、これを妥當に説明し、それが將來の運行を指導するに足るものは、未だ生れて居らぬ。そはこれより生るべきである、と云ふ事である。若し、充分なる時の餘裕とそれを解くに足る天稟の頭腦を有する人であるならば、これより何等かの理論を導き來るであらう。若し、マルクスをして地下より立たしめて、一八四九年の英國で無く、今日の英國に在らしめば、必ずやかの『資本論』とは、全く面目を異にしたるものを生み出したであらう。斯くの如き感慨を禁じ得ざる者、豈獨り私のみではあるまい。しかし、斯くの如き資格と立場とを有せざる私の求めたる目的は他にある。新らしき『資本論』は必ずや生れ來るであらうが、そはその任にある他人に求めよう。私自身の動機は凡そ次ぎの二つにある

その一は、今後この新秩序が如何なる徑路を辿つて完成の域に達するにせよ、現在經濟界の諸方面に現れつゝある現

象の相互關係を妥當に說明し、その中心點たるべきものを見出すことが、將來を豫斷するに對しても、緊要の問題である。そは如何にして可能であるか、と云ふ課題に對するものが、私の第一に掲げたる動機である。私は前に、この課題に對して、大膽にも過去の社會主義思想は何れも失敗してゐると述べた。そは、勿論それらの諸思想を全部否定するものでも無ければ、又その現在に於いても有する効果を無視するものではない。私の眞意は、一方寧ろその將來に於ける發達を豫想し、確信してゐるが、今日までの夫れは皆先驅者の思想に過ぎぬのであつて、我々は更に多くの創造を試みる必要あることを言はんとするに在る。他方私の目下抱きつゝある考へは、社會主義思想の他の主要職分たる資本主義思想に對する批評は、右に述べたる建設的方面と同じく不充分であつて、近時に於ける資本主義思想の發達に對して怠慢且つ不注意である、と云ふことである。何故に、過去の社會主義思想は、今日の實際を說明するのに失敗してゐるのであるか。何故に、その不充分なる內容に膠着しつゝ他を批評し、論難するに急であるのか。かうした問題に對する疑問も自ら、この動機に伴へるものである。この第一の動機は、それに對する答解如何は暫く別として、今日の資本主義制度に滿足せず、之に代るべき新制度への指針を求めんとする人々に一般的な問題たり得るものと思ふ。

その二は、少しく限定的な、主觀的な動機に因るものである。そは、現在及び將來に於ける新秩序內に於ける政治及び行政の地位如何と云ふ問題である。發生的に言へば、この動機の方が最初に私の抱きたるものであつて、自分の專門的研究がこの方面に存するが爲めなのである。しかも、政治及び行政の研究に從事する者の總て經驗する所であらうが、この社會的職分を研究し調査する場合に最も困難と煩勞とを感ずることは、經濟現象との相關々係より生ずる問題である。初期の資本主義時代に於ける如く、政治及び行政の、經濟界及びそれより生ずる社會的結果に對する關係が、極めて狹少であり且つ消極的であつた場合には、國によつて種々異るけれど、政治及び行政の研究は比較的簡單であり、

有力な支配者階級の承認する範圍の組織と機關とを以て營まれたる職分を研究すればよい。しかし、今日の如
に英國の如く、政治的の支配者階級は最早單一な階級では無く、その勢力は、略均衡を得つゝあるやうな國に於いて
は、政治及び行政の範圍は極めて廣き範圍に亘り、且つ自ら積極的に經濟的職分に干渉し、是正し、指導するに非れ
ば、その存在の理由が無いのである。從つて經濟との關係は、事實上分離し難き體樣を爲してゐるのである。即ちその
相互關係は、結果でもあれば原因ともなつてゐる。そは、概念上我々の腦裡に於いて區別するの外無い。理論の研究の必
要はそこにあるが、しかもその概念を構成するに急であり、又偏跛なる時。反つて實際を曲げて、無理な解釋を施すこ
とになり、理論的概念を把持せざる方が反つて妥當な判斷が得られ、政策の樹立にも有利であることになる。例へば、
若し假りに今日炭坑業が或る形式に於ける國有と決定されたる場合に、その組織を如何に實現すべきか、その賃銀決定
の方針及び機關を如何に設定すべきか、その金融を如何にして調節するか、その市場への關係は如何にして有利に運用
されるか、等の事項を思ひ浮べたゞけでも、どこまでが政治の範圍で、どこからが經濟の範圍であるかは容易に決定さ
れ得ない。若し、これが暴力革命か叛亂かの形式でも執つて一切の重要な産業が國有となりたる場合なら、その所有關
係から生じ來る政治問題丈けは存在しなくならう。それでも、埋藏物及び土地所有權に基く賃料即ちロアルテイの問題
は容易に解決つくが、鑛業用資本の所有權に基く關係は、その後の經營と大に關係ある爲め、即ちその鑛區の地位、內
容の優劣等は、國有事業そのものの能率に關係あるが爲め、更に積極的な、建設的な政治及び行政上の行爲を必要とし
よう。況んやその決定が、事業不振な爲めに改造を要すると云ふ理由が主要な點となつて、炭坑業のみがその問題とな
りたる場合に於いては、他の地位を異にする產業及び外國市場との關係は、嚴密な意味に於ける經濟的職分では無くて、
政治的及び行政的なものを必要とすることは明かである。右の如く職分の內容から言つて、單一明白なものでないの

みならず、その組織から言つても、これに關與するものは、その經營に直接に當る企業者——それが政府の任命による場合には官吏と言へるかも知れぬ——及び勞働者の團體と、配給、調査及び社會事業的性質の事業を營む方面には、地方團體及び各種の施設團體があらうし、金融及び他の近接事業との關係に對しては國家の役割は非常に大とならう。これら諸種の團體の相互關係を一體として見る時、如何なる定義を以てするも、如何なる概念を以てするも、今日までの所、適當なものは我々の既成の學問には見出し得ないのである。鐵道の如き交通業、瓦斯電氣の如き動力照明業の經營は、その消費需要方面への關係が極めて簡單であり、且つ外國との競爭が全く存在せず又は、遮斷されてゐる事業であるから、從來と雖も學問上及び實際上の理論が既に存在するけれど、右に例として擧げた炭坑業に至れば事情は全く異る今日英國の社會主義はフエービアン協會の研究以來四十年間の歷史を持つてゐるけれど、尙且つその『瓦斯水道の社會主義』(The Socialism of Gas and Water) の綽名に値する、前記の交通動力業の經營に關する研究すら、經濟的理論から言へば、不完全な域を脱し得ないのである。英國の公營事業の實際は、政治的庇護により又は財政上の轉嫁又は回避によつて、その會計上の辻褄を合せてゐる場合が尠くないのであつて、是に對して政治上の理由と經濟上の必要とを如何に正しく決定すべきか、は今後の發達に殘されてゐるのである。要するに、政治及び行政の研究に最も必要なるは、その空中の樓閣たるやうな體系を研究したり、砂上の礎石なるやうな概念の建設に急ぐことでは無くて、經濟の實際と理論とを先づ適確に把握することであらねばならぬ。かうした實感によつて、私は今日の英國が經驗し、創造しつゝある政治及び行政の現象に當面した時、それと密接な關係ある經濟現象及びその理論の研究に力を注ぐことの避くべからざるを思つたのである。殊に、私は拙著『政治學の任務と對象』に於いて、極めて不完全なる研究しか發表してゐないので、これを補綴する義務あることは、自ら感じてゐる所であるが、その最大の缺陷は、當時この問題に對する

積極的の叙述をする力を持たなかつた爲め、極めて概念的な關係を叙ぶるに止めてゐたことである。

三

右の二箇の動機に基づいてこの觀察を試みる氣になつたのである。從つてその觀察の意義はその動機の範圍に於て、大體決定されよう。この觀察の內容及び將來への豫斷は、素より本論に於て示されるそれによつて、それ自身が語るであらう。此處に私の附加せんとする事は、今日の事態に對して、右の如き動機を以て觀察する意義には、更に重大な歷史的意義が見出し得ると云ふことである。これは今日の事態に遭逢したる我々二十世紀の人間に共通に與へられたる機會である。總て社會の進化は不斷の進行であるけれど、それは恰も河流の如く、又は海波の如く、時に急流あり怒濤ありて、決して坦々たるものでは無いのである。それは過去の歷史の明證しつゝある所である。人間社會の進化は、良きにしろ惡しきにしろ、幸か不幸か、戰爭なるものによつて、急激なる動搖裡に進展する事實を有する。國と國とは、干戈を交へ、人血を流して、それによつてより緊密なる――必らずしも親善とは云へぬ――相互關係に入るといふ矛盾を有する。殊に經濟的發展は戰時及び戰後に於いて、急激なる發展を遂げてゐるのである。今次の歐洲戰爭もその例に漏れないのである。戰爭直後人々は、生産に就いては多くその前途に對して悲觀的見解を抱くのを常とするが、やがて事實はその豫想を裏切るのである。戰後七年にして、今日世界全體の生産額は、戰前のそれよりも增加してゐるといふ事實は專門家の語る所である。勿論國によつてその程度は異る。又或る一國丈けを取るなら、戰前に比して遙かに低位にあるものもあらう。しかし、これは他の國の發展によつて補はれてゐる。例へば、露國はその著しき例證であつて、種々なる原因によつて、此國は不幸にして、戰前の生産額に恢復してゐない。しかし、これは米國の異常なる發展によつて、

世界全體の立場から見れば、裕に補充されて餘りあるのである。又或國の或る産業丈けを取るならば、未だ戰前の域に達しないか、又は他の産業の比例と同じく進展しないものもあらう。例へば英國の木綿紡績業の如きはその好箇の例である。それは、支那の動亂止むことなき爲めと、印度の市場を日本の紡績業に多く蠶食されつゝある爲めである。即ち世界全體の木綿紡績業は、日本の發展――安價なる賃銀及び長き勞働時間によると云ふ悲しむべき原因を伴つてはゐるが――によつて補はれてゐるのである。又英國それ自身に限つても、新なる産業の發達によつて、その損失が補はれてゐる。例へば、人造絹絲業は戰後否最近二、三年に於いて異常の發達を遂げた新らしき産業であるが、その投資額三千萬磅に達し、昨年(一九二五年)の生産額は、二千五百萬封度に上つてゐる。即ち、古き纖維工業は新らしき姉妹工業の勃興によつて補はれつゝあるのである。(The Times, Artificial Silk Number, 8'th. mar, 1926.) 單に生産額の問題より云ふならば、戰後の世界は異常なる進歩と言へる。しかし、問題はしかく簡單では無い。斯くの如き生産額の發達の裏面には、國と國との間又階級と階級との間に分配の關係を戰前の夫れと異る體樣に置いてゐるのである。又原料及び販賣市場の狀態は同樣に著しい變化を遂げてゐる。而して、生産額が世界全體の立場より云ふならば、その總額は増加してゐるのであるから、分配の夫れも全體として増加してゐる筈であるべきであるが、事實は寧ろ反對であり、その內容は極めて複雜であつて生産額の場合の如き簡單な計算は許されない。戰後或る方面に於ては分配の點に就いて著しい樂觀的見解が行はれたけれど、世界各國及びその內部に於ける各社會階級の分配所得の狀態は必ずしも戰前に比して良好なりとは言へぬ。生産の變化又は發展と平行して行はれた分配の變化との相互關係を如何に見るか。今日の問題はそこにある。國と國とが未だ統一せる國際社會を有せず、階級と階級とが統一せる中樞機關を有せざる時、この相互關係に不公平あり不均一ある場合、國と國との間に、又階級と階級との間に、これに對する態度と政策とが、種々なる形

を以て現れることは見易き事理であらう。

斯くの如き著大なる變化は、決して屢々ある譯では無い。英國の場合に就いて、今日の資本制經濟の發生當時に遡らす、資本制經濟の最大の要件たる國外市場の獲得の行はれた當時から觀察するならば、十八世紀の末葉から十九世紀を通らして行はれたる著大なる變化を見れば足る。そこに我々は二つの時期を見る。一つは、一七九三年に始まつて、途中アミアン條約の成立により暫く中絶したが、結局は一八一五年のウィーン條約に至るまで續いた所謂奈翁戰爭である。他は一八六〇—五年の米國南北戰爭及び一八七〇—一年の普佛戰爭の結果として發生せる米獨二國の經濟的發展が、大なる影響を英國の經濟に及ぼし始めたる時期である。右の如き二つの時期に現れた變化を觀察し、それが結局如何なる形態に落ちついたかを見る事は、今日歐洲戰爭の後我々が眼前に當面しつゝある問題の意義を理解し、その將來の趨勢をトする上に頗る參考になるであらう。この理由よりして、こゝに私は奈翁戰爭當時及び其直後に起りたる問題をとつて、論究してみようと思ふ。

四

十八世紀より十九世紀への過渡期に於いて、前後二十年間の長きに亘つた奈翁戰爭は、既に農業及び商業上の革命的變化を遂げ、產業上の技術的基礎も備り始めて居つた十八世紀末葉の英國經濟に躍進的變革を齎らしたことは容易に想像せられるであらう。戰爭は、國家をして一大消費者たらしめ、國內市場に一大變化と刺戟とを齎らすのみならず、國際市場に於いても從來の關係に大なる變化を與ふる結果、國家と國家との輸出入貿易は著大なる變化を蒙むるのである。引いて各國內の異れる產業部門のバランスを轉換し、それに從事する人口比例に變動を與へ、企業者及び勞働者の

所得の性質及び金額も種々異れる比例に於いて變化し、同時に物價の動搖を伴ひ、斯くて國家の財政、企業の金融狀態、個人の生活程度に革命を齎らすを常とする。市場、物價、及び銀行等の問題が、平時に於いては單に技術的の問題に過ぎざる如く考へられ易きに反し、それが政治上の問題となり、經濟政策の上に著大なる役割を演ずるのは、いつもかやうな激動期に於いて見られる現象である。かくして、經濟界の諸方面が各個の機能を極度に表現する結果、經濟理論の變化が之れによつて伴はれるのは毫も不思議では無い。又經濟と政治との關係が、平時冷靜に概念的な區別の下に、各がじじその部面の進行を迎れるが如く見ゆるに反し、戰時變動の際はその區別が紛交され新なる關係の下に展開されることも經驗される所である。

かやうな變化を奈翁戰爭も亦、十九世紀初頭の英國に齎らしたのである。その重なる問題として、私は次ぎの三箇の問題を擧げたい。第一は農業の危機であり、第二は工業の發展であり、第三は金融の變革である。

(1)農業の危機　十八世紀の末葉、奈翁戰爭の始まる以前に於いては、英國は農業生產の上から言へば、國內の需要を充したる上、その餘剩を國外に輸出して居り、その生產額より言ふも工業生產に優り、全體から見て英國は未だ農業國であつたと言へるのである。それが次第にバランスに近づき奈翁戰爭の前夜に於いては、人口の增加、工業の發達により、平年作以上の場合に於いてのみ、國內の農業生產はその需要供給が略平均したのであつた。これは何を意味するかと言へば、若し不作の場合には、供給の不足を告げ、價格の騰貴を齎らし、外國よりの輸入によつて緩和せねばならぬといふことである。これ十八世紀の最後の十年間に至るまで英國に於いて經驗せざりし新問題にあらずして何んであらう。

かゝる時期に際して戰爭は勃發したのである。外國からの供給——當時は未だ帝國領內よりの輸入は存在しなかつ

と言つてよい——は遮斷され、國內の需要は增加し、價格は騰貴するに至つた。かくて、農業生産は戰爭に……られたる不自然なる需要によつて、大なる刺戟を受け、耕地は擴張され、リカルドウの所謂限界耕地は高まり行つたのである。若し理論經濟學者の假定する如き自由競爭——この場合は外國よりの輸入を意味する——の存在したらんには、到底耕され得ないであらうと思はる土地まで、此の法外なる價格の爲めに、銀行その他の資本貸付を得て、耕作さるゝに至つた。この農業界を見舞へる好景氣によつて利得した者は主として地主と借地農であり、當時既に賃銀農業勞働者の地位にありし者は、賃銀の增加に比して、物價の騰貴によつて不利益を蒙むり、貧民救濟區の救助によつてその生活を維持するの外無かつた。彼等も最初は、賃銀値上の運動によつて、この事態に對抗したのであるけれども、一七九五年の所謂スピーナムランド(Speenhamland)式救濟法の各州に採用せられるや、この値上運動は阻止せられ、貧民となる事によつてのみその要求の幾部分かが容れられたのである。この救濟法の採用は、幾多の提案中實現を見たる唯一のものであつて、十八世紀に於ける最後の、支配者階級の行へる恥辱的行爲である、とハモンドは評してゐる。即ち、政府の物價調節は殆んど見るべきもの無く、サムユエル・ホウイットブレットの提案せる最低賃銀法案は首相ピットの反對に逢ひて議會之を郤け、小分割地制度(Allotments)は圍ひ運動の爲めに共有地への入會權を失へる農業勞働者の救濟政策の一つであつたが、これ又實現せず、數年の後僅かの地方に於いて、アーサア・ヤングやコヴエットの努力によつて實現されたに過ぎぬのであつた。(J. L. and B. Hammond, The Village Labourer, pp.99-141)

農業企業者にとつての好景氣は、一に戰爭によつて惹起せられたものであるから、その戰爭の休止によつて齎らさるべき反動期への豫想は、地主及び借地農は固より、彼等に法外な信用貸付を行つてゐる銀行家の頭を惱ましてゐた處であつたが、戰爭の長びくにつれ、彼等はこの狀態の當分存續するものと思ひ込むに至り、どしどし事業擴張を行つたので

ある。この投機的事業も彼等の豫想に當り、さしも長かりし戰爭が、愈休止の時期に近づいたといふ豫感と警告とが、一般に普及するに至つたのは、奈翁がエルバ島に流謫されてからであつた。即ち一八一四年に入つてから、バルチツク地方及び米國からの輸入によつて、穀價の下落を見るべしとの聲は、農業者達を驚かしたのである。かくて、當時政治上の支配者であつた地主は、早速議會をしてこれが對策を講ぜしめたのである。これが結果が有名なる一八一五年の穀物條令となつたのである。即ち國内市場に於ける穀物の價格が一クオーターに付き八〇志を超えざる限り、外國からの輸入を禁止した。これより以前の穀物條令は、戰前の夫れは極めて低きものであり、戰時中のものと雖も斯くの如き高いものでは無かつた。一八〇四年の改正法が、その最後のものであつたが、それに依れば國内市場の穀價六三志以下なる時、二四志三片の輸入税が課せられ、六六志の場合は僅かに六片であつたから有名無實と言つてよかつた。輸出に就いて見れば、五四志の場合は禁止され、四八志の時は五志の奬勵金が與へられた。是等の條令と雖も、需要供給の自由を妨げたことは事實であるが、實際上大なる障碍で無かつたことは、この輸入税を拂つた輸入穀物も相當にあり、輸出も禁止されてゐたに拘らず、戰時中穀價は概ね六六志以上の高値を保ち、一八〇八年より一三年までは九五志六片を下らなかつたことからも察せられるのである。即ち斯くの如きは、一に國内需要の存在と多量の輸入が船腹の不足、運賃の騰貴によつて、不可能であつたことを示すのである。從つて、これは近き將來に於ける價格下落無きことの保障と見られた。そこで、生産力に乏しい土地まで耕され、生産費の増加となり、地代の騰貴を見、農業者の生活程度の向上となつたのである。かういふ好景氣裡にあつた際であるから、當時の地主貴族は將來の對策に就いて餘り努力する要も無かつた。然し、ヘンリー・パーネルの如き、アイルランド出身の地主から提案されて、一八一三年に穀物市場調査委員會が議會に設けられた。彼の動機は、當時專ら英國へ輸出する目的を以て營まれてゐたアイルランドの穀物農業が一八

○四年の法令によつて蒙つてゐた制限を撤去せん目的であつたのである。この委員會の調査によつて明かにされたことは、大陸諸國よりの小麥の輸入が相當にあるが、これが英國にとつて得策なりや否やの議論の始めて生じたことである。ピットによつて設けられた農業局の第一次總裁であつたシンクレーアの如きは、これは財政的に見て英國の弱點であるとした。しかるに、このことは英國の工業的發展の事實を看過するものであつて、その工業製品を賣りて、小麥を買つてゐる事實を忘れてゐるのである。この農業と工業との衝突は、未だ正面に現れなかつたのである。而して、この委員會の議論が一八一四年まで持ち越され、偶その年の豐作の爲め穀價の下落を見、輸出禁止は撤去された。而して、輸入關税の問題をどうするかの審議の必要上、新なる調査委員會が設けられた。この委員會が、既に述べた一八一五年の穀物條令の基礎を提供したのである。即ち、戰時中發達せる穀物農業の生產費及び生活費を考慮する時、最低價格八○志を維持するに非れば、農業生產者に利益無し、と云ふのである。この委員會に對して、工業家からして輸入關税の增加に反對する請願のありたることは注意を要する。翌一八一五年も續いて豐作であつた爲め、農業の危機は一層その度を增し、二月拾七日の緊急決議によつて、遂に輸入禁止の穀物條令となつたのである。この討論に對いて、工業家の意見と利益とを代表するロビンソンの如き、フイリツプの如き有力な反對のあつたこと、後者がマルサスの人口論を引用して、農業保護の弊害を論じた事等、後年のコブデン・ブライトの自由貿易運動の先驅として見るに値する。(J. F. Rees, A Short Fscal and Financial History of England. 1815—1918.pp.32-35)

斯くの如く奈翁戰爭の終末期に於ける穀物條令は、地主及び農民の勝利として現れた。この勝利が戰後に至つて繼續されたか否かは英國十九世紀經濟史の經過を知る者にとつては、今更ら絮説を俟たぬ所であるが、今私の茲に讀者の注意を引かんと思ふことは、この勝利が經濟狀態から見て當然のものなりしか、又その後敗退せる所以のものは、何の故であ

つたかの一事である。奈翁戰爭は農業と工業との生産力比例及び農村と都市との人口比例を如何なる狀態に置いたか。これを知ることが、この問ひに答ふる第一の條件とならう。『十九世紀英國民史』の著者アレヴイが、當時の統計文獻によつて、記述する所を見るに、論者によつてその計算が異り、農業階級の代辯者は人口の半數は尙ほ農業に從事すると主張してゐたが、一八一一年の國勢調査によれば次ぎの如くである、と言つてゐる。一方農業及び鑛山に從事する人口數六、一二九、一四二なるに他方商工業及び海運業に從事する人口數七、〇七一、九八九である。その所得は前者の階級に關するもの一〇七、二四六、七九五磅、後者の階級に關するもの一八三、九〇八、三五二磅である。エレヴイは曰く『この平衡の破綻からして、現在の結果が如何にあらうとも、平和恢復の曉、英國と他の諸國との關係は平和的な恒常的な元通りとなるであらうか。問題は重大である、英國を擧げてその重大さを認識してゐる』と。(E. Halévy Histoire du Peuple Anglais au XIX Siècle, I, pp. 191-93)

しかも七年が過ぎた。一八二二年に至るまで、地主階級の覇權は動搖しなかつたのである。この七年間に於いて、地主及び農民の運命をその根底に於いて覆しつゝあつたものは、連年の豐作による生産過剩に外ならなかつた。穀物條令による獨占を以てしても、國内の供給そのものの統制なくしては、價格の動搖を防ぎ得ぬことが明白となつた。而して、この價格の不安定は、消費者階級たる工業階級に不利益なるのみならず、農業階級自身にとつても決して有利ではない。なぜなら、國内生産の統制は、その大部分天候に支配される以上、人力の及ばざる所に存するに拘らず、他方輸入の禁止によつて調節の不可能なる場合、他方一定の有効なる需要の存する限り、この需要供給の開きは不當に人爲的に保たれてゐるものと云ふべく、農業をして全く投機的なものとなしてゐるからである。農民は豐作の場合には價格の下落を防ぎ得ぬし、不作の場合を豫想すれば生産費の高上をもつてして耕地の擴張を企てねばならぬ。その結果、地代の

騰貴、利子の増加となり、現在の價格を以てするも、農民にとつて採算に合はない結果となつてゐる七年以後のデフレーションによつて物價の下落を來し、農民自身困難の位置に陷つたのである。かくて、この事態と穀物條令との關係如何は輿論の焦點となり、政府は、當時旭日の勢を以て擡頭しつゝありし正統派經濟學の主張に動かされ、穀物條令の不合理を信ずるやうになつた。一八二一年に政府は議會に調査委員會を設置して、その審議を命じた。この委員會の中にハツスキンソンとリカルドウの二人の居つたことを注意して欲しい。この二人の主張が委員會を動かすに有力であつたことは、歴史家の記す所である。リカルドウは現行穀物條令の禁止主義に反對したことは云ふまでもなく、低き税率による國定關税率にも不贊成であつて、唯外國との比較生産費による對等税率（countervailing duty）の主義を主張した。しかるに、委員會は主義に於いて禁止に反對せるも、實際は固定關税主義による制限を提案した。從つてこの委員會の報告にすら、農業階級は猛烈に反對し、彼等は政府に向つて減税による救濟法を要求した。從つてこの委員會案は實現せられず、翌二十二年第二回委員會が新に作られた。リカルドウの批評する所に依れば、主義の上に於いても、逆轉し、高き程度の固定關税率を以てする制限を提案した。彼は、その固定關税率を如何なる標準によつて計上するかを問ひて、その根據無きことを非難してゐる。『我々は六十磅の收益價格で、綿布を製造して外國に賣り、それで一クオーター二磅の小麥を三十クオーター買へるのである。しかも我々はそれを拒絶せられ、一クオーター四磅の小麥を十五クオーター買ふべく餘儀なくされてゐる』と言つて居る。（Ricardo, On Protection to Agriculture, in Ricardo's Economic Essays, edited by Gonner, p.292）ここに、リカルドウの所論を詳細に紹介する必要は無いと思ふが、彼が農業階級の主張を各方面より論駁し、當時未だ政治的に有力とならざりし工業階級の爲めに歸せる所は、歴史的に見て興味が多い。ともあれ、かくの如き第二回委員會の提案が、その年に法[illegible]穀物條令改正法とな

つたのである。その後の改正法の歴史的推移に就いては、そしてその一八四六年に於ける最後に就いては、天下周知の事實であるから、玆に略する。百年後の今日、この農業階級の地位に該當する者が、その當時の新興階級であり、リカルドウの如き有力な代辯者を有せし工業階級であることは、歴史的變遷の教ゆる最大の意義ではあるまいか。

(2)工業の發展　右の農業の危機を齎らせる底流が工業の發展に存することは、既に述べた所である。而して、この工業の發達は、既に奈翁戰爭の以前に顯著に現れて居つた事實であることも、經濟史家の詳かに語つてゐる所である。今それに就いて語ることは無用であらう。たゞ、その如く準備されてゐつた工業が、戰爭時に於いて急激な發展を遂げた原因に就いて語ることは、農業の場合よりも、今日歐洲戰後の事態と對比して、寧ろより多くの歴史的意義があらうと思ふ。なぜなら、その工業が今日に於いては、他と比較のならない程主要な產業であり、今日英國の經濟と言へば、右の一世紀以前の時代に於てその基礎を確立した資本制工業であるからである。

總て生產組織又は方法を中心として見る經濟發達の階段說に就いて、我々の注意を要することは、その生產に要する資本、勞働の供給範圍及び移動圈內に着眼することと、その原料及び製品の需給領域に着目することとの調和的綜合的な見方である。經濟理論を組立てる場合には、この兩者に就いて一定の假定を設けることが缺くべからざる條件となつてゐる。しかし、實際上の觀察又は歴史上の考察では、その假定を設けることよりも、寧ろこの兩者の關係が種々に變化する有樣、その結果として生ずる兩者の變動の態樣を、ありの儘に見ることが肝要である。例へば都市經濟と言はれる經濟階級は、後者の觀點よりすれば、國民經濟と言へるのである。國民經濟と言はれる階級では、世界市場を伴ふてゐるのであるから、同時に國際經濟とも言ひ得る。同樣に、生產を中心としない他の見方の場合にも、例へば消費信用

等に着目するものの場合にも、それと生産との關係を忘れてはならない。要するに、經濟發達階段說は何れかの觀點に立たねば成立ぬけれど、他の觀點との綜合的關係を逸すると、實際上の觀察や歷史上の考察に役立たぬのである。いま、十九世紀初頭の英國經濟が、奈翁戰爭によつて如何なる發展を遂げたかを見ようとする場合に、第一に必要な見方は、この綜合的な、或は相關的な觀點である。而して、この時期は、正に英國經濟が國民經濟と言はれる階段に到達した時期なのである。ランカシャイアの紡績業は、その勞働者の供給が英國內のあらゆる地方から、多かれ少かれ障碍は尙存在してゐたにせよ「自由な移轉」によつて可能となつたのである。從つて、熟練勞働者も最早フランダース地方からの移住又は招聘を俟たずして自國內で供給し得るに至つた。又資本も個人の手元金により、又は自國內の銀行によつて自由に供給され、フランフルトやライプチツヒの商人から借らずともやつて行けるやうになつたのである。(初期のランカシャイア紡績業の創業資金が外國商人によつて供給された事例に就いては、ダニエルスの研究「初期木綿紡績業史」(G. W. Daniels, Early History of Cotton Industry) を參照せられたし) かくの如く、生産方面に於いて、國民主義的傾向の完成により、全く中世的世界主義の打破が行はれると共に、他方商業方面に於いては、その原料の供給地として又製品の販路として、益々國際的傾向が募つて行つたのである。しかも、その初期に於ては、國際市場に關する智識も不完全であり、その取引關係の機關も充分に備つてゐなかつたのであるから、その生産に及ぼす關係は極めて亂調子であり、恒常的な關係を保ち得なかつたことは極めて自然である。しかも資本制工場生産は、その製品の販路その他の點から、この國際市場に依存してゐる以上、そこに發生せる變化の如何は直[illegible]の[illegible]を齎らさざるを得ない。初期の資本主義制度に於ける賃銀勞働者の狀態が極めて悲慘苛酷なる運命の下に置かる[illegible]の原因はそこに在る。なぜなら資本的企業家は、かゝる時代に於いては、その利得の機會と損失の機會とを併ひ[illegible]けれど、勞働者は強固な團結

をせざるを以て、前者の機會に於いてその分け前に與ること薄く、後者の機會に於て打撃を受けること殊に甚だしいからである。奈翁戰爭時の企業は正にかゝる時期に於いて見出されるのである。即ち一言にして盡せば國內及び國外に於いて不確定なる一大需要の發生を見た爲である。この點前段農業の場合よりも、その範圍の性質及び程度が一層大きいのである。その內容を一々詳述することは歷史書に讓るとして、その主要なる條項を擧げて見よう。先づ第一に國家が一大消費者と化したことである。一八一五年度の豫算は一億六百萬磅であつたが、一八一八年度の夫れは五千三百萬磅となつてゐる。即ち約三分の二が軍事費であると見られやう。その中の何程が工業家の手に入れるものか分らぬけれど、軍需品製造に關係ありし工業が、國家に一大需要者を見出してゐた事は事實であらう。第二は、海外の需要である。その內容は頗る複雜であり、殊に一八〇六年の奈翁の大陸封鎖によつて受けた打撃、又自ら行へるこれに對する報復條令が齎らせる損失等を計算に入れねばならぬけれど、大體に於いてその海洋の支配によつて、英國が當時世界の輸入貿易の半ばを占めてゐたことは歷史家の論斷する所である。殊にスペインとの條約によつて南米に對する商權の擴張を行つたことは、恰も這時の歐洲戰爭當時、我國の資本家が東洋の市場に亂調子の發展を行つた狀態とよく似てゐる。從つて、一八一一年に起つた恐慌の有樣も大正九年四月のガタ落ちとよく酷似してゐる。マカロツクがその當時の記事を書いてゐるが、初期資本主義が如何にして發展するかを見る好資料であらう。(Smart, Economic Annals, p. 181.)第三は、歐洲市場の需要に對する見込である。當時の英國は、今日の英國と異り、未だ自國の帝國領に於いて購買力ある顧客を有たなかつた。從つて資本家の意圖は一に歐洲及び米國市場の獲得にあつた。殊に、前者に於いてその將來を期待し、奈翁戰後に於ける發展を見込し、事業の擴張を維持せんとしたのである。これが戰後に於いて見込はづれとなつたことは、一時大なる打撃を受ける原因となつた。しかし、結局に於いて、戰爭の疲弊より歐洲諸國が次第に恢復する

につれ、彼等の見込は當つたと言ふべきである。歐洲諸國、殊にドイツが、その資本主義的發展とたつた十九世紀の末葉まで、英國は歐洲にその一大顧客を有してゐたのである。以上三箇の方面より發生せる需要の増大及び獲得が、奈翁戰爭による英國工業の發展の原因である。かくの如き原因による工業が、その生産及び流通の組織を如何に變化せしかは容易に想像せられる所である。これ、第二の觀點として私の擧げんと欲する所である。

即ちそれは工業組織の變化である。機械の應用による多量生産である。如何なる産業革命史と雖も、機械の發明、介業の應用による工業組織の變化を說いて詳かならざるものは無い。否寧ろこの變化即産業革命とまで見做され、世人を誤解に導ける所多きに過ぐる位である。換言すればかくの如き變化が齎らされたるは、決して偶然でも無く、又自發的でも無いのであつて、そは前段に述べたる需要の量的質的の變化に伴はれたものなのである。この需要と供給との關係は、因果の關係と言はんより、寧ろ楯の兩面であつて、機械生産と多量消費とは、同一の現象の異れる機能に過ぎぬ。マーシャルが、産業發展の一原因として需要の増大即ち市場の擴大を擧げ、經濟學者によつて、この方面が輕視せられ來つたことを遺憾としてゐるのは正當である。なぜなら産業革命は右の二重の刺戟によつて發生したのであるから。(Marshall: Principles of Economics, pp.664-7.) 理論經濟學に於けるこの二者の關係が如何に取扱れてゐたかを理論として論評することは、次回に讓るとして、この歷史的變化が理論そのものに變化を及ばしたことを、茲で一言して置きたい。即ち需要の量が増大すると共に、その質がそれ以前の如く少數貴族の奢侈品で無く、多數民衆の生活必需品に代れる變化が、此の場合機械生産を可能ならしむる要件である。ハモンドの說く如く香料や布や貴金屬の輸入に代りて、茶や砂糖や棉花の如き生活必需品やその原料が輸入せられ、これに應じて綿布や鐵器の輸出が可能となりたる事が、重大[illegible]これ十六、七世紀と

り十八世紀にかけての重商主義時代に於ける商業の性質と根本的に異れるものである。從つて、この時代に於いては、商業は最早現相では無く工業の依存する基礎なのである。人々の注意が工業に向ひ、その現相に眩惑されたのは極めて、自然であるが、重商主義の陥れる誤謬を、その反對の側に於いて自ら行へることも亦明白である。(J. L. Hammond and B. Hammond, The Rise of Modern Industry 1925, pp.1-65) しかし、この點から見て興味あるは、アダム・スミスに對するリカルドウの批評である。アダム・スミスは農業と工業との區別に就いてはクイヂオクラットに一歩を進めて、その同じく生産的なることに異る所無しと見做したが、外國貿易殊に輸入貿易に就いては、不生産的なる刻印を撤することができなかつた。從つて、彼の資本の四用途に關する章節は、彼より四〇年遲れてその書を公にし、殊にこの外國貿易の性質の一變せる當時の事情に通ぜるリカルドウにとつて、甚しく不滿足に見えたのは當然であらう。彼は、外國貿易に投ぜられる資本は國內工業に供給する原料及び製品の販賣に缺くべからざるものであつて、後者の發達と不可離の關係にあることを暗示して、その生産的なことに變りは無いことを述べてゐる。この叡智こそ、彼の『價値と富の區別』や『國際比較生産費』の所説の如く、人をして誤解に導き易き、又今日となりては最早無用な理論に優つて、我々の感嘆すべき點である。なぜなら、アダム・スミスがその時代に制限せられて、外國貿易の意義を見得ざりし如く、リカルドウその人の場合も、その生存せし當時の環境に著しく制限せられた事實を一般化せしものに過ぎぬからである。又、彼の論理よりも叡智の取るべきものある一例として、彼がアダム・スミスの植民地貿易說に反對せる意見を擧げて見たい。スミスの植民地貿易獨占論を植民地の側より見る場合と母國側より見る場合の二つに分け、獨占が植民地の發達を妨げ、引いて之れに與り得ざる諸外國に損害を與ふることを理由として、之れに反對せるスミスの意見に對しては、リカルドウは滿腔の贊意を表してゐる。が、母國側への直接關係として見る場合に、スミスが簡單に、母國に

とつてもその發展に害ありとしてゐることは、説明が不完全であるとして、後年の特[illegible]有利なる場合あることを論じてゐる。その意見の當否は暫く別として、議論の生れたること自體は、當時の事[illegible]らしむる所であると言はねばならぬ。リカルドウのこの種の議論が、彼の價値論の一部分として讀まれたらんには、彼の學説の贊否共に多少異つたものであつたらうと思はれる。論理のみ鋭くして、非體系的な彼の書方の致す所止むを得なかつた所であらうが、經濟學説史上の一遺憾事であらねばならぬ。（Ricardo, Principles of Political Economy and Taxation, edited by Gonner, pp. 109-129, 325-338）この事は、マルクスに就いても同樣に言へる。彼の產業革命を齎らせる商業的變化に關する敍述は、リカルドウの夫れよりも遙に明快であり、徹底的である。資本制生産の完成は、曾つて工業者の間に介在してゐた第三者たる商人の支配に代りて、生産資本の所有者たる工業家が、自ら商人の位置を奪ひ、商業をして生産過程の一部分たらしめることに存する旨を述べてゐる條項は、如何なる説明にも優つて當時の本質的傾向を道破せるものと言ふべきである。この事實を前提とするならば、彼の生産過程中心論も、反對論者の批評するが如く、決して需要方面への無理解に出發せるものでは無い。寧ろ、餘りに透徹せる洞察とその鋭利なる論理とが、反つてその事實を詳細に觀察することを妨げ、單なる傾向を完成の形に表現せし點に、その後人を誤らしむるものが存するのである。殊に斯くの如き前提の下に、遡つて工業組織の內部過程の分析より出發したるが爲め、この部分が資本論の大部分を占め、不幸にして他の研究への餘力充分なるを得ずして終らさるを得さるに至つた爲め、資本制全體の觀察が、極めて薄弱且つ不完全となつてゐるのである。定に惜むべき點である。マルクスの商業資本と生産資本との關係に就いては、第三卷第二十章の『歴史的資料』の一箇を讀まれんことを望む。今、手許に英譯しか無いので邦譯と頁を示すことが出來ないが、英譯の夫れは次の如くである。（Capital, III, [illegible]）

右に於いて述べたる所は、工業の發展が商業の變化に伴ひ、工業家の職分が流通過程に於いて著大なる役割を演するに至つたことが見逃すべからざる現象であると云ふことである。これと共に、更に我々の注目すべき他の一現象は、異種工業間の關係が相互依存の關係に立つに至つたことである。分業のことは人の説く所であるが、分業は統一の反面に過ぎぬのである。より高き社會的統一を考ふることなくして、社會的分業又は分散は考ふることができぬ。未だ全體の意識的統制は存在せないが、その相互は必然的に連鎖的關係を保たざるを得ないこととなつた。從つて、斯くの如き產業社會の危險は、一の鎖りに破綻の生ずる時は、他のものが直ちにその影響を蒙むることである。即ち、一の產業の需要又は供給が失はれる時は、その產業の購買力は減じ、それに依存してゐる他の產業は、その爲めに損害を受けることとなるのである。殊に新大陸に於ける需要の性質は、舊大陸に於ける夫れの如く一定なものでなく、種々なる原因により て動搖を免れなかつた。當時屢々恐慌の來襲を經驗したのはこれが爲めである。(Hammonds, The Town Labour, pp.101—2)

しかし乍ら、この異種產業間の有機的關係なるものは、當時の社會的意識に上れるものでは無く、後世の歷史家が、後日の推移と比照して、そこにこの新なる關係の發生を認めたるに過ぎぬのである。當時の企業家が、專ら意識的に努めたる所は、この關係を認識して、それを統制する組織の創造に着目することでは無くして、寧ろ十八世紀が殘し傳えたる中世的及び重商主義的制度の打破にあつたのである。換言すれば、この新らしき自由主義社會が齎らせる結果を統制し集中することでは無くして、過去の企業形態より解放せられんとする自由主義運動の衝動的原因を一向發展せしむることにあつたのである、なぜなら、當時は彼等生產企業家にとつて、その所謂自由を束縛する多くの制度と規制とが存してゐたからである。異種產業間の統制組織の第一步たるカルテルやトラスト運動の實現したるは、此等の自由が完

全に實現したる後、即ち十九世紀の後半に至つてからである。工業方面に於けるコンヴイネーションの行はれる爲めには、有限責任株式會社の發達、銀行の發達による株式引受業者の確立、及び市場方面に於ける合同の發達を先決條件とするのである。即ち産業の資本化を可能ならしめ、多量生産の販路の制度化することが條件なのである。十九世紀前半の資本家企業家の運動目標は、この前提條件の完成にあつたと言ふべきである。

資本家的解放運動の對象は、「方勞働契約の自由と居住の解放にあり、他方資本移動の自由と蓄積の保障とにある。これと關連して、商業的方面に於ける自由貿易の制限撤去の運動である。勞働移動の自由を束縛せし制度は、それ以前の諸法を統一した一六六〇年の「居住法」(Settlement Act)に始まる所謂貧民法制度である。この法制は、貧民救濟の制度として言はんよりも寧ろ一種の雇傭制度と云ふべきものであつて、手工業及び家内時代に適當せる制度であつたとしても、新らしき工業家にとつては、その制度の故に勞働者を得るに困難を感じたのである。ロバート・オーウエンの舅デヴイント・デールが、ニユー・ラナルクにその紡績工場を建てたるとき、附近の農村より勞働者を得るに困難を感じ、孤兒や難破船員等を使用したことは有名な事實である。少年勞働者の虐待とその悲慘なる狀態とが問題となりたる時ピツトによつて一般的にこの貧民法制度の改正が論議されたのを見ても、這箇の事情が判明しよう。資本企業家とアダム・スミス及びベンサム一派の個人主義者とが、この制度の解體に努めた所以もそこに存するのであつて、遂に一八三三年の「新貧民法」は、彼等にとつて完全なる勝利を示すものである。次に勞働契約の自由を束縛する制度は、各箇の産業及び地方によつて異る起原と内容とを有するが、エリザベス朝以來の賃銀規律及び徒弟法である。これに對する大なる改正の行はれたるは一七六〇年より一八三〇年の間であつて、いま奈翁戰爭開始以後の重要なる改正の行はれたるものを見るに、一八一三年の紡績工賃銀條項の撤去、翌年の徒弟法の廢棄の如きを擧げ得るであらう。前者に對して勞

働者側より反對の陳情が提出せられてゐるのを見る時、當時の勞働者が組合團結の禁止の下においては、このエリザベス朝以來の古き法律的保護に依賴するの外他に術策の存し得なかつたことが知れよう。

資本移動の自由とその蓄積の保障の問題は、銀行制度の發達と關連する所あるを以て次段に讓り、最後に自由貿易運動に就いて一言しやう。詳しくは歷史書に就いて知られんことを望み、たゞ本文の趣旨に叶ふ要點だけを擧げよう。この運動は、前段に述べたる穀物條令への反對に於て現れたが、積極的に商工業階級の運動として現れたのは、一八二〇年のロンドン商人の『自由貿易請願』に始まると言つてよい。この請願書の起草は、トマス・ツークの筆に成るとは、歷史家の語る所であるが、その冒頭第二段にかういふ文句がある。『制限よりの自由は、外國貿易に對して最大の發展を與へ、我國の資本と産業に最良なる方向を與ふるものと思考す。』次段に曰く『最も廉き市場に買ひ、最も高き市場に賣るの法則は、何れの商人をもその個々の取引に於いて支配する所のものなるが、一國の商業に對しても最良の法則として適用せられ得るものである。』スマートの前掲書には全文が載つてあり、トウネー等の編した經濟資料集には少しばかり削除したものが載つてゐる。(Tawney and etc., English Economic History, pp.693-701)。この請願に對して、當時工業家代表の勢力漸く顯著となれるリバプール内閣及び議會は、非常な同情を以て迎えたと云はれてゐる。議會は外國貿易調査委員會を設け、その撤去又は緩和すべき規則の調査に當らしめた。而して航海條令はその主たるものとして擧げられた。一八二二年この委員會に列らなつたハッスキンソンが商務省に入るや、その實現の機會來り、彼の政策は自由貿易政策實現の第一端と見做されてゐる。この時より一八四六年の穀物條令の撤廢に至るまでの歷史をここに說くべく餘りに周知の事實と思ふ故、省くことにする。なぜなら奈翁戰後七年にして實現の端を開き、十九世紀の中葉に至つて完成せし自由貿易運動と、百年の後、歐洲戰後七年にして實現の端を開かんとしつゝある産業統制運動とを對比す

とつてもその發展に害ありとしてゐることは、說明が不完全であるとして、後年の特惠關稅の如き施[illegible]有利なる場合あることを論じてゐる。その意見の當否は暫く別として、議論の生れたること自體は、當時の事情の然らしむる所であると言はねばならぬ。リカルドウのこの種の議論が、彼の價値論の一部分として讀まれたらんには、彼の學說の贊否共に多少異つたものであつたらうと思はれる。論理のみ鋭くして、非體系的な彼の書方の致す所止むを得なかつた所であらうが、經濟學說史上の一遺憾事であらねばならぬ。(Ricaldo, Principles of Political Ec nomy and [illegible]

[illegible]こも同様に言へる。彼の產業革命を謳[illegible]資本制生產の完成は、當[illegible]商人の位置を奪[illegible]時の本質[illegible]が

[illegible]

與へ、我國の資本と産業に[illegible]

[illegible]何れの商人をも[illegible]

[illegible]

[illegible]注意して置く必要が[illegible]と思[illegible]

[illegible]商銀行が設立されたけれど、普通銀行に[illegible]と預[illegible]

[illegible]活動せねばならぬが。即ち兌換銀行の設立の目的は、[illegible]

れ、時恰も佛軍侵入の報傳り、地方銀行は大なる取付[illegible]

る時、そこに我々をして沈思せしむる無限の教訓が横つてゐることを暗示し得ば、本文の目的は足

(3) 金融の變革　前二段に於ける農業の危機及び工業の發展に關する短き敘述の中にも、讀者は必ずや物價の變動が中心の問題を爲してゐることを看取せられたであらう、なぜなら資本主義と名づけられる經濟制度の眼目は、商品生產、即ち流通價格の問題である。而して、この流通經濟の激動は、多く戰爭の如き社會的變動に伴ふて起るが故に、この時代の經濟問題は最もよく資本制經濟の本質を示すのである。而して、この流通經濟の中心點が貨幣價値に存することは言はずして明かである。總て經濟生活に參與する者の目的たる所得の內容を決定するものは、その所得の源泉たる經濟的職分に存することは云ふまでも無いが、その獲得する所得の價値を決定するものは、貨幣の有する價値即ち購買力たるのみならず、貨幣價値の如何は、商品の生產狀況そのものに大なる影響を有することも亦明白である。しかし、この流通經濟とは何であるか、換言すればそれの全體としての經濟に於ける地位如何を斷定することは、甚だ困難である。近時、貨幣價値の動搖延いて商況の循環を中心として研究する經濟學者輩出し、流通經濟論は今や學會の中心問題を成す概あるも、專門的立場にあらざる私は、それに對して理論上の當否を云爲する資格を有しない。けれども、現在の實際問題を觀察し、歷史上の事實に遡つて、之を論ずる場合、どうしてもこの問題に觸れざるを得ないのである。從つて、この貨幣價値とそれに關する經濟制度及び職分を特にとり立てて、先きに農業の危機及び工業の發展の事情を語りたる如く、通貨及び信用の情況に就いて、金融の變革なる題下に論及する所以である。

歐洲戰爭以前の英國金融狀況を簡單に[illegible]るならば、通貨は大體に於いて金貨が主要なる通貨であつたが、銀貨も同じく[illegible]行[illegible]銀行による信用通貨[illegible]小切手による銀行券の流通[illegible]銀行[illegible]の發達[illegible]

り結果見るべきものは無かつた。銀行制度も商業的意義に於いては產業革命そのものの所產と云ふべく十八世紀末葉に至つて發達したのである。金銀兩貨の法定價格の決定を見たるは、一七七四年であつて、それ以前は嚴密なる意味に於ける法貨は存在せず、單なる商品と同じく市場價格を有するに過ぎなかつた。この年より銀貨は二五磅以下の取引に對してのみ法貨たる資格を與へられた。(嚴格に言へば、一オンス五志二片の割合で量目による取引には無制限であつたけれど。)金貨が唯一の法貨たる資格を與へられたのは、奈翁戰爭後の一八一六年であつて、この年より銀貨は四〇志以下の取引に對してのみ法貨たる資格を限定されたのである。ここに注意すべきは、これは後世の學者の論ずる如く金本位制を採用したと云ふのでは無く、寧ろ支拂手段を金貨に限定したことを意味するに過ぎぬのである。本位制度の觀念の確立したのは、十九世紀の末葉に於いて、金銀兩本位制度の可否が論ぜられた時、始めて價値の尺度として金貨が採用せらるべしといふことが定まつた時である。理論上この二箇の職分は分ち難きものであるが、制度の發達から見れば、この二箇の職分が金によつてのみ代表せられると云ふことは、右の如く漸次に實現したものと見るべきである。私一箇の考へとしては、この二箇の職分それ自身が、果して貨幣の本質的職分であるや否やを疑へるのであつて、貨幣の職分はより高き一箇の職分を行ふものでは無いかと考へられる。それは普通用ひられる信用の概念を論理的に反省した場合のものであるが、これが明白となるは信用制度そのものの發達に俟たねばならぬ。從つて今日に於いてすら、まだこれを斷定することは困難であるが、兎に角金本位制度の觀念の變遷も、今日で完成してゐるものではないことを過去の發達と比照して、注意して置く必要があらうと思ふ。銀行制度の如何なりしかに就いて、一言するならば、一六九四年に英蘭銀行が設立されたけれど、普通銀行はずつと遲れて發達したのである。(スコットランドの事情は少しく異ることを注意せねばならぬが)。即ち英蘭銀行の設立の目的は、商工業家の便宜の爲めでは無く、專ら政府に軍資金

その代償とし の調達をしてゐた倫敦の金持連が、政府の要求の頻繁に且つ多額に成り行くのに對して、――貨幣の起源が、交換の手段たるよりも寧ろ奉納又は租税たるにありたる如く、銀行の起源も商業機關たるより、も政府への信用貸付にあつたことに始まるのである。この點はイタリアの銀行の起源と甚だ酷似してゐる所である、――貨幣の起源が、交換の手段たるよりも寧ろ奉納又は租税たるにありたる如く、銀行の起源も商業機關たるより,も政府への信用貸付にあつたことは、甚だ興味ある點である。論理的に考へても、經濟なる現象が財貨の交換たるよりも財貨の移轉として考へることによつて、より高き概念を得られる如く、銀行の職分も信用なる概念を廣義に且つ論理的に反省することによつて、今日の複雜なる業務を統一的に考へられると思ふ。而して、財貨の移轉なる現象と信用の賦與なる現象とは、論理的に必然的連關を有するのである。この二者を更に統一する時、そこに經濟の新たなる概念が可能となるやうに思ふ、このことは今少しく理論的説明を要するを以て、後に金融政策を一般に論ずる場合に讓る。――斯くの如くして設立された英蘭銀行が長くその特權によつて獨占的地位を保つてゐたことが判ぜられよう。しかるに、中部及び北部英國を中心として起りたる産業革命は、その事業の發達と共に資金の需要を喚起し、通貨の増加を必要としたのである。從つて、大商人や小商人に至るまで、自己の信用に於いて濫りに信用劵を發行し、その弊害も大であつた。これを防ぐ爲に、個人的事業としてで無く株式による合資機關を設ける必要は益々大となり、一七四二年に至つて僅かに六人を越えざる合資會社が許された。從つて、信用力も大でなく多大な發展を見るを得なかつた。マクレオドの話す所によれば、エドマンド・バークが、一七五〇年に英國にやつて來た時、ロンドン以外には十二の銀行しか無かつたが、一七九三年には四〇〇に達した、と言はれてゐる。(Macleod, Theory and Practice of Banking, I. P. 450。)古き制度によつてその獨占的地位を保つてゐた英蘭銀行と時代の必要によつて、雨後の竹子の如く族生した地方銀行との關係、殊に二の發券行爲に關する論爭が生じたのは、その結果である。この[illegible]は發展したのである。

戰爭や地震の如き大變動の場合、金融制度が麻痺の狀態に陷り、その機能を停止することは極めて自然のことである。取付とモラトリユーム、それから中央銀行及び政府の援助と云ふ段取りはいつの場合にも繰返へされる所である。

一七九三年の奈翁戰爭に英國の加はるの報、全國に傳はるや、殊に北部及び中央の工業地方に危機を齎し、同地方の銀行は取付に逢ひ、救を英蘭銀行に求むる者頻出した。しかるに、英蘭銀行と地方銀行との關係は、未だ制度上かゝる場合の相互關係を確立してゐなかつた爲め、英蘭銀行は中央銀行としての職分を充分果す義務を感じなかつた。從つて確實なる擔保の提供に對してすら割引及び貸付を拒絕した。政府は止むを得ず、この危機を救ふ爲め、五百萬磅の大藏省券を發行することを企圖し、之を聲明するや、その效果はパニツクを漸次に鎭めるに役立ち、僅かに二百二十萬磅の發行を以て濟ますことが出來た。が、この結果英蘭銀行の中央銀行としての職責が問題となつた。既に述べたる如く、英蘭銀行の設立目的は、專ら政府への貸付に存してゐたのであつて、地方銀行の親銀行又はその預金保障銀行と云ふ職分は、未だ制度化してゐなかつた。又その割引その他の方針を決定する金利政策なるものも、當時は未だ高利制限法なる中世式法制の存在してゐた位であつて、これが爲め英蘭銀行の職能は充分發揮せられなかつたのである。しかも產業の發達はこの事態の存續を許さない。かゝる中に、再び金融の危機は勃發し、これが結果が、英國金融制度に一大變化を齎らすものとなつたのである。それは一七九七年の兌換停止による不換紙幣の發行である。これより先き、政府は、その對奈翁政策の遂行の爲め、旺に聯合諸國に對して、軍資金の補助を行ひ、その都度英蘭銀行に向つて、その貸付を求め來つたのであるが、一七九六年七月オーストリーに對して百二十萬磅の貸與を行ふた。かくして英蘭銀行の準備金は次第に減少したのであるが、これが政治上の問題となるや、地方銀行よりの引出要求が旺に英蘭銀行に向つて企てられ、時偶佛軍侵入の報傳り、地方銀行は大なる取付に逢つた。政府は直ちに樞密院（privy council）を召集し、決斷を

求め、その結果を議會に報告した。この結果が一七九七年二月の「銀行制限法」(Bank Restriction Act)で、[illegible]をして兌換の義務を免れしめたものである。ピットは議會に於いて、これが一時的のものなることを聲明し、先づ最初は六月二十四日迄の期限としたに拘らず、奈翁戰爭中は勿論、實際上の恢復は一八二一年まで行はれなかつたのである。これが不換紙幣時代の現出なのである。この兌換停止に至りたる原因に就いては、單に右に述べたる如き政府の對歐政策による貸與や佛軍侵入の報によるパニックのみに因るのでは無くて、學者はその他に種々なる原因を擧げてゐる。第一は、一七九三年のパニックよりして地方銀行が充分その創損を恢復してゐなかつたこと。第二に、戰爭景氣による經濟の膨脹が、通貨の增加を必要としてゐたこと。第三に、各個人が公安の變化を恐れて、金貨の手元蓄積を行つた爲め、通貨の減少を來してゐたこと。等これである。(Rees, op cit, pp. 19-20 R. G. Hawtrey, Currency and Credit, pp. 262-272)

この兌換停止による不換紙幣の齎らせる種々なる問題が、英國貨幣史上に於ける特筆大書すべき論爭を發生せしめた。金本位による自由鑄造の行はれる常時と雖も、通貨金融の政策は、決して自動的な機械的なもので無く、常に所謂統制通貨であるべき筈であるが、英蘭銀行の重役は全く金本位の自動性を信じ、その統制の技術及び方針を有してゐなかつたのである。從つて、今やその標準たる金の存在失はるるや、彼は全く海圖無くして大海を航するの運命に逢着し、一向ら商況の赴く所に從ふのみであつて、その責任の自らに存することを忘れたのである。かくて、生じたる論爭を見ることは、當時に於いて貨幣制度の如何にありしかを知る好箇の資料である。戰時及び戰後の二時期に分つて論究して見よう。

一七九七年の兌換停止より[illegible]の間、英蘭銀行は[illegible]一八二一年まで

は、この不換紙幣は法貨では無かつたけれど、政府は之を無制限に受取つてゐたので、法貨の如く流通した。從つて金紙の開きは明白に認められなかつた。然し、景氣の增加と共に、その發行額は次第に增進し、一八〇〇年の五月には、金塊價値は一オンス四磅五志となり、鑄造價値の三磅十七志一〇片半に比して九パーセントの開きを生じた。この時リカルドウは、「モーニング・クロニクル」に論文を寄せて、斯くの如き金塊價値の騰貴は紙幣價値の下落に外ならず、爲替相場の下落も亦通貨膨脹の證據である所以を論唱した。この趨勢は、一八〇九年に至つて極點に達した。「工業の發展」に於いて述べた南米貿易の齎らせる恐慌の前夜である。翌十年の二月フランシス・ホーナアが議會に於いて、通貨調査委員會を提議し、それが容れられて成立したのが、有名なる金塊騰貴委員會（The Bullion Committee）であつて、その報告は大體に於いて、既にリカルドウの論唱した所と同意見であつた。即ち、紙幣價値は金塊に比して下落してゐる事實を認め、そはその發行額の通貨需要に超過してゐる爲めであるとし、英蘭銀行は金塊價値及び外國爲替率の移動に從つて、その發行額を統制すべしと云ふにある。（この報告のテキストは、一九一九年にキャナンが印刷して公にしてゐる。その題は Paper Pound of 1797-1821 とされてある）他方、然るに、之れに對して、英蘭銀行側は、紙幣價値下落の事實を否認したるのみならず、金塊價値の騰貴はその數量の減少に基くのであつて、英蘭銀行は確實なる手形割引を行ふ以上、通貨の需要に超過すると云ふは謂れ無きことである、と反對したのである。斯くて、所謂通貨主義（Currency principle）及び銀行主義（Banking principle）の論爭の端を發したのである。いまこの論爭に立ち入つて論評することは、歷史的事實を專ら取扱はんとする本文の範圍に屬しないから、この問題に興味を有せらるゝ讀者に對しては、通貨主義の有力なる主張者であつたリカルドウの三個の論文とそれの要約とを見らるべき『原論』第二十七章を讀まんことを御奬めする。彼が、それらの諸論文に於いて、主張せる事項は、凡そ(1)通貨の價値に就

いて數量說を說き、⑵金貨の流通を不經濟なりとして、兌換紙幣の有用を論じ、⑶發行制度に關しては、中央政府說に贊成しつゝも、デモクラシーの發達せる國に於いては、中央銀行の利得を制限する意味に於いて、議會の監督の下にコンミショナー制度に依るを可とする旨を提案し、⑷金利政策に就いては、彼自身の勞働價値說に基き、金利によつて物價を統制することの不可能を論じ、⑸本位制度に就いては、金銀兩本位制の弊害多きを擧げて單本位制に贊成してゐるのである。(Ricardo's Economic Essays, edited by Gonner pp. 219; Principles of Political Economy, pp.350-360) 此のリカルドウの議論が、今日の發達せる貨幣金融理論から見て誤れる點あることは讀者の看取せられる所であらうと思ふ。殊に金利政策と物價との關係に就いて、勞働價値說によつて簡單な解釋を下した事は、彼自身の學說の根本的缺陷に基くのであつて、ジョン・スチュアート・ミルに至るまでの正統派經濟學をして、流通經濟に對する單純なる機械觀に滿足せしめた素因を成せるものである。しかし乍ら、當時に於ける彼の提案は、最も進步的なるものであつて、後年の金融制度の改革は、彼の主張を裏付けて餘りあるのである。一八四四年のピールによる銀行法は彼の流派の勝利と見られる。

金塊委員會の報告は、英蘭銀行及び政府の反對の爲め採用せられなかつた。ホーナアが委員會の報告に從つて作成した決議案も、一一年五月の議會に提案されたが、多數を得ることが出來なかつた。戰時は何等の改革が行はれなかつた。然るに、戰爭の終りたる後に至つても、金紙の開きは減少せざるのみならず、反つて激增した。しかも、戰後直ちには、金解禁の意無しと政府は聲明したのである。そこで再び論爭が起つた。一八一六年の十一月英蘭銀行は、一八一二年以前發行の紙幣に限り兌換を開始する旨發表したが、金貨の海外流出甚しく忽にして停止するの醜態を演じた。それが完全に實行せられたのは、一八二一年の五月であつた。[illegible]二〇リ[illegible]、今更の事か、この紙幣價値の下落二〇%

た證據が歴然として、種々なる方面に現れ、所謂デフレーションの齎らす故障を經驗したのである。そこで、問題は新なる方面に展開し、不換紙幣の行はれた時期とその恢復した時期とに於ける影響の差異を感ずるに至つたのである。人々は、その不換紙幣が物價の騰貴を齎らすことを論じても、それの恢復した後の物價狀態に目を注ぐことを忘れてゐたのである。金塊委員會もそれに就いて何等報告する所無かつた。玆に於いてか、輿論の趨勢は金塊委員會の主張を非難するに傾き、ジョセフ・ラウの如きは戰時經濟に於いて發展せる產業と人口との發展は、當然に通貨の膨脹を必要とし、不換紙幣時代の通貨膨脹は當然なるものであることを力說した。更に後に至つて、企業家側の有力なる代辯者トマス・ツークは、その有力なる『物價史』（第一卷）に於いて、この主張を裏書きした。これに對して、マカロツクが『經濟學文書』に於いて、リカルドウの通貨主義によつて反駁した。

此の論爭は、英蘭銀行條令が一八四四年に改正され、大體に於てリカルドウの主張した改革案の如く、中央銀行としての形態を取るに至つた後に於いても、屢繰返へされたのである。即ち物價の變動は、通貨側に原因ありとする通貨主義の意見、否そは財貨側に原因ありとする銀行主義の主張は、今日に至つても、新らしき形式の共に論議されてゐるのである。それは何故であらうか。これに對して快心の答へを我々に與へて吳れたものはマルクスである。彼は、『經濟學批判』（一八五九年）に於てリカルドウ說の誤謬を說き、又資本論第三卷第二十八章に於てツーク、フラートン等の銀行主義者の妄を啓いてゐるが、私の見る所によれば、貨幣職分に就いて彼の言へる所は、この兩主義の論爭の由つて來れる所を道破して餘りあると思ふ。即ち貨幣が、價値の尺度たる職分と交換の手段たる職分とを同時に有することに矛盾が存するのである。なぜなら、前者は金の供給の制限せられることを要求し、後者はその供給の自由ならんことを欲するからである、と。かくの如く貨幣職分に存する矛盾を把握せるマルクスは、更にこの兩主義の何れもが、信用の理論

に於いて缺くる所あることを指摘したのは當然であらう。なぜなら、通貨の需要供給を構成する大部分は、信用の膨であるからである。從つて眞の問題は、この信用なるものが如何にして統制されるかにある。マルクスの信用理論の何たるかは、ここに論斷し得る程、私には充分理解されてゐない。從つてそれに就いて述べることは他日に讓り、今の場合は、マルクスが十九世紀の中葉に於ける事實を詳細に研究し、當時の意見を克明に論究して、それと十九世紀初頭の當時との差異を明白にしたことが、我々にとつて將來の研究に大なる礎石を提供して呉れたものであることを述べるに留めたい。(Marx, capital, III. part V, chap. XXVIII; XXXIII; XXXIV.) 歴史の教ゆる所は、通貨主義は制度の上に於いて勝利を占めたけれど、事實の上に於いては銀行主義の需要根據說によつて、ブルジョア階級の支配に立たざるを得なかつた事である。この矛盾せる事實から、如何なる論理を導くにせよ、又如何なる假說によつて說明しようとも、我々は今日に於いて再びこの問題に當面してゐるのである。勞働者階級は、今やブルジョア階級とは全く異れる立場より、マルクスの所謂通貨供給の自由を欲してゐるのである。彼等の代辯者が、その據つて以て立てる根據は、新なる銀行主義であつて、通貨主義の消極的立場に一歩を進めつゝある。この趨勢の由來とその將來に於ける可能とを考ふる時、我々の先づ想起すべきは、十九世紀初頭の金融變革とその結果であらねばならぬ。

(一九二六・三・一〇)

(記者曰く)鐵山氏の通信は今後續々到來する、而して七月號に總罷業通信、徒として期待さるる氏の論稿が今後一年間載ける

現代常識の根本概念百

杉森孝次郎

十五　政治

三つの直線に圍まれた平面圖形、これは三角形の定義たりうる。それの各點が、一とつの點から等距離を保つ一とつの線に圍まれた平面圖形、これは圓の定義たりうる。富の生產方法に於ける集團主義と、それの所有方法に於ける個人主義との結合、これは資本主義の一定義たりうる。政治の定義はどう成り立つか。

社會經營、これが政治だ。換言すれば、社會を統一的に經營すること、これが政治だ。社會の統一的經營即ち統營、これが政治だ。政治は社會統營そのものだ。社會を統一的に經營すること、政治の定義として、これは、押しも押されもせぬ一とつの有資格物だ。

その統營を支配と呼ぶことは、多少不適當だが、寛容しえられない限りではない。さう呼んだ方が習性的理解を利用しうる場合もすくなくない。

さて、社會統營即ち政治には三樣の形式がある。少數專制、少數善政、全衆自治がそれだ。

その三形式のいづれの場合にも、社會統營即ち政治の消費者、これを消費するものは全衆だ。しかし、これを生産す

るもの、即ち政治の生産者は、全衆自治の場合のほか、多少有限だ、

少數專制としての政治にあつては、政治の生産者が、數に於て有限部分であるばかりでなしに、動機に於てもさうだ。

少數善政としての政治の場合にあつては、政治の生産者が、數に於ては有限部分だが、動機に於ては全衆の利福だ。

全衆自治の場合は、政治の生産者が、それの消費者と同じである場合だ。この場合にあつては、支配者が即ち被支配者だから、動機の公私は問題とされる餘地がない。

デモクラシが近代政治の傾向だといはれる。また、事實、さう見られもする。そのデモクラシは、しかるに、勿論、全衆自治にほかならない。デモクラシは、讀んで字の通り、民治だ。

政治の進歩はデモクラシの進歩としてのかたちに於てなされるほかないか。全衆自治的に、いよ〳〵完全に、なり行くことが、即ち政治の完全化か。

從來の一般の理解にしたがへばさうだといふほかない。しかし、眞理は單純にさうだとは決していはない。

從來のデモクラシ觀は頭數集中だ。政治の生産者が、それの消費者との比較に於て、數に於て劣つてゐれば、そして

その少數生産者の動機がかれら自身の利福に限られてゐれば、その政治は、デモクラシを去ること最も遠い少數專制政治だと見られた。そして、デモクラシを知ること最も遠いことは、取りもなほさず政治の理想的完全形を去ること最も遠いことだと見られた。

政治の生産者は少數者であつても、その少數為政者の動機が、多數乃至全數者の利福にのみに、これにデモクラシに

近い政治、即ち完全政治に近い政治だと見られた。

政治の生産者が、政治の消費者と同一全衆であれば、即ち政治が全數者の自己支配であれば、それは政治としてこの上ない完全なものだと見られた。

要點は、すべての場合を通じて、數だ。政治の生産者及び消費者の頭數だ。

かくして、デモクラシの標語として「一人一票」が發達した。

普選はデモクラシの一現象だ。一人一票主義が普選だ。一人といひ、一票といふところに、すでに數意識が君臨してゐる。普選は、實に、各人一票主義にほかならない。

社會の各員が參政有權者でありさへすれば、それになりさへすれば、政治はそれの完全形式を持つたことになるかといふに、決して單純に然りとはいへない。

一時代または一社會の各員が、即ち全數的多數者が、本質的文化全、人性全、社會全の見地から考察されれば、部分的興味の捕囚である場合がある。いはば、世を舉げて狂者狀態にある場合がある。どの時代も、どの社會も、多少必ずその狀態にある。

單なる頭數關係からいへば、完全に全衆自治であつても、その各の頭のなかに於て、そこなる眞實の大世界に於て、或少數專制が行はれる可能性があるのだ。

人性全、文化全、したがつてまた社會全は、本質的及び眞實的には、決して單純ではない。それは多くの要素に分析もされる。

政治、眞に政治的自覺ある政治は、單なる頭數本位の全衆自治を目的とはせず、人性全、文化全、社會全を、それ

本質的必要にしたがつて、現實に統營するものにほかならない。

それゆゑに、もしも一時代の全數者または全數的多數者が、共通特徴的に、或本質的要素に對する色盲狀態にある場合には、眞實に有資格な政治意識としては、普選の實現や、各人一票主義の實現を、必要にして且つ充分なる條件だと認めることはできない。

現代について見る。

現代の各人は、壓倒的大多數者としての各人は、かれの頭のなかに、一種または二種の少數專制を形成してゐる。その一種は生產經濟意識的要素または勢力であり、その他種は民族意識的要素または勢力だ。頭のなかの世界が、その世界の本質的雜多要素が、或一、二種的少數要素の專制、支配、統營、强壓、權力下に屈抑、卑服、屛息してゐては、そして、さうした頭だらけの時代と社會に於ては、どんなに頭數全算的デモクラシを發達させて見たところで、結果は、その一、二種的少數要素の專制、支配、統營、强壓、權力としての政治以外のものではありやうがない。

眞に政治的自覺ある政治の立ち場からしては、それは專制政治だ。專制政治としての不完全政治だ。原始的幼稚政治だ。

現代に於て、どんなに普選を、單に普選としての形式に於て、發達させても、したがつて男女のすべてに參政權が分配されてさへも、もしもその男女の各の頭のなかが、生產經濟意識的要素と、民族意識的要素との專制國を形成し續けてゐるならば、この兩要素以外の社會要素は、依然として參政權を持たぬ不便、不利、不幸の狀態にある[illegible]かならない。人性、文化、社會、生活に於けるどの一とつの要素にも專制的傾向がある。もしも一とつの時代に於て、[illegible]

識的要素のみが、あるひは民族意識的要素のみが、あるひはその二要素のみが、その專制的傾向に實現の機會を滿喫してゐるならば、それは、他の諸要素の專制的傾向が、それだけ實現の機會を制限されてゐる狀態だ。そこには、自由享樂的要素と、不自由受苦的要素との對立があるのだ。そこには、即ち、階級別があるのだ。

頭數的デモクラシが完全に實現されても、無告の要素は、人性、文化、社會、生活の世界のなかに澤山にありうる。現代に於ける消費經濟意識的要素は、及び經濟意識的要素以外の、多くはまた以上の、諸要素と、民族意識的要素以外の多くの要素とは、現代に於ける無告的要素だ。

單なる頭數的全衆自治としてのデモクラシにあつては、興味的少數專制の餘地はほとんど無限だとさへもいひうる。そして、これは、この興味的少數專制は、眞正政治の立ち場からしては、許容されない。

政治が一派生物であることは明確だ。しかし、それは政治の全意義ではない。政治が一派生物であることが明確であると同樣に、政治が一獨立物であるべき必要と理由も明確だ。

經濟、婚交、教育、學問、藝術、衞生、交通、娛樂、道德、信仰、等々のかたちに於ての生活必要と、生活事實とが先づ在り、しかるのちに、それらのものの各即ちすべてのために、それらのもののすべてを統一的に經營することを職責とする政治が必要とされ、事實とされる。この關係が關する限り、政治は一派生物であるのだ。政治よりも根本的な本能と衝動と意思が、政治には、先在的に內在する。

原料的、實質的關係に於ては、政治は創作せず、承述するのだ。

かくして、例へば、資本主義的產業動能が先づ在り、しかるのちに資本主義的產業立法及び行政が發生し、社會主義的產業動能が先づ在り、しかるのちに社會主義的產業立法及び行政が發生する。同樣に、民族意識的動能が先づ在り、

しかるのちに民族意識的立法及び行政が發生する。

原料的、實質的關係に於ては、政治は、いかにも、供給者ではなく、被供給者であるほかないが、その原料または實質を、政治は、限られたる種類に於て受け取らず、その社會の、その時代の全内容から受け取る。しかも、政治がその原料、實質を、その社會の各部から受け取る目的は、それに全體的新關係を附與して返還するにある。原料、實質を社會の各部内容から取り集めるところに政治の準備態的獨特能があり、その取り集めた各部内容的原料、實質に新綜合を與へるところに政治の積極的存在理由がある。

政治が一派生物だといふ事實は、原料を受け取る過程によつて意味される限りのものだ。政治以前にはなかつた關係を、その原料に加與する限りに於て——そして、そこにこそ政治の本領はあるのだが——政治は一派生物ではなく、一獨創力だ。

司法の獨立といふ概念は習俗化したが、政治は、全體として、それの獨立を新たに問題とし、そして獲得する時代的必要がある。

社會統營としての政治が、單に現存の、當面の社會内容中の或現實的に強大なる要素の御用をつとめるかたちに於てそれの派生機能となり、他の現實的に強大ならざる、しかし眞實的には強大なるべき諸要素を壓迫、頤使、閑却することは、その政治に獨立の自覺なき證據だ。

世に政治よりも大愛、大忠、公平なものはありやうが、その政治が眞に政治的自覺ある政治である限り、ない。

政治自身の本能、衝動、意思が、原料としてのそれら以上に、政治によつて明確に自覺されうる狀態が、政治の眞正の在りかただ。

産業革命以來の政治は、資本主義による社會統營か、社會主義による社會統營かのいづれかだ。けれども、資本主義と、社會主義とは、要するに、生産經濟意識の一形と他形だ。

ここに於てか、産業革命以來の政治は、消費經濟意識による社會統營としての功績に於て荒寥を極めてゐる。生産のための科學、技術、機械が大飛躍的に發達して、無産大衆が、あだかもその事實からなる必然的結果たるかの如くに、發生したことはこれを意味する。富の生産は大衆化し、社會化したのに、富の所有は依然として新生産方法以前の原則を原則としてゐること、即ち大衆化せず、社會化せずにゐることもまた勿論それを意味する。

産業革命以來の政治が、經濟意識以外の意識による社會統營としての功績に於て一般的に落莫不振である程度も著甚だ。生産能力がかほどに發達した現代としては、富が關する限り、社會は飽き足るほどにもそれを消費しうる新環境に生存し、したがつて、學、藝といふが如き人間的事業そのものに心置きなく沒頭することを最賢選擇とする。しかるに、事實がその逆になつてゐることは、政治に、現代政治意識に、社會統營的良心が缺けてゐることを、他の多くの事實と共に證明する。

現代政治は、大體に於て、生産經濟意識の奴隷奉公者であると同時に、民族意識の奴隷奉公者だ。

民族意識が、現代に於ては、なほ不拔の存在理由あるものであることは多く論ずるまでもない。しかしながら、現代生活を分析すれば、そこに、民族的特有物以外の要素が、結論的には民族的特有物以上の有價物として、種々發見される。これこそ、このことこそなほさら、多く論ずるまでもない、自明的といひたい巨大なる現實な

しかるに、現代政治は、民族意識の獨占機關たる觀を、生産經濟意識の獨占機關たる觀と共に呈する

頭數的專制は目に見える。しかしまたそれだけにそれは表面的だ。頭數的企業自治も目に見える。しかしまたそれだ

けにそれも表面的だ。生産經濟意識的專制と民族意識的專制とは、肉眼には全映しない。しかし
とは確實な事實だ。

いはゆるデモクラシは、それの發生と發達に於て、主として、あるひは專ら、頭腦意識物であつたがゆゑに、現代に於ては、すでに、最善政治意識の理想たる資格に不足する。

頭は、人的自然の一象徴物にすぎない。社會統營としての政治が目ざす目的物は、もつと内容的な人間部分であることを至當とする。從來のデモクラシには、殊に政治的デモクラシには、頭に對する迷信がある。しかし、デモクラシは、もと〱政治的デモクラシをこそ、それを第一に、意味する。

社會に於ける政治の位置は、一人に於ける信仰の位置に比される。信仰とは、ここでは、勿論、一人の生活に内在する、その生活の統營力のことだ。一人の生活は、どんなに支離滅裂的であらうとも、かれが現に生存する限り、ともかくも統營されてゐると見られる。その統營力が低級名譽心であることもあらう。それは酒であることもあらう。蓄財であることもあらう。その種のものによつて、一人の生活が確實に、完全に統營されることなどは勿論思ひも寄らぬ不可能事だが、なほかつ、その種のものが一人の生活に於て最も專制的であることはありうる。

頭數的全衆自治のデモクラシの政治形式の内容は、本質的人性全、本質的文化全、即ち本質的社會全を最も善く保護するかたちの統營ではなしに、本質的に部分價であるものに、現象的に支配權を持たせたかたちの統營、不完全統營、いはば似而非統營である可能が充分にある。現代は多少の程度に於てその一例だ。

その可能を極小限化する方法としては、各人の頭腦内容を、最も正しき意味に於て哲學的に統營されたものにすることを第一要件とする。即ち、各人の頭腦内容が、人性全、文化全、社會全に對する自覺あるものとされるこ

とする。

そして、社會的には、まじめな各種興味が、それの共通範圍が眞實に發見される限り、その範圍全を一とするかたちに於て組織されることが、その方法に於ける筆頭事だ。生産、消費、地域、意見等の各が、またその各に於ける實質的分類内容の各が、それぞれに、組織された社會内的社會のかたちを與へられることが、即ち、それだ。

いはゆる機能代表論は、かくして、政治の理想的形式が、すでにデモクラシを超脱して、次ぎの、一層内容的、性質的全社會自治へ進入する兆候だ。

政治の定義は、それゆゑに、政治は社會の内在力による社會經營だ、といふにあるが、その内在力は、單なる頭數的、量的形式のものではなく、代表的には人間性的、文化要素的なものだ。その内在力が人間性的、文化要素的有限部分であるならば、その場合には、その社會統營は專制政治だ。その内在力が人間性的、文化要素的全體であるならば、その社會統營は、本質的社會全自治としての完全政治だ。

一獨立社會機能として自認すべき、また公認されべき政治が、弱くも、不見識至極にも、一、二要素のみの隷役機能たる現實を示すことは　いかにもなさけない話だが　決して類例に乏しい現象ではない。

例へば教育を見よ。教育の一職責は、文化全、社會全を　進歩的に保存することにある。現存の政治組織、經濟組織、習慣道德　これらも、それゆゑに、勿論、一獨立社會機能としての教育によつて絶えず改善されべき位置にある。しかるに、事實に於ては、その逆の場合が多い。例へば現代の學校教育、即ち最も組織的な教育は、現代の政治、經濟、習慣道德等の世界に對して、改善力的位置を持つよりも遙かに餘計に、改善力的位置をばほとんどすこしも持たずしてほとんど專ら、隷仕的位置を持つ。現代の教育が現代の政治、經濟、習慣道德に卑屈してゐる圖は、現代の政治が

現代の生産經濟意識及び民族意識に卑屈してゐる國と好一對だ。

政治の獨立を、現代は、新たに問題とすべき理由を持つのだ。

一面に於て、政治が、次第に事務化しつゝあることは事實として、また進歩的意義ある事實として認められる。政黨と議會と政府とは、方針を輿論及び民間の各種組織團から受けて、立法、豫算、行政の各種形に於て、文字通りに使命を果たすだけのものに、一面的事實としては、いよいよいちじるしくなつて來た。これは、自治が、それが大社會を舞台とするにかかはらず、組合の發達を方法として、直接化することを意味する現象であつて、たしかに進歩的事實だが、なほかつ、例へば豫算の一事だけを取つて見ても、それを分析すれば、そこには、政治の獨創的位置が顯著に、明確に看取される。豫算支出の割り振りは、すでに、社會全の綜合的必要に對する綜合的經營を、その割り振りが充分なる理由意識を有するものであるためには、確實に内容とし、目的とするものであるほかない。社會全の綜合的必要に對する綜合的經營は、しかしながら、相當の良心を必要とする事業だ。それなしでは出來ない仕事だ。そこには政治的個性が必要だ。政治自身の根本衝動がそれには必要物だ。積極的公平は、そこに獨自の使命を明視し、確信し、それに殉ずる至深意思あるものによつてでなければなされない。孟子は、大丈夫の特質として、富貴淫する能はず、貧賤移す能はず、威武屈する能はずといふを擧げたが、政治を行ふものゝ條件としては、社會全の各部必要を客觀的に忠實に知る能力及び努力と、その各部必要なその各部必要自身のために統一的に經營する能力及び努力が注意される。これが個人的にいかなる素質及び修養を特に必要とするかは比較的に單純な問題だが、社會的にいかなる方法を必要とするかは未發達、未解決の問題だ。消費生活の分析、消費生活に對する社會的注意及び保護の發動、その方法は、しかしながら、第一にこの方法にしたがつて發見された。[illegible]

に於ては、保存をあたひする社會的各部及び全體が最も簡明に自身を主張してゐるがゆゑにほかならない、消費生活よりも鮮明に、顯露に、なに人にもわかりやすく、社會的なものはない。社會統營を使命とする政治が、その時代の消費生活に無理解であつては、それは、有害にして無用な長物でさへも隨分とありうる。消費生活の保護、それに對する組織的保護を第一原則として、各種生産行動に、その消費生活に忠實な在りかたを與へる、さう助成する、こゝに眞正政治の方法は成り立つ。

現代政治は、頭數專制よりも深く、時代的、社會的、全頭數的に、生産經濟意識及び民族意識專制を形成してゐるとはたびたび注意した通りだが、消費經濟意識を手始めとして、あまねく社會的消費生活の不自由を解放する一途に政治が方向轉換することは、民族意識的專制をまでも救除する結果を最も成功的に持つ方法だと考へられる。

十六　民族意識

民族意識は近代殊に十九世紀以來の新現象だ。

民族と民族意識とは勿論二物だ。階級と階級意識とが二物であると同樣にだ。

民族の歴史は民族意識の歴史よりも遙かに古るい。

日本の民族意識は、最も選擇していふならば、米艦來浦以來の歴史を持つ。それは、日清役の姙娠期間に新加速し、遼東還附以後十年間に再加速した。

北米合衆國の民族意識は、獨立戰爭胚胎期間に發生し、その後百年を超えて、外來移民難が發達し行くにつれて新たに發達した。そして、歐洲戰は、民族的不統一ゆゑの内患をかれに與ふることによつてかれの民族意識の新發達を刺戟

した。墺匈帝國の民族的不統一ゆゑの分裂の如き現象も、多少同様の効果を觀察者たるかれに與

英の民族意識は、百年戰爭當時に曙光を見た。詩人チョーサーにその反映がある。その後、女皇エリザベスの時に、フィリップ第二のスペインを敵としての力爭がなされた頃に、英の民族意識は著進した。勿論、十八世紀中、アメリカの獨立運動がそれに一新發達を與へた。

佛の民族意識は、百年戰爭に激發された。ジアーン・ダークの名がこれを紀念する。その後、三世紀半餘を經過して、革命の佛が、貴族主義諸國からの侵略に抗爭する必要に當面した際にそれは長大歩を進めた。普佛戰に於ける敗辱もそれを刺戟した。歐洲戰後、それはまた不斷の刺戟を與へられつゝ今日に及ぶ。クレマンソーの名は歐洲戰を機會として強度を増した佛の民族意識を紀念する。

獨、露の民族意識は、ナポレオン第一からの加害を機會として發生した。

既成民族意識の發生及び發達は、それの時代と事情に於て、右に記したもののほかも、要するに同様的だ。

民族意識は、交通の或程度に於ける發達をそれの主要事情とする。

交通が、異なる民族間に、愛と信が成り立つほどには發達せず、しかし、憎と疑すらもが成り立たないほどには缺乏してゐないことが、民族意識發生の事情因だ。

されば、民族意識は、交通機關があまりに幼稚であつたあひだ、發達しやうはなかつた。交通が或程度以上に發達すれば、それはしたがつて衰滅するだらうことも、推想される。

民族意識は、かくして、長い過去及び將來の人類的全歴史から見れば、一時の現象であるのだ。一時の現象だといふことは、しかし、勿論、それが非實在だといふことではない。

歴史の或時期にあつては、氏族と氏族との間に、また部族と部族との間に、今日の民族と民族との間に見られるやうな争鬪的關係があつた。わが國に於ても、つひ先刻までは、そのやうな事實も隨分あつたが、藩族と藩族との間には勿論極めて顯著にそれがあつた。

交通の發達と共に、愛、信の目的物としての社會的單位の極大限もいよ〳〵大化し、憎、疑の目的物としての社會的單位の極大限もいよ〳〵大化する。一言にして、共同戰線が長くなる。

民族意識は、その共同戰線が民族の周圍線だけに長くなつた狀態だ。戰線のこちら側は一民族より小さくも、大きくもない、そして、戰線の向ふ側は、内側民族とは別の民族であるといふことだけを條件として人類以内のものだ、これが民族意識の具體形だ。

要するに民族意識は、一民族にむかつて、その民族以外の人類部分が、戰爭またはそれに似たかたちの行動を取つた、または取りさうだとその一民族によつて想はれた、時に、その一民族に發生する意識だ。最近代のアメリカから見た外來移民の如きは、一種の入寇だから、それがアメリカの民族意識發達の一事情であることは、したがつて、すこしも不思議でない。

民族そのものの歴史は民族意識の歴史よりも多少遙かに古るいとさきにも注意した。日本の場合はいふまでもないとして、アメリカを見るに、民族意識は獨立運動以來の現象だが、民族の歴史はすくなくとも一世紀前後だけ年長だ。獨立運動發生までに、それまでの期間に、土地、歴史、慣習及び風俗に代表される限り、一特殊人間族が形成されたのだ。たとひ言語と血液に於ては新でなかつたと概斷してもだ。

現在のヨーロッパの諸民族は、大體に於て、紀元千年以來の歴史を持つ。民族大移動は、およそ、紀元第五世紀の這

中に始まつた。そして、それは紀元千年にまで及んだ。その後、例外程度の民族移動ほかなくして今日に及んだのだから、歐洲現在の諸民族は千年の歴史を持つといへる。それに比しては、歐洲現在の諸民族意識の歴史は、二分の一前後から十分の一前後の長さを持つにすぎない。交通設備及び交通内容に於ける發達程度が右の現象を説明する。

民族とはなにか。それは人類以外のものではない。しかし、人類といふ概念と、民族といふ概念とは、精確に同一ではない。民族は、人類を、土地、歴史、母語、體質等を注意の焦點に置いて分類した結果として發見される事實だ。なぜ人類と民族とは精確に同一の事實でも、概念でもないといふたかといふに、人類を分類する方法は、右の方法以外にもあるからだ。例へば人類を數學的興味及び能力にしたがつて分類することができる。さうして發見される事實は、二に二を足せば五になると考へる種類の人々と、四になると考へる種類の人々とだ。人類を、自然科學的及び社會科學的知識、意見を條件として分類することもできる。さうして發見される事實も、土地、歴史、母語、體質等を分類條件とした結果とは、世界を色わけした結果が、世界を背わけした結果と無緣または遠緣であるが如くにも無緣または遠緣だ。藝術でも、道德でも、信仰でも、哲學でも、宗教でも、人生觀でも、世界觀でも、それを深く堀れば堀るほど、それ自身の本質に近づくと同時に、單なる土地、歴史、母語、體質等からは遠ざかる。

例へば道德にしても、單なる習慣道德こそ種々なれ、本質道德、原則道德に二體系はない。行儀、作法の類が、それの末の規則に於てこそ、時代を異にし、社會を異にするにつれて多少別であつても、敬、愛、美の精神的内容を意味するそれの本志に於ては遙かに一致的であるにもそれは似てゐる。勿論、本質道德、原則道德といつたところで、人間世界の事だから、比較的の話だが、その比較が、習慣道德の場合と、本質道德、原則道德の場合とに於て、著大の差を示す。」

かくして例へば、異國語の書物が意譯されうる。その「意」は、しかるに、語境によつて制限されない共通世界だ。そして、その「意」の世界について、譯者の同語系族の人々は、土地、歴史、母語、體質等に於ける區別などには注意を引かれずに、泣きもし、笑ひもし、怒りもし、喜びもし、憎みもし、愛しもし、本質人としての各種形式を自由に取る。

二に二を加へて五になるといふ文章は、それがどの母語に於て成り立つてゐやうとも、それの目的が數學に存する限り、數學研究者としてはそれを憎まないことはできない。

人類を、可能的各種方法にしたがつて分類することが、そして、その結果を比較することが、さらにそして、その結果の一は、一だけが、民族であることが、現代に於て深い一とつの必要事だ。

人類を分類する必要と共に、それ以上もの必要として、各個人を分析する必要がある。

一人を分析すれば、そこに民族質が見つかる。或土地、或歴史、或母語、或體質がそこに見つかる限りに於てだ。しかし、そこには、多くの他の性質または要素も見つかる。それらの或ものは地上のすべての人々と共通であり、すべての人々に所有されてゐ、他の或ものはかれの父母兄弟姉妹によつてさへも所有されず、かれのみによつて所有されてゐる。

各人はそれぞれに一個性だが、個性には、最廣義的部分と最狹義的部分との間なる各部分がある。

個性に於ける最廣義的部分は、勿論、人の個性、人としての個性についての話だが、人類共通だ。例へばなに人も笑ふ。またなに人も脚二本だけを地につけ、手や胴は地につけずに歩行する。現代人なら、なに人も或程度以上に數へることも、話すこともできる。これらの性質は、どの「一人」にも所有されてゐるものであるといふ點に於て個性內の或

ものだが「どの」と「にも」がついてゐるから、同時に人類共通だ。

個性に於ける最狹義的部分は、まだ一他人からもの理解をも、信用をすらもえないあひだの獨創的意見、技術の如きをも意味しうるし、その人に特有の癖、書風、顔、流儀、素質、習性等をも意味しうる。個性中の個性を、個性に於ける最狹義的部分は形成する。

現代の一人を分析すれば、或民族的特質も見つかる。かれの個性内容の或もので、勿論、それはあるのだ。ところで、この民族性としての個性は、個性に於ける民族性的部分は、個性に於ける最廣義的部分と最狹義的部分との中間にある。民族性的個性部分は、人類性的的個性部分ほど一般的ではないが、個人性的個性部分ほど特殊的でもない。例へば土地が關する限りに於ても、地球面といふほどに廣く、自由ではないが、宅地といふほどに狹く、制限されてはゐない。歴史にしても、人類史といふほどに廣くはないが、閲歴といふほどに狹くもない。その他の要素にも同樣の中間性が顯著だ。

しかし、具體的に生存する現代の一個人を分析すれば、そこには、民族性的要素が確認されると共に、人類性的要素と、一人專有的要素とが確認される。即ち、一全人を、現代に生存するそれを、分析すれば、一民族に特有の、即ち一民族だけに共通の性質、要素が發見されることはたしかだが、全人類に特有のそれと、かれ一個に特有のそれとが發見されることも極めて確實だ。

そして、その三種内容間に、事實的及び價値的關係が存することも必然だ。

一人が、一人自身に内在する力によつて統治されることは、かれの本質的最大必要だ。現代の各一人としては、それゆゑに、右に述べた三種内容間に、最も無理すくなき統制を、あるひは統帝を、即ち統治を與へる必要を否定することはできない。

その内在的統治力は、完全道德意識のほかにない。完全道德意識よりも綜合的なものはない。民族意識は、完全道德意識を構成する一材料としての位置を現代に於ては持つ。しかし、民族意識は、完全道德意識によつてしか

自身の位置を決定されるべき部分物だ。

民族意識を教育し、啓蒙する第二方法は、全人性主義、綜合人格主義としての個人主義を徹底させるほかにない。それに徹底するほかにない。その哲學を持たすほか、持つほかない。

それから、一層社會的な方法としては、人性內容、したがつて文化內容の各種に應ずる結社、組織の發達が最も必要だ。さうするならば、それが發達するならば、民族意識的要素の位置は自然に適當に制限される。

民族と民族意識とには、現代に於て、それの必然的位置と必要的位置とがある。その必要的位置を知るためには、しかしながら、人性全、文化全、現代社會が持つ自由と制限とのすべて、これらに對する綜合的認識が必要だ。正しき意味に於ての哲學が必要だ。

現代に於て、民族が一とつの事實であることは問題とする餘地もない明確事だ。ただ、民族意識となると、問題とされるべき餘地がほとんど無限だ。民族といふ客觀的事實が、いかなる關心事たるべきか、その意味に於ていかなる現實たるべきかは、研究的、思索的企業を現代に於て限りもなくといつていいほどに必要とする。

ここに於てか、既成民族意識の追認よりもそれの將來が問題だ。及び未成民族意識の問題がそれ以上もの問題だ。かくして、例へば支那民族と支那民族意識との關係を、將來的にどう構想すべきかの如きは、最も創造的考察を挑發する現代的、そして民族意識關係の一至深問題だ。

國家は、現代に於ける最も綜合的な結社だが、國家そのものが、それの外延が關する限り、民族結社にほかならない。國家の內包としての各種要素が、國家の外延を不自由として意識すべき事情と理由が發達しつつある。支那の場合の如きは、同時に、民族結社構成の必要と、超民族結社構成の必要とを、最も具體的に示す一例だ。

現代に於ける民族意識は、民族結社の完全發達と、超民族結社の、當然、必然、多種な、自由成長とを、綜合道德意識に立脚して、直接目的と主要條件とのかたちに於て理解するものであることを最も存在理由に富んだ在りかたとする。その主要條件は直接目的以上の目的としての間接目的だ。

インターナショナル統一問題と各國組合の態度

田中九一

如何なるインターナショナルにもせよ、ロシアの組合を除外するはハムレットなしでハムレットを演ずるやうなものである。

イギリス勞働組合大會總評議會副會長、
アムステルダム同盟會長　パーセル

一、概説

今日世界の勞働組合の國際運動は、大體二大別せられてゐる。一はアムステルダムに本部を有する改良的な『國際勞働組合同盟』(成員約千三百四十萬)、他はモスコウを中心とする革命的な『赤色勞働組合インターナショナル』(成員約八百七十九萬)がそれである。この兩インターナショナルの主義政策は水と火のやうに異つてゐる。モスコウ派が獨裁を主張すればアムステルダム派はデモクラシーを固執し、前者が政治運動に積極的に參加すれば後者は經濟運動を高調し、又前者が集權的組織を採れば後者は加盟團體の完全なる自治を保證してゐる。從つてこの兩者の間には常に闘爭が絶えない。モスコウ派がその規約(第一條第四項)中に『國際的ブルジョアーの支柱たるアムステルダムの國際勞働組合同盟との決定的闘爭の敢行』を目的の一に算へれば、アムステルダム派は、モスコウ派に加盟せるあらゆる團體は當然アムステルダム同盟より脱退したるものと認むる旨の決議(一九二二年五月)を以て、之に酬ひてゐる。

然しかゝる戰線の分裂が勞働者にとつて不利益[illegible]ふまでもない。この國際的分裂が戰後に於け[illegible]抗するに當つて、勞働者を如何に不利な地位[illegible]にファシストの乘ずる機會を與へたか。更に[illegible]は、國際的分裂が諸國の國內運動の分裂を助長す[illegible]フランス勞働總同盟(CGT)の分裂、イタリー[illegible]ける左翼分子の除名及我國に於ける現在の分[illegible]コウ對アムステルダムの對立の代りに統一的[illegible]ルが存在して、戰前の第二インターナショナル[illegible]

も行つた調停をなしたなら、餘程その勢は緩和せられたに違ひない。それ所かモスコウとアムステルダムとは最近に至つては、東洋諸國の組合運動に對して猛烈なる爭奪戰を開始せんとしてゐるのである。

勞働者階級にとつて不利益極まるこの分裂を除去して、全世界の組合運動を打つて一丸とするインターナショナルを建設せんとするのが、以下に述べんとするモスコウ派を代表するロシアとアムステルダム派の加盟團體たるイギリスとの統一運動である。モスコウ派は一九二一年に成立以來、形こそ異なれ終始一貫統一運動を行つて來たとも言ひ得る。之に對してアムステルダム派は、モスコウ派がアムステルダム組合同盟に反逆して別のインターナショナルをつくりながら、今更共同戰線とか統一運動とか口先だけ立派な事を言ふが、實はアムステルダム派の戰線を攪亂するために接近せんとする口實にすぎぬ。統一を欲するなら何故に最初分裂的態度をとつたか、と非難する。之に對してモスコウ派は辯明して言ふ、政黨が階級的色彩の鮮明なる者のみを結束する必要上第三インターナショナルを組織した時にも、我々は組合運動の分裂を避けるために別の國際團體をつくらなかつた。然しアムステルダム派が國際聯盟附屬の國際勞働局を支持し、世界の組合運動の方向を誤らんとするのを、默視し得ずして遂に起つたのである。我々はアムステルダム派の協調的指導者を排斥するが、一般組合員を信頼する事は昔も今も變らない。故に我々は別のインターナショナルを組織しながら、アムステルダム派に加盟せる既成組合より脫退し之を破壞する事をなさず、飽くまでも既成組合内に踏止つて、一般組合員との提携を圖つたのである。斯く統一を重んじたる我々を諸國の組合より除名したるアムステルダム派の幹部こそ今日の分裂の責任者ではないか、と。

之等の主張の正否は別として、現に今モスコウ派は成立以來機會ある毎に、日常の闘爭に於て協同戰線をつくる事を、アムステルダム派に申込んだ(この時はインターナショナルの統一ではなく、只一々の問題に提携する事を求めたのである)。然るにアムステルダム派は、前述の如き同派と全く相容れざる規約を持つモスコウ派との交渉を斷然拒絕して來た。そこでモスコウ派はインターナショナルとしては手出しが出來ないのを見て、一九二四年始頃から形を變へて、ロシアの勞働組合が單獨にアムステルダム派と交渉を開く事にしたのである。之に對してはアムステルダム派も直に拒絕する口實を持たないのみならず、今度はアムステルダム派内の有力なるイギリスの組合がロシアを熱心に支持するために、重大なる問題となつたのであ

る。次にこの交渉の經緯を述べる前に、此の統一運動の性質を明かにするために、モスコウ派の會長ロゾフスキーが本年三月二十日のモスコウ派機關紙に述べたる論文の要點を示す。(イギリス側も之に贊成する事は後述の如し)。

『我々は統一のために何等かの條件を附するか? 否、何となれば條件の提出は統一の破壞及サボタージュと同意義なる事を知るが故に。……如何にして統一を實現するか? アムステルダム同盟と赤色勞働組合同盟とが、國際的統一大會召集の委員會をつくるのである。この大會には、あらゆる組合が――アムステルダム同盟或は赤色組合同盟に加盟してゐるもののみならず、兩者何れにも屬せざるもの(例へば印度、米國、フイリッピン、キューバ、南米、濠洲等)も亦――召集せらるべきである。この大會は統一インターナショナルの規約を作製し、又その今後の態度をも決定する。大會は比例代表の原則に基いて召集せられるであらう。我々はこの大會の決議に服從し、且つ赤色組合同盟を解散するであらう、といふ事を豫め宣言すると同時に、アムステルダム同盟の幹部も亦同樣の義務を負ふ事を要求する。若し我々に、分裂を除去するためにより民主的な、より價値ある、又より公正なる手段を示すならば、我々は喜んでそれを採用しやう。アムステルダム同盟の幹部は自から多數派たる事を確信しながら、何故に世界大會を恐れるのか? この怖は恐らくは弱味の徴しなのか? 如何なるインターナショナルを我々は要求するか?、我々は、必要あらばこのインターナショナルの鬪爭しつゝある支部を援助するために、あらゆる國、あらゆる生產部門の勞働者を動員し得る所の、活動的な、潑剌たるインターナショナルを欲する。……然らば勞働者はかゝるインターナショナルのために未だ熟してゐないのだらうか? 勞働者は既に熟してゐる、然し二三の反動的幹部が未熟若くは爛熟してゐるのだ……。』

二、統一運動の經過

前述の如くこの新しい形の統一運動は一九二四年始頃から起つたのであるが、この時より今日までの經過を一々詳述する事は紙面が之を許さぬから、古い所は出來得る限り簡略にし、最近の狀態を稍々詳く述べる。

一九二四年二月七日全露勞働組合中央評議會はアムステルダム同盟に對して、全世界のあらゆる勞働組合の協力を計るために會議を開きたい、と申込んだ。之に對してアムステルダム派は、同年六月二日のウィーン大會に於てこの問題を討議した。この時多數派はロシアの申込を拒絕する事を主張したが、同インターナショナルの三分の二以上(同派機關紙に依れば一九二五

年現在の總成員約千三百四十萬の中イギリスは四百三十四萬）の勢力を占むるイギリスの組合は、ロシアの申込に應ずべき事を力説し國際運輸勞働者聯盟のフインメンもイギリスを支持した結果、『アムステルダム同盟の尊嚴を傷けざる範圍に於て』ロシアの組合のアムステルダム同盟への加盟を許すための會合をしてもよい、といふ意味の決議がなされた。（この決議は其後屡々問題になつてゐるから注意せられたし）。

モスコウ派は同年七月八日大會を開きこの問題を協議した結果、アムステルダム派のウイーン大會の決議そのものは極めて誠意なく殆ど拒絶同樣のものであるが、同派内にも統一運動に贊成する有力なる分子の擡頭し來れる事を認め、ロシアの組合を通じて統一運動に最善の努力をなすべき事を決議した。ロシアの組合はこの決議に基いて、七月二十六日再びアムステルダム派に對して、從來のインターナショナルの行懸を離れ全く無條件で、全世界の組合の大會を開くための協議をしたいから、アムステルダム派に都合よき時と所とを指定せられたい、と申込んだ。之に就て九月及十月に両者間に文書による交渉がなされた後、十二月一日アムステルダム執行委員會はロシアに對して、ロシアは我々のウイーン大會の決議の範圍外の事を要求してゐるが、之は執行委員の權限外の事であるから、來年二月に開かるべき總評議會まで待たれたし、と返事をした。

斯く遅々として渉らない交渉が行はれてゐた間に、統一運動は重大なる一發展を見た。それは英露兩組合の緊密なる關係の成立である。兩國の組合は一九二四年秋に開かるべきそれぐの組合大會に、互に代表者を招待し合つた。その結果九月に開かれたるイギリス勞働組合のハル大會には、ロシアの代表者たるトムスキー等が出席し、統一運動の必要を力説した。次で十一月十一日に開かれたる全露勞働組合大會には、イギリスよりパーセルを始め數人の代表者が列席した。この大會に於てパーセルはイギリス側を代表して挨拶をなしたが、その中にはロシア革命の偉大なる効績を賞揚して『我々も亦生涯にかゝる變化をイギリスで見たいものだ』と述べた後に、統一問題に就ては、何等の條件をも附せざる世界大會を開催する準備をなす目的を以て兩インターナショナルの代表者會議を開く必要を力説した（この演説はアムステルダム派に動搖を與へた。同派の執行委員はパーセルの演説がアムステルダム同盟會長の資格を以てなされたものでない事を頻りに辯解した。又ドイツ社會民主黨機關紙『フオルウエルツ』は、この演説は恐らくロシア側の『僞物』であらう、と言つて葬り去らんとしたが、パーセルは之に對して、その眞物なる事を確證する旨の特別通牒を送つたが同紙

は倚前言を取消さないで英、獨兩國語の速記錄にパーセルが署名したものを送つたが、フオルウエルツは、之は速記の間違ひに違ひない、と空とぼけた)。

パーセルの演說の後トムスキーは全露勞働組合評議會を、又ロゾフスキーは赤色勞働組合インターナショナルを代表して統一の必要を高調した。この時トムスキーが統一運動と赤色勞働組合インターナショナルとの關係に就て述べたる言葉は特筆する必要がある。何となればアムステルダム派はロシア側の統一の要求に對して、ロシアの組合が赤色組合同盟より脫退して、單獨にアムステルダム同盟に加盟する事を要求し、以て赤色組合同盟を破壞せんとしてゐるのみならず、更に最近にはアムステルダム派中には、ロシアの組合が赤色組合同盟中の他團體を見捨て、アムステルダム派と交涉を開始した爲に、モスコウ派に內訌が生じたと宣傳する者があるのみならず、イギリス共產黨の擴大中央委員會までも、困難なる兩インターナショナルの統一の代りに、比較的容易なるロシア組合のアムステルダム同盟への加盟を可とする決議をなしてゐるからである。扨トムスキーは言ふ。

『我が社會主義ソヴイエツト諸共和國同盟(U・S・S・R・)の勞働組合は赤色勞働組合インターナショナルの基礎的構成分子である。從つて我が組合は、赤色勞働組合インターナショナルのあらゆる決議は同時に我々自身の決議にして、我々を拘束するものであると考へてゐる事を了解してもらはなければならぬ。我々は確信する、勞働組合の眞の國際的統一は、アムステルダム、モスコウ兩インターナショナルが作製したる基礎の上に兩インターナショナルが召集したる勞働組合の世界的統一大會に於てのみ實現し得らるゝものである、と。

『國際的勞働組合統一の問題は、全露勞働組合中央評議會とアムステルダム・インターナショナルとの相互關係の設定に依つて解決せらるべきものでない。統一は只、赤色勞働組合に包含せらるゝあらゆる組織が、新統一勞働組合インターナショナルの設立に參加して初めて可能であらう。

『さればこそ我々はU・S・S・Rの組合とイギリスの組合とのより密接なる關係を作る事を企圖しながら、我々の思想に完全に共鳴してゐる獨、佛、伊、チエツコスロワキア、バルカン諸邦、ポーランド及其他諸國の勞働組合との連帶を、瞬時と雖も忘れ得ないのである。この事は特に了解してもらはねばならぬ。

『赤色勞働組合インターナショナルが、若し勞働組合の世界的大會へモスコウ、アムステルダム兩者に加盟してゐる諸國

合會（參加する所の）が正しき基礎の上に召集せられたならば、何時でも解散する覺悟を有する、と屢々決議したる事に留意し、我々はU・S・S・Rの勞働組合の名に於て、赤色勞働組合インターナショナルの之等の宣言との完全なる連帶を聲明す。」

之に依つてロシアの組合はモスコウ派の諸組合と最後まで行動を共にするが、只交渉の便宜上――その理由は既述した――單獨に統一運動をとるものである事、從つて如何にアムステルダム派が要求しても英國共產黨の主張する如く單獨に同派に加盟する意志はない事が明かである。

この大會に於てロシア組合とイギリスの代表者との間に、運動を促進するために、英露兩組合の代表者より成る常設的委員會を設置する申合が出來た。但しイギリスの代表者は之を確定的に設置する權限を持たなかつた爲、歸國後これが設置に努力すると約束し、ロシア側は遲くとも一九二五年一月までにその實現を希望した（之は後述する如く一九二五年四月成立）。

一九二四年十二月一日附の手紙を以てアムステルダム執行委員會がロシアの組合に對して、解答を來年二月の總評議會まで待たれたし、と言ひ送つた事は前述の如くであるが、この總議會は予定通り二月五日より七日までアムステルダムに開かれた。

この時統一問題に就て三案が提出せられた。その一はイギリスの組合の提出したる、ロシアとの間に何等の條件をも附せざる會議を即時に開くべし、といふ趣旨のもの、第二は之と正反對に、アムステルダムの勸告にも拘らず加盟を肯じないロシア組合との交渉を斷然打切るべし、といふウーデゲースト（アムステルダム同盟書記）の案、第三案はステニユイス（オランダ）及スミス（國際事務員同盟）の提出せる折衷案にして、次の如きものであつた。

『アムステルダム同盟の總評議會は、アムステルダム同盟と全露勞働組合中央評議會との間に交はされたる文書を吟味の後、執行委員會に對して次の如き指令を與ふ。――アムステルダム同盟は、若し全露勞働組合中央評議會がアムステルダム同盟に加盟の希望を表明するならば、加盟を許す意志を有する事及び、全露勞働組合中央評議會がアムステルダム同盟に加盟の希望を示し次第直に、意見交換の目的を以て全露勞働組合中央評議會と、アムステルダムに於て會議を開く意志を有する事を全露勞働組合中央評議會に通知すべし。』

右三案中ウーデゲースト案はイギリス側をして折衷案に屈服せしむるための掛引として提案せられたものらしく、折衷案は提出せらるゝやウーデゲースト等も自己の提案を撤回して、

を支持するに至つた。イギリスの代表者は最後まで強硬に自說を主張して讓らなかつたが、採決の結果イギリス案は十三對六を以て否決せられ、折衷案が十四對五を以て可決せられた。イギリス案贊成者はパーセル（英）、ブラムリー（英）、クック（國際坑夫聯盟代表、英）、ブラウン、（國際書記、英）、フィンメン（國際運輸勞働者聯盟代表、オランダ）、マドセン（デンマーク）。

アムステルダム同盟の執行委員會は右の決議に從つて、二月十六日ロシアに對して通知を發した。然しロシアが之に滿足しなかつたのは勿論である。

斯くロシア對アムステルダム同盟幹部の關係は、一歩も進まなかつたが、然し英露兩國の組合の關係は益々親密を加へ、世界の勞働運動史上に劃時代的とも言ふべき事件を發生せしめた。それは即一九二五年四月六日より八日までロンドンに開かれたる英露代表者會議に於て『英露合同協議會』（Anglo-Russian Joint Advisory Council）が成立した事である。之より先一九二四年十一月のロシア勞働組合大會に於て、英露兩國間に統一運動促進のための委員會を作るべき申合せがなされ、ロシア側は之を遲くとも一九二五年一月までに成立せしめたき希望を表明した事は前述の如くであるが、この申合せが漸く四月上旬に至つて實現したのである。この記念すべき會合に列席したのは、ロシア側はトムスキー、オルガ・チエルニショヴア、レプセ、ダレボフ・アヴイロフ、ミカイロフ、メルニチヤンスキー（書記）、及ヤロツキー（通譯）の七名、イギリス側はスウエールス、パーセル、ブースマン、ボーウエン、ヒツクス、プールトン、ソーン、テイレツト、ジユリア・ヴアーリ、ウオーカー、フレツド・ブラムリ（書記）及チヨージ・ヤング（通譯）の十二名であつた。

この會議は統一運動に關する共同宣言及び英露兩組合の『相互扶助の提案』を作製した。共同宣言は反動期に於ける組合運動統一の必要を力說したる後に、兩國の組合はアムステルダムをしてロシアの希望する無條件會議に直に應ぜしむるやう、共同の努力をなすであらう、と述べてゐる。次に『相互扶助の提案』は『英露合同協議案』の設立及その任務等を定めたるものにして、一種の同盟議定書とも言ふべき重要なるものであるから次にその全文を記載する。

『全露勞働組合評議會と英國勞働組合大會の總評議會とが國際的統一を促進する目的を以て行ふ共同行爲に對する提案を有效ならしむる爲め、本會議に列席せる代表者は次の宣言を作製した。

（一）國際的統一を促進するためにその時々に有効なりと思はるゝ凡ての方法を以て、英國勞働組合大會總評議會と全露勞働組合中央評議會との協働を促進するは我々の義務であらう。

（二）この目的のために我々は、英露兩國の組合運動間に文書の自由交換をなす便宜をはかる事を約束す。この文書中には次のものを含むものとす、英國勞働組合の綱領及規約を記載したる組合事業書類の謄本集、國家保險及び失業保險制度、掛金及手當、組合會計、地方的組織の制度、組合役員任命方法、其他組合機關の構成及び組合組織並に管理の一般政策に關する一般的報告又は特別書類。

（三）その時々に必要と認むる重要なる原則に就て共同討議をなすため、共通の利害關係ある特殊問題に關する覺書の交換をなすべき事を約す。

（四）機會到來の時は、兩國間の出來得る限り密接なる相互扶助を發達せしむるため、相互の接觸を更に擴張するであらう。

（五）右數項に述べたる目的に關して起り得る凡ての問題及び特別の出來事を處理するため、英露兩國の組合運動を代表する合同協議會を設立すべきものとす。この協議會は議長及兩國の書記、並に全露勞働組合中央評議會と英國勞働組合大會總評議會とより各三名宛出したる成員より成るものとす。

（六）共同機關の活動を有効ならしめるため、全露勞働組合中央評議會は、英國勞働組合大會總評議會の國際委員會に相應する所の、國際委員會を設置する事を約す。』

この協定の成立に依つて、イギリスの組合は實事上アムステルダム同盟に對するよりもロシアの組合に對して、より親密なる關係を持つに至つたのである。而してタイムス紙（一九二五年四月十一日）が、之に就て次の如く論じた事を以てもその重大さを知るであらう。『若しもこの決議が最初に總評議會の、次に組合大會の批准を得たならば、それは英國勞働組合史上に一轉期を劃するものである。而して總評議會がこの決議を否認する可能性は極めて乏しい。從つて年次大會の常識に俟つの外はない。ロシアの共産主義組合とのかゝる協定は、アムステルダム同盟に於ける激烈なる而して分裂の可能性ある論争を惹起するに違ない。而してそれは結局、英國勞働組合の現指導者達が、アムステルダム同盟を構成する正統派諸組合との闘争否絶緣をすらも辭せざる事を意味するものである。……』

この劃時代的協定は四月二十一日に至つてイギリスの總評議會の是認する所となり、又タイムス紙――のみならずアムステ

ルダム派の大陸幹部——が賴みとせる年次大會（九月、スカーボローに於ける）の『常識』も遂に滿場一致を以て之を是認した事は後述する如くである。尙全露勞働組合中央評議會は四月三十日より五月三日までの會議に於て之を是認した。

斯く英露兩國の陣容を整へた後、五月七日英國勞働組合大會總評議會は、英露合同會議に關する宣言を發して、アムステルダム同盟大陸諸幹部との『鬪爭をも辭せざる』決意を示した。その要點を示せば、

（一）ロシアの組合はアムステルダム同盟に對して、アムステルダム同盟の綱領中に列擧せらるゝ目的を、その目的中に包含し、且つ大體に於てアムステルダム同盟の規約と本質的に異らざる規約を有する一のインターナショナルに加盟する希望を有する旨の解答をなすべきである。

アムステルダム同盟の綱領はロシアの組合運動の合法的要求を充すに不十分であるから、國際的統一大會を開く前に、予備的交涉を開く事は絕對に必要である。

（二）ロシアの組合を加盟せしむる際には、ロシアの國情がアムステルダム同盟に現に加盟せる諸國と非常に相異する點が問題となるが、然しアムステルダム同盟を眞に國際的に發達せしめんとせば、加盟諸國の慣行、政治狀態等の相違に對して十分なる規定を設けねばならぬ。而してアムステルダム同盟とロシアの組合との相違を考慮するためには、非公式商議の開催を最良の道と信ずる。

（三）以上の點に鑑みてアムステルダム同盟イギリス支部は同盟事務局に對して次の提案をなす、——（イ）一九二五年二月五日より七日までアムステルダムに開かれたる總評議會の決議より發生したる情勢及びこの（英露合同）會議の決議を考慮する目的を以て、直に統一會議を開くべき事を提議す。その時はイギリス支部は會議に參加せるあらゆる團體の完全なる協力のために最善の努力をなすであらう。（ロ）アムステルダム同盟事務局が右の會議を開催し得ざる時は、イギリス勞働組合大會總評議會は、自から會議を招集して統一運動を促進するであらう。

この宣言と呼應して、全露勞働組合評議會も亦之に全然同意なる事を聲明したが、五月十九日に至つてこの宣言（一）の趣旨に基きアムステルダム同盟に對して通牒を發し、規約及び目的は現在のアムステルダム同盟のそれと牴觸せざる全世界の單一インターナショナル（但し階級鬪爭に根本的立場を置き、且つ資本主義よりの解放を究局目的とするインターナショナルたる事は固守す）に加盟の意志を有する事、統一を考慮するために無條件の會議を開きたいからその時と所とを指定せられたい

事、を申出た。

之に對してアムステルダム同盟はは何等好意的返事をなさないのみならず、イギリス勞働組合スカーボロー大會直後一九二五年九月十七日に、英露兩國の組合が世界の勞働者に對して統一の必要を力說せる宣言を發したのに對して、その機關紙『印刷通信』(十月一日號)に次の如き威嚇的論文を揭げて、イギリス組合に酬ひた。『……然るに彼等(英國幹部)は熱狂の極、屢々アムステルダム同盟及之に加盟せる各國組合の全國的中心機關に對する誠實の限界を踏み越えんとする程の熱意を以て、統一問題に關するロシア側の意見を支持し續けて來た。彼等は自己の考を大陸諸組合に强制せんと渴望する余り、彼等の行爲がより大なる統一をもたらす所か、却てより以上の分裂を惹起し得るものなる事を忘れてゐるやうである。大陸諸組合が、イギリス組合の中に斯く急激に發展したる急進主義の形式に屈服するは、極めて可能性の乏しい事である。』

斯くしてイギリス組合とアムステルダムの大陸幹部との間の溝は益々深さを加へて行つた。そうして十二月初めに開かるべきアムステルダム同盟總評議會定期(年二回)會議の雲行が可成險惡に見えた。そこでこの兩者を調停するために、アムステルダム同盟執行委員會は十二月一日ロンドンにイギリスの總評議會と會見して了解を遂げた後、十二月四五兩日アムステルダム同盟の總評議會を開く事となつた。この會議に於てもイギリス代表はロシアと無條件會議を開催すべし、といふ提案を極力支持したが、又も採取し、二月の決議(前述)を再確認するのみで何等新決議をなすの要なし、とする提案が十四對七の多數を以て可決せられた。尙この會議に於て注意すべきは、アメリカ及東洋諸國の諸組合に對して、アムステルダム同盟への加盟を勸誘する旨の決議がなされた事である。アメリカの組合は後述する如く極めて右傾的のものであるが、今回特に之を勸誘せんとするのは、アムステルダム同盟内に反ロシア分子の勢力を增し、以て英國組合の運動を壓倒せんとするもの、又東洋諸國に加盟を勸めたのは、最近モスコウ派の勢力が支那等に伸張したのに對抗せんとするものなる事は明白である。

英露合同協議會は十二月八、九兩日ベルリンに會して、右のアムステルダム總評會の決議に對して採るべき態度に就て協議した結果次の趣旨の決議をなした。

一、アムステルダム總評議會が、ロシアの申込める無條件會議を拒絕したのは遺憾である。

二、アムステルダム總評議會の決議は、國際勞働運動の大衆の希望を代表するものでなく、幹部の偏頗の反映にすぎざるも

のと認む。この事は總評議會がロシアの組合に對して示したる偏見と、其他のアムステルダム同盟に加盟せざる諸組合（米、東洋等）。に對する態度とを對照すれば明かである。

三、我々の採るべき第一の實行手段は、一九二五年五月イギリス組合大會が同年四月八日の英露合同會議の趣旨に基いて發表し次いで兩國の各組合大會が確認したる宣言第三項（ロ）（前出）に基いて、イギリスの總評議會主催の下に、國際的合同會議を召集する事にある。

イギリスの總評議會は十二月十六日ベルリン會議の報告を聽取した後、今後の態度を協議した結果、今直に自己主催の國際大會を開く事を不利とし、只アムステルダム同盟大陸幹部に對して、再考を促す旨の通知を發するに止めた。

＊　＊　＊

以上述べた所に依つて、大ざつぱながら統一問題の要點には凡て觸れた積りである。要するにこの運動は、英露兩組合の關係を益々緊密ならしめた効果はあつたが、ロシア對アムステルダム——從つてモスコウ對アムステルダム——の關係は之を一歩も發展せしめず、兩者の間隙を愈々明確ならしめたにすぎなかつた。只昨年秋に至つて、ノルウエーとフィンランドとの勞働組合の全國的組織（兩國共現在何れのインターナショナルにも加盟せず）が、統一運動に積極的に參加を表明した事は特に附言しなければならぬ。

統一運動の將來を豫言する事は、勿論筆者のなし得ない所である。然し本年三月一、二兩日の共產インターナショナル擴大執行委員會第十二回會議に於て、トムスキーの述べたる所は多少この問題の參考となし得ると思ふから次にその要點を紹介する。『統一運動は現在困難なる狀態にある。今までの經過に依つて知る如く、アムステルダムはこの問題を一九二七年に開かるべき國際組合大會まで延引するであらうから、ロシアとアムステルダムとの交渉は差當り期待し難い。又イギリスの同志の注意は、炭坑の大爭議によつて國際問題から引離されてゐる。從つて統一運動は、アムステルダムは一歩も進まうとしないし、赤色インターナショナルも最早や讓歩し得ない狀態にある。さなくてさへ我々は既に、インターナショナル對インターナショナルの交渉といふ形式を棄てて、ロシア組合對アムステルダムの交渉に依つてゐるのである。勿論之は赤色インターナショナルの完全なる了解の下になされたのであり、より速かに目的を達成せんがための妥協に外ならぬ。イギリスの同志も亦他の一の妥協をなし、アムステルダムに對して嚴しい態度をとる事を止めた。既に最近の英露合同會議に於て我々は[illegible]

て、若しアムステルダムが之以上この問題をサボタージュするならば、我々の調子を變へやうと言つたが、然しイギリスの同志は我々にもつと待つやうに勸めた。最近の英露合同協議會の決議は、から宣言した、我々はアムステルダム派が我々の非難的態度にも拘らず我々に差向ける攻撃を之以上默視し得ぬ、と。

『之以上の讓歩は不可能である、我々は統一を、アムステルダムに對する一方的叩頭と認める事は出來ぬ。我々は新インターナショナルを建設せずして、舊インターナショナルを解體し得ぬ。それは裏切であらう。』

次にトムスキーはアムステルダム派幹部が統一を肯ぜざる時は、或は未組織勞働者を赤色インターナショナルに引入れ、或はアムステルダム派の大衆中に左翼をつくる事に努力して、赤色インターナショナルの勢力を伸張し、以て統一を促進せんと言ひ、最後に次の如き言葉を以て結んでゐる。

『……若し國際的組合統一運動の一方の戰線が停頓してゐるならば、我々は大衆を動員するために他の部分の戰線を見出さねばならぬ。而してアムステルダムが統一を欲しないならば、我々は大衆の要求に依つてアムステルダムを統一へ強制するか、或は善き、辛抱強き組合運動に依つて大衆を獲得した曉にアムステルダムなしで國際的組合統一を樹立するであらう。』

三、各國組合の態度

アムステルダム總評議會の統一拒否は大衆の意志の代表でなく幹部の偏見の反映にすぎぬ、と英露協議會は斷言した。又前記トムスキーの意見も統一運動は各國大衆の下よりの要求に依つて實現するの外はない、と言つてゐる。然らばアムステルダム派諸國の一般組合員の之に對する態度はどうであらうか。以下に極めて簡單に之を述べる。

(1) イギリス

イギリスの總評議會の熱心なる態度は前述したが、一般組合員が之を如何なる程度に支持してゐるかを一言する。イギリスの勞働運動は最近二、三年間に急激に左傾して來たが、その主要原因として一般に認められてゐるのは、(一)ドイツにドーズ案實施以後イギリスの經濟界が著しく不況に陷り、勞働者が資本家の攻撃の下に苦しんでゐる事、(二)勞働黨內閣の業績に失望したる勞働者が、妥協政策の非を覺つた事であるが、この外に一昨年暮の組合代表者のロシア視察も附帶的原因として算へる事が出來るであらう。それは兎に角、組合の左傾は極めて急激に行はれ、初めは組合大會內の所謂「左翼少數派運動」として

表はれてゐたが、昨年九月のスカーボロー大會に於ては多くの點に於て左翼が優勢であつた。之を最もよく證明したものはこの大會に於て、『勞働運動の目的及方法の確立に關する決議案』が、二、四五六、〇〇〇對一、二一八、〇〇〇の大多數を以て可決せられた事である。この決議は組合運動は階級闘爭の原則の上に立つべきものなる事を明言したものであつて、この時以後イギリスの組合は改良主義より社會主義に變つたものである、と見られてゐる。其他植民地の完全なる獨立を認むべしといふ決議が三、〇八二、〇〇〇對七九、〇〇〇の大多數で可決せられた事や土地の無賠償沒收案の可決等を見ても、同國の勞働運動の傾向を明かに知る事が出來る。而して統一問題に關して總評議會が採つて來た政策は、この大會に於て滿場一致を以て承認せられたのである。

（2）ドイツ

全ドイツ勞働者同盟（A・D・G・B）は昨年八月末に開かれたる大會の報告に依れば、成員は約四百五十萬ある。革命後一、二年間の七百八十七八萬に比すれば著くし減じたが、然し未だアムステルダム同盟總成員の三割三分近くを占め、同同盟中最も有力なる團體である。從つてイギリスと對抗して、大陸派幹部を[illegible]この點ドイツ勞働者同盟内には革命以後ドーズ[illegible]か勢力を持つてゐたが、ドーズ案が實施せられ同國の經濟界が稍々安定を見るや左翼の勢力は殆ど全滅に近い有樣となつた。而して前記の昨年八月の大會に於ては、統一問題に關する決議案を提出せんとする者もあつたが、提案贊成者が五十人に滿たざるため議題とする事すら許されなかつた有樣である。

（3）フランス

フランスの組合運動は大體C・G・T（約四十九萬）とC・G・T・U（約五十萬）とに折半せられてゐるが、この中C・G・T・Uは赤色インターナショナルに加盟し統一に贊成なるは勿論にして、國内に於ても屢々C・G・T・に對して合同の申込をなして來たが、常にC・G・T・に拒絶せられてゐる。C・G・T・の拒絶は宛もアムステルダム派幹部がロシアの組合に對すると同じく、合同を欲するならば先づ自から解散してC・G・T・に加入せよといふやり方である。昨年八月末のC・G・T・大會に於てもC・G・T・Uの申込める合同案が提案せられたが、三、九三六對三六五の大多數を以て否決せられた。即合同贊成者は一割に足りないのである。國内的合同は國際的統一の問題と同じ性質を有する。國内的合同贊成論者（二十七組合之代表者）は、右大會に[illegible]

力を感謝する意味の手紙を送り、僅かに彼等の鬱憤を晴らしたが、C・G・T・の大勢を如何ともする能はざる地位にある。

(4)イタリー

ムッソリニの高壓政策に依つてイタリーの組合運動は殆ど全滅に近い窮狀に陷つた。一九二一年に三百五十萬の成員を算へ、アムステルダム同盟中イギリスに次で第三位を占めてゐた勞働總同盟(C・G・L)も、一九二三年には總成員十萬といふ慘めな有樣となつた。其後稍盛り返して一九二四年十二月のミランに於ける第六回大會(第五回以後四年を經て始めて開かる)の報告に依れば成員四十萬に增加したといふが、然し昔日の面影はなくその活動は極めて不自由な拘束を受けてゐる。その一例をあげれば本年始めに議會を通過したる新勞働組合法には次の如き規定がある。(第一條)組合の設立は只次の場合にのみ許可せらる、當該範疇の勞働者の少くとも十分ノ一を包含する事、組合員の共濟、教養水準の向上、及道德的、國民的教育を目的とする事、組合の管理が成員の道德的及國民的精神の尊重及確立を保證する事。(第六條)國際的性質を帶ぶる團體に依つて規律せられ又は義務を課せられてゐる組合は如何なる場合と雖認可せられぬ。一勞働者範疇毎に唯一の同盟のみが法律上認可せられる。(第十八條)如何なる場合と雖も使用人又は勞働者が、傭主をして勞働契約を變更せしむる目的を以て、三人又は三人以上合意の下に罷業をなすか、又は仕事の繼續的、規則的性質を阻害するが如き方法で勞働する時は一ケ月以上三ケ月以下の拘留に處せらる。その主謀者及組織者は一年以上二年以下の懲役に處せらる。尙第十九條は公益事業の被傭者が前條の行爲ありたる時は特に重く罰する旨を規定してゐる。

この法律の實施以後總同盟が如何なる影響を受けたかは不明であるが、前記一九二四年末の大會に於ける投票に依れば成員の色分は、右翼たるコンフエデラリストは一五三、三一六、中央のマキシマリストは五四、七九二、コンミユニストは三二、五九六といふ割合を示した。この中最後の者のみが統一運動を支持するものと見て差支ないであらう。右翼及中央幹部は、昨年七月の中央委員會の決議を以て、『勞働組合の統一は全勞働者共通の希望なるが故に、我々は總書記に對して、アムステルダムの總評議會に於て、速かにこの問題を解決するため斷乎たる處置をとる事を委任す。但モスコウが統一を眞面目に欲するか、或は統一の要求を單に鬪爭的目的に利用するかは、確にして置かねばならぬ』と言つたが、その眞意は最後の文句にあつて、モスコウ派の不誠意を口實に統一を拒否せんとするものなる事は、彼等の平素の實際行動が之を證明してゐる。

（5）アメリカ

アメリカは今何れのインターナショナルにも加盟してゐないが、前述の如くアムステルダム派が之を引入れんとしてゐるから最後に同國の勞働聯合會（A・F・L・一九二五年十月の大會報告に依れば成員約二百八十八萬）の統一問題に對する態度を略述する。A・F・L・は初めアムステルダム派に加盟してゐたが、一九二一年に至つて、アムステルダム派が社會主義の原則を採用してゐる、といふ理由の下に脫退した程右傾的な團體である。而して今日に至るまで米國政府のロシア政府不承認を支持してゐる程、ロシア嫌の團體である。この勞働聯合會の第四十五回大會が昨年十月アトランチック・シティに開かれた時、イギリスのパーセルはこれに列席して統一運動の必要を說き、共に之がために協力せん事を勸告した。然るに大會は之に對して所謂『勞働モンロー教義』の決議を以て之に答へた。次にその要點を示す、『…我々は世界に對して、我々がなし得べき最も嚴肅なる警告を發す、曰我々は舊世界の諸民族が自己の意志をアメリカ諸民族の上に强制せんとするが如きあらゆる舊世界の運動を、西半球に許容する事を欲せずと、合衆國政府が大統領モンローを通じて、武力的領土侵略に對する警告をヨーロッパに發したるその事を、我々は同様に高調せる言辭を以て、プロ・パガンダに依る侵略に對して聲明するものである。アメリカはデモクラシーの爲に存在す。汎米勞働聯合會は公認せられたるアメリカの國際勞働運動である。…願はくば獨裁的モスコウの赤色インターナショナルも、或は又他の如何なるインターナショナルも、アメリカ勞働者の政策のこの定義を無視せざらん事を…』

之を以てもA・F・L・が如何なる性質を有するかは明かであらう。アメリカは今日世界に於て最も資本主義の榮えてゐる國である。戰前イギリスの資本主義が廣大なる植民地のお陰で全盛を極めてゐた間は、イギリスの組合運動は社會主義を顧なかつた。然るに戰後同國の資本主義が行詰の兆を示すに至つて、その勞働運動が如何に左傾したかは前述せる如くである。アメリカの組合も亦資本主義が發展しつゝある間は現在の傾向をとつて進むであらう。そうして同國政府の政策がロシアのそれと對蹠の立場にある如く、同國の組合運動の本流も亦赤色インターナショナルと拮抗して進むであらう。

（註）組合員の數字中その場所で出所を示さないものは凡て『ローテス・ゲウエルクシャフツ・ブレタン』昨年十二月二十六日號に發表せられたる統計に依る。この統計はアムステルダム派の機關紙（印刷通信）に發表せられたる數字に依り、モスコウ派の組合に就てはモスコウ派自身の調査に基いて作製したものである。

經濟時事問題

堀江歸一

一、爲替相場の恢復

爲替相場は昨年下半季以來一方に貿易の狀勢に於ける逆調の緩和された他の一方に、政府が時々正貨の現送を行つた結果、次第に恢復し來つたが、殊に最近一兩月に於ける上進の歩調は頗る急であつて、四十八弗を上下し、震災以後始めての高値を見ること〻爲つたのである。之に關しては、種々の問題に接せざるを得ない。

第一、斯る騰貴の勢は今後引續いて、結局爲替相場をして平價に達せしめるかどうか、

第二、爲替相場の騰貴に幾何の實勢力が伴うて居るかどうか、

第三、斯る狀勢の下に、金輸出解禁は行はれないものであるかどうか、

と云ふが如き、今日當面の問題として、世人の注目を惹く所である。

獨逸がライヒス馬克の制度を布くまで、馬克に關する投機的取引の行はれたことは、著明の事實であり、今日法(フラン)や、リーラに就ても、同様の事があり、否前年は磅に對しても、投機的賣買の試みられた事實がある。故に我國の圓が一時三十八弗まで低落し、之を底値として爾來多少の恢復を告げるに至つたもの〻、尚ほ其間に一高一低のあつたことは、投機取引に恰好の目的物と爲つた所以であつて、近くは内地や上海に於て、遠くは紐育倫敦に於て、我國の圓が投機的に賣買されるに至つたことは、爭う可からざる事實である。而して斯る投機的賣買は始め圓價の低きに居つた時代には、之に從事する者は極めて些細なる資金を以つて、小規模に行うに止めたのであるが、圓價に聊か騰貴を告げる一方に、内地に於ける正貨の現送、貿易狀態の改善に依つて、騰貴の勢、漸く著しきに至るや、投機業者は金輸出解禁に依つて、結局圓價が米貨に對する平準點に恢復し、又此所

に安定するの遠きに非ざることを豫想し、平準點を一の目標として、盛に買進むに至つたのであつて、此一事が原因と爲り、殊に銀塊相場に下落を來すや、銀を賣つて、圓を買ふ者が上海邊に續出し、是等の事情相重なつて、最近一兩月間に於ける如く、殆ど棒押しの勢を以つて四十八弗を摩し、又は之を越ゆるまでに、騰貴を見ることゝなつたものと解される。

斯る投機以外の關係に於ても、爲替相場の恢復を告げるに至つた原因の存することは、之を認めなければならない。然しながら貿易外關係に於ける經常的收入の經常的支出に超過するものは、僅々一億六七千萬圓であつて、如何に近年輸入超過の勢が衰へたとは云ひながら、現に昨年度の如き二億六千七百萬圓の多きに上つて居り、右の貿易外收入超過を以つて、此輸入超過を決濟し、其間に著しき壓迫を加へざるを得るのは、偶々外資の輸入される結果に歸す可きものであつて、我國對外勘定に於ける不安は昨今に至つて、聊か緩和されたと云ふに止まり、貸借の受取勘定超過に移つたものとするを得ない。多少の超過があるとしても、其超過から輸入超過を決濟するに足らず、纔に外資の輸入に依つて、一時の安を偸むが如き有樣であつては、之を以つて國際貸借上に於ける我國の現狀未だ安んずるを得ざるは勿論其將來に對しても、亦遂に樂觀するを得ざるものと斷ずるの外ない。假に本年の貿易が輸出超過に爲らないまでも、輸出入平均を保つを得たならば、爲替相場は平價に恢復するであらうが、此點に就ては本年に於ける生絲輸出の狀況こそ、最も重大なる關係があるのであつて、今日から如何とも豫測するを得ないし、本年度に於て、幸に此事があつたとしても、明年度に於て、亦果して然るを得るや否やは更に豫測に困難を加へる。確乎たる貿易外收入の依つて生ずる源泉を備へて居らない國が國際經濟上の關係に於て、感ずる悲哀の一としなければならない。

故に今、若し政府が一個の決心を持して、金の輸出禁止を解除するの擧に出でたとしたならば、其爲替相場の昂騰する勢を助け、之を平價に達せしめるを得ることだけは確然である。然しながら平價に達した曉には、投機的取引の目的物として、特に圓を買入れる者のないのは勿論であつて、其以後に於ける爲替相場は一に貿易並に貿易外收入の出合に依つて、定まるのであるが、此際に於て兩者出合の狀況にして前述の如くであつたならば、我國から外國に向つて、若干の金貨の流出することは、勢の免れ難き所であり、金貨の流出は世人をして一般に危惧の念を懷かしめ、之を避ける爲めに、金に對する取付や、其流出に制限を加へたならば、一旦平價に復した爲替相場に低落

を來さゞるを得ざる次第であつて、是れが國際貸借の狀勢の有利に展開し來つたことの確實ならざる間に、金輸出の解禁を爲す能はさる有力なる原因と爲るのである。

此問題は英國が金輸出の解禁を行つた場合にも逢着した所であつて、解禁後相當纏まつた金額の金輸出を生ずるや、曩に輸出解禁を尙早とし、又不可なりとする一部の論者は此事實を捉へて、政府の政策に劇烈なる反對を試みたのであるが、今日に至るまでの經過に徵すれば、此事たる、一時の時相であつて、決して永く英國の經濟社會に累を及ぼす所以とならなかつた。然らば何故に其然るを得たかと云へば、英國の國際貸借の基礎が英國に取つて、頗る鞏固であつて、常に巨額の受取勘定を齎すことに歸着するのである。如何なる場合に於ても、一國が國際貸借に於て、有利なる差額を持つに非ざれば、貨幣制度の安全を維持するを得ないと云ふ事情は明に看取される。英國が四圍に起れる反對論を排して、將來に於ける國際貸借の狀勢の益々有利と爲ることに確乎たる信念を持し、金輸出解禁を行つたのは、道理ありと云へる。而して此事を斷行するに當り、萬一の變に備へる爲め、合衆國にクレデキットを開くを得る協定を同國金融業者との間に結んだことは、流石に周匝を重んずる英國財政家の態度であると云へるし、尙ほ實際に此クレデキットの利用されずして、解禁後の變に處するを得たに就ては、英國財政家に一個の見識ありと見られる。故に我國にして國際貸借の現狀若しくは近き將來に起る變化に就て、有利なる信念を持つ能はざる以上は、一時の投機的取引に依る爲替相場の騰貴のみに根據を置いて、金禁輸の解除を即行せざることも、亦道理ありと云へる。而して假に我國に於て、英國の爲した所に做ひ、解禁後の變に處する爲めに、外國にクレデキットを開き、解禁後國際貸借の狀況、我國に有利に展開せざる爲めに、國際支拂上の關係、我國に不利と爲り、之に當る爲めに、右のクレデキットに依つて、調達された金貨を拂出すが如き狀態と爲つたとしたならば、爲めに我國に對する諸外國の經濟的信用の減損することは論を俟たざる所である。假令ひ一方に爲替恢復、圓價騰貴の美名を收め得るとしても、美名に伴ふ實利は果して如何なる處に求められるか、吾人の疑ふ所である。

現に私は四月三十日から、五月二日に亘つて、此論文を認めたのであるが、其間に於ても、一時上進した我國の爲替相場に多少の反動的下落を告げた。其下落の原因たる、當時偶々銀塊相場に多少の騰貴を告げた結果、投機業者は圓を賣つて、銀を買つたことに基くと稱された。斯る些細の出來事に依つてすら、尙ほ騰貴の趨勢を挫折される爲替相場の狀況であつては、

直に一時の狀況に安んじて、金輸出解禁を行ふ能はざることも、亦當然であると考へられる。

二、爲替恢復に關する一喜一憂

爲替相場が平準點に恢復し、圓價が外國の金貨價値と平衡を保つに至ることは、國民の一般に希望する所であつて、斯くありてこそ、我國の經濟社會をして安全なる境地に就かしめるを得るものとする說があつた。現に私の如き此說を主張し、今日に於ても主張の依然たることを述べるに躊躇しないが、終局の歸着點と其此所に達するまでの道程とに就ては、自ら利害の岐れるものがある。爲替相場の低落しつゝある間、輸入品の內地市價の騰貴したことは、自ら內國物資の價格を騰貴せしめると共に、其輸出價格を低廉にし、兩者相待つて、經濟社會に大なる刺戟を與へる所以となつたが、昨今の如き爲替相場が騰貴し、然も騰貴の勢の急速なるに於ては、右の事情は正反對と爲り、內國に於ける市價の低落は一般の不景氣を加重し、輸出價格の騰貴は物資の輸出に碍礙を來し、世人をして爲替相場の恢復が果して有利であるや否やに就て、疑惑を挾ましめるに至つた。圓價恢復の終局に於て、有利であることに就ては、論を俟たないとしても、急劇なる恢復の經濟社會を騷がすのは、明白の事實であつて、政府が其影響を緩和する爲めに、正貨の現送を中止したのも、一個の政策であるやうに考へられるが、當初から爲替の恢復に就て、自然に之を放任し、何等の調節を加へず、投機をして其行はれるに任せたことが、大なる失計であつて、此失計があつたればこそ、一方に爲替の急騰を來し、他の一方に其急騰に依つて、市場を騷がしたものと認めざるを得ない。

然らば圓爲替に關する投機取引を抑制する道がなかつたか、投機業者をして市場に跋扈せしむるのは已むを得ざる所であつたかと云へば、私は決して其然るを信じない。現に私は或る機會に於て一說を公にし、後に之を拙著「國際經濟總論」第七章の一部に收錄したが、其要點は政府をして或る期間或る價格を以て、正貨の拂下を行はしめ、當初其價格を時の爲替相場よりも、聊か高き所に置き、正貨現送に依つて、爲替相場が引上げられて、正貨拂下價格に達したならば、再び時を限つて、拂下價格の引上を行ひ、斯る事を二度びし、三度びする間に、爲替相場が平準點に接近する時を以つて、金輸解禁を斷行す可しと云ふのであつた。蓋し斯の如くすれば、爲替相場に對する支配は政府の掌握に存し、市場を騷かすまでに之を急騰せしめざる一方に、或る金額の金貨は海外に現送されるとしても、其現送に依つて、徐々に爲替相場の恢復を促進し、四方に及ぼす影響

最も輕くして、輸出解禁の彼岸に達し得ると信じたからであつたのである。

三、金利問題

爲替相場の騰貴は徒に世人をして經濟社會の將來に樂觀を懷かしめる所以と爲つて居る。然しながら此騰貴を齎した原因に就ては、議す可きものがあり、隨つて是れのみを以つてして、直に經濟社會の前途に光明を認めしめるか如き早計の甚だしきものであつて、經濟社會の狀勢が健實なる步調を以つて、恢復するには、其前提として、金利步合が或る期間を通じて、低廉と爲り、斯くて金融の緩和することを必要とする。然るに我國の現狀に於ては、金利は單に國內の關係のみに就て見ても、外國との關係に徵して、著しく不廉であつて、到底事業の振興を促して、以つて好景氣を誘致する狀勢と爲つて居らない。其原因に就ては、種々の方面から、之を求めるを得るが、就中其重要なるものとしては、

第一、經濟社會が放資者の安心を收めるまでに、安定して居らないこと、

第二、銀行に震災以來——更に遠く遡れば、往年の投機熱時代に生じた多額の固定貸があり、其回收未能の爲めに、融通能力を制限されて居ること、

第三、日本銀行が市場の金利を低廉ならしめる刺戟と爲るまでに、金利引下を行はざること、

第四、有價證券市場が一般に不振であつて、諸證券の利廻り高く、諸銀行亦之に制されて、預金利子を引下げるに至らざること

の諸點が擧げられるのである。

故に我國の金利步合が將來如何なる狀勢を辿るかと云ふ問題に對しては、私は何としても貿易の差額が、我國に順と爲るか、其差額が逆であつても、之を償うて餘りある貿易外の收入を生ずることを以て、根本的解決の要點とする。此勢にして定まつたならば、金利步合の如きは、坦々たる道路を行くの趣きを以つて、低落するであらうが然らざる限り金利の低落、金融の緩漫は容易に望まれないのである。

茲に於てか一部の人士は望みを日本銀行金利引下に囑し、日本銀行さへ金利を引下げたならば、自ら金融市場の大勢を左右するに至るであらうと云ふ考を懷くが如くである。日本銀行が金利步合を上下するに就ては、或る程度まで、金融市場の大勢を利導する態度を持することもある。即ち市場の金融の緩和せざるに先だつて、日本銀行自ら率先金利步合を引下げて、以つ

て市場の金融をして之に就かしめるが如き、此場合に當るものであつて、中央銀行として此種の政策を講ずることも、中央銀行の取る可き措置の一つを以つて、許される。最近紐育の聯邦準備金銀行が金利引下を行つた如き、道理から云へば、行ふ可からざる時に行つたものであつて、政略的分子の含まれて居ることを否定するを得ない。蓋し近時合衆國には相當の輸入超過あつて、內國の金融や、一般市場の狀況に壓迫を加へる趣きあり、之に對して聊か人氣を轉換せしめるには、金融の局面を變更することに就て、刺戟を與へる必要があつたからであり、更に昨年四月十五日我國に於て、日本銀行が突然金利の引下げを行つたことの如きも、之を引下げるだけの事情が成熟した結果ではなく、當時高田商會の破綻に關聯して、人心の頗る險惡と爲つて居つた際、如何なる間違の他の方面に生ずるやも測り知るを得ざるを以つて、一時の緩和策として、行はれたものと解されたのである。左ればこそ一年を經過する今日に至つて、猶第二回の利下げの行はれざる所以である。

是等の點から見れば、日本銀行が市場の大勢を利導する考へを以つて、或は市場の人心に一時の小康を與へる目的を以つて、利下げを行ふこともあり得る次第である。然し是等二個の場合は其性質に於て、全然異なる所がある。第一の場合に於ては、日本銀行が金利歩合を引下げた[illegible]をも引下げしめることを必要とする。日本銀行の金利政策に依つて、果して斯る勢力の發揮されるを得るや否やは固より程度の問題に屬し、如何なる場合に於ても、其然るを得ざるは勿論、市場の大勢に逆行して、目的を達せんとするが如きは、全て及ぶ可からざる所であり、第二の問題に就ては、私は今日の經濟社會を以つて、斯くまでに切迫したものとは考へて居らないのである。

四、經濟社會整理の進行

以上私は爲替、金融、金利に關して、現時我國の實際に現はれつゝある事情を述べたが、是等を綜合するに、我國の現狀に對して、樂觀論を試みることの無謀なるは、論を俟たざる所であるが、左ればと云つて、一年前若しくは二年前に於ける狀況と比較して、之を考ふるに、經濟社會が一時陷つて居つた著しき窮迫の狀態を脫して、次第に緩和の趣きを示しつゝある一事は何としても之を爭ふを得ない。唯其緩和の狀態から振興の時代に移らないのは、諸外國殊に我國の輸出貿易に重大なる關係を有する米、支、印三國の市場が經濟的に活躍せざることを以つて、大なる原因とする。殊に目今我國に於て生絲や、綿絲の

價格が低廉であつて、當業者を苦しめつゝあるが如き、要するに上記の事情に依るものであつて、若しも米國の經濟社會が例年の如き輸出超過に刺戟され、印度が銀價の騰貴に依つて、國内に於ける消費力に增進を來し、支那が内亂の禍を免かれ、關稅會議の順調なる進行に依つて、外國借欵の成立を見るを得たならば、米支印三國の經濟的好轉を通じて、我國の經濟社會亦眞實の景氣恢復に接するを得たことを疑はない。將來に於て是等三國の經濟事情が如何に動くかは、豫想に困難なる問題であるが、今日までの所では、盡く我國の期待する所に反するものである。昨今我國が漸く景氣恢復の曙光を仰ぐに至つたとか、又は景氣恢復の遠からず到來するとか稱されながら、未だ其現實を味ふを得ないのは、一に斯る經濟的關係の密接なる諸外國事情の然らしめるものと云へる。

斯く諸外國の事情の盡く我國に取つて、不利であるに拘はらず、經濟社會に安定の徵を示し、少なくとも一兩年前に比較して、面目を更めるを得たのは、何故であるかと云へば、官私兩方面に於ける消極政策の下に、各方面に亙つて、整理緊縮が敢行され、官私亦節約され、斯くて物價の一般的低落を來し、國民に對する負擔の直接に間接に輕減されたことが擧げられる。固より緊縮政策の實行や、整理事業の實現が經濟社會に對する不景氣の勢を添へ、又其上塗りを爲すの嫌あるは勿論であるが、此事たる、景氣の恢復を期するには、是非とも通過せざる可からざる關門であつて、之を踰越せずして、濫に積極政策の下に、好景氣の到來を謀るが如き所業に出でたならば、恰も土工を爲さずして、家屋の建築を爲すの危險なると撰ぶ所を知らないのである。

我國に於て、資本の供給が足らず、爲めに金利歩合不廉であつて、景氣恢復に對する刺戟を生ずるに至らないことは、吾人の遺憾とする所である。而して斯く金利歩合の不廉なる一原因の銀行機能の不振に存することは、曩に私の擧げた所であるが、斯る特殊の原因でなく、更に事の一般に亙るものとしては、我國中流以上に屬する階級の生活に於て、奢侈の風頗る强く、無節制なる消費行はれて、資本の蓄積を妨げつゝある一事が擧げられなければならない。此事たる、多年間に亙つて、國民の間に存する生活上の惡風の然らしめる所であるが、同時に政府の積極政策に於ける經費の濫妄なる支出や、好景氣時代に於ける成金輩の續出が之を助長したことは、爭ふ可からざる事實である。最近數年間に亙る不景氣と消極政策とは相俟つて、國民に對する覺醒を促し、或る程度まで多年の陋習を打破し、惡風を抑制する効果を奏するに至つた如くに思はれる。物價の

一般に下落しつゝあるが如き、一面から考へれば、國民消費の抑制に基く需要の減退に歸す可きものゝあるは勿論であつて、斯くて國民の間に蓄積される資金漸く豊富と爲り、資本の供給增加して、金利步合を低廉ならしめてこそ、始めて景氣恢復の勢に確實性を與へるものと云へる。隨つて早く景氣の恢復を迎へるを得るや否やに就ては、國民の反省、自制、努力に待つ所の大なるは、吾人の疑を容れざる所である。

ナポレオン戰後に於ける英國の經濟社會の窮迫したことは、世人の認める所であると共に、戰後數年ならずして、恢復するを得たことも、亦世人の意外とする所であつた。而して其一原因の產業革命の效果の完成に存するは、明白の事實であるが、更に此事よりも重大なるは、國民が一般に時艱の何ものたるやを解し、堅忍不拔の精神を以つて、之に堪へたことを擧げなければならない。否遠く英國に事例を求めるを要しない。之を獨逸に就て見ても、本誌三月號に於て、私の論述した如く、獨逸戰後の狀態に窘しき改新の跡の示されて居るのも、亦國民的精神の振興、之を然らしめたとするの外はない、私は是等の點を擧げて我國民の發奮を望むのである。

五、整理時代の金融

經濟社會の整理時[...]

己むを得ざる所であつて、斯くてこそ、經濟社會の整理に[...]するものと云へる。然しながら今日金融の梗塞しつゝある一原因は銀行が其れぞれ資金の一部を或る方面に固定せしめて、融通能力に缺陷を來しつゝある事實に存するのであつて、銀行は自ら好んで融通を制限するに非ず、制限せざる可からざる境遇に居るものと解される。然らば目前の金融狀態を改善するには、直接當面の關係を持たないが、將來の問題として、吾人の考ふべき所は何故に我國の銀行業には固定貸付多くして、融通資力の束縛されることの大なるかの一事である。此點に就ては、私は我國の銀行業に大なる缺陷の存することを認める。缺陷の重なるものとして、

第一、預金銀行と投機銀行との差別嚴重ならざること、

第二、機關銀行の弊著しきこと、

第三、銀行の重役が事業會社の重役を兼任すること

の三點が擧げられる。預金銀行でありながら、預金銀行として格守す可き職責に就て、必ずしも嚴肅なる態度を持する能はず動もすれば一時の利益に、眩惑して、投機的企業方面に資金を融通し企業の狀況の面白からざると共に、其方面に注入した資金の回收に困難を感じ、營業上に大なる損害を與へるのが

國銀行業界の病弊であり、更に機關銀行の如きに至つては、當初から、資本家たり、事業家たる者が自己の經營する事業の爲めに、資金を融通せしめる目的を以つて、設立されたものであることの關係から、或る方面の事業に多分の資金を注入し、之を固定めしめるの勢を免かれない。而して更に此勢を甚だしからしめるものは、一銀行の重役が同時に或る工業會社の重役を兼任し、前者に於ける地位權勢を濫用し、前者をして後者の爲めに、過大なる資金を融通せしめる一事である。啻に金額に於て、過大であるのみならず、條件亦寛大に流れ、二者相率いて銀行を窮地に陷らしめることは、我國銀行業界の病弊であると認めなければならない。故に經濟社會の整理時代に際會して、金融の緊縮し、金利の高歩と爲るのは、已むを得ざる所であるとしても、銀行業者の經營上に於ける失敗が原因と爲つて、斯る結果を齎し、爲めに當然經濟社會の機運の恢復す可き勢を妨げるが如き、吾人の忍ぶ能はざる所であつて、昨今世間に金融制度改善論の起りつゝあるが如き、當然の歸結であると思はれる。

然らば何を以つて我國に於ける金融制度改善の目標とす可きであるか。銀行の規模を大にして支店制度の實現を期することの如き、預金銀行と投機銀行との間に儼然たる區別を設け、後者の資金は銀行の資本金積立金に依らしめることの如き、銀行の資金融通の少數者に偏倚するを制限することの如き、銀行重役の他事業に關する兼任を禁ずることの如き何れも其の要目とする所であつて、斯る趣意を體した改正が一擧に行はれたならば、以つて我國銀行業の改善に資するを得るであらう。

私は曩に我國に於て金利歩合の高貴なる理由を擧げたが玆に銀行業との關係から、更に一の理由を追加する。即ち我國の銀行は概して小規模であり、支店制度に依るよりは、寧ろ獨立銀行制度の下に、營業に從つて居る。隨つて事業家や商業家にして相當金額の纏まつた資金を需要する者は勢大銀行に就て、其の融通を仰がなければならず、其の大銀行は數に限りある結果、大なる資金の供給は事實其れ等大銀行の獨占に歸し、彼等をして其の欲する儘に、高利を徴することを可能ならしめる。銀行業の競爭は中流以下の小銀行間に於てこそ、隨分に劇烈に行はれるが、大銀行の間に於て、格別然るものなく、斯くて後者をして容易と高利を貪らしめることが我國に於て、一般の金利の上進する有力なる原因であると認められる。競爭なくして、高利の貪り得られる大銀行こそ、誠に我國に於て、好都合の營業であつて、彼等の利益配當が一割二分とか、一割五分とか、云ふが如き程度に居り、株式市價が額面の二倍内外に居るが如き獨占業に近き状態に於て始めて見るを得る所であると解

される。茲に於てか金融機關改善の一要件として、必要と爲るのは、如何にして早く大銀行支店制度を我國に作り上げるを得るやと云ふ一事である。此點に就ては、從來政府に於て行政上の權力に依つて、或る程度の其の干渉を施して居るに相違ない、其干渉の一端は銀行設立の當時に現はれるのであつて、一方に小資本の銀行の都鄙に濫設されることを防ぐ爲めに大正七年以前に於ては、人口十萬人以上の大都會に於ては、資本金百萬圓以上人口十萬人以下の小都會に於ては、資本金五十萬圓以上を以つてしなければ、銀行の設立を許可せざる方針であつたが、大正七年五月以後前者を二百萬圓以上とし、以つて小銀行の簇生する勢を防遏しようとして居り、更に大正十三年に至り、政府は支店の設置を以つて、或る規模以上の銀行の行ふ特權として、銀行の規模を擴張せしめる見地から、(一)資本金五十萬圓未滿の銀行に對しては、何れの地に於ても、新に支店の設置を認めざること、(二)資本金五十萬圓以上二百萬圓未滿のものに對しては、人口十萬以上の地又は經濟關係の稀薄なる地若しくは直接取引の稀小なる地に新に支店設置を認めざること、(三)資本金二百萬圓以上の支店設置に就ても、濫設の弊に陥らざるやう、一層嚴密に取扱ふことの方針を決定し、以つて銀行の支店設置に臨むことゝなつた。故に政府としては銀行の合同若しくは大銀行の設立に對して、多少の好[illegible]しとしないが、其效果の著しきを得ないのは、要するに政府の方針の緩怠なるの致す所であつて、我國銀行制度の面目を一新しやうとするからには、政府は宜しく銀行の資本金の最低限度を法律に於て決定し、或る時期を定めて、其時の到來するまで、增資又は合併に依つて、必ず右所定額までに、銀行の資本金を達せしめることを以て、捷徑とする。之を行はずして、當業者の自發若しくは預金者其他取引先の銀行に加へる刺戟に依つて、目的を達しやうとした所で、幾年の後に効果の擧げられるものがあるか、私の斷定するに難しとする所である。

六、消極政策續否の問題

加藤内閣の當初から若槻内閣の今日に至るまで、政府の傳へて、以つて實行する財政方針は所謂消極政策である。固より此政策の實行された程度を考へると、歐洲戰後英米兩國に於て行はれた同種政策ほど徹底したものでなく、消極政策の下に、經費に必ずしも大なる削減が行はれず、却つて大正十五年度豫算に於ては、前年度に比較して、經費に若干の增加さへ見るに至り。一部の世人をして奇妙なる消極政策もあるものかなと云ふ皮肉なる批評を下さしめて居る。此の批評に對して、一應の道

理のあることは、吾人の認める所であるが、我國に於て消極政策の効果の著しきを得ないのは、當局者に之を敢行する誠意と熱心との缺けて居る其上に、始め加藤内閣は消極政策と積極政策と双方の信奉者を網羅して居つて、前者のみに偏するを得ざる事情のあつたことゝ、後日内閣の改造されて、憲政會單獨の勢力に支配されるに至つた時代には、其議會に擁する勢力、餘りに微弱であつて、思ひ切つた消極政策を實行する實力に缺けて居り、加ふるに此政策の徹底に依つて、不景氣の勢を加重し、政府に對する一般國民の感情を惡化せしめるを恐れた趣きのあることが認められた。然も之を積極政策の横行の時代と比較して、如何であらうか。兎に角不完全ながら、消極政策の實行されたことは、第一經費の異常なる膨脹を抑制し、從來財政上の方面から來る物價騰貴に對する刺戟を除去し、第二民間に財政上の冗費の撒布される勢を制して、民間に行はれつゝあつた浮華輕佻の風を遮斷し、第三公債公募の廢止に依つて、金融に對する財政の壓迫を緩和し、第四國内物價の低落に依つて、貿易の改善に資するを得たと云ふが如き諸種の利益を齎したのであつて、消極政策其ものゝ効果に就ては、之を爭ふを得ない、單に其實行された程度の强弱を以つて、問題とするのである。

然しながら消極政策の適用にも、或る限度がありはしないであらうか。政府が消極政策を行ふことは、一方に民間の經濟社會をして積極政策に出でしめる餘裕を作り、民間に行はれる積極的施設に依つて、政府の消極政策を補ひ得る道理である。財政は消極、經濟は積極と云ふことは、慥に一の原則として、認められる。然しながら是れでは餘りに一國の財政策を自由放任主義全盛の往時に復歸せしめたものゝ如くであつて、到底現代人の諒解を得るに難き所があり、又國民の廣き階級に亘つて、輿望を收めんとする政黨内閣としては、到底消極政策の一天張りを以つて、數年を經過し得る譯に行かない。啻に然るのみならず明年度の豫算には、前年來の懸案たる海軍補助艦建造費の如き純然たる不生産的經費が承認せられざる可からざる行掛りに居り、一方に幾多の生産的經費も亦相當の程度に於て、現出し來る事情の存する以上は、消極政策の表看板は自ら廢棄され、消極政策を轉換して、積極政策に邁進するか、其れとも消極政策に加味するに、積極政策を以つてするか、孰れかの一に豹變することが豫想されないでもない。歳計に目覺ましき經費の節約が加へられた次第でなく、單に經費の膨脹せんとする勢に或る制限の置かれたに止まり、税制は整理されたと云ひながら、或る一税を減じて、他の一税を増した如きものであつて、國民の負擔に對する實質的輕減の求められ可きものなく、而し

て今日に至つて、早く積極政策復興の聲に接するのは、私の甚だ遺憾とする所であつて、斯の如きは要するに國民に消極政策に堪へる氣力の存せざると、政府に之を遂行する勇氣を缺けるとの結果に歸せざるを得ない。

假に積極政策が行はれるものとして、如何なる方面に其實現を見るであらうか。公債政策に依つて、鐵道港灣治水の諸事業を盛にするが如き、積極政策の一たるを失はないが、斯くては憲政會内閣が一兩年に亘つて、實行し來つた所を根本的に顚倒し去るものであつて、理に於て爲し得る所ではない。斯く露骨の程度に至らずして、積極政策の片鱗を現はし、以つて經濟社會を有利なる狀況に導く方法はなからうか、憲政會内閣として取る可き所謂積極政策は斯る方面に向うものではならうかと云ふことが想像される。而して此の方面に於ける政策として、差當り私の念頭に上る所は過般來政府の着手しつゝある金融制度改善の問題であつて、如何なる解決を見るかは、豫め之を想像するを得ないが、日本銀行の增資とか、同銀行の保證準備制限擴張とか云ふが如き問題にして、適當なる解決を得たならば、必ず株式市場や、金融市場を通じて、經濟社會の狀勢を有利に導くを得るを誤らない。固より是等の問題に對しては、世間に贊否の說の存することは勿論であるが、絕對に、又如何なる場合に於ても、不可なりとする議論は立たないのであつて、時と場合と、程度とに依つては、贊成論の行はれる餘地もあり、すれば、此餘地に乘じて、政府の實行する所と爲り、經濟社會の局面を一新する用に充てられはしないであらうかと考へられる。事の可否に就ては、其具體的案件と爲れる時に論ずることとし、玆には唯斯る政策の行はれ得ることを揭げるに止める。

七、我國經濟の根本問題

斯の如く經濟上の時事問題を論じ、或は當面の事情を樂觀し、或は之を悲觀する間に於て、私が最も痛切に感ずることは、我國經濟の存立に關して、大なる弱點の存する一事である。我國が瑞穗國と稱されたのは、四十年五十年前の昔であつて、今日に於ては、農業國を以つて、許される資格は我國何れの方面に就て、之を尋ねても、見出すに苦しむものがある。我國は何時の間にか、農業國の狀態から脫して、製造工業國と爲つた、否爲りつゝあるは明白の事實であるが、然らば將來製造工業國として、發展するに就て、幾何の條件を備へて居るであらうか。製造工業國として起つに必要なる條件の一は原料品供給の豐富なることであるは、何人も疑を挾まない、而して其原料品たる必ずしも國內に自給されることを要しない、唯必要とする所は內外何

れかの場所から、自由に又確實に供給されるの一事である。第二の條件は此原料品を利用して、國內に於て、優秀なる技術を以つて、製造品を製出し、然も需要の恒久的であり、又廣汎的である製造品を世界到る所の市場に輸出することであり、更に第三の條件として、必要なるは資本の供給豐富なるの一事であつて、今日の如く工業の規模大と爲り、機械其他の設備に就て、巨額の資本の固定するの已むを得ざる以上は、資本の容易に獲得されることが製造工業の發展に就て、必要と爲るのである。

上記の諸要件に就て、今日我國の狀況は如何であるか。我國の製造工業は近年著しく發達したと稱される。然も其必要とする原料品は棉花にせよ、羊毛にせよ、生皮にせよ、生護謨にせよ、鐵鑛にせよ、盡く外國に其供給を仰ぐのであつて、其外國の內には、戰國と利害の關係に於て、衝突を惹起し易きものこそあれ、我國の權力範圍を以つて、目される所から、輸入されるものは極めて少ない。而して斯る輸入の決濟に供される輸出品の主要なるものは、生絲、絹織物、綿絲、綿織物の四者であつて、其販路も亦合衆國、印度、支那の三國に止まり、敢て他に及ぶを得ない。故に若しも今日我國に原料品を供給する或る地方の經濟的環境一變し、自ら產出した原料品を自ら使用する狀態と爲るか、或は從來我國の製造品を需要する地方が自ら製造業を國內に起すか孰れかの狀態と爲つたならば、其我國の經濟的立國に對して、大なる脅威と爲ることは、論を俟たない。而して斯る狀況を一變するには、國內に於ける製造、工業の種類を饒多にし、殊に鐵、鋼鐵を製造し、進んで之を資料とする工藝品の製造に從はざる可からざる道理であるが、一方に技術の不鍛錬あり、他の一方に資本供給の不足あつて、容易に此目的を達する能はざらしめる。啻に然るのみならず、國內に於ける資本の供給常に不足勝ちであつたならば、其一部を外國に投下し、利子收益を對外債權に屬する收入として、國內に回收することも亦不可能と爲り、有利なる國際貸借の維持に依つて、我國經濟の存立を安易ならしめることも亦望まれ難き所と爲るのである。

經濟社會の景氣不景氣は常に循環し、好景氣の永續する能はざるが如く、不景氣も亦停滯するものでない。現に多年我國を襲うて已まなかつた不景氣が近頃に至つて、轉換期に近づき來つた兆候のあるが如き、此原則に對する一證左とす可きものであるが、我國の經濟に如上の缺陷あつて、基礎の薄弱なるを免かれないとしたならば、景氣不景氣の狀勢の推移しつゝある間、外國の壓迫を蒙つて、好景氣の時期は常に短かくして、不

景氣の時期は往々にして永く、國民をして疲弊困憊の甚だしきに至らしめはしないであらうか、是れ最も吾人の疑惧する所である。

人口問題の如きも、最近に至つて、遲蒔ながら、世人の注意を喚起し、政黨の如き其解決法を政綱の一に掲げるに至つたが、人口問題の解決たる、要するに。

第一、增加する人口を國内に留めて、以つて富裕なる生活を送らしめるに足るだけの經濟的發展を謀るか、

第二、國内の經濟力に比較して、過剩なる一部の人口を外國に移すの道を講ずるか、

第三、國内に於て人口を增加する勢に對して、或る制限を施すか、

三者の一に歸するのである。第二の海外移住策は言ふ可くして、行はれ難き所であり、第三策亦國を擧げて、退嬰消極に陷らしめる危險の伴うことを免かれないとすれば、勢第一策に依つて、我國をして富裕ならしめるの外に、策の出づる所を求めるを得ない。此點を閑却して、人口問題の解決を云々した所で、一場の空論に墮することは、吾人の想像に苦しまさる所である。

英國總罷業と世界勞働運動の動向

英國總同盟罷業の經濟的意味

高橋龜吉

一

炭坑爭議を中心にして、いま英國は、史上未曾有の一大産業戰たる總同盟罷業の渦中に在る。この出來事は、これまで、炭鑛主と坑夫との一産業上の爭議が、いまや明かに、英國勞働階級全體と、政府との階級的對戰となつたことを語るものであること云ふ迄もない。然らば、いま何故に、一産業上の爭議が勞働階級全體と政府との産業戰となつたかと云ふに、そのわけは、要するに、英國經濟の現狀が、その經濟の一大立て直しを敢行しない限り、二進も三進も出來ない事情にあるに對し、資本家側はその立て直しに必要な負擔を可及的多く勞働階級に轉嫁せんとするに對し、勞働階級は之を出來るだけ多く資本家階級の責任に歸せしめんとし、この兩者の爭闘の選手として選ばれたのが、その産業の一大整理を最も必要とし、且つ英國産業の根幹をなして、勞資共に、團結の最も鞏固な炭坑業であつたと云ふ事情に在る。繰返して云へば、この爭議に於て、炭鑛主が敗北せば、そは英國全體の資本家の敗北を意味し、同國經濟の大立て直しの負擔は多く資本家の負擔となることになる。之

に反し、若し炭坑夫側の屈辱とならんか、英國の勞働賃銀は全般に亘つて、決河の如き引下運動の壓迫に會することになる。即ち、一産業上の爭議が全産業上の對戰となり、勞資の關ヶ原戰となつた所以である。がその委はしい經濟事情を語るには、先づ、炭坑爭議が決裂するに至つた由來と爭點とを明かにし、之を糸口にして、英國全體の經濟事情を鳥瞰することが此際この總同盟罷業の經濟的意味を理解に最も便宜であると思ふ。

二

そも／＼今度の炭坑爭議は、一九二四年の改訂契約が、昨年七月滿期の際に於て、鑛主側は炭抗業不引合の理由により賃銀引下と勞働時間の延長とを主張せしに對し、坑夫側は之に反對したることに第一歩を發する。顧るに、一九二一年春三ヶ月に亘る炭坑夫罷業の後ち協定せられた勞働條件は、一九二四年勞働内閣の下に、重なる點に於て、左の如く改訂せられた。

	一九二一年協定	一九二四年協定
(1)標準利潤の標準賃銀に對する比率	一割七分	一割五分
(2)剩餘金中賃銀に配當すべき率	八割三分	八割八分
(3)「標準賃銀」の一九一四年に對する割増最低率	二割	一割三分の一

即ち、一九二四年の協定は一九二一年のそれより、(3)の最低賃銀に於ても、(2)の利益配當率に於ても、(1)の資本家の標準利益率に於ても勞働側に少からず有利になつたわけだ。斯く、炭鑛主側が讓歩し得たるわけは、一九二三年初以來佛軍のルール占領によつて、英國炭坑は一時少からぬ好況に惠まれたからであつた。然るに、この一九二四年の協定後、ルールの占領は解放せられる。英國の爲替は騰貴して物價は下る、世界の不況は愈々深刻化すと云ふわけで炭坑業は不況のドン底に落ち、これ迄坑夫側に入つた利益分配は殆んど全滅して、坑夫の收入は殆んど皆最低賃銀にまで陷落した。(しかもこの最低賃銀は戰前の生活程度をも賄ふに不足である)しかし他方炭鑛主側も多くは損失を續けてゐると云ふわけで、漸く借金によつて坑夫に最低賃銀を支拂ふと云ふ有樣である。

斯かる裡に、一九二四年協定の滿期日なる昨年七月が來た。そこで、炭坑主側は從來の協定を廢棄して、新協定をなすべきことを聲明して、その新協定案を發表した。その主なる要求の意味は次の如き點である。

一、各地方の炭坑賣上高の中、その一割三分を標準利潤とし、その殘りの中、賃銀として[illegible]各地方の[illegible]

だけは支拂つたが、この原則を廢棄して、損をしない程度に賃銀を支拂ふと云ふのである。）

この結果、勞働賃銀は幾何の減少をなすかと云ふに、いま勞働側から當時發表せられたものによると、左の如くなると云ふ。

一九二五年七月坑主側提案に由る賃銀引下算定

地方別	現在各種炭坑勞働者平均賃銀	現在下級炭坑勞働者平均賃銀	坑主側提案を適用する結果を生ずる減賃
スコツトランド	志片 一〇・二	志片 七・一〇半	志片 二・一・二
ノーザンバランド	九・二	七・七半	二・二・七
ダーハム	九・一〇	七・六半	二・〇・五六
東部	一〇・九	六—八志	〇・七・九八
北ウエールス	九・五半	六・五	一・一一・二七
南ウエールス	一〇・六半	八〇	一・一〇・六五
ランカシア及チエレア	九・八	——	〇・一〇・二三
フオレスト・オブデイーン	九・三半	六・一半	一・八・六八
ケント	一二・一一½	——	一・二・八八

（備考）本表は、社會政策時報第六十一號に由る。

之に對し、坑夫側は左の如き理由により、之に反對し、他の組合と協同して總同盟罷業決行の準備を着々として進めた。

一、從來最低賃銀の保障はあつたが、それさへ今日の生計費に比較すべきもなく低率であるが、その最低賃銀の保障すら廢止せんとすること。

二、賃銀が如何に低下するかに拘らず、坑主側の手に入る利益には一定の保障あること。

三、坑主側の提案を實施せば、基本賃銀に於て一三%一四乃至四七%九の値下に等しい結果となり、これは或地方に於ては一日二志乃至四志に相當する減賃を意味する。

四、炭坑經營上有利なる、コークス製造、副產地其他の生產部門と採炭とを依然として分離獨立せしめてゐること。

斯樣にして、昨年七月正に英國は總同盟罷業の勃發に會せんとしたのであつたが、政府は、その結果の重大なるに鑑み、國庫補助約二億圓を支出せしめて、現狀を維持せしめ、其間、石炭業調査委員會を任命して、炭坑業の平和的解決案を考案せしめ、特に之に基いて、新協定をなさしむることにした。その期限は即ち去る四月末であつた。

三

この石炭業調査委員會に對し、坑夫側からは一の具體的な炭坑國有案を提出し、炭鑛主側からは、（一）現在の七時間勞働制を一九一九年以前の八時間制に復すこと。（二）賃銀を引下げる

こと。(三)同時に運送費並に鐵道從業員の俸給を減ずること、(四)各炭坑はそれぐ\甚だしく事情を異にするから、現在の全國的協約に代へるに地方的協約を以てすること、(五)鑛山採掘權を維持すること等を主張した。他の言葉で云へば、坑夫側は炭坑國有によつて今日の炭坑業の行詰は打開され、戰前の最低生活よりも低下せる今日の坑夫の勞働條件をこの上低下する必要はなくなると云ふに在り、炭坑主側は勞働條件を低下する外に、今日の炭坑業の行詰を轉換し得る方法はないと云ふのである。であるから、兩者何れも、今日の炭坑業がこのまゝではやつて行けないことを認めてゐて、その解決策に見解を異にしてゐるわけである。事實、調査會の報告によれば、昨年十、十一、十二月の三ヶ月間の成績によると、若し政府の國庫補助が無かつたならば、英國現在の炭山にして損失に陷るものがその七割三分に達すると云ふ有樣である。それと共に又、坑夫側の現在賃銀が、戰前並みの最低生活程度をも維持し得ない程、已に低下してゐると云ふことも亦事實なのである。即ち、英國の石炭業は、いまや、それに從事するものに對して、社會的に必要な最低賃銀を支拂ふ能力すら、多くは失ふに至つたのである。

深刻な事情に於て、石炭委員會が如何なる解決策を編みだすかと云ふことは、世界の興味の中心であつたが、しかし三月中旬發表せられたその提案は、結局、勞資双方に不滿足な妥協案であつた。即ち、(一)國庫補助を續けることを先づ不可とし、(二)炭坑國有に反對し、その代りに、(三)鑛山採掘權のみを國有化することを主張し、依然經營は私有を可とした。(四)しかし、今日の炭坑經營には多くの濫費あることを認め、これの改善によつて生產費を低下し、以て、今日の炭坑業行詰を打破し得ると云ふ見解の下に、各種の技術上及組織上の改革を要求し、(五)他方勞働條件については時間の延長には反對したが賃金の低減と、全國的賃率協定を地方的にすることとは之を余儀ないものと認めた。いま、委員會が指摘した生產費低下の法としての組織及技術上の改善の重なるものを示せば、

(1)現在の炭坑の合同によつて經營能率を向上すること、

(2)炭坑業と之に關聯する諸產業、例へば熱、動力及び光の諸產業其他とを結合さすことによつて、經營能率を十分にすること。

(3)石炭の採掘、及び石炭利用の兩方面に對し新方法を發見するため調査研究の機關を設け、之に國庫は財政的援助を與ふべきこと。例へば低温炭化の方法の完成するだけであつて

の特徴は之丈である。

（4）協同販賣機關の設立、運輸方法の統一、取引方法の改善等によつて多大の失費を節約し得ること。

等である。が、その何れも、結局、英國全體の炭坑業が、何等かの形に於て統一されるにあらざれば、從つて又、多かれ少かれ、炭坑國有の原則が適度に作用するに非ざれば、その實現は困難なものである。即ち、この委員會の提案が、炭坑主と坑夫側とを妥協に導く力なくして、遂に、五月四日午前零時を限つて、史上未曾有の一大總同盟罷業を余儀なくさすに至つた所以である。

ロ

以上によつて看取し得る如く、今度の炭坑爭議の根因は、要するに英國炭坑業が愈々經營困難に陷つて、その整理の斧鉞を、勞資何れに主として負擔せしむるかと云ふ點に於て爭つてゐることに在る。この點は過去の罷業原因と少からず意味を異にしてゐる。即ち、一九二〇年十月の炭坑罷業は、石炭の産出高と賃銀との關係を、所謂『出來高拂』にせんとするに對し、坑夫側が之に反對した所に根因があつた。坑夫側の云ふ所によれば石炭の産出の增減は資本家側の經營の仕方如何に主として關することで、坑夫の關知せない所だと云ふのがその理由だつた。更に、一九二一年の四月から六月迄約三ヶ月續いた石炭大罷業の根因は、政府が石炭管理を廢止したことに主として關聯して、賃銀の全國的協定制度と、全國利潤綜合制との採用をその中心點とした。若し、この原則が破れるならば、政府の石炭管理廢止後に於ては、貧坑地方の賃銀は「經營不可能」「營業損失」等の理由によつて、著しき賃銀引下げの打擊に接すべきことを豫見してゐたからである。即ち、前二回の石炭大罷業は、坑夫側から云へば歐洲戰時中獲得せる地位の向上を維持確保せんとする運動であつて、尙ほ餘裕綽々たるものがあつた。然るに、今度の罷業は、坑夫側がその最後の最低生活の保障を脅かされて、その生活維持のため、背水の陣を布いて立つたものである。

所で、注目すべきことは、上陳の如き英國炭坑業の行詰は、實は炭坑のみに限れることでなくて多少の程度の差はあるが、英國全體の産業に對する位地であると云ふことだ。なる程、その中でも炭坑業は、それ獨特の原因による衰微の事情多く、從つて、その行詰も甚しいと云ふことに間違はない。例へば、石炭の代りに重油、水力電氣等の利用が發達したと云ふが如きだ。さり乍ら、其他の石炭業不振の原因なる、

(1)世界就中歐洲經濟の弊體によつて世界の石炭消費量が減退

したと云ふこと、

(2)露國への輸出が殆んど杜絶したこと、

(3)大陸の石炭がより安い生産費で競爭すると云ふこと、

(4)石炭坑の老境に入り、ために生産費が多くかゝると云ふこと、

と、

等と云ふが如きことは、他の英國一般の産業にも共通のことであつて、現に、英國の重要産業、例へば鐵鋼業、造船業、紡績業等、何れも同じ原因から不振を續け、しかもこれ等は、後進國に於ける産業發達の競爭のため、多大の打撃を蒙りつゝある。即ち、英國の産業全體は、いまや或は自國産業の老境に入れる結果としての生産費割高のため、或は國際事情の變化のため、炭坑業と同じく（しかし程度の差はあるが）根本的に、その産業の整理をなすに非ざれば、資本主義的繁榮を所期し難い事情に當面してゐるのである。

加ふるに、斯様な難局を、最近更に激成するに至つたものは、英國の爲替回復に基く物價の暴落である。蓋し、爲替の回復は必然に、直ちに、國際的商品の物價を下落せしむるが、國内的商品物價の下落は、極めて徐々にしか來ないものであつて、就中、勞働者に關係ある生活必需品相場に於てさうである。例へば、左表の如く、一九二四年以來、英國爲替相場の著しく回復すると共に同國卸賣物價指數は二二〇・七から一八五・八と約三四點を下落せるにも拘らず、生活費指數は此間一八〇から一七三と僅かに七點を下げたに過ぎない。

英國の爲替と物價表

	爲替對米相場 最高	爲替對米相場 最低	爲替對米相場 高低平均	年末卸賣物價指數	年末生活費指數
一九二〇年	四・〇一七〇弗	三・一八〇〇弗	三・五九八五	二六九・三	二五五
一九二一年	四・二二九五	三・五四五〇	三・八八七二	一九八・〇	二二二
一九二二年	四・六七九九	四・一八六五	四・四三三二	一九三・八	一七八
一九二三年	四・七二一九	四・二八四六	四・五〇三二	二〇八・二	一七七
一九二四年	四・七三四四	四・二〇九四	四・四七一九	二二〇・七	一八〇
一九二五年	四・八六二六	四・七四九六	四・八〇六一	一九三・二	一七五
最近	約平均、即ち四・八六六〇			一八五・八	一七三

この結果、資本家は爲替回復による製品物價の下落に應ずるだけの賃銀の引下を必要とするのであるが、しかし、勞働者は生活費がそれだけ低下しないから、この賃銀引下を苦痛として、極力之に反對せざるを得ない。之れが、物價下落の場合に常に起る資本主義經濟の矛盾であり、混亂である。

五

斯様のけわで、英國經濟はいま、(一)、其經濟の根本的行詰を打開するためと(二)爲替回復に基く物價暴落に對應するためとの二方面からその經濟の立て直しを必要としてゐる。而して、資本家側は、この經濟の立て直しは、結局、勞働賃銀を引下げるか、勞働時間を延長するかの二つに一つしかない。さうしない限り、産業は損失を續けるだけで、この上經營を維持することは出來ないと主張し、その經營の困難なる實際を示すのである。然るに、資本家側のこの賃銀引下運動は、團結の薄弱な勞働者の方面には、已に少からず進行してゐるが、しかし、之を勞働階級全体として見れば、その賃銀引下の脅威を一番强く感じてゐて、しかも一番强大な且つ鞏固な組合を有する炭坑夫を陣頭に立てゝ、この資本家の攻撃を堰き止めてゐる形である。であるから、若しも、この先陣に於て勞働側が敗北せんか、形勢觀望中の他の産業に於ても、滔々として賃銀の引下運動に押し寄せられる外ない。これ、今度の炭坑罷業が、英國勞働運動の精神的團結乃至同情罷業以上、强力な利害關係に結びついて、史上未曾有の一大總同盟罷業が、一絲亂れず敢行せられた一大根因である。

而して、勞働側の主張は、現在の英國經濟の立て直しは、勞働階級の最低生活を脅かすことにその解決策を求むべきでなく、産業を國營とすることによつて現に資本主義經濟の下に行はれてゐる浪費を省くことによつて達成すべきである。と云ふに在る。所で、若しも、英國經濟の背骨をなす炭坑業に於て、其の産業の立て直しが國營によつて一度び、斷行せられんか、その他の英國主要産業の立て直しも亦、國營の原則を採用するに至るは明かである。無論、斯かる成行に對して資本家は極力反對である。之れ、英國の資本家階級が、炭坑主を援けて、史上未曾有の産業戰を敢て挑戰するに至れる根本事情である。

云ふ迄もなく、ことの玆に至る迄に於ては、勞働側は極力、議會政治の力によつて、之を解決せんとした。例へば、勞働內閣の下に於て、最低賃銀法案の通過を圖つて敗れたが如きである。斯くて、遂に、今度の實戰となり、産業戰爭によつて、雌雄を決せんとする所にまで押し詰まつたのであるが、無論、この一戰が何れの勝利に歸するとも、それで、この大難問題が一時に解決せられるものではなく、その愈々安定ある解決を得る迄には、幾多の迂餘曲折と、多大の犧牲とを必要とするであらう。

× × × ×

この英國産業界の苦悶は、幾萬哩彼方の出來事ではあるが、しかし、決して、他所事として對岸の火事視することの出來る

事ではない。云ふわけは、現在の我が日本の產業界も、丁度、英國のそれと同じ經濟の立て直しに當面してゐて、英國と同じ、苦悶を目の前に控へてゐるからである。即ち、我が產業は、（一）根本的にその產業の立て直しを必要としてゐる點も、（二）爲替回復に基く產業の一時的立て直しを必要としてゐる點も、英國と殆んど異らない。異るは、幾分その程度が弱いであらうと云ふことゝ、勞働側の團結が遙かに劣り、從つて、英國勞働階級程の戰鬪力がないであらうと云ふことだけである。さり乍ら、何れに致せ、多なり少なりの差はあるが、我が國も國のそれと同じ苦悶を嘗めねばならない事情にあるわけであが、この英國の總同盟罷業の敎へる所を、よく理解し得る能力があるか否かによつて、その苦悶の程度と期間とは、少からず異つて來るのである。私は、我が社會が、この意味に於て、この英國の總同盟罷業の成行、その結果、その功罪等を、最大の注意と興味とを以て研究せられんことを希望して止まないものである。（五月九日）

英國の總同盟罷業

山川　均

□

『闇の金曜日』と、それにつゞく三角同盟の崩解から五年を經て、當年の三角同盟の構成要素たる坑夫、鐵道從業員、運輸勞働者を中堅勢力とする總同盟罷業が始まつた。五年前に企てられて實現しなかつた『空想』も、五年後の今日は、具體的な眼前の實事となつて現はれた。たゞこの一事のうちにも、深刻な意義がある。

□

この罷業は英國の資本主義の歴史のうちに、未だかつて見ることのできなかつた階級戰の展開である。英國ではこれまで

も幾多の大罷業が起つたが、單にその規模においても、現在の罷業の如き重大な罷業の起つたことはない。四百萬の組織せられた勞働者が、中央機關の命令一下により、完全に全國的の規模において總同盟罷業を實現したことは、これを全世界の勞働運動の上から見ても、新しい記錄であるといはなければならぬ。

けれども現在の罷業は、その規模において重大であると同時に、その性質においてもそれ以上に重大である。英國における今日までの如何なる勞働の爭議といへども、勞資双方が、現在のそれのように明白な階級意識の上に立ち、充分な用意と覺悟と決心の臍を固めて着手した爭議はない。資本と勞働との今日の正面衝突は、少くとも九月以前から(實際にはそれ以前からも)豫期せられてゐた。資本家階級も勞働階級(少くともその前衛分子)も過去九ケ月間 避くべからざる現在の歸結を凝視しつゝ進んで來た。たゞこの衝突の時機を定める選擇の鍵は、資本家階級が握つてゐた。そこで勞働階級に取つては 現在の正面衝突は、何時かは、避くべからざる歸結であつたが資本家階級に取つては、正確に九ケ月後に到着すべき歸結であつた。從つて資本家階級の陣營では、過去九ケ月の間に、この戰ひにのぞむ一切の準備をとゝのへた。現に政府は、大急ぎで反動團體を全國的に組織し、共產黨の幹部を一網打盡にして一ケ年間投獄して、おくといふ程度にまで、用意周到な準備をもつて現在の戰ひにのぞんだものである。昨年の七月 當時英國を威嚇してゐた總同盟罷業を避けるために、政府が炭坑資本家の代りに一億圓といふ莫大な金を支出して、一時爭議を解決したのは、要するに一億圓の代價を拂つて 資本家階級のために九ケ月間の準備の時間を買つたのである。

なにゆへであらうか? いふまでもなく、英國資本主義の興廢がこの一戰にかゝつてゐるからである。この爭議が×××形勢にまで展開するかどうかは別問題としても、若しこれが坑夫側の勝利に終つたなら、それは獨り炭坑資本家の受ける打擊ではなくて、すべての資本家階級、英國の資本主義そのものが致命的の打擊を受けることを意味してゐる。即ち英國の資本主義は、勞働條件を引下げることによつて、云ひ換へれば勞働階級の全負擔によつて、その命脈を維持する望みがなくなるからである。

これに反して勞働階級の側から見れば、炭坑資本家が勝利を得る結果は少くとも今後相當に長い時期の間、資本の攻勢が維持せられるばかりでなく、さらに一層甚しくなり、勞働階級は全線に亘つてさらに總退却をよぎなくされ 有ゆる產業部門

を通じて勞働條件は極度にまで押し詰められる。資本家階級に取つては、坑夫の抵抗を打ち破ることが、英國の資本主義を救ふ唯一の活路を開くことを意味して居り、勞働階級に取つては、かうして英國の資本主義が活路を開くことは資本のために完全に征服されることを意味して居り、英國に最も露骨なブルジョア獨裁、ないしはファスチストの支配が確立され、資本主義的奴隷王國が確立されることを意味してゐる。

現在の爭議は、もと／＼炭坑夫の勞働條件についての、炭坑資本と炭坑勞働者との爭議であるが、その結果は英國の資本主義が活るか、英國の勞働階級が活きるかを決定するものであつて、全資本家階級の利害と全勞働階級の利害との、調和すべからざる對立抗爭を代表したものである。この中心問題をさしはさんで、全資本家階級と全勞働階級とが對時したのが、現在の總同盟罷業である。英國の勞働運動は、初めて眞實の意味での階級戰の舞台に上ぼつたものである。

□

現在の罷業の直接の爭點は、いふまでもなく坑夫の賃銀と時間の問題である。從つてこの範圍においては、如何にそれが全國的總同盟罷業の形態を取らうとも、どこまでも經濟上の爭議であり、從つてそれは資本主義の範圍内において勞働の生活標準を維持改善しようとする改良主義的、部分的の闘たる性質をもつものであつて、これ等の部分的な闘爭ないしは部分的の目的を綜合した無產階級の全般的階級的の目的のためにする闘爭、即ち政治上の闘爭ではないとも云ふことができる。

しかしながら勞働階級の經濟上の闘爭と、政治的闘爭とを、全然別々な二つのもの、二つの並行線であるかの如く考へるのは誤つてゐる。この二つのものは、吾々の概念と抽象との上でこそ行動の二つの線であるが、しかもこの二つの線は並行した線ではなくて、しば／＼交叉する線であり、たゞに交叉するばかりでなく、一方から他方に發展する。經濟闘爭と政治的闘爭とは孤立した別々のものではなく、掌の表と裏ほどに經濟上の闘爭そのものが、或る形勢の下においては、そのまゝ政治的闘爭に發展するのである。

そこで現在の總同盟罷業にしても、それが坑夫の賃銀と時間といふ、純然たる經濟上の性質から出發してゐるのを見て、それ故にこの線はどこまで追及しても、どこまでも經濟上の線であつて、決して政治的な線に變化する苦がないと考へるのは、皮相の考へである。否な現にこの總同盟罷業は、すでに今日で

段階においてさへも、もはや何等の政治的性質を有せぬものとは云ふことができぬ。この爭議が眞實の意味での階級戰たる性質を備へてゐるといふことが、即ちその程度において、眞實の意味での政治的性質を帶びてゐることを意味してゐるのである。

〔二〕

鐵道從業員のトマスは五日の下院における論戰において、『勞働者側は今回の爭を純然たる産業爭議たらしめんと努めてゐる』と云つてゐる。これは懸引の上の言葉であるか、それともトマスの眞意であるかは知らないが、少くとも英國における保守的指導者のうちには、現在の爭議に純然たる産業上の爭議以外の性質を認めず、またこれを純然たる産業上の爭議に始終せしめようと努めてゐる人々のあること、今後ます／＼それに努める人々の出てくることは爭はれぬ。この努力は、形勢の重大化に比例して、いよ／＼露骨になつてくるにちがひない。

これに反してボルドウイン首相は同日の下院において、『いづれの政府も如何なる狀態の下にも、同盟罷業の前に屈伏することは出來ぬ』と斷言したと報ぜられてゐる。現在の爭議が坑夫の勞働條件についての純然たる産業上の爭議である限りは、それは一私人としての炭坑資本家と勞働者との爭議でなければならぬ。英國政府は形式の上では、勞資兩階級のいづれにも組しない中立の立場に立つものゝ如くに裝うてはゐるが、下院における首相の『斷言』は、現在の同盟罷業をもつて、炭坑資本家に對する單なる經濟上産業上の鬪爭とは見ないで、明らかに國家權力（特に、資本家階級の手にある）に對する挑戰（即ち政治的鬪爭）として受取つてゐることを告白したものに外ならぬ。

炭坑資本家は、罷業に先きだつて、一般的なロツクアウトを宣言した。英國政府は固よりこの宣言を、國家權力に對する挑戰とは見なかつた。そしてボルドウイン首相は、『いづれの政府も如何なる狀態の下にも資本家の同盟締出しの前に屈伏することは出來ぬ』とは言はなかつた！　ところがこの政府は、資本家に對する總同盟罷業の宣言は、これを政府に對する挑戰として受取つたとすれば、英國政府の階級的性質については、一點の疑ひがないと云はなければならぬ。現に政府が取りつゝある罷業の對策とは、徹頭徹尾、この罷業を粉碎するための對策なのである。かように炭坑資本家と勞働者との間の『純然たる産業上の爭議』を、英國政府は現在の國家權力と勞働者との政治的の鬪爭と見なすとしたならば、そして英國政府は、當然、

國家權力によつてこの罷業を粉碎する役目に任ずるとしたならば、トマスとその他のすべての保守的指導者の熱望と努力があるにも拘らず、この瞬間から、現在の爭議は、もはや『純然たる産業上の爭議』の性質以外の何等かの性質を帶びるに至るたものである。

小ブルジョア的人道主義や感傷主義は、この事實を見ることが出來ぬ。けれども英國の資本家政府は明白にこの事實を見、英國の資本家階級は明白にこの事實を見、英國のファスチストは明白にこの事實を見て、一切の行動をおこしてゐる。そして我國にも、資本主義社會における斯ような階級關係の眞髓を、本能的に正しく嗅ぎ分けてゐる社會層のあることを忘れてはならぬ。私はある新聞の社說のうちに、次の如き一節を見た。

『……産業本位の現代の社會に於て、全國の產業戰は、之を一種の內亂と觀るに不都合がない……』

『……悲しい哉、英國政府は自由主義の上に立つて居る。自由主義にも、花一と時の盛りはあつた。この花固より仇花であり、この花既に萎れて居る。各々結束した暴力を最後に控へて睚み合ひを本職とするに至つては、何の自由主義ぞ、何の自由主義の有難味ぞ……。」

記者の結論は、そこで我國の勞働組合が英國の勞働組合運動に對して『金錢その他の具體的援助を與へることは、『英國內亂の一方に加擔する』許すべからざる行動であつて、政府は何故にこれを禁じないかといふのである。

私はこの結論が正しいか否かは別として、少くとも日本の支配階級の立場から考へて、この結論が賢明であるか否かをさへも疑うものである。けれどもこの一記者は、小ブルジョア的自由主義者よりも、英國に於ける現在の形勢の神髓をよりよく掴んでゐると斷言するに躊躇せぬ。吉野作造氏はこの罷業が如何に永びいても、『決して暴動化せぬことは請合ひだ』と云はれてゐる。けれども吉野氏は、遺憾ながらそれと同時に、英國政府がこの罷業を粉碎するために、決して暴力を用ひぬことを保證はされなかつた。英國政府が勞働階級を壓伏するために如何なる手段を用ひても、決して『暴動化』せぬといふ推定――ないしは希望――は、勞働階級は敵の如何なる手段の前にも平伏すべしといふ要求を意味してゐる。さもなくば、『自由主義の上に立つ』英國の政府は、總同盟罷業の粉碎と勞働階級の征伏のために、決して暴力を用ひぬといふ幻想を意味してゐる。現在の總同盟罷業が果して實際に『暴動化』するか否かは別問題であり、その上、重要な問題ではないが英國政府の本質を自由主義たと見る見解は、英國に於ける勞働組合に對する一反動主義者の

本能的な自覺に來ると云はなければならぬ。

□

歐洲大戰の末年から戰爭の直後にかけては勞働階級の×××××の全世界を通じて滿潮期であつて、それは一と波ごとに高まつた。然るに歐洲に於ける主要交戰國の勞働運動の指導者が、戰時中、『擧國一致』『××擁護』といふ美しい盃に盛られた階級協力の××に醉うた當然の歸結として、勞働階級はこの×××滿潮に棹さすことが出來なかつた。

其結果として、戰後の反動期が押し寄せた。如何なる代價を拂つても現在の危機から脫しようとする資本主義の狂亂的な努力は、全世界を通じて、勞働階級に對する猛烈な資本の攻勢となつて現はれた。勞働階級はすべての戰線に亘つて退却をよぎなくされ、既得の陣地の多くを失ひ、勞働條件は極度に低下し、退却することのできる殆んど極限まで押し詰められた觀があつた。そして當年の×××形勢は、百年前の夢の如くに消え去つた。

然るに一九二四年――二五年を境として、再び新しい形勢が動き初めて來た。協調主義者によつて指導せられてゐるアムステルダム派の國際勞働組合聯合が、漸次ヨーロッパに於て指導の實力を失つたこと、各國の組合運動の內部に於ける少數派が、次第に擡頭し來つたこと、アムステルダム國際勞働組合そのものゝ中樞においてさへも、少數派の勢力が日々に增大し來つたこと、國際勞働組合の戰線統一の主張が、漸次に一般大衆を動かしたことなどは、この新形勢の現はれであつて、なかんづく英露組合運動の間に聯合委員會の成立したこと、英國の組合運動內部における少數派運動が、非常な成功をもつて全國的に組織せられたこと、昨年の大會によつて、英國勞働黨が著しく右傾したにも拘らず、英國勞働組合大會が、英國の組合運動あつてこの方、未だ曾て見ない階級的政策を採用して新時期を劃したことは、この新しい傾向を示す著しい事實であつて、しかもこの新しい機運の先頭に立つてゐるものが、英國の組合運動であることも見逃がすことの出來ない事實である。

そこでかような國際勞働運動の形勢を背景として、現在の總同盟罷業を見ると、その意義は一層重大を加へてくる。即ち國際勞働階級の運動が、資本の攻勢をはね除けて、再び攻勢に轉じようとする新機運、○○○○○の干潮期から差し潮に轉じようとするこの新機運は、まづ代表的な資本主義國たる英國において、敵の主力と正面衝突をしたのである。この意味に於いては現在の總同盟の罷業の勝敗とその展開如何とは或程度まで

國際資本主義の運命を決定し、その範圍においては、世界の歷史を左右する世界史的の重大事變であると云つてよい。

□

これを勞働階級運動の內部の問題として見れば、現在の罷業の究極の勝敗はしばらく別として、少くとも四百萬の勞働者を包容する全國的規模に於ける總同盟罷業が、成功をもつて開始せられたことは、國內的にも國際的にも、左翼の政策が確實に勝利を占めたことを意味してゐる。

昨年のリバプールに於ける勞働黨の大會と、スカボローに於ける勞働組合大會とは、英國の勞働階級運動の二つの指導精神を代表したものであつた。總同盟罷業の成功ある開始は、スカボローの指導精神がリバプールの指導精神に打ち勝つたものであつて、現にマクドナルドの如き、鐵道從業員組合トマスその人の如き札付の協調主義者といへども、この罷業を支持せざるを得ない立場に立ち、現にこれを支持してゐることは、リバプールがスカボローに引きづられてゐる活きた證據に外ならぬ。

國內的に云はれることは、國際的にも云ふことが出來る。常に勞働黨及運動の國際的協同戰線にサボタージしてゐるアムステルダム[illegible]

るを得ないのは協同戰線と國際的統一の主張が、事實の上に彼等のサボタージに打ち勝つたことを意味してゐる。

□

現在の總同盟罷業は、坑夫の賃銀と時間とを、少くとも當面直接の問題として開始せられたものである。從つて資本家と政府が、適當の時期にこの要求に從ふとすれば、罷業は『純然たる產業上の爭議』の範圍內で解決することができるに相違ない。たゞこの場合には、解決せられたのは現在の總同盟罷業に點火した當面直接の問題であつて、その背後に、ないしはその根底に橫はつてゐる眞實の炭坑問題に至つては、たゞその解決が延期せられただけである。英國の勞働階級は、この勝利によつて獲得した新しい陣地により、更に××××××××することになる。要するに、その結果は或る××××××に外ならぬ。

それと同時に、現在の罷業が『純然たる產業爭議』の範圍から踏み出して、英國に×××形勢が展開するといふことも、決して有り得べからざる空想ではないのである。けれどもいづれの場合にしても、勞働者側の勝利は、勞働黨の勢力を增大し、[illegible]

て、××××××××××××××××を獲得するためには、これが必要欠くべからざる行程なのである。

次に現在の罷業が、勞働者側の勝利（最少限度の勝利でも）に終るなら、英國の組合運動の內部における左翼少數派の勢力は增大する。産業別による組合の整理は促進される。恐らくは勞働組合大會總務委員會（ゼネラルカウンシル）の權限は擴大され、從つて英國組合運動の全國的組織は、一そう牢固な集中的なものに進歩するに違ひない。

國際的にも左翼が擡頭する。國際勞働組合運動統一の機運が、著しい刺戟を受けることは云ふまでもない。（五月八日）

英國の炭坑爭議

堀江歸一

英國の炭坑爭議は種々の點に於て、吾人の注目を惹く。爭議紛糾して、同盟罷業と爲り一炭坑の罷業たるに止まらず、諸多の關聯せる、又は殆ど關聯せざる諸事業に同情的罷業の誘致された點に於て、解決の次第に依つては、英國に一種の社會革命を生ずるに至るやも測り難き點に於て、勞働問題に對する姑息の處置が他日に至つて由々しき大事を生ずる事實を現實に暴露した點に於て、吾人に教へる所少なしとしないのである。

先づ炭坑爭議の由來に就て、一瞥する。英國に於て、最も團結の鞏固である、氣風の眞面目であり、加ふるに統率者に人を得て居るものとしては坑夫組合を以つて、其隨一とすること、世評の一致する所である。故に團結の威力に依つて、勞働問題を解決し、之を自家に有利なる方嚮に展開する努力も亦常に坑夫組合に依つて、發揮され、最低賃銀制の採用されたのも、八時間勞働制から、七時間勞働制に移つたのも、坑夫組合を以つて、其嚆矢とする。炭坑夫の賃銀制は千九百二十一年に起つた爭議の解決に臨んで、勞資間に成立した協定に據るのであつて、從來炭價に依つて、賃銀を增減せしめた制度を改めて、各地方に於ける炭坑利潤の多寡に據らしめることゝした。而して千九百二

十四年五月の爭議に於ける協定を以つて、坑主の利潤率を一割七分から一割五分に、坑夫の賃銀率を二割から三割三分五厘に其れ〴〵增減したのである。

或は英國の石炭業が常に順調であり、又相當に繁昌して居つたならば、右の如き賃銀協定の下に、坑主も坑夫も共に滿足なる結果を收め得たかも知れなかつたが、不幸にして、戰後に於ける英國の石炭業は（一）佛白兩國炭の增產、（二）廉價なる獨逸炭の出廻り、（三）石油の競爭、（四）水力の利用に依つて打擊を受けることの少なからざる其上に、前年來炭坑夫の勞働時間に行はれた短縮は未だ彼等の能率を上進して、生產額を增加せしめる一段に達しない。普通に說明される所に據つても、又從來の事歷に徵しても、勞働時間の短縮は勞働者の能率に增進を告げ、彼等をして短かき時間の下に、大なる生產を行はしめるに至るものと解され、此一事が常に勞働時間の短縮を可なりとする根據に充てられたのである。然るに炭坑業の場合に於ては、戰爭中熟練坑夫の多數が兵役に召集され、其內には戰死し負傷した者があり、彼等に代つて就業しつゝある者の勞働能率は彼等に比して、遜色ある爲め、右の如き效果を現はすに至らず、現に戰前の出炭量二億八千七百四十三萬噸に居つた際にも、之を增加して三億噸に上らしめなければ、一旦其要求出[illegible]としての地位を保ち、他は內國工業に對する燃料として供給の豐富を謀るを得ないと云ふ說のあつたに拘らず、此期待は事實に於て裏切られ、戰後數年間を通じて、二億二三千萬噸に居り最近に於ても二億六七千萬噸を上下するに止まれるが如き、要するに勞働能率低下の結果であつて、事の成行の已むを得ざる所であるが、一面に於て、炭坑業の如何に不振であるかを語る資料とするに足りるのである。

然しながら炭坑業の斯く不振であるに就ては、獨り其責めを勞働者の能率低減のみに歸するを得ない、勞働者の能率が減下したとしても、一方に資本家が斯業に多くの資本を投下し、設備の完成を謀つたならば、自ら一方の缺陷を補充して、生產を增加し、又は之を維持するを得る道理であるが、英國の現狀に於ては、此事が期せられないのである。私は此點に就ては、グレン、ヂョージ氏の著した「石炭業の將來と國有に代る政策」と題する冊子を引抄する。此書に於て、同氏の記述する所に據れば、戰前に於ける炭坑業の利潤は平均一割一分五厘であつたが、戰後に於ては一割に減少し、更に千九百二十四年の賃銀協定に依つて、八分五厘內外に低落するの已むを得ざるに至つつたと云ふことである。然らば從來の炭坑に放下する資本を增加して、以つて事業を改良することも、出炭高の增加を圖るとか

云ふ方針に出でないのも、亦異とするに足らない。

然しながら他の一面から云へば、坑夫の生活も炭業不振の餘波を蒙つて、時勢の進歩に伴はざるもの丶甚だしきことが事實に於て、立證されて居る。戰前に比較して、戰後の今日、勞働者の生活費の增進したことは明白の事實であつて、其割合は七割五分內外と認められる。而して勞働者の賃銀は之に伴うだけの增率を告げて居るかどうか、建築業に於ては八割三分、鐵道業に於ては一倍の賃銀率增加を示して居るから、是等二業に從事する勞働者の實質的賃銀は或る程度まで上進し、其生活亦安樂なりと云へるかも知れないが、他の諸事業に於ては、其然るを得ない、炭坑夫の如き其然るを得ざるもの丶一であつて、現に生活費の增加七割五分に對して、賃銀の增加率は千九百二十二年の協定賃銀を以つてして四割であり、千九百二十四年の協定賃銀を以つてして、尙ほ五割九分に止まる、亦以つて炭坑業不振の餘波を蒙つて、坑夫の生活狀態の如何に壓迫されて居るかの一斑を窺ふに足りるであらう。而して坑夫の勞働時間は七時間に短縮され、常に勞働時間短縮の先驅を爲して居るには相違ないが、炭坑內の勞働は地上に於ける工場勞働と異なり、坑口から坑內に入つて、實際の作業に就き、又作業を離れて、坑口に出るまでに、若干の往復時間を要し、表面七時間の勞働は實際に七時間三十分乃至四十分を要するの有樣である一方に、如何に英國に於て坑主が坑內の危險豫防設備に力を致すとした所で、坑夫の傷害を蒙る機會の多いことは、他の諸事業を凌駕するの有樣であつて、此危險に酬ゆる爲めに、又現實に增加しつつある生活費に對する均衡を收める爲めに、炭坑夫が機會の求め可きもの丶ある毎に、賃銀增率を要請することは、吾人の諒とせざる可からざる所である。

斯の如く炭坑夫の賃銀增率に關する要求に事情の諒とすべきもの丶ある一方に、石炭業沈衰の今日に於て、炭坑主の方に於て、容易に此種の要求に應ずる能はざることも、亦已むを得ざる次第であるとすれば、其處に兩者の利害關係に於ける衝突の避け難きものである。此衝突を回避する爲めに、政府に依つて立案されたものが炭坑補助金の制度であつて、昨年七月三十一日を以つて、當時紛糾の極に達し、如何なる危機に陷るやも測り知るを得なかつた爭議は此制度の採用に依つて、辛うじて解決されたのである。則ち政府は一方に石炭產出の能率を改善するに就て、徹底的方策を調査し、他の一方に右の調査の完了するまで、政府から坑主に財政的援助を與へること丶なり、政府は八月一日から本年五月一日まで九個月を期して、二千五百萬磅の補助金を支給する代りに、坑主をして協定賃銀の支拂を繼

績せしめたのである。

右の如きは固より一種の彌縫策であつて、炭坑爭議に對する根本的方策としては、一顧の價値だも之に認めるを得ない。今回補助金廢止の時期を機として、爭議の再燃するに至つたのも、當然の經過であると考へられる。當面の爭議は如何にして解決されるか、固より外國に居る吾人の憶測を許さゞる所であるが、時局は次第に英國をして炭坑國有問題に根本的解決を下さしめる方嚮に導きつゝあるのではあるまいか。近年英國の炭坑業に於て、爭議の發生することの頻繁であると共に、關係者の數の次第に增加するは、著明の事實である。而して是等の爭議たる、賃銀、時間其他の勞働條件に關するものであつて、爭議に伴ふ當面の結果として、採炭量に減額を告げるのは、已むを得ざる所であるが、更に不良の結果を以つて目す可きは、勞資兩者の間に反抗的心理の殘される一事であつて、今や彼等の間には、何等共同の精神なく、產業に於ける共通の動機なく、最高能率を擧げる意識もない。斯の如くして炭坑業の面目を一新するが如き、企て及ばざる所であつて、此結果を齎したもの、一に政府の優秀なる處置の然らしめる所と解される。此一事は炭坑夫組合の有力者が炭坑國有の一理由として、高調する所でもあつて、殊に千九百十八年の[illegible]と國家との間に於ける感情は坑夫と資本家的坑主との間に、るものよりも、良好である可きことを力說した。固より政府に坑主を代表する委員の間には、炭坑國有を以つて、產業の發達に對し、又一國の經濟生活に對して、有害であるとする說が行はれた如く、今日に於ても彼等の間に、此種の說の盛なることは、疑を容れざる所であるが、炭坑國有に代つて、政府が斯業に對して、行つた政策は何ものであつたかと云へば、石炭の生產並に分配に對して、又坑主の獲得する利潤に對して、或る管理權を持ち、一方に炭坑業の內部に種々の分科會を設けて、賃銀其他の問題を議決することに外ならなかつた。斯くて其結果は斯業の安定を維持するに難く、毎回の爭議を經て、遂に今回の如き社會的動亂を招くに於ては、政府の對策の變更の加へられざる可からざる理由は明瞭に認められるのである

此問題に對する解決は姑く他日に讓り、今回の英國炭坑爭議は日本の國民に何事を數へるであらうか。私は之を左の數點に概括する。

第一、勞働運動の威力は總同盟罷業に依つて、最も能く發揮される。英國の三角同盟は實際運動に於て、必ずしも其効果を示すに至らず、時に一個の案山子に過ぎざるやの觀なきを[illegible]劃となつたが、今回の爭議に與へた、三角同盟以上の影響と

勢力とを以つて、社會に大なる衝動を與へ、階級鬪爭の趨きの歴然たるを示した。

第二、爭議解決の根本策として、英國に於て炭坑が國有と爲れば、鐵道亦同樣の運命と爲り、而して其經營には勞働組合代表者の參加を認めるに至れば、資本主義の經濟組織は玆に大なる變革を受けざるを得ない。斯くて政治組織は從來の形態を備へて、一方に經濟革命の行はれる事實は英國に依つて示されるかも知れない。

第三、英國に於て彼の如き大規模の勞働爭議勃發し、國内の紛亂、左こそと思はれるが、物情存外に平靜であり、罷業者は罷業以外に暴行を試みるの態度に出でず、政府亦權力を挾んで罷業者を壓倒せず、公衆濫に罷業破りの妄擧を敢てせず、互に其分を守りつゝある國風は吾人の欽仰する所である。

第四、斯の如きは畢竟勞働者の罷業は彼等の生活を維持せんとする一の方便であり、此方便を運用する場合には、第三者たるもの、干渉を敢てす可きものでないと云ふ多年の國民的訓育の然らしめる結果であると考へられる。

第五、然しながら資本主義の經濟組織は何としても其爛熟期に入つたものではあるまいか、資本主義は勞働者の勞働力が資本家の搾取に任されることを以つて、其存立し、又發達する第一義とする。勞働者が自己の地位に就て覺醒し、資本家の搾取に甘んぜず、自ら産業の經營に干與する希望を懷抱するに至つては、正に經濟組織は其改造せらる可き時期に到達したのであつて、而して今、資本主義全盛の英國に此事の起つたのは、吾人の興味を惹く所、少なしとしない。

我國の勞働運動の如き、勞働團體の幼稚であるが如く、頗る未熟のものであつて、英國の其れ等に比較したならば、殆ど日を同じうして、語ることを許されないであらう。然も英國の運動に依つて、我國の勞働者なり、勞働運動者なりが大なる刺戟を受け、又各自の行動を如何なる邊に向つて、進ましめ可きものであるかに就て、大體の目標を立てるを得るに至つたことゝ想像される。然しながら同時に我國には幾多の保守主義者あり、又反動論者がある。彼等の見る所を以つてすれば、英國が從來勞働者に讓與するもの多かつたればこそ、遂に勞働者をして社會上に拔く可からざる勢力を擁するに至らしめたものであるとし、我國に於て此轍を踏まざる用意の下に、種々の措置を運すに至ることゝ考へられる。然も資本主義の自由なる運用を認容して、一方に勞働者の權利發揚を抑制することが社會正義を維持する所以であるかどうかに就て、私は彼等の一考を促したい

と思ふのである。何れにしても右に揭げた二種の氷炭相容れざる思想の我國に對立しつゝある以上は、其間、地上に於ける衝突と爲るは勿論、其餘波は常に實際問題に及んで、社會の平和傷けるもの多きの嘆を免かれないであらう。

英國總罷業の我國勞働運動及ぼす影響

赤松克麿

一、

今回の英國總罷業の我國勞働運動に及ぼす影響如何といふに、之を端的に觀るならば、なか〳〵複雜なものがあると考へる。英國の總罷業は、近頃勞働運動者仲間の好個の話題となり研究題目となつているが、先日或る勞働運動者の云ふ所を聞くに、今回の總罷業は英國資本主義の斷末魔を誤るものであつて、若し勞働組合側が勝利を得るならば、英國の資本主義は崩壞の第一步を踏み出すものであり、しかして英國資本主義の崩壞は、爾餘の資本主義國家の動搖となり、從つて我國の勞働運動も急進的步調を取るに至るであらうと。右の說に對して、他の勞働運動者は次の如く反駁を試みた。英國勞働組合の主張が、社會主義的色彩を有していることは明白であるが、しかし今回の大事件を以て、所謂社會革命戰の勃發の如く考へるのは大いなる見當違ひである。罷業當事者はあくまで當面の生活問題を解決する心持でやつてゐるのであつて、その態度は何處までも冷靜であり、實利的であり秩序的である。たゞ彼等の陣容が外で見られないやうな雄大性を持つて居るだけに、一般社會に對して大きなショックを與へたに過ぎないのである。だから若し勞働側が勝利を獲たとしても、それは英國勞働階級の秩序的一前進を示すものであつて、直ちに突變的に新社會が出現するものではない。勿論今回の大事件は、全世界の勞働運動に深刻なる刺激と教訓とを垂れるには相異ないが、ロシヤ革命によつて其の端緒を開かうとした世界革命が中折の已むなきに至つ

たのを、英國革命によつて再びそして的確に、世界革命の氣運を復活するものの如く考へ、そして我國の勞働運動も此の趨勢に順應すべきものの如く考へるのは、今回の大罷業に對する正しき理解を缺くものと云はねばならぬと。

我國の勞働運動に於て、右の二様の見解の行はれているのは事實である。そして後者が正しき見解であつて、かくの如く觀察することによつてのみ、今回の大罷業の與ふる教訓を、我國勞働運動の合理的發達に資することが出來ることも亦たしかなる事柄である。

二

英國の勞働階級は、革命氣分に醉つぱらはないで、どこまでも「生活安定」を旗幟として、悠々向上の進路を辿つているのである。彼等の心底に横るものは、團體取引による生活條件の改善である。しかして彼等の生活條件の改善が、今や炭坑國有に依らなければならない時期に達したのであるから、正々堂々と之を主張したのである。そして此の炭坑國有に關する取引が圓滑に行かないので、一時取引を中止したのである。之れが今回の總罷業である。彼等が、今回の總罷業を以て、産業上の一爭議に過ぎないことを力說しているのは、全く掛値のない聲明と見るべきである。然るに保守黨政府の閣僚等が、今回の總罷業を以て「革命」だと叫び、如何なる代償を拂つても勞働者側を屈服せしめやうとしているのは、甚しく公明を缺いだ卑劣極まる態度と云はねばならぬ。勞働黨首領マクドナルド氏が「罷業は純然たる産業上の爭議である。諸外國の國民諸君は此の點を誤解せぬよう、また英國憲法の傳統的精神が政府の宣傳のために害はれぬやう自分は希望する」と述べたことは、我々の尤も首肯し得る事柄である。我國に於ても從來沒分曉の官憲が、勞働組合宣傳のビラを不穩文書だと云つたり、勞働運動者を非國民だと云つたり、示威運動を暴動視したりすることがよくあつたが、正々堂々たるべき檜舞臺の上に於て、支配階級の態度がしば〱男らしくないことは、東西其の軌を一にするやうである。

英國憲法の傳統的精神は民主主義である。今回の事件に於て勞働側の態度は、政府よりも資本家よりも民主主義の精神を立派に發揮している。同盟罷工は勞働者生存權の一つとして夙に國法の認むる所である。故に今回の總罷業といへども、それ自身何等非合法的手段ではないのである。しかして罷業團幹部は此の罷業の合法性を確實ならしめんがために、あらゆる愼重なる方策を講じている。或は國民の死活に關する食料品の配給方

面に於ては罷業に出でず、或は罷業者に對して嚴に暴動を戒め、あくまで模範的行動を執つて官憲に干渉の口實や機會を與へるやうな行動は斷じて執らぬやう警告している。しかして一方に於て罷業者に向つて運動會や音樂會の開催を勸め、意氣壯んな男女勞働者の活動欲を滿足させ且つ娯樂を與へやうとしている。かの總評議員會が、ピケッチングの勞働者に對して、工場に近寄り又は工場に入らうとする勞働者の妨害をなすことなく、法律によつて認められた合法的義務の遂行にのみ努力すべきことを特に注意した如きは、我々日本の勞働運動者には斯うした場合にとても我慢の出來ないやうな鷹揚振りを示している。世界勞働運動史に於て未曾有の堂々たる大陣容を築きながら、慌てず騒がず、赤旗と革命歌と勞働者獨裁とを一切抜きにして、どこまでも鐵の如き意志を以て民主主義的態度を把持せんとしつゝある其の組織的訓練と教養とは、實に驚嘆に値するものであつて、彼等は全世界の勞働運動に對して、正に勞働運動の王道を教示したものと云ふべきである。

三

に、かくの如き程度の間違ひは、誠に取り上げるに足らぬ件である。我國の如きは僅か二三百人程度のストライキにへ、警官隊と衝突があつたり、負傷者が出たりすることがしばしばあるではないか。しかも最近の外電の報ずるところに依ると、それらの暴行者は多くの場合、無責任な青年や相當の年輩者が亂醉のあまり不平が昂じてやつたものであつて、かの自動車運轉手を毆打した事件の如きは、運轉手の方にも手落ちがあつたといふことである。罷業團が大體に於て秩序を嚴守していることは確實のやうである。尙ほ外國電報は、ジャーナリズムの立場から、微々たる暴行事件でも誇大に報道する傾向があるから、こうした記事はよほど割引して見る必要がある。

今回の總罷業によつて示された英國勞働運動の比類なき陣容と組織的訓練とは、英國傳統の民主主義精神の賜である。民主主義は專制と陰謀と徒黨と横暴とを排斥する。そして一切の行動の公明正大を要求する。民主主義の徹底は、無産階級陣營内に於ける陰謀と横暴とを取り去り、その陣容の擴大をはかり、小黨分立を改めて眞に健實なる共同戰線を形づくり、その運動を公明正大ならしめる。そして支配階級に對しては、その官僚主義と頑迷思想とを取り除く。かくして勞働問題の解決をして合理的なる過程を辿らしめる。若し今回の罷業に於て、勞働側

が勝利を獲たとしても、それは資本主義に對する秩序的一改革を加へるに止るものであつて、勝に乘じて、一擧に資本主義の牙城を屠り、以て勞農英國を樹立するものとは考へられない。勞働側は從來の聲明通り、あくまで全國民承認の下に、秩序整然と、資本主義改造の針路を辿ることであらう。また若し勞働側が敗北したとしても、彼等が捨鉢になつて無秩序な暴行破壞に移るとは考へられない。彼等は徐ろに陣容を整へて、捲土重來の日を期することであらう。今日、英國に於ては既に民主主義の顯著なる成績を擧げつゝあるが、果して今後とも英國の階級鬪爭が一貫して民主主義を以て終始するか否かは、實に興味ある問題であるが、私はそれは偏に支配階級の態度如何にかゝることだと考へる。勞働側があくまで公明なる態度を執りつゝあるに拘らず、マクドナルド氏の憂慮するやうに、支配者側が英國憲法の傳統精神を自ら破ぼするやうな行動に出るならば、勞働者側といへども勢の激する所、已むを得ず非合法手段に訴へるやうなことになるかも知れない。民主主義の發達の低い我國の如きに於ては、官憲や資本家の挑戰的態度のために、事態が惡化することが珍らしくないのである。今後英國の支配階級が、民主主義を以て一貫するか否かは、ひとり英國のみならず、全世界の民主主義の消長に至大の影響を及ぼすであらう。

四

英國の歷史や社會形態と、我國のそれとは自ら異るものがあるから、我國の勞働運動が英國のそれと全然同一の軌道を走ることは不可能であるけれども、勞働階級の民主的發達による社會改造が、勞働運動の王道なりとするならば、我國の勞働運動の如きは、英國勞働運動に學ぶべき所が少くない。未だ組織が微弱であり、訓練が不十分である我國の勞働組合は、今回の總罷業に於て示された英國勞働組合の威容を見て、實に忸怩たるものがある。殊に勞働運動の發達階段として、民主主義の獲得を當面の任務とする我國の勞働階級に取つて、英國民主主義の驚くべき成績は、多大の刺激となることは疑ない。民主主義の價値を輕視し、勞働階級の民主的發達の意義を解しないで、たゞ衝動的な、無組織的な、朋黨的な、陰謀的な、ブランキスト的な、一揆叛亂を夢みる人々は、英國の勞働運動に興味を持たないか若くは之れを穿き違へて英國勞働階級の罷業を革命戰と同一視し、これが成功して所謂世界革命の火の手が一時に燃え上らんことを期待してゐるが、かくの如きは今回の總罷業に對する觀察と批判とを全然誤つたものであつて、若し斯うした批判が廣るならば、それは甚しく我國勞働運動を不健全に導き、そ

のノーマルな發達を沮害するに至るであらう。多くの勞働階級も端的には斯くの如く考へ易いと思はれるが、しかし一般の大勢は漸次に之れに對する正しき批判をつかんで、勞働運動の順當なる發達に資することになるであらうと信ずる。

英國の總罷業に於て、「資本主義打破」とか「マルクス主義と」か「勞働者國家」とかいふやうな觀念的標語が姿を見せないで、罷業團が「生活權確立」の一路を邁進していることは、ともすれば現實生活を離れた觀念に陶醉し易い我國の勞働運動に對して、深い教訓を與へるものである。炭坑國有といつたところが決して突飛な案ではなくて、既に一九一八年に南ウエールス坑夫聯盟が唱へ出して以來、廣く國民の間に普及された問題であつて、一九一九年に政府の任命した有名なるサンキー委員會は炭坑の國有又は統一經營主義を是認した程である。觀念的、氣分的、飛躍的、藝術的に走り易い我國勞働運動は、生活的、實利的、常識的、現實的なる英國勞働運動の態度に學ぶ所が多いといはねばならぬ。

我國の支配階級が今回の英國總罷業を如何に觀るかといふことは、勞働運動の立場から注目すべき事柄である。進歩的分子

になるから愈々勞働運動を壓迫しなければならぬ、勞働組合公認の如きは以ての外である、と考へるであらう。現に或る資本家の如きは、勞働運動は結局こうした大事件になるのだから、あくまでそれに制肘を加へねばならぬ、自分達が社會局立案の勞働組合法案に極力反對したのは先見の明があつた、と語つているが、その愚や度し難しといふべきである。こうした彼等の近眼的な、專制的な態度は、階級闘爭を激化に導き、やがては本當に產業破壞を招來すること明々白々である。我々は支配階級が國家百年の計を思ふならば、最も聰明なる態度を以て今回の大罷業を觀察し且つ批判されんことを切望する。勞働階級は到底現狀生活に甘んずるものではない。若し支配階級が、生活權確立のために已むを得ざるに出でたる勞働者の秩序的同盟罷業さへも之を不法視するならば、勞働者に殘されたるものは、○○○○○○○○なることを銘記しなければならぬ(五月九日)

地下人の信念

馬場恒吾

穏健着實其ものを代表するかの如く云はれてゐた英國の勞働組合が總罷業を行つた。露西亞に於て虐殺と戰爭とに依つて行つた所のものを、只勞働者が手に持つてゐる道具を措くと云ふことに依つて行はんとするにしても、若しそれが成功すれば社會革命が成し遂げられたと云ふことに於て何の差別がない。これを見ても、勞働運動に左傾も右傾もあつたものでない事が分る。只生活の現實に立脚する人間の眞實の要求のみが其國の勞働運動の形式を決定する。カウツキーが××××に關して、過去の××に依つて、將來の××が如何なる形を採るかをトする事は出來ぬ。

何となれば、如何なる革命の要素が將來の階級鬪爭の中に生れ出づるかゞ豫想出來ぬからだと云ふ。これは、英國の總罷業に於ける坑夫の感情に其適例を見る。

英國の總罷業が果して社會革命迄行くか否かは今より豫言出來ぬ。併し今回の總罷業に至る迄の勞働者側の動機が思想上其に彼等が勞働する間に養たる感情には、社會革命迄行かねば滿足せぬ心持がある。英國の石炭坑夫は一九〇〇年から一九二〇年迄に爭議の場數を踏むこと二八一二件。一九二一年には三ケ月に亘る大罷業を行つた。そして今回の總罷業である。其間に彼等の雇主に對する感情が悪化した。彼等は行く所まで行かなければ止まぬと云ふと新聞電報は云ふ。

英國の土地所有權

炭坑爭議の遠因は英國の土地所有權の性質にある。土地所有權が英國では只土地の表面丈けに行使せられるのでなく、上は天國迄、下は地獄迄達すると云はれたほど、地上と地下に迄及ぶ。だから近世になつて石炭が堀られるやうになつて、地主は居ながらにして石炭王になつた。モーニング・ポースト社長のノーザンバーランド公は、默つて居て毎年八萬磅（一磅は約十圓）の借地料を取る。そんなのが數多くある。八萬磅を百萬の

坑夫に分けた所で大したものでないが、坑夫聯合幹事長であつたスマイレーは云ふ、自分がランカシャの炭坑に働いてゐた時、石炭を貨車一臺分切る。すると其同じ石炭から何にもせぬ地主ハミルトン公爵の懐ろに、自分の取るより余計の金が行くと云つた。かうした感情が坑夫の胸を蝕む。

英國では炭坑持主と炭坑經營者とは大抵別人である。炭坑會社は炭坑地主に借地料(ローヤルテー)を拂つて、炭坑を計營する。借地料は掘り出す石炭の一噸に對して四片(十六錢)乃至十片(四十錢)である。

英國の炭坑數	三三〇〇
炭坑經營會社數	一四五二
炭坑地主の數	四〇〇〇

だから一つの會社が、幾人もの地主から炭山を借りて、幾ケ所をも經營してゐる事になる。一九一八年に此地主に拂つた借地料の總額五百九十六萬三百六十五磅に達した。(此數字はスマイレーに次いで坑夫聯合會の幹事長であつたホッヂスの炭坑國有論に依る)。

英國で炭坑經營難が叫ばれる。最近三年間に石炭の輸出が左の如く減じた

一九二三年	九九、八四七、二三七磅
一九二四年	七二、〇七九、五四七磅
一九二五年	五〇、四七七、二一一磅

概算一億磅の石炭輸出が其半額の五千萬磅に減じたのだから、英國の上下が青くなつた。其所で坑夫の賃銀引下げ、勞働時間延長が叫ばれる。併し地主は安樂椅子に坐はつて六百萬磅の地代を懐ろにしてゐる。此數字が血で書かれた文字の如く、坑夫の頭に焦げ付いて離れない。

血で書かれた文字と云ふのは單なる形容詞でない。それが文字通りに事實である。一九〇八年乃至一九一四年の六年間に炭坑の事故の爲めに死者一萬四十九人、恢復一週間以上を要する負傷者百十萬四千五百一人であつた。即ち石炭を掘り出す爲めに、六時間毎に一人が死に、三分間毎に一人が負傷する割合になつてゐる。それが英國の炭坑業の爲めに坑夫が拂ふ犧牲である。地主の取る借地料が屢々問題になるのは其爲めだ。併し坑夫側の反感の焦點は地主に向つてゐるのでなく、寧ろ英國の炭坑が經營される現在の組織と制度其物に向つてゐる。

市場と賃銀と時間

議論の中心は英國の産業の基礎である所の石炭採掘業が廢滅、衰亡に歸するものであるか、恢復すべきものであるかと云ふ點

に存在する。一億磅の石炭輸出が五千萬磅に減じた昨年の成績を見て、坑主側はそれを勞働賃金が増して勞働時間が減じた事に責任を歸する。石炭を掘るのに費用許り嵩む。從つて値段が高くなる。外國と競爭出來ぬと至極簡單明瞭な理屈を述べる。昨年組織された調査會も今年の報告に石炭坑夫の賃銀が高いと報告した。他の英國の職工に比較して（一志は約五十錢）

石炭坑夫	一週平均	七六志
造船工	同	五六志
機械工	同	五七志

時間も英國は七時間、佛、獨、白は八時間だと云ふ。

併し坑主側の云ふ事を其儘には請取れぬ。昨年八月以降今年四月迄九ケ月政府が補助金として二千萬磅（一千萬磅の豫定が倍になつたから支出した結果、英國の石炭の相場は二割方低下した。それでも輸出は増加せぬ。英國の七時間は坑夫が坑内に入つてから石炭の斷層面を離れる迄の時間を云ふので、坑外迄に出る時間を含んでゐない。だから實際は七時間半である。それで獨逸などの八時間よりは能率が上る。英國が時間を増せば外の國も時間を増す。賃銀にしてもエリノア・ラスボーン女史の調査に依れば坑夫總數の三割三分、幼年勞働者の六割六分は人間必需の生活程度以下に居り、坑夫の五分、幼年の一割七分は極貧の生活程度以下に居る。必需とか云ふ標準はラウントリー氏が拵らへたものである。此賃銀を減ずる事は人道上の問題となる。

英國の炭業不振は今少しく根底の深い所にある。昨年八月に起るべき爭議を九ケ月間延期するために政府が補助金を出し同時に調査會を拵しらへた。此調査會の報告は當らず障らずに云はんと勉めた結果、事實として、炭坑問題を解決する何らの斷案を下してゐない。それ故に各方面で評判が惡るい。併し遠方から見れば、此調査會を設置したと云ふことがボルドウイン内閣の一時逃れの心持ちを現はすのみだ。炭坑の事は調査し悉くされてゐる。一九一九年、ロイド・ジョージ内閣の時に矢張り調査を作つた。それが有名なサンケー調査會である。其報告は四通りも出てゐる。委員長サンケー氏の報告と、勞働者側の報告は炭坑國營を主張する。國有ではない。地主に拂ふ借地料の焦眉の問題でない。地主から借りて、炭坑を經營する千五百の數に近い炭坑會社を國營に統一する方が急務であると云ふ態度を示してゐる。坑主側の報告と委員ダカム卿の個人報告は炭坑借地料の國有を主張する。併し國營には反對した。坑主側は飽くまでも今迄通りの私人經營、ダカム卿は地方別の統一的經營を主張した。政府は國營には反對だ。大體ダカム案を採用しやうと云つた。それには坑主と坑夫が共に反對した。

今年の調査會報告は借地料國有には賛成、炭坑國營には反對と云ふ。サンケー報告より見れば、寧ろ逆轉の氣味はあつても、進歩の跡はない。英國炭坑に關しては調査は已に澤山である。名を調査に假りて、優柔不斷の九ケ月を送つた間に、總罷業の機が熟したのである。ボルドウイン内閣は必ず倒れると豫言するものさへ出て來てゐる

採炭業不振の原因

英國炭業は何故に不振であるか　それを研究し悉くされてゐる。過去五十年間に英國の石炭産出額は二倍にあつた。其間に米國は十倍になつた。獨逸は六倍になつた。世界全體としても十倍になつた。だから英國は世界の石炭の三分の二を供給してゐたのが、今は僅かに五分の一になつた。それは勞働者の罪だと云つても、餘りに釣合がとれぬ

さう云ふことは却つて勞働者側の方がよく調べてゐる。フランクホッヂスは云ふ。英國の炭坑が千五百からの別々の會社に依つて經營される爲めに、鑛區と鑛區の界目の處は掘らずに殘してある　隣りの鑛區から水が浸入する事を恐れる爲め、其他種々の事情の爲めに掘らずに殘してある　殘すのは一時殘すと云ふのでなく、永久に捨てるのである　後から再び掘るのは金が掛つて不可能だからだ。加へ

三十五億乃至四十億噸に上つてゐる。米や麥や綿などは

るのだから無駄が出ても補充される。石油石炭の如き地下に藏してあるものは、後の補充は出來ぬ。だからサンケー委員會は國營を主張した。

英國炭鑛經營者は配當を急ぐ爲めに機械を改良せぬ　例へば石炭洗滌の機械が舊式な爲めに小さな石炭は泥屑と一緒に坑内に捨てられる　それが永久に失はれる石炭である。其高が毎年二百三十二萬千噸に及ぶ。又現在の設備では石炭の層が非常に厚い時は充分に掘り悉くす事が出來ぬ。大抵四割は殘される。二十四吹の厚さで二千五百町歩に擴がつてゐる炭層を掘るときは一億千五百二十萬噸の石炭が捨てられることになる

炭坑會社が分立してゐる爲めに、それを强力な排水機關を据へ付けてゐない。炭坑の排水が充分でない爲めに、何の位

が捨てられたか分らぬ。

今日の習慣では炭坑の口元から奥へ掘つて行く

る爲めにそれが必要である。併し其れが爲めに、

て、大量の石炭が無駄になる。少しく配當を後ち

層の境界線から後すざり的に掘れば此無駄が除が

英國の炭坑では炭坑自家用の動力を作る爲め二

噸の石炭を燃いてゐる。それを統一したならば優に六百萬噸の儉約が出來る。

炭坑のみならず、共同全體の機械が舊式であり、組織が個人主義である。英國全體動力を作る爲めに費やす石炭が一年約八千萬噸である。これを中央發電所に纒めたならば五千、五百萬噸は儉約出來る。石炭を燃やす汽鑵が舊式である爲めに、獨逸が大をなした所以の化學製品が多く空中に捨てられる。ホッヂスは云ふ、吾々は今石炭の眞價の七分乃至一割しか利用して居らぬ。それを九割迄利用し得られるのであると。

英國の炭坑は多數の會社の別々の經營になつてゐる爲めに、中樞機關がなく、從つて科學的進歩がない。又英國全體の產業が同じく科學的に後れてゐる結果大量の石炭が浪費せられてゐる。これは坑夫側の論者が云ふのみでなく、ランセロト・ロートン、ダビト・ブラウンリーの如き獨立した專門家も最近の隔週評論に論じてゐる。彼等は英國の炭業は、粉炭製造、低溫蒸溜の如き製產過程の改造を行はねば復活の希望なしと云ふ。それは個々分立の會社組織で出來る事でない。

炭坑國營の過程

坑夫聯盟が最初に炭坑國營の決議をしたのは戰前一九一二年十月であつた。併し國營の味に近きものを味つたのは戰爭中であつた。一九一五年戰爭の眞最中、南ウエルス坑夫は賃銀增加を要求して、罷業の氣勢を見せた。首相ロイド・ジョージは軍需品令に依る勅令を出して、炭坑罷業を犯罪にした。此勅令が出るや否や、二十萬人の坑夫は直ちに罷業して見せた。首相は自から罷業地に出張して、坑夫の要求を容れ、軍需品令に依る刑罰を全部赦免した。政府の面目は丸潰れになつたのみならず、此讓歩の結果、其翌年から翌々年にかけて、政府は全國の炭坑を管理し、賃銀を地方別に協定せずに全國的に協定するやうになつた。今迄貧鑛に働いて、賃銀の低くかつた所の坑夫が、他の豐富な炭坑の利益に均霑する。その均霑不足分が何日でも政府補助金となる。故に政府の管理廢止が一九二一年の罷業の原因であつた。今回も賃金を全國的にするか、地方的にするかと云ふのが爭議の大問題になつてゐる。

戰爭中に賃銀は增加した事は事實である。同時に地主と坑主の所得も增加した。ホッヂスは左の如く計算する。

年次、	地主坑主側利益、	產出一噸平均利益、	坑夫賃銀
	百萬磅	志　片	志　片
一八八九—一八九三	一二・九	一　三・七八	四　七・一六
一八九九—一九〇三	一九・二	一　八・五四	五　五・三
一九一三	二八・〇	一　一一・三八	六　四・〇一
一九一四	二一・五	一　七・四二	六　二・九八

略當れりと云へるかと思ふ。以上の事述を以て、英國に於て行炭業に投ぜられた波紋は、如何に各般の方面に動搖を生ずるかを知り得ると思ふ。

（二）

次に我々の注意すべきことは、炭坑々夫の組織する組合、即ち英國炭坑夫組合（Miners' Federation of Great Britain）なるものの特質である。今英國勞働組合史を見ると、千八百四十八年にチャーチスト運動が崩壞してから所謂保守主義の時代に入つて、勞働組合は現存秩序の資本主義的たることを容認し、唯組合の力によつて、賃銀時間制の條件に於て、資本家と有利な接衝するを以て足れりとした。此の時代の組合は主として熟練職工より成れるもので、多額の掛金を募つて、豐富なる相互扶助的の基金を擁してゐた、人の所謂勞働者階級の貴族と稱せられるもので、勞働組合なるものは、此の如き熟練勞働者のみ始めて組織し得るものなりとせられてゐた。

然るに千八百八十年代に於て、所謂新組合主義（New Unionism）の時代に入るや、從來不可能とされてゐた不熟練勞働者が組合を組織することになり、更に從來の一職業一組合と云ふ舊習を破つて、一產業一組合主義を採り、更に各產業同種の組合が全英國中各地に割據してゐたのを統一して、全國的組合なるの機運に向つた。この傾向は八十年代に於ける社會主義の勃興の影響に依るものであるが、此の組織方面に於ける新傾向は、同時に組合の採るべき思想に影響して、勞働組合は既に前時代の組合の如くに、現存秩序に妥協的の態度から脫して、急進的思想に向ふに至つたので、此に英國組合史上に於ける新時代が現れたのであるが、此の新組合主義の代表を以て目されたのが英國炭坑夫組合である。

炭坑々夫組合の成立したのは、千八百八十年で最初は僅に三萬六千の組合員を有するに過ぎなかつた。之より先各地方に夫々地方的の組合はあつたが、全國的の組合を標傍して立つたのは、之が始めてであつた。漸次大をなして遂に千九百八年に、一切の組合が合併してから、組合員の數六十萬を算するに至り、千九百廿年には、九十萬に達するに及んだ。組合は全國的であり產業的であり、此の點に於て新時代の組合の特質を充分に備へてゐるのみならず、更に幹部に闘士を持つてゐたことに於て幸ひであつた。千九百十二年以來ロバート・スマイリーは會長の地位にあつて全組合を引率し、之を助くるに年少氣鋭の幹事長フランク、ホッヂスがあつた。此の兩人の意氣は啻に、坑夫組合を指導したのみならず、最近の英國勞働運動に重要な役割

演ずるものであつた。

英國勞働組合大會（Trade Union Congress）に屬する組合員は、千九百廿年に於て六百五十萬五千であつた、此の中に於て坑夫組合が九十萬を占めたるは、數量に於て既に重要であつた。自分は曾てプリマウスの勞働組合大會に列席したことがあつたが、其の代表者席に於て坑夫組合の有する割合は、其の大會を動かす勢力を如實に物語るものであつた。況んや前述した如く、石炭業が産業としての重要さは、坑夫組合の一進一退に多大の威信を加ふるものでなくてはならない。實際に於て組合史を繙けば、十九世紀中に於て勢力のあつた纖維工業、造船業、機械工業等の組合が、英國勞働組合の上に有する勢力は頓に去つて、之に代つて活動の前景に現はれて、大會を左右するものは、何れも新組合主義の下に成れる、炭坑夫組合、鐵道從業者組合（National Union of Railwaymen）及び交通勞働者組合（Transport Workers' Union）等である。英國勞働運動中の主要人物なる、スマイリー、トーマス、クラインス等、何れも之等の組合の幹部である。此の中に於て特に炭坑夫組合は、組合運動の中心的地位にあつて、炭坑夫先づ動けば、全運動之に次ぎ、炭坑夫敗るれば、勞働界は一齊に資本家の逆襲を受けるのである。現に千九百廿一年の坑夫組合の大敗は、其の後の全勞働界の敗北の前驅を爲したものであつた。今回の罷業に於て、勞働資本何れもが、全力を傾注して炭坑問題に決戰するは、之が一炭坑問題に非ずして、勝敗の係る所、勞資全軍の運命に在るからである。

（三）

更に坑夫組合は今日迄の戰績に於て、注目を惹くに足るものがあつた。彼等は千九百八年に於て、議會をして八時間勞働法を議決せしめた。英國に於ける勞働時間に關する立法は、從來は婦人年少者等の其組合の組織を有せざるもののみに、制限されてゐた。然るに此の時に於て組合を有するのみならず、しかも英國最大の組合を有する炭坑夫に時間に關する法規を制定したことが既に、從來の勞働立法の前例を破つたことであつた。更に又千九百十二年に於ては、從來の賃銀支拂方法に滿足せずして、全國劃一の最低賃銀を規定すべきを要求して、二月末より一ケ月、約五十萬の坑夫が同盟罷業をなし、遂に政府をして最低賃銀法を制定せしむるに至つたのである。英國に於て最低賃銀の制度は、既に千九百九年の Trade Boards Act に於て、實行されてはゐたが、其の適用の範圍は全く家内工業の無組織勞働者を保護するにあつたのである。今や最大の組合を有する

炭坑夫に、最低賃銀法を施行するに至れるは、之れ亦立法史上に於て一新紀元を劃するものであつた。

啻に之のみではない、炭坑夫組合は夙に炭坑の國有を主張して來たのである。一般資本の國有とは分離して、炭坑の國有には別個の特種理由があつた。石炭業が英國産業の生命なる以上、此の如き主要な産業を、私人の所有に任すべきでないこと。炭坑所有者の連絡が余りに組織を欠く爲に坑夫の生活條件に重大の關係あること、炭坑夫の危害率は特に顯著で、坑夫は生命と健康とを提して産業に從事すること、自然の與へたる富源は公共の所有たるべきこと等の理由は、特に炭坑國有論をして、永い間の懸案たらしめた。他の産業の勞働者が國有の聲さへ發し得ない時に於て、炭坑夫の標傍する所は、始よりして此の根本問題に在つた。而も此に注意すべきは、千九百十九年後議するサンキー報告に於て、彼等の代表者は、啻に炭坑の國有を以て足れりとせず、國有後の經營に對して、勞働者の參加權を要求したのである。此の事たるや、戰時戰後に於けるギルド・ソシアリズムの主張した所で、公共所有の外に産業の民主的經營に指を染めたのである。此にも彼等の要求は、新時代の新思想を夙に受入れて、全勞働界の最先頭に立つものであつた。[illegible]

期待を囑するは、決して出來ないではない。

最後に附加すべきことは、炭坑夫は啻に國内に結束固き組合を有するのみならず、歐洲諸國の間に於て、國際炭坑夫組合（International Federation of Miners）を有することで、千九百廿二年に於て參加組合員二百萬壹千を算し、本部を倫敦に有する。殊に最近に於て前述せるフランク・ホッヂスが其の幹事となつたことは、炭坑夫組合が國際的に援助を求め得ることを示すもので、勞働組合の國際的結合は其の成績一般には良好でないが、其の内に於て炭坑夫の組合は、少い國際組合の一たることを、此に記憶するの必要がある。

（四）

以上二つの前提に讀者の注意を促して、自分は次に今回の罷業の由來に筆を進めたいと思ふ。

千九百十二年炭坑夫組合が、前述せる最低賃銀法を獲得した後に、首領スマイリーは、鐵道從業者組合及び交通勞働者組合が石炭業と運命を同じくするを思ひ、此の三者の間に提携を畫策し、翌千九百十三年交渉を開始し、十四年四月に及び、三組合の委員が集まつて、細目の協定を議するの運びに至つたのである。[illegible]同年八月に、[illegible]

盟（The Triple Alliance）と稱せらるゝものである。然るに戰爭中に於て、スマイリーは戰後必ずや資本家が勞働組合壓迫の擧に出づべきを怖れ、之が防禦の爲に三角同盟を作るの必要を思ひ、千九百十五年十二月遂に三組合の間に協定が成立したのである。其の支配する組合員百二十五萬以上に及び、偉大なる力を包藏したのであるが、此の同盟の實際に活躍したのは、全く今回の罷業に於てゞあつて、今日迄此の同盟の歴史は決して光輝あるものではなかつた。

戰爭は勞働界を擧げて、國家の休戚に奮起せしめた、唯戰爭中坑夫組合の獲得したものが一つあつた。それは千九百十五年石炭採掘が政府の管理に移つた爲に、今迄永い間炭坑夫の求めてゐた。全國劃一的の賃銀制度を實施したことであつた。元來英國の炭坑は地方によつて狀況が異つて從つて生産費が不同で、小は一噸當り十二志六片から大は四十八志に反んだ。此の差に伴つて勞働者の受ける賃銀に差異を生じ、從來は各地方地方で賃銀の協定を遂げた。此の事が一方に於て資本家側からすれば、勞働者の利害を地方的ならしめ、全國統一的の勢力をなすを妨げることになるので、容易に抛棄しない制度であり、反對に勞働者側からすれば、此の差をなくして全國劃一的にするとは、永い間の宿願で、戰時中政府の管理する間に於て、此の宿志は達せられたのである、此の事は其の後の運動を見るに必要な事實である。

扨て戰爭終了してから翌千九百十九年一月、炭坑夫組合は三個の要求を政府に提出した。即ち第一は從來の賃銀の三割增加、第二は就業時間を六時間とすること、第三は炭坑の國有と云ふことであつた。此の時は三角同盟共に合して、炭坑は組合の要求を援助したので、同年三月將に全國總同盟罷業開始せられんとし、其の人員百五十萬以上の數で、成年勞働者の數のみよりすれば、全國の六分の一を占める勢力であつた。當時戰線より歸還し、政府にして策を誤らば、革命の勃發することをなきにしあらざる危機に瀕してゐた。此に於て首相ロイドジョージは炭坑業調査委員を任命し、其の報告を實施すべきを契つて、罷業の勃發を防がんとした、炭坑夫としては此は絕好機會であつて、全國の石炭貯藏額は僅少で、倫敦の如きは僅三日を支ふるに過ぎざるものがあつた。然し組合は調査委員の報告が誠實に實施せらるゝことに希望を繼いで罷業を延期した。委員はサンキー氏を議長とし、他に十二名で炭坑主三名炭坑夫側三名、外に中立代表者として資本家側三名、勞働者側三名とし、之にはシドニーウエッブ、トウネー、及び統計家チオザ・マネーの三名を推薦して容れられた。此の調査は一代の注意を

集中せしめたもので首相は誠意を以て文字上も精神上も調査報告を實施する旨を聲明した。然るに議長サンキー及び勞働者側六名の手になれる多數派の報告は、炭坑の國有と勞働者の經營參加とを認めたに拘はらず、首相は同年八月報告を實施するの意思無き旨を斷言するに至つた。此の調査報告は炭坑業の實狀を述ぶること詳細を極め、其の結論の開明的にして大膽なる、從來の公的調査に例を見ざる所で、ギルド・ソシアリズムが机上に於て主張し來れる要項が、政府の任命せる調査に於て採用せられたもので、議長サンキー氏の聲名を重からしめたのみならず、勞働問題の研究者にとつて好個の參考資料である。嚮に三月調査會成れる時、最も有利なる狀勢に在りし炭坑夫は、八月今は罷業に不利なる時機に於て、見事に首相の違約によつて欺かれたのである。炭坑夫組合が政府當局に對する不信と憤慨とは此に遠い淵源を有し、止み難き復讐の念永く消えざるものを作つたのである。

（五）

歎かれたる炭坑夫組合は、勞働組合大會に訴へた、大會は特別會議を開いて事を議し、炭坑夫組合が罷業を要求せるに拘はらず、大會は七[illegible]票を以て、直接行動を止めて政治行動を採り、次の總選擧を俟つべきことを議決した、之が千九百十九年三月である。

十月に於て炭坑夫組合は更に、賃銀の增加を要求して起つたのであるが、政府の拒む所となり、三角同盟の援助を求めたが容易に協定が成らず、炭坑夫組合のみ獨り罷業をなし、若干の賃銀割增を得ることが出來たが、此の時に於て三角同盟の到底賴むべからざるを知らしめ、他方に於て却て十月廿九日政府をして、非常時權力法（Emegency Powers act）を作らしめる破目になり、公共の生命に關する場合に於て、政府は非常手段を採るを得ることとなつた、今回の罷業に於て政府が早速活用したのは、此の法律である。

翌千九百廿一年に入るや、石炭市場の景氣は一變した、それは戰爭直後久しく續いてゐた好景氣が停止したことと、海外に於て石炭の賣行が著しく減退したことである。其の理由は一はフランスが獨逸の炭坑を手に入れて英炭を必要としなくなつたのと、アメリカが石炭輸出國として活躍し出した爲である。此に於て政府は此の上永く石炭の管理を續けることの、損害の大なるべきを怖れて、本來は同年八月卅一日迄繼續すべき管理を、特に早めて三月卅一日に於て打切り、戰前の資本家に復歸すべきを通告し、[illegible]は同時に、三月卅一日限り現行協定を

破棄し、其の後に於ては、賃銀を引下ぐるのみならず、賃銀の**協定は、全國劃一的にせずして、各地方々々に於て爲すべきことを通知し、此の條件に從はざる時は、ロック・アウトをなすべきを告げた。**

此に於て炭坑夫組合は三角同盟に訴へたので、鐵道及び交通の二組合は四月八日總罷業を十二日より行ふべきことを宣言した。政府は非常時權力法によつて、非常狀態に在る旨を告げ、特別動員をなして變に備へた。恰も、狀況今回の罷業と類似してゐる。然るに三角同盟間の商議容易に成らず、遂に十五日に於て總罷業命令を撤回し、炭坑夫組合のみを窮境に見捨てた、英國勞働史上に於て此の日、千九百廿一年四月十五日は、ブラックフライデー（Black Friday）と稱して、永く汚辱の日と目せられ、事は鐵道勞働者組合の首領ジェー・エッチ・トーマス氏に責任ありとして、之より永く氏は勞働界の不信を負つて解けなかつた。炭坑夫組合は孤立無援の界にあつて、六月末迄戰つたが、遂に敵せずして敗れ、所謂千九百廿一年の賃銀協定を甘受するの止むなきに至り、同時に此の時を以て戰後の勞働運動は一轉機を劃し、資本家の逆襲又逆襲に、勞働組合は相次ついで後退し、組合員の離散するもの多く、千九百廿年に於て、勞働組合に屬した勞働者八百四十九萬三千なりしもの、千九百廿一年に於て減じて、五百五十八萬に下落した。英國勞働運動の**非境の極此に在りと云ふべきである。**

（六）

今千九百廿一年の賃銀協定を此に詳しく說くことは、余りに技術的に亘つて其の煩に堪へない。唯此の協定は一種の利潤分配制度を採つたもので、勞働者側にとつて不利な點は、第一に地方的に賃銀の協定を爲さしむることで、彼等が永く渴望して、戰時に於て漸く獲得した全國劃一的制度を拋棄したものなること、第二に此の制度に依る賃銀が當時の最低生活費を支拂ふに足りないこと、第三に賃銀支拂計算の基礎となるべき利益の有無に關して、單に純粹に石炭の採掘のみを考慮に置き、之と分離すべからざる副産物の製造から來る利益を全く計算の中に入れざること等であつた。

以上の協定は三年間繼續して千九百廿四年に至り、同年六月更に千九百廿四年賃銀協定成り、其の內容は前回に比し、少しく勞働者側に有利であつた。然るに廿一年に始まつた炭業界の不景氣は、僅に廿三年の始フランスのルール占領當時を除いては依然として持續し、此の年に入るや更に其の度を高め、炭坑主にして維持し切れなくなつて、炭坑を閉鎖したものは、千

九百廿四年五月一日から十一月末迄の七ヶ月に於て、百十一坑に及び、解雇された勞働者の數五萬九千に達した位である。從つて此の協定は炭坑主側にも勞働者側にも双方に不滿足で、早くから次の協定に對する畫策は双方から試みられてゐた。坑主側に於ては是非とも賃銀の引下を行はんとし、勞働者側は千九百廿一年の創痍漸く癒えて、雪辱の機會を待てゐた。翌千九百廿五年二月より炭坑主勞働者双方の代表者相集まつて、炭坑業不振の原因を調査し、六月に至るまで繼續された、此の時資本家側は同廿三日突如として、現協定は七月卅一日限り廢棄する旨を通知し來り、廿四日炭坑夫組合の執行委員會は本問題を以て、全英國の勞働運動の前に訴へることを議決した。而して七月一日坑主組合は新協定の基礎たるべき要項を發表し、賃銀は地方別に協定することを根本原則とすること、最低賃銀の保證を放棄すること、更に就業時間を八時間に復歸すべきこと、(此の點は自分の調べた範圍内に於ては了解出來ない事であるが、戰爭中にでも七時間制を採たものの樣である)を告げた。此の發表は明に炭坑夫組合に對する挑戰を意味するもので、此より後一ヶ月英國は鼎の沸くが如き混亂に陥るに至つた、恰も今回の罷業の約一年前で、其の直接原因となつたものである。

されば以下事件の發展を箇條的に記述するならば、七月二日炭坑夫の代表者會議招集せられて、滿場一致を以て炭坑主の[illegible]を拒絶すべきこと、賃銀は全國的に協定すること、生活費の增加に伴ふ賃銀以下を承諾せざること、八時間勞働制の復歸すべからざることを議決した。七月四日炭坑夫組合の幹事長アーサー・クックが永く計畫せる新産業同盟の議漸く熟し、炭坑、鐵道、交通、機械工、造船等の組合幹部協議に入る。其の包含する組合員二百五十萬を算し、組合の數五十に及ぶ。此に於て政府は海軍大臣ブリッヂマンをして調停に立てしめたるも、容易に成らず、政府は調査裁判を開始せんとしたるも、炭坑夫組合は之に參加するを拒絶し、七月十日勞働組合大會は特別委員を任命し、炭坑夫組合と連絡を採ることとし、別に今回の問題に對する炭坑主の態度を非難し、萬一炭坑夫組合が罷業をなす場合には、全勞働組合は其の背後に於て援助をなすべき旨を聲明し七月十七日新産業同盟の幹部相集つて、同盟規約起草をなしアーネスト・ビーヴィン氏を以て其幹事とした。

(七)

七月廿三日勞働組合大會の評議會は事件の處理一切を任され、廿五日交通勞働組合は、萬一炭坑主のロック・アウトの場合に、一切石炭の運搬を[illegible]をなし、更に廿七日

際運坑夫組合と國際交通勞働者組合も亦、英國に石炭を輸入せざるべきを宣言した。廿九日首相ボルドウインが勞資双方の代表者と会見せる際には、決して政府が補助金を下附して、調停を為すが如きことなしと明言したが、三十日勞働組合大會は炭坑夫組合に財政的援助を約し、罷業命令を發するの權能を特別委員に與へ、同夜愈々石炭の運搬を停止すると命令が特別委員から發せられた。此に於て首相ボルドウインは遂に意を決して、補助金下附によつて、坑主組合をして提案を撤回せしめ、かくして始めて全英國を未曾有の混亂に陷れんとした産業爭議は、危機一髪の際に救はれたのである。千九百廿一年結束を疑はれた三角同盟は此の時は其の陣容をより大にして、非常な威壓を加へたのと、勞働組合大會が全勞働界を指揮したる活躍は、頗る刮目すべきものがあつた。

補助金の下附とは、炭坑主側にて賃銀の引下を行はなければならないと云ふので、其の引下を行はれない代りに、政府が其の差額を下附しやうと云ふのである。此の補助金の下附は千九百廿六年即今年の四月末迄九ケ月繼續すべきもので、概算一億二三千萬圓と稱せられた。一方政府は昨年九月三日石炭調査委員を任命し、サー・ハーバート・サミエル氏を議長とし、サー・ウイリアム・ベベリッヂ、サー・ハーバート・ローレンス、ケンネッス・リーの三名を舉げた。此の委員四名は何れも保守黨自由黨に屬する人々で、此の調査の結果に多大の期待を寄することは出來なかつた。三月其の調査報告が發表せられて、補助金下附を停止すべきことと、炭坑夫の賃銀引下の止むべからざるを述べた。一方坑主組合は略前年七月宣言したると似た強硬な條件を固執し、他方炭坑夫組合は勞働組合大會、勞働黨と協議して、炭坑の國有を主張し、經營に付ては今直に豫期に、て、參考として勞働者の經營參加を提案した。其の要求は恰も往年のサンキー報告に髣髴してゐる、かくして余りに大きな勞資双方の間隙を抱いて、時は刻々として移つて補助金下附の期限たる四月末日に迫つたのである。事情は前年七月末と異る所がなかつた。唯問題の解決を九ケ月延期し、其の間に双方が來るべき決戰に窃に準備の時を與へたに止まつた。勞働者側が更に補助金下附を延期すべきを求めたるも、政府之を拒み、遂に有史以來未曾有の總同盟罷業は今年の五月一日から開始されたのである。之に參加するもの、三百六十萬と稱せられ、其の後の經過は外電の報ずるが如くである。自分は此に史實を新聞に繼續せしめて、筆を擱かねばならない。

(八)

今少しく運動中にある主要人物に付て語るならば、自分は新同盟の中心人物ビーヴインには會つたことはない又勞働組合大會の特別委員長たるジョージ・ヒックスにも一面識がない。鐵道從業者組合のトーマスは前勞働黨內閣當時の植民大臣で、其の帝國主義は保守派の人を喜ばせたと共に、急進派の人の不滿を買つた。一體に談笑の間に議論を纏める手腕や、議會に於て討論の應酬をする冴えた能力に至つては、彼は確に勞働黨中の偉才である。現に戰爭中、マクドーナルドが失意の境に在た際には、將來の勞働黨首領にして、又首相たるべきものは彼なりと囑目された。然し彼に欠けたるものは、一貫したる主義原理である。余りに變通の術に長じた彼は、組合の幹部としてはともかく、大政黨の首領たり台閣の宰相としては、人の信望を繋ぐに足りない。千九百廿十一年の三角同盟の瓦解は彼一人が責を負ふべきでないにしても、如何にも彼にして有勝ちの事と思はれる所に彼の弱點があつた。彼と對比してマクドーナルドを見る時に、堂々たる節操の士と云ふ感を抱かせる。永い教養の不足がその差を生じたことを思ふ時、人の生立が重要なものだと感ぜざるを得ない。

スマイリーは今は表面に示現しない。然し炭坑夫組合をして今日あらしめたのは、彼である。若し[illegible]運に[illegible]へてアカッスト・ベルが勞働者から一般的の[illegible]英國に求めるならば、スマイリーであらう、彼は勞働界の問題が紛糾する時に現はれてなだめ役をするに相應はしい。併て僕の千九百廿三年の組合大會に列席した時に、組合間に於ける爭奪に付て、議論沸騰して、果しがつかなかつた時、現はれて鞘をつけたのは彼であつた、傍人僕に囁いて曰はく、スマイリーでないと出來ない役割であると。數年前スマイリーに代つて、炭坑夫組合の會長の地位に就いたのは、ハーバート・スミスである。僕が千九百廿四年の七月炭坑夫組合の大會に列席した時に會たことがあつた。議長としての彼は如何にも冷靜である。人は前議長スマイリーはスユットランド人であつたので、熱情家で卓を叩いて論じたが、スミスはヨークシアの出身である爲、如何にも中部英國人らしい冷靜さを持ち、此の二人はよい對照だと云つてゐた。

フランク・ホッチスが勞働黨內閣に入るや、彼に代つて幹事長となつたのが、今度の罷業の一方の立場であるアーサー・クックである。彼は打見た所は容貌に於て、特別な印象を人に與へるものではない。人も亦材幹に於て到底クックはホッチスに及ばざること遠いと云ふ前幹事長が英國勞働界に[illegible]た位の[illegible]であつた丈、クック[illegible]

い。然し炭坑夫が早晩一決戰を試みねばならぬを思うて、南船北馬其の準備に怠りなかつたのは彼で、最近の新同盟は彼の努力に負ふ所大で、今度の罷業も彼が主要なる役割を演じたに違ひない。

(九)

然らば最後に勞資何れに其の曲が在るか、材料の充分でない外國人に此の種の判斷をすることは不可能であるが、私の知る限りに於て意見を述べるならば、今度の勞資の衝突は、直接には英國石炭が、貿易上に於て往年の地位を持續が出來ないことに原因してゐる。フランスが戰前主要な輸入國であつたのが、今は石炭を豐富に持つことになり、之に代はるべき獨逸は未だ充分に回復してゐない爲に、フランスへの輸入の減少を償ふに足らず、加ふるにアメリカが石炭輸出國として競爭に加はつたことである。更に石炭を國外に運ぶべき鐵道、交通等の費用が高まつた爲に生產費を加へたのと、最も重要なことは、英國炭坑の採掘が一番古い爲に、今は地下二千尺乃至三千尺の下に下り而も採掘の地位に着く爲には更に一哩三哩を歩まねばならないことになり、生產費が漸增の時期に入りつゝあることである。而も坑夫一人宛の產額も千八百九十四年乃至九八年の平均一、百八十六噸なりしもの千九百九年乃至十三年の平均一、百九十七噸に減じて來てゐる。英國勞働者の時間賃銀等の條件が大陸勞働者に比して、勝ることは云ふ迄もない。之等の事情は、資本家をして勞働者の條件を低下することによつて、國際競爭場裡に於ける不利を補ふことに至らしめたので、此の中に英國產業の苦境が明白に讀まれるのである。

然し一方に於て炭坑夫は充分の賃銀を得てゐるかと云ふに、必ずしもさうではない。千九百廿四年十二月石炭局の調査に依れば、當時戰時に比し生活費は八十パーセント增加せるに拘はらず賃銀は平均六十六パーセント增加せるに過ぎずと云ひ、千九百二十五年三月廿七日下院議員スチーブン・ウォルシュの說明によれば、炭坑夫の大部分は一週二磅以上の賃銀を得てゐないと云ふ。國外に於ける貿易を維持せんが爲に、生產者が共に其の犧牲を忍ばねばならないことは了解出來るとしても、それは獨り炭坑夫のみに犧牲を要求するに止まつて、炭坑主も亦等しく其の犧牲に甘んじつゝあるか否か、此に滿足なる答が得られないのである。假に炭坑主も亦平等に其の苦を同じくするとしても、炭坑業の組織は何等之れ以上に改善の余地なきか否か。話はサンキー報告に遡らねばならないし、今之を詳述するの暇がないが、英國石炭業程無秩序で無組織のものはないのであ

九百廿四年五月一日から十一月末迄の七ヶ月に於て、百十一坑に及び、解雇された勞働者の數五萬九千に達した位である。從つて此の協定は炭坑主側にも勞働者側にも双方に不滿足で、早くから次の協定に對する畫策は双方から試みられてゐた。坑主側に於ては是非とも賃銀の引下を行はんとし、勞働者側は千九百廿一年の創痍漸く癒えて、雪辱の機會を待てゐた。翌千九百廿五年二月より炭坑主勞働者双方の代表者相集まつて、炭坑業不振の原因を調査し、六月に至るまで繼續された、此の時資本家側は同廿三日突如として、現協定は七月卅一日限り廢棄する旨を通知し來り、廿四日炭坑夫組合の執行委員會は[illegible]坑夫の代表者會議招集せられて、滿場一致を以て炭坑主の[illegible]を拒絕すべきこと、賃銀は全國的に協定すること、生活費と[illegible]加に伴ふ賃銀以下を承諾せざること、八時間勞働制の復歸すべからざることを議決した。七月四日炭坑夫組合の幹事長アーサー・クックが永く計畫せる新産業同盟の議漸く熟し、炭坑、鐵道、交通、機械工、造船等の組合幹部協議に入る。其の包含する組合員二百五十萬を算し、組合の數五十に及ぶ。此に於て政府は海軍大臣ブリッヂマンをして調停に立てしめたるも、容易に成らず、政府は調査裁判を開始せんとしたるも、炭坑夫組合は之に參加するを拒絕し、七月十日勞働組合大會は特別委員を[illegible]路を採ることとし、別に今回の問題に[illegible]炭坑夫組合が罷業をなす場[illegible]すべき旨を聲明[illegible]

す。しかはあれども時節の移るに隨ひ、風俗もかはりもて行は

蓄…の…が、…

…の…に出現し、勞働界は之に贊意を表しつゝある。

…をも見…ざる裡に時代思想の動きを看取するを得たいか。

載されて好評を博した

て見れば又た、著書としての別の趣が

圓送料十七錢）

…には更に…を歩まねばならな

…生產費が…時期に入りつゝあることであ

…一人宛の產額も千八百九十四年乃至九八年の平均

ざるべきを宣言した。廿九日首相ボルドウィンが勞資双方の代表者と會見せる際には、決して政府が補助金を下附して、調停を爲すが如きことなしと明言したが、三十日勞働組合大會は炭坑夫組合に對政府援助を約し、…

…由家に屬する人々で、此の…とは出來なかつた。三月…下附を停止すべき…

る。炭坑主相互の間に協定し、販賣業者の間に協定をなすことによつて、換言すれば組織の整理をなすことによつて、英國炭業を救ひ、勞働者の苦境を救ふ路が、未だ試みられずして、殘されてゐるのである。此の最後の一途を外にして、勞働者に其の犠牲を求めても、彼等が唯々として盲從せざるは同情に値するのである。

然し私は此の罷業は恐らくは成功すまいと思ふ。勞働者側に準備の時間があつたと共に、政府に於ても周到の對策を凝らして來た。現に昨年七月十五日一議員の探知したる所に依れば、政府は萬一總罷業の際に海軍軍人をして産業に從事せしめ、其の場合に支拂ふべき報酬に付て命令を發したと云ふことである。早晩來るべき此の種の爭議に對して、保守主義を標傍せる政府が、最後迄も決戰するの準備をなさざる筈がない。殊に此の決戰は勞働者にとつては、敗北は單なる勞働條件の低下に止まると云へるかも知れない。然し資本家にとつては、確に革命である。產業組織の根本が日ならずして顚覆することを覺悟せねばならない最後の死戰である。又政府にとつては政府の存在の威信に關する所以であり、單に現保守黨政府の問題のみならず、政府と云ふもの、法律と秩序と云ふ名に於て、極力之を阻止せねばならない場合である。若し政府が屈するとすれば、これは産業勞働者がディクテートすることゝ[illegible]の命令に服することとなり、英國傳來の制度を根本から改造することである。英國人の牢乎動かすべからざる社會的觀念が之を容認しやうとは思はれない。勞働者にとつて之は產業の爭議であるが、政府にとつて之は無政府か政府かの取捨に關する問題になる。此に突入することによつて、勞働者は產業爭議としては多大の同情を寄する多くの味方を失ふであらうと思ふ。私は勞働者の立場に同情すると共に、結果は悲觀に傾きつゝある。

（十）

假令此の事件の結果はどうあらうとも、事件そのものの直接の結果以外に波及する影響は實に大きい。勞働者は敗北しても、あれ丈の陣容を整へたことに於て、既に社會に一大脅威を與へた。そしてそれによつて將來の發言に威重を加ふることは疑あるまい。そして英國勞働運動は、勞働黨內閣沒落以來、一旦產業爭議に向つたのが、今後再び主力を總選擧に注いで、一[illegible]會の多數黨を掌握せんとするであらう。

最後に補助金の下附と云ふ制度は、今後行はれるかどうか[illegible]ないが、資本主義を維持して往く爲めに國庫が[illegible]

が巨大に上ることは注意に値することである。失業保險の費用に付て、既に政府の支出は何億圓に及んでゐる。社會主義か、資本主義維持の爲に巨大の補助をするか、此の取捨に英國民は當面してある。學究の空論でなくて數字から來る損得の比較である丈に彼等の將來の進路は盡きざる興味がある、英國は今迄にも、壯大な學理によつて動かずして、經驗的の事實から一歩一歩と大きな旋回をして來たからである。

補助金の下附は勞働者の要求した所であつたとすれば、勞働運動の永い間の信條たりし自由貿易政策、保護政策反對の主張とどう關係するか。政府の保護も勞働者の保護を目的とするものならば、之を容認するの趣旨か、恐らくはさうであらう。保護政策なるものが、チエンバーレン當時と其の內容異にして、再び舞台の前景に出現し、勞働界は之に贊意を表しつゝある。此にも見えざる裡に時代思想の動きを看取するを得ないか。

發行六十餘日

六十五版賣盡す（壹版壹千部として計算す）

罪の渦

ゾラ作 井上勇譯

本書はゾラが最も露骨に色情事件を描抜したと云ふ斯有名なテレーズの全譯で併も半面の澁味キビキビした筆致は終に佛國政府の發賣禁止解禁と成り我國の原本輸入禁止を解かしめた

東京神田今川小路二

第百書房

振替東京七〇三七五番



近代脚本叢書

此名作・此名譯・各冊壹圓卅錢

此叢書十卷壹揃は貴下の書齋と腦智の泉を世界的文藝光に輝かす

ストリンドベリー作 島村民藏譯 **伯爵令嬢** 十六版

イブセン作 草野柴二譯 **海の夫人** 十一版

ハウプトマン作 小野秀雄譯 **馭者ヘンシェル** 十三版

ショオ作 楠山正雄譯 **運命の人** 八版

メーテルリング 若月紫蘭譯 **青い鳥**上下二卷 三十版

ワイルド作 若月紫蘭譯 **サロメ** 二十版

ホフマンスータル 伊庭孝譯 **窓に立てる女** 三版

作 **戀はあ る人** 五版

メーテルリング 譯 **ペリアスと** 九版

して、所々の風俗を作りし

す、しかはあれども時節の移るに随ひ、風俗もかはりもて行し



十年間に貳千五百圓の貯金の通帳を無くして仕舞ふも同じだと云ふ煙草も一度『カロット』を口にすれば

再び煙草は吸へぬ、乞ふ明かなる事實に聞け!!

實業之日本社代理部と榮川堂主人

先年十月十三日煙草代用品「カロット」發賣元の榮川堂へ電話があつて實業之日本社代理部から「カロット」の御註文がありました店員が此事を主人に報告しますと主人は一明日私自身で代理部へ上つて「カロット」を御説明申さう」と云つて主人は翌十五日午前十時「カロット」一組を携へて實業之日本社代理部を御訪問申しました。丁度社員の諸君は熱心に執務の最中でありましたが快く迎へて呉れました、其處で榮川堂主は自身來社せる眞意を述べて「カロット」發賣に至る迄の苦心と確信を申上げました、其うして先づ一社員の煙草好きな方に御試を願ひました、すると其社員の方は早速　カロット」を取上てお試しになりました、暫して其方は「カロット」を口より放して今度は卷煙草をお吸ひになりましたが、社員の方「やつ!之は驚いた、之は全く煙草が吸へない、煙草がいやになりました、到底煙草等吸へないですね!、」驚いたと仰有いたしました、此時迄發賣主の言葉に對して半信半疑の眼を持つて見てお出になつた他の社員の方々も「どれ僕も一つ、」「僕もやつて見よう」「僕も」と云ふ風に余社員の方が總立になつて「カロット」を取り上げてお試しになりました。

「やあこれでは煙草は吸へませんね!」「全く煙草が不味くなつて仕舞つた、驚いた」と口々に御賞讃下さいました。其處で更に店主は口を開いて一度「カロット」を御用ひになれば何等の努力を要せずして斷じて再び煙草は吸へなくなると云ふ事と、幸ひに近來「カロット」が多くの人に認められて來た事の本懷を述べて暇をして參りました、歸るに先だつて社員の方々は此品の將來に對する御奬勵の言葉を述べて下さいました。

天下堂は銀座、時事新報社に向つて左の通り左側八軒目です。何うか一度誰方も御來店御試しの上ニコチンの中毒の害からのがれて下さいまし、兎に角弊堂は確信を以つて發賣致して居りますから御來店御實驗の程願ひます。……………

特徴

外見恰も卷煙草を用ゆるに異なざるを以て手持無沙汰の事なく適量朝鮮人蔘の精氣を含有せるを以て朝鮮人蔘が具有せる諸效用の凡てを人體に與ふると同時に溫雅なる香氣と忘れ難き清涼なる甘味とは輕き刺戟と快感とを永く口中に殘し一度之を口に試みたる者は全く煙草に對する永き嗜好を離れて斷じて再び顧みざるに至る殊に口中惡臭を發する時又は食後夜中に至りて口中「ねばり」を生ずる時其他散歩等に之を常用する者は身心の健康期して待つべく且永年の「ニコチン」中毒を完治すべし。

東京府大森不入斗四五一

榮川堂

振替東京五二九壹壹

カロット（凡百日分）

金貳圓五十錢（ベークライト製パイプ付）

金參圓五十錢（サック入象牙製パイプ付）

送料（内地十八錢 臺、朝、樺四十五錢）

引替送料（内地三十錢 臺、朝、樺五十五錢）

御註文は振替利用を便とす 尚ほ御都合によりては[illegible]代金引換小包にて送品可仕候

代理店 東京市京橋區丞山町十三番地

天下堂

藝術の社會的地位に就いて

游歐雜記——歸來(一)——

阿部次郎

畠山箕山の「色道大鏡」は、その志すところの珍らしさと、これに捧げられた努力の眞摯な點とに於いて、天下稀に見るの書である。彼がこの書に於いて志すところは遊里の內面的（道德的といふ言葉を用ゐることも出來るであらう）立法である。彼は、政治家の遊廓政策とは全然異れる意味に於いて、理想的な「遊び」の道を——所謂「色道」を——建立するために、その生涯の最も多產なるべき三十余年を捧げた、さうして漸く「寛文格」「寛文式」なるものを定めることが出來た。「抑昔日十三歲の秋より此道に列座して（「まさり草」序文、）道に遊ぶこと十七年、廿九の年にふと「色道大鏡」の著述を思ひたつてから

「諸方の風俗人傳にのみ聞ては、委敷勘辨しがたきが故に、或は關東に走り、或は中國より九州に渡り、其郭邊に經歷して、所々の風儀を伺ふ、畿內に小地の遊郭は、累年是を見及び、六條の過し昔は、古老の達人に事を尋ねてしるす、しかはあれども時節の移るに隨ひ、風俗もかはりもて行ば、これを委しくわきまへしらんがために、人のそしり

をかへり見ず、老年にいたる迄當道に立まじり、諸郭をめぐりて此書をしるしぬ、一年頃此書に心を費しつるを、世の人片腹いたくおもふべけれども、よき道のことはよき人の所作にあらずや、當道の教道をあきらむる品々、誰か是に心を留てしるしをかんと思ふが故に、身を捨て此書を撰み出しぬ……」

「寛文格」「寛文式」等の名稱によつて推測すれば、この書の主要な部分が出來上つたのは、恐らく寛文年間のことであらう。さうして

「一此書を編る中に、いまだ書綴すべきと思ひて、少々綴りかけたる物八巻有。然といへども、余氣力おとろへ、病つきたれば、打捨ちらして二たび見ざりしうちに思へば死も遠かるまじ、跡にて人のあざけらんもよしなしと、是をさへ引やりて、なきものにすべきと覺悟しつる處に、累年のこゝろざしを、いかで空しくはすると、朋友に諫められて、力なく書立て人に譲り侍る、後人のそしりまのあたりなれば、若葉のなぐさみ草ともならば、罪赦したべし」

といふやうな序文をつけて延寶六戊午の年に彼の手を離れたのである。西暦で云へば千六百七十八年、歐羅巴に於いては既にバロックの時代であるが、日本にあつては寛永から元祿に向つて流れつゝある Frührenaissance のころである。恐らくこの時代の文化の潮流の中に於いてのみ、このやうな不思議にユニークな著作が産れ得たのであらう。一生の心血を灑いで、類書中最も眞面目な（或意味に於いては官僚的とさへ云ひ得るであらう）。惡巫山戯を超越した生涯作（ライフ・ウァーク）を殘した點を買つてやれば、この書に漢文の序を書いた某が

此有二呑舟軒箕山者一、其先出川上總介源泰国之後裔也、從二弱冠一遊二心于斯道一[illegible]

[illegible]

歸ニ塲々、風俗區々不レ果、因茲歷ニ行六十餘州ー、積年三十有餘而始作ニ爲是書ー、以題曰ニ色道大鏡ー、比ニ左氏三都ー、猶有レ光者乎、嗚呼山者所謂當道之巨擘者也……

と云つてゐるのは、必ずしも狂愚不倫の言とのみ云ふことが出來まい。

此書は全部十八卷、寫本によつてのみ傳つたといふことであるが、明治四十二年始めて國書刊行會の續燕石十種中にその九卷が收錄された。第一卷（名目抄）、第二卷（寛文格）、第三卷（寛文式上）、第四卷（寛文式下）、第六卷（心中部）、第七卷（器財部）、第八卷（音曲部）、第十二卷（遊郭）、第十七卷（扶桑列女傳）がこれである。他に第十五卷雜談部の一部分が經邦といふ人の集めた「吉野傳」（燕石十種本）の中に引用されてゐることを私は發見した。爾餘の八卷は未だ何處に隱れてゐるかを知らない。

私は前に「まさりぐさ」の序文を箕山の著として引用した。この事については少しく考證めいた事を附け加へて置く必要があるであらう。同書は明曆二年（西曆千六百五十六年）に開板された遊女評判記である。その作者虛光庵眞月居士が畠山箕山の戲號らしいと云ふことは、石川巖氏が既に「推せられ」たところである（書物往來叢書、花街篇上、はしがき）。さうして私も亦同氏の推測に左袒すべき理由あることを思ふ。第一の理由は「まさりくさ」の序文が「色道大鏡」の著者の年少氣鋭時代の豪語として極めてふさはしいものであるからである——

「抑昔日十三歲の秋より此道に列座して、振袖の下より手をしめ、目配せ抔に採れて、翌年の末より自ら戀慕對談の實否を糺す。かるが故に我世に出て三十年、道を見る事十有八年、旦夕斷絕なく修して、當道至極の理を知り、而して

「我斯道を立て、始めて之を色道と名付く、予時行ら終つて後、誰か色道の開基となつて、若輩の妄人を示さんや。我今大極の格式を定め置かずば、末世の輩當しく邪路に入て、人氣散亂せん事を悲み、救世の大願を起し、舊年の春より思ひ立ちて深秘決談抄といふ貳十卷の書を編集す。然りと雖も所勞に冒され遊宴に引かれ、徒らに匣中の底に入れて、未だ成就し難し。若し予存命の内に首尾せしめたらば末代の重寶となさん。……而して我れこの道に入て世間退出の身となる事、狂人に等しく世の人思へり。譬へば鳥魚は林水に飽かず、その心にあらねばその心を知らざる類に歟、また妻子眷屬を持ちて、世を貪る心のみあらば、いかでか世俗の業法に洩れんや。只我一人かたちを風雲になぞらへ、身を草葉の露に置く、元より短才無智の身なれば、他の道を窺ひて、豈天下隨一の教主とならんや。是を惟へばこの道に至り、輕身を棄てん事何惜むべけんや。濁世の凡俗譽るとも悦ばじ、誹るとも悲まじ。賴母しきかな〳〵、當道に於ては一天四海を掌の中に納め置きたり……」(引用者圏點)

色道の開基として萬世の格式を定めんことを志し、世間から狂人と見られることさへ厭はぬ意氣込を持つ者が、時を同じくして京都に二人生れあふことは極めて考へ難いことと云はなければならぬ。

第二の理由は、當時三十であつた「まさりくさ」の著者が「舊年の春より思ひ立ちて」といつてゐることと、「色道大鏡」の著者が「予二十九年より風と心にうかびて催し出る」といつてゐることとが符節を合せるやうに合つてゐることである。さうして「まさりくさ」に豫告された深秘決談抄の名も亦、色道大鏡の漢文の序者の「自壯齡嘗憶著斯道奥秘」といふ言葉と吻合する。假に兩書の著者は人を異にして偶然志を等しくしたに過ぎないと考へることが可能であるとしても、兩人ともに二十九の年に同様の心願を立てたのはあまりに不思議な契合と云はなければならぬ。

さうして第三の理由は、藤本氏の「名人忌日錄」に從つて「寛永元申年六月二十一日歿享歳七十七」とあることを信

すれば、明暦二年は丁度箕山が二十九の年に相當して、「我世に出て三十年」とあるのと僅かに一年の差異あるのみであるからである。固よりこの一年の相異を如何に說明すべきかは私にはわからない。名人忌辰錄には時として數字の誤植があるから、この記事の根據を突とめれば、或ひは七十八と訂正することが出來るかも知れない。又「まさりくさ」の著者が三十と書いたのはたゞ概數で、「色道大鏡」に二十九の年と書いてあるのは、「まさり草」の出來る前年ではなくてそれが開板された年を意味してゐるのかもわからない。或ひは「まさり草」の著者が當年思ひついたことを一年前に延長して、自分の思想の淵源を古くするために虛勢を張つたのだと考へることも亦出來るであう。孰れにしても、一年の差異は、「まさり草」の著者と箕山とを別人にするよりも、寧ろ同一人と見る方に有力な證據を提供してゐると考へるのが自然である。

寶永元年七十七歲若くは七十八歲を以て歿したものとすれば、箕山は寬永四五年頃（西曆千六百二十七八年頃）三代家光が將軍となつて間もなく、此世に產れたと見なければならぬ。貞德門下に遊んで俳人の端くれとなつたことを除けば、彼の出身敎養閱歷共に詳かでないが、「まさりくさ」と「色道大鏡」とを連結して考へることを許されるならば、彼の生を貫く主題はおのづから明かである。彼は「鳥魚は林水に飽かぬ」やうに色道に遊んで飽くことを知らず、「まさり草」の序文に、三十にして未だ妻帶せぬ趣をほのめかしてゐるところを見ても、彼の「世間を退出」した熱心は想像すべきである。西鶴の「好色一代男」（天和二年、西曆一六八二）に先つこと四十年前に、彼は既に世之介から西鶴によつて附加された誇張的な空想的な分子を取去つてこれに野心と覇氣とを加へたやうな實在の人物として生活してゐたであらう。六條の遊廓が島原に移された寬永十八年には、彼は最早春を解する少年であつた。京都の名妓吉野（德子）が灰屋紹益の貞淑な妻として、寬永二十二年に逝いた頃は、彼が「此道に列座した」十三の秋を越すこと既に三四年である。「鄰をば

花なき里になしにけり吉野は死手の山に移して」といふ當時一般の痛哭は、彼の若い心にもその反響を喚び出したであらう。江戸の吉原が山谷に移つて新吉原となつた明暦三年は、彼の「まさり草」が刊行された翌年である。仙臺侯に殺されたといふ傳說のある萬治高尾（その實彼女の死は病死らしい廓内の悲劇が當時の名妓に附會されることは、享保の玉菊にあつても同樣である、原武太夫太田南畝等「高尾考」京山「高尾考」等參照）全盛のころは、箕山が色道行脚のふり出しに近い。「さてはもみぢの紋をめしたるが高尾さまにやと問へば、中々の事よ、あれ御らんぜよ、あのやうな生れ付もある事にや、ま事に天のなせるれいしつにこそ、すらりしやんとしたなりふりのしほらしさ、みめくつきと玉のやうなるなさけの程ひとしほにて、心いきよの常ならず、人のとりさた所のちさう、此君にますはなし」（高屛風くだ物語、京山の高尾考より引用する）と話し合ひながら、傾城道中を見物してゐた群集のうちに、當時三十幾歲の箕山がまじつてゐたと考へることも、必ずしも不可能ではないのである。かくて「東のかた奥武に到り、西のかた肥筑を究め」、寛文なにがしの年、四十余歲にして「色道大鏡」の主要部分は出來上つたのであらう。小歌や淨瑠璃をひき、遊里や樂道の言葉を使つて洒落のめした芭蕉の「貝おほひ」がほゞ時を同じくして出たことを思へば、凡そ如何なる雰圍氣がこの時代の上に漂つてゐたかは想見すべきである。併し箕山はその後も病弱の間に猶色道大鏡の筆を捨てず、延寶六年朋友の勸說に從つて兎に角これを完成した頃には、彼は既に五十の坂を越してゐた。これに次ぐ天和貞享元祿の二十七八年如何に過したかは明かでないが、西鶴と彼の追隨者の浮世草子が盛んに世に行はれた時代、近松が漸くその筆を世話物に轉じた時期にその老齡を送つたことは、色々の意味で感慨の深かかつたことであらう。箕山が自ら自己の上に課した不思議な使命と、この使命を果すための勞苦と熱中とは、このやうな遊里勃興時代を背景としてのみ始めて理解される。そのなすところが如何に人生の正道を踏み外してゐるにもせよ、兎に角一人の鬼氣多い野心家が、その生涯をこれ

に捧げて悔いなかつたといふ事實は、その時代のうちに一種の欝勃たる精神流が流れてゐて、彼を捲き込むに足るほどの渦巻を形成してゐたことを證明する。この精神流の正體を見究めることは、一つの時代を正しく理解せむとする者にとつて、回避することを許されぬ一つの課題である。

禿より物かくことをせんにせよ、手のよからぬはゆかしげもなし
いひつけし事より外に何事も、しらぬふりする禿ゆかしき
新艘の男をふるは行末の、ものにならずのしるしなりけり
傾城の藝はあまたにありぬとも、人のしのぶは小うた三味線
傾城は常に心をひろくして、借錢するをいとはぬぞよき
傾城はおさ〳〵としてしとやかに、底のうはきを誰もこのめる

これは箕山が「寛文式」の下の巻首に列記せる一種の道歌のうちから抜粹したものである。彼が遊女の理想を何處に置いたかは、これ等の數首の歌によつても推想することが出來るであらう。彼女は「遊」女として、一般の女性のうちでも、最初から特殊な位置に置かれてゐる。彼女は賢母でも良妻でもない一人の「遊」女として、男を心持よく「遊ばせる」稟性と手腕とを最大の資格としなければならぬ。併し男を遊ばせるために最も必要なものは、必ずしも彼女の肉體的條件ではない。寧ろ一種特別な精神的教養に光被されることによつて。此等の肉體的優越も始めて充分の牽引力を發揮する。「ゆかしさ」「心のひろさ」「しとやかさ」「おさ〳〵しやんとした氣性」、さうして「男をふらぬ浮氣」――

此等の心性を禿のうちから煉り上げ磨き立てゝ、彼女は始めて立派な一人前の傾城となることが出來るのである。やうな遊女の「德」の或るものは固より一般人間的である、少くとも一般女性的である。併し「ゆかしさ」や「しとやかさ」や「心の廣さ」や、若くは手を書くわざ、小唄三味線などのTüchtigkeitの外に、特に遊女として要求される或程の德に至つては、町女房として、若くは貞淑な女性としてあるべからざるもの、反道德的なものが混入するのは自然の數である。新造として「ものにならず」の極印を捺されることを避けるためには、彼女は「男をふらぬ」修養を積まなければならぬ。一流の遊女として廓に鳴らさうとするものは「借錢するを厭はぬ」ことによつてその「心のひろさ」を具體化する必要がある。さうして彼女は又「底の浮氣」によつて萬人の愛を身に集めなければならないのである。かういふやうな遊女の德は如何にして基礎付けられることが出來るか。それは地女に對する輕蔑や、通用の功利道德に對する叛逆を基礎として、徹底的に建立せられた遊里的人生觀から生れて來たのであるか。吾々が後に觀察しようとする「ひとりね」の中には確かにこのやうな輕蔑や叛逆の傾向がある、「地女め」との對照に於て「女郎樣」を崇拜する一種のヒロイズムがある。併し「色道大鏡」にあつては、その基くところは極めて常識的心學的な功利主義である。宮城野のせりふを借用すれば、「勤め大事に思ふ」のが遊女といふものの商賣冥利であればこそ、彼女は「浮川竹の身の」義務として、男の最もよき遊び物とならなければならないのである。故に「借錢」を勸め「底の浮氣」を勸むる道歌は又次のやうな心學講義と、平氣な顔をして並立することが出來るのである——

大切に親方思ふ女郎こそ、つねにその身も冥加ありけれ
傍輩を數ならぬとて侮するな、めぐめばつねに身のためとなる

私は今茲に、知れきつた事柄を繰返して、このやうな常識的道德觀を表示してゐる餘裕を有たない。吾々は此處に明

かにすることを要するのは、此種の常識主義の埒内にあつて、人間の美的本能がそれほど自己充足の途を開拓し、どれほどその中に風韻を創造し得たかにある。

24

太夫は遊里の女王である。彼女は下郎より立身せる豐臣秀吉のやうに、最下級から叩き上げて最上の位に昇るのではない。禿だちから特に選ばれた者として、體を磨かせ、藝を仕込み、美音無雙のほまれを得べき鶯のやうに優れた姉女郎に付けて教育されるのである。固より如何なる見巧者の目にも見あやまりといふものがある、太夫として育てられても太夫の職に堪へないものに對しては「太夫おろし」といふことがあり、天神として突出された者のうちにも、その技倆如何によつては「太夫あがり」といふことがある。さうして太夫、天神、圍等の等級を上下させることは土地によつて色々の品があるが、「元祿太平記」の著者が吉原の遊女について云つてゐることは、大體に於いて寛文の世にも、又島原と新町とにも通用するであらう——「二千に近き首帳、太夫はやう／＼四人、數少しといへども、此地の松の育て樣上方と違ふて、其位を與ふるに、眉目容(みめかたち)は勿論、諸藝おつとつて能(よ)くこなし、座付、盃、はり、口舌(くぜつ)一つも欠ては成ぬ事、さあるに因て前金を打ち、女護島へ渡り撰取にしてからが、思ふ樣には取出されず、千人の內より百人撰び、百人すぐつて十人、十人の內にて五人三人拾ひとり其職に備ふ、」——その撰擇の嚴正な點に於いて、吉原は他の二廓に優れてゐたであらうが、凡そ遊廓らしい遊廓に於いて、太夫撰擇の精神と方針とが皆此處にあつたであらうとは、德川時代の階級主義から推しても想像することが出來る。太夫は遊女といふ理念(イデー)の具現である、理想(イデアール)である。縱令それはその數に於いては甚だ僅少であつても、遊里の旗幟として又模範として、一般の氣風を高め、全體の品格を維持するといふ中

心的意義を持つ。從つて遊女の教育は先づ太夫を育てることを以て樞軸としなければならぬ。

太夫は固より美しくなければならない。その美しさは素質と共に「磨き」上げることが必要である。併しこれを磨くにはおのづから法あり、最も必要な部分を、自然を損はぬほどに磨き立てるのを最上とする。「色道大鏡」の著者に從へば——

「禿の時より磨きたつるには、いづくにおろかはなけれども、耳のわき、うなじのあたりを專に磨べし、いかに餘のかたをあらためたりとも、此處黒きはおぼえ劣り拙く見ゆ、生れつきにもよるべけれど、實は年を重ねてみがきたらむには、そのしるしなくてやはあるべき。」

「傾城の顏に假粧する事これを制する處也、但し新艘立の女郎少しの間は是をゆるす、月を經ては必とゞむべし。端女郎はいかほども心まかせにぬるべし、その故は局に入來る輩、其善惡を辨へされば、たゞ色白く見えたる計りよし、擧女郎の年經たるにも、折々假粧する女かたへにあり、是よからぬ事也、最停止すべし。抑傾城といふは禿立より朝夕五體を磨き上げて糚なき貌を本とす。道に長ぜる人は傾城の色黒きとて嫌はず、色くろき女郎は黒きまゝにておくべし。是生れつきにて不たしなみと云はず。昔天が下しろしめたる君は、女の顏のいたく白きを嫌はせ給ひて、淺黒きを好ませ給へり、是御物好のたけさせ給ふ故なりと感じおぼゆ。」

まことに「傾城といふは禿立より朝夕五體を磨き上げて、糚なき貌を本とす」、色の黒きは「生れつきにて不たしなみと云はず」、不たしなみこそ彼女の最も避けなければならぬところである。さうしてこのたしなみは、髮の結ひやう、笄わげの用ゐやう、額髮ののばしやう、爪の取りやうに至るまで巨細に亘つて規定される。特に傾城のたしなみを見するは衣服である、小袖、打掛、帯の結びやうから、二布の寸法、下帯の色まで、細かな吟味と趣味とが行届いてゐなけれ

ばならぬ。併し此等の吟味もその極意は身に合ふと合はぬとにある——

「傾城の衣裳を、客の前へ着かへ出る事、兩三度までを許す、帶は二色までを許す、その上は然るべからず。大寄せの座などにて、度々改ること初心のいたりなり。六條の時、太夫十八人の大寄あり、さなきだに此時の上職どもは、莊嚴常にあたりも輝くばかりなるに、此日は晴の會なりとて、あらたに衣裳を改む。綾羅錦繍をまとひ、金色の光座に充ちて、偏に安養淨土に異ならず。此時吉野（諱徳子）上客たりけるが、いまだ出座なし、いかにと問へば、曉天まで起居給ひしが、いまだしづまりて御はすといふ。さらば夢驚かし申せとて、座中より使をたてしに目をさまして、はやいづれも來り給ひつるか、それへ參りなんと、寢所にて手水を請ひ、ねみだれ髮にて座に出たり。白綾の肌着に、無地なる黑き物二つ重ね着て、紫のくゝし帶をまはし／＼出つるが、數輩並居たる女郎を越て、座上に著たる體あつと感じられて、暫く挨拶もしがたかりけるとかや、その座におはしける歷々の御方、予にかたらせ給ひけるまゝ書つけ侍る」。

併したしなみの極致は固より心にある。心のあらはれにある。名ある傾城は、揚屋入り、貰ひ、夜起、朝込などの平生から、口舌、離別の品々に至るまで、應揚に、情深く、品格を保ちつゝ行動しなければならぬ——

「傾城男と一座する時、ふと身のかゆき事あるに、みづからかくことよろしからず、大かたは堪忍すべし。太鼓女郎禿などに教へてかかせなどするはさもあらんか。とかく腰より下のかたをかく事見ぐるし。蟲などのさすやうにて、いかふこたへ難くば其座を立ちて内證に入るべし。男の見る所にて立ながらゐどころのあたりをかく事、もつての外見ぐるしき次第なり……」

「蚊帳へ入るとき、かいつくまひて蚊をはらひ、さしうつぶきて入る事風流たらず、又蚊帳のすそにて蚊を拂ひ入るは

猶々見ぐるし、是よき女郎のせぬこと也。附物の女郎か禿にても、蚊をよく拂はせて、その拂ふ内に立ながら、蚊屋をはるかに揚て、頭を少し傾ぶけて入るをよしとす……とかく蚊帳うつりのふためきたるはせこつきて風流めかず、なるほどゆるやかなるをよしとす。

評曰、立ながら蚊帳にうつる事、勿論蚊は追ひ拂ふべけれど、さしうつぶきて入るにさへ蚊の入る事あり、まして立ながら入るは、蚊の入らずやはあるべき。しかはあれど、蚊は入るともいらずとも、蚊帳うつりはおほやうなるよし。もし蚊の入りなばつき／＼をよびてやかすべし、ひとつも蚊を入れじと蚊帳のすそを引かづきて入たるなどは、さまよからぬとしるべし。」

特に女郎のお里を暴露し易きものは、夜起のときの食事である。凡て遊女は客の前で物を食ふことを避けなければならないが、特に夜更に起きて客のために食事を調へるときには、「太夫天神は申におよばず、かこひ端女郎にいたるまで、酒の外物くふ事曾てあるべからず、何ほどなじみの男こゝろやすき中にても、ゆめ／＼物くふべからず、もし水物などして、是非といひたらば一口などは吸ふべし、湯漬やうの物も無用の事也、唯すゝまぬといひておくべし、臺所の調度ふつつかなる物の名、口にとなふべからず」——

「たゞ女郎は喰物料理がたには、不調法にしどけなきこそ床しけれ。あしくとも太鼓まかせにしたらむは、是にはまさるべきとおもはれ侍る。北川家の貞子野風が夜起の時、ふは／＼にするとて玉子を人のわるを見つゝ、おもしろがりて我にわらさせ給へとたのむ。ともかくもとさし出せば、かいとりてわるに一つもわり得ず、皆々うちくだきながらよごれたる手をさし出、是何とすべきと詫あへりしさま、けだかくなつかしかりし」。

かくて穢れた太夫たちは、賓客につけて、[illegible]育つた大名の[illegible]のやうな、[illegible]

要求される。併しこの要求の根柢に、それが最も快く男を遊ばせる所以であるといふ理由が隠されてゐることを悟ると き、喜見城の幻は直ちに消えて、此等の女菩薩が事實上投げ込まれてゐる地獄の深淵が一時に口を開くことを感ずるで あらう。「後世を願ふ傾城」は、矛盾のやうであつて矛盾ではない。寛文の昔にもこの流の傾城が少くなかつたことは、箕山が態々これを戒めてゐることによつても想像される。さうしてこの點に於ける彼の奇異なる論法は、結局彼の倫理的立脚地の不徹底と、遊女といふ職業の倫理化が遂に不可能なことを暴露せずにはゐない——

「此頃何者のすゝめけるにや、後世を願ふ傾世おほかり、傾世の似合はぬ事なれば、よも名聞には願はじ、定めて眞實なるべけれど、眞實と思へば猶可笑しくうるさく思はれ侍る……遊女の所業といふは、男に無常を知らせず、儉約を忘れ歡樂に誇らするやうにと仕立る、傾城の身にして面々血脈を請て守りにおさめ頸にかくる、平生旦夕の看經怠らず、剰へ客遊翫の座にても、袂より念珠をとり出、所作をくるは何事ぞや。殊勝なりと見られむためか、又は後世を願ふ傾城なれば、僞あらじと思はせむ謀かと思へば、眞實に尊がると見えたり、笑止なるかな〳〵。是佛を嫌つた後世をな願ひそといふにはあらず、心底に深く念じて表向を謹めといふ事也。たとへば傾城の眞實にひだるきとて、客の前にてふつゝかに物くひてよからむや。後世を願ふも是にひとし。傾城不斷の宿にては、佛に向ひて香華をとり、珠數をつまぐり、經陀羅尼をも續み、潔齋するなどは殊勝にも聞え尤とも思はるゝに、何ぞや平生珠數血脈を身に離たされば、假の男の添臥にも、珠數は不浄の○○に汚れ、血脈袋は蒲團の端に置捨て、ともすれば是にかゝるなど、誠に勿體なき次第ならずや。總じて傾國は佛の道に疎く、精進をするだに、それとはなしに改るをこそよしとはすれ。今日は何の精進かの精進などといひ、ことはるこそ名聞ぐるしけれ。そも精進にあらぬ日なりとても、客の前にて魚肉をくふものかは。とにかく目にたゝず、耳にたゝぬやうなるこそ、飽かず向はまほしけれ」(引用者圏點)

遊廓といふ世界のつひの寂しさは、茲に至つて覆ひかくすわけに行かない。それは徹底せる誠を以て生きることを許されぬ世界である。名聞、品位、見た目のゆかしさ——かういふ社交的な諸徳の上に建立されてゐる點に於いて、それは今も昔も變るところなき貴族社會と弱點を等しくする。寧ろそれは貴族社會に對する愛と憧憬とから造り出された Homunkulus とも名け得るであらう。金錢の力によりて平民も亦あづかり得る貴族社會、この意味に於いては平民のために準備された自由社會——而も徹底せる誠を以て生活し得る自由を享受するためには、結局人はこの里の「格式」をも破壞して「野暮」と「愚痴」とに歸らなければならぬやうな形式社會、併しこの形式の中に盛られたゆかしさ、品位、しほらしさ、ぽつとりとして鷹揚さ——さうして又意地と張りとよつて苦味を調合された心の遊戲が人の心を捕へる。「余にとつては——如何にして余の外なるものがあり得よう。其處には何の外なるものもない。とはいへ我等はあらゆる聲によつてこの事を忘れる。忘るゝといふことの如何に愛すべきかな。」人が物によつて自ら爽かにせむがために、名と聲とが物に贈られたのではないであらうか。物言ふとは美しき愚劣事である。是を以て人は一切の物の上に踊るのである。「凡ての言葉と凡ての聲の詐りとは如何に愛すべきかな。聲を以て我々の愛は樣々なる色の虹の上に踊るのである」(「ツアラツストラ如是說」)——德川時代の心にとつて、遊廓は恐らくこの「聲、」この「踊り、」この「詐り、」この「饒舌」であつたのである。さうしてこの「虹の上の踊り」の美しさが浮世繪や音曲の隅々にまで泌み込んでゐるのである。併しこの世界のつひの寂しさ、完き人たるを得ぬホムンクルスの嘆きも亦、濃淡色々の程度に於いて憂愁の影を投げる。かの美しさに添ふこの憂愁の影こそ、德川時代の遊里藝術を、人生の正道を歩まむとする人々の心に繋ぐ橋梁である。

箕山の「色道」は悪所道の故も道學的なものである。或意味に於いては、それは遊蕩と世間道との調和を志してゐると云ふことも出來るであらう。他の遊里文學はこれに比べれば、遙かに放埒で、その點でもつと徹底してゐる。併し彼の「理想」が當時の遊里や遊客の要求を離れて空に揭げられた規則ではなくて、當時の事實に基いて時代の意識を代表してゐるものであることは他の遊里文學との比較によつて容易に證明することが出來る。「色道大鏡」の完成後數年、天和二年版の「好色一代男」の著者に從ふも、「女郎は浮氣らしく見えて心の賢きが上物と亡八の又市が申せし、さもあるべし」である。さうして彼が「起たで叶はぬ用事」の起ち方にも遊女の品格を見ようとする色好みの細かさは、箕山が蚊帳の入り方や卵のわり方に、傾城の「風流」と「氣高さなつかしさ」を認めたのと軌を一つにする。――「此太夫(新町藤屋の吾妻)は志深く、物和に、賢く、行義ほんとして、座に着きてより假にも勝手へ起たず、禿の噺く辭もなく、屆けの文も人の目を忍ばず、ありべい懸りをつひ書きて、其日の敵の心を背かず、まして始の出會には、なほ一座を困め、起たで叶はぬ用事にも、前栽に下りて秋の袖垣など物靜かに眺めて、露分衣かいどり前して、のれ板の戸明くるをも音せず、下地窓より外を覗かず……出ても座敷に輕くあがらず、築山の景色を様子ありげに見渡し、何時となく手水つかひて、其一炷袖に留めて直らるゝこそ、身持はかくありたきものなれ」。更に西鶴流の執拗を以て追跡せる「逢はねば知れぬ好き事」の描寫は、固より此處に引用すべき限りではないが、其處にも亦遊女道の理想――名聞、なさけ、意地、手管の數々が潜んでゐることは云ふまでもない。吉野が小刀鍛冶の弟子の切なき戀に許したなさけと、「譯知の世之介様なれば何隠すべき」とその色容にこれを打あけた大らかさ(卷の五、三十五歳)。初音の男をあや

つる才氣と手管（卷の六、四十二歲）。「眼色微かに靑み入る」野秋の深なさけ（同上、四十二歲）。「盗逢」に心意氣を立せる高雄の要領（卷の七、五十二歲）――かういふやうな遊女の「身持」は一面から云へば固より當時の遊冶郎の隨喜渴仰から生れた夢想である。併しそのうちに事實によつて構想された幾つかのエピソードあり得ることは、例へば吉野の話によつても推察される（燕石十種本「吉野傳」參照）。わけて理想的な遊女の「浮氣」として吾々の注目をひくものは「野秋兩夫に見ゆる事」である。必ずしも多くの男に心を許すことを意味せぬ遊女の浮氣、たゞわさ／＼と陽氣に賑かに男を遊ばせる氣性の面白さを意味する遊女の浮氣が、此處では二人の男に對する心からの愛にまで深められる。世之介と傳七と「何れを思ひ、何れを思ふまじきにあらねば、一日挾みに逢ひ」て、「起請もお二人より外は」と書くやうな「名譽の仕なし」を彼女はしたのである。而もそれが世上の惡評のやうに、「野秋は慾のために、兩の手に花と紅葉とを眺めつるもの」でないことは、「打明けて物語せし折節、世之介樣、傳七樣、お二人の事は車の兩輪、大方は因果の廻轉、これほど床しさ、いとほしさ、此上に身がな二つ欲しきと、人知らぬ泪にて仰せられし事」もあるので證明される。「其後三月の二日醉は世之介、三日は曲水の宴にたよりて傳七が逢ふ日なり、不思議の出會、此時和談して、三人同じ枕を並べながら、下卑て首尾する譯もなく、味な事どもばかり、前代未聞の傾城狂ひ」、このやうな遊女とこのやうな客と、その間に行はれた不思議な寛容とも、亦徳川時代の遊里にのみ咲くことを得た優曇華の花である。この點においては、箕山よりも西鶴の方が遙かに「色道」の三昧に入つてゐると云はなければならぬ。さうしてこの事は又遊女高橋が金錢の取扱に關する物語（卷の七、四十九歲）によつても觀はれる――「醉の紛れに世之介金錢銀錢紙入より打明けて、兩の手に掬ひながら　太夫請け、やらうといふ、此中では請かれぬ所ぞかし、初心なる女郎は脇からも赤面してゐられしに、高橋しとやかに[illegible]、如何にも歎き[illegible]と、情に[illegible]

證にて狀で職くも同じ事と申して、禿を呼寄せ、なうて叶はぬ物じや、取つて置けと申されし其見事さ、何時の世か又あるべき」――箕山が口癖に云ふ口訣秘傳は知らず、當時遊里では口にするのも下品だとされてゐた金錢についてこれほど自在な取扱をするとは、書き現された彼の「寛文格」、「寛文式」には何處にも見出すことが出來ない。西鶴の浮世草子は、往々露骨面をそむけさせるものがあるが、元祿前期に於ける色道の正體と、その奧に開かれてゐた一種の自在境を示す點に於いて、これも亦得難き一つのヒューマン・ドキュメントである。

併し彼の描いた遊里文化の極致も、その輪廓に於て結局箕山の「色道」の外に出でなかつたことは、「神代以來又類無き御傾城の鏡」扇屋の夕霧のことを噂し合つてゐる五人の通人の話（卷の六、三十七歲）によつても知ることが出來るであらう――

「姿を見るまでもなし、髮を結ふまでもなし、地顏、素足の尋常、はづれ綽に細く、態恰好しとやかに、肉のつて眼光ぬからず、物ごし好く、肌雪を爭ひ、床上手にして、名譽の好にて、命をとる所あつて、飽かず酒飲みて、唄に聲好く、琴の彈手、三味線は得物、一座のこなし、文面氣高く、長文の書手、物を貰はず、物を惜まず、情深くて、手管の名人、是は誰が事と申せば、五人一度に、夕霧より外に、日本廣しと申せども此君々と、口を揃へて賞めける、何れも情に預かりし過にし事ども語るに、或は命を捨つる程になれば、道理を詰めて遠ざかり、名の立ちかゝれば了簡してやめさせ、募れば義理をつめて見放し、身思ふ人には世の事を異見して、女房のある男には恨むべき程を合點させ、魚屋の長兵衛にも手を握らせ、八百屋の五郎八までも言葉を喜ばせ、只此女郎人を捨てずに、まことなる心を思合せ、始めの程は高聲せしが、何時となく靜になつて、何か泪を滴さぬはなし」。

夕霧の美しさ、夕霧の多藝、夕霧の心掛の好さはこれ等の話によつて遺憾なく讃美されてゐる。併し彼女の特長として

とり出された點が何處にあるかを注意深く思料すれば、人はそれが主として理知の冴え、人並勝れた怜悧などによつて形造られてゐることを發見するであらう。夕霧のやうな遊女が全盛を極むべきことは、固より何の疑ひもないところであるが、彼女はその心を――愛を求むる心を、何處に寄託すべきであるか、世之介が享受した「戀の拔道」ではあまりに便りがない、近松の空想によつて生れた夕霧のことは知らず、「好色一代男」の夕霧はその冴えた理知に飽ば忘れながら、心飢ゑて死なずにはゐられなかつたであらう。如何に「人を捨てずに誠なる心」は深くとも、それはつとめにつるゝ殊勝な心掛の一つで、「女」になくて叶はぬのはこれとは異る自然な戀の誠である。然るに痛ましくも彼女は徹底した誠を以て生きることを許されぬ世界の佳人であつたのである。私がかういふのは固より夕霧を貶すのでも西鶴を責めるのでもない。ただ遊女が「里の掟」に對する叛逆を敢てせぬ限り、自然を矯めた技巧の世界を離れることが出來ないのが、遊里の根本的約束であることを、此處でも亦想起して置きたいのである。

26

一傾城町之外、けいせい商賣致すべからず、並傾城町圍の外、何方より雇來り候共、先々へ傾城を遣候事、向後一切停止たるべき事、
一傾城買遊び候者、一日一夜より長留致すまじき事、
一傾城の衣類、總縫金銀の摺箔等一切着せ申間敷事何地にても、紺屋染用ひ可ㇾ申事、
一傾城町家作普請等、美麗に不ㇾ可ㇾ致町役は江戸之町格別の通り、急度相勤可ㇾ申事、
一武士町人體の者に不ㇾ限、出所慥ならず、不審成者徘徊致し候はゞ、住所糺方致、弥以不審に相見候はゞ、奉行

所へ可ニ訴出ー事、

右之通り急度相守べくもの也

寫本「洞房語園」の天命增益本に從へば、以上の五ヶ條が、元和三年（西暦一六一七）三月、庄司甚右衞門に吉原開基を許可したときの「御書出し」である。故にこれは德川の新政府が採らうとした賣淫政策の根本を示すものといふことが出來るであらう。京の島原や大阪の新町は、その前身なる柳町若くは道頓町の時代に遡れば寧ろ吉原以前のもので[illegible]あつて、それは新しく移轉するに當つて吉原五ヶ條の精神に從つて規整されなければならなかつた。德川政府の[illegible]は、他の凡ての場合に於けるが如く、賣娼の必要を否認してこれを禁止せむとするほど一本調子ではなかつた。たゞそれはたゞその害毒を最少限度に制限せむとする。その制限の方法は私娼に代ふるに公娼を以てして、これを一廓に[illegible]することである。而もこの一廓が奢澤と放縱とに堕せることを防いで、賣淫をたゞ賣淫にとゞまらしめることである、賣淫に附隨してこれを裝飾する趣味好尚情趣等が此處に結晶することを妨げることであつて、茲に[illegible]諸等美麗に致」さず輪奐の壯大を以て遊客を牽引することを避けて、たゞ賣淫の目的に達する手段に[illegible]らない。其處に稼業を營む傾城どもは、綺箔を施せる衣物を遠慮して、たゞ[illegible]した其處に出入する遊客は、一日一夜を期限として、それ以上に流連をすべきではない。[illegible]し」の精神が實際生活を支配することが出來たならば、吉原島原新町等は[illegible]上の職を誇る太夫どもは宿場女郎らしい「稼ぎ手」とならなければならなかつたであらう。[illegible]ことは、「色道大鏡」や西鶴以下の浮世草紙が其處から生れて來たことによつて[illegible]いて天降りの濫法を破つたばかりではない、あらゆる意味に於いて[illegible]

——美と自由と一種の「戀」の要求をこの一點に結晶せしめて、例へばスタンダールの「情熱愛」の説のやうに、贊美といふ中心事實を、ザルツブルクの岩鹽坑に落ちた枯枝に過ぎぬものとする魔法が、此處に巣喰ふやうになつたのである。果然、雞は家鴨の子をかへした、地獄に定められた場處には思ひがけぬ喜見城が湧出した。さうして思はぬ方に人心を教化し且つ誘惑した。これは自己の「政令」の萬能を信ずる政治家と呼ばるる種族が、繰返し經驗しなければならぬ「意外」の一種であるが、この場合最も皮肉なのは、彼等の採用した公娼政策そのものが、その結果を招來する有力な一理由となつたといふことである。

寫本「洞房語園」は「君か親方」庄司甚右衞門六世の孫庄司道恕齋が享保五年に著したものである。その中の一節に從へば、慶長年間新廓の設置を出願するとき、仲間の中に一つの異論があつた。その主張者は岡田九郎右衞門といふ一妓樓の主人である。この人は吉原開基と共に江戸町に移つたが、寛永の始め抱への遊女二十人ばかりに家屋敷家財を添へて稼業を手代某に讓り京都に隱居したといふ處を以て見れば、當時の樓主として一風變つた人物であつたのであらう(道恕齋は「この相談にさのみ進まぬも憎からず」と評してゐる)九郎右門の論點は、「御公儀樣御沙汰に及び、御免許あるときは、彼傾城町へ參りて遊べと、諸人に敎えさせ給ふに似たり、しからば、ばさらを好むものも、世間に多くなりて無益なることとなるべし」といふのにある。併し「當時江戸の御繁昌、諸國第一なり、然るに定りたる遊女町なき故に、年月を重ぬるに隨ひ、所々方々に遊女屋際限もなくふゑて、古來の者は衰微し、新來のもの手柄次第はびこるべし、然れば遊女の數も夥しくふゑ、ばさらを好むものも、又無レ限多くなるべし、傾城の類、御制禁とあらば、とかふに不レ及事也。乍レ去今迄有來ことなれば、中々一國には相止まじ……とかく傾城町の場所、一ケ所御定ありて、其外に遊女の置に無レ之は、[illegible]町中の爲にも[illegible]道理也」といふ[illegible]の[illegible]を得た。さうして「當時者

も亦甚右衛門の說を是認してこれを許可するやうになつたのである。

併し九郎右衛門の說には動かすべからざる眞理がある。これに對する甚右衛門の主張は公娼設置論の代表的意見であつて、今日に至るまであらゆる公娼論者は三百餘年前に於ける甚右衛門君の後塵を拜する者と稱すべきであるが、この說は公娼設置の道義的意義と、これより生ずる「ばさら」奬勵の結果とに對して充分の意識を持つてゐないのである。固より公娼を認めずして私娼を無制限に放置すれば「所々方々に遊女屋際限もなくふゑ……遊女の數も夥しくふゑ、ばさらを好むものも又無レ限多く」なるであらう。併し私娼を私娼として取締るには又幾多の方法があり得る。私娼が私娼である限り、それは全然非公式な日陰者であり、其處に「ばさら」を盡すものも亦忍び〳〵の通ひ路に浮身をやつさなければならない。それは一國としての勢力——一國としての社會的文化的勢力となることは出來ない。併しそれが一廓として公認されるに至れば、賣淫と放蕩とは此處に一種の道義的根據と社會的權利とを獲得する。それが、數に於いては知らず、もつと深い內面的な意味に於いて放蕩の奬勵になることは爭ひ難き事實である。特に德川時代に於けるやうに、娼樓と娼婦との關係が抱へ主と抱へ遊女、資本家と勞働者、溫情あり若しくは溫情なき搾取者と女奴隷との關係であるといふやうな事實が既に發生してゐる時代にあつては、公娼制度の承認に遊廓の組織的な宣傳が——傾城歌舞伎や傾城道中や、後世になつては燈籠、夜櫻、俄の類が、——附隨して來ることは、極めて見安き道理と云はなければならぬ。當時の遊客を牽引することが出來る程度に、建築を宏壯にしたり衣服を華麗にしたりすることは、遊廓といふ一つの社會が自己を保存するための必須の條件である。法令は生存のための努力を窒息させる力を待つてゐない。既に公娼の遊廓を官許しながら、「傾城町家作普請美麗に致すべからず」だの、「傾城の衣類紺屋染用ひ申すべきこと」だのと申して凉しい顏をしてゐるのは、頭隱して尻隱さずの甚しいものである。元和寛永の江戸に伏見や奈良の遊廓は存立

の餘地を待つてゐない。

兎に角に矢は既にきつて放たれた。而も當局は單にこれを認許しただけではなくて、自らこれに勢を添へた。元吉原の時代には、江戸の花なる「山王神田兩所の御祭禮」に傘鉾を出すのが吉原の町役であつた。吉原は固よりこれを宣傳に利川することを怠らなかつた、「愛宕まいり、汐汲など禿の中より器量をずくり粧ひ出したれば、ひと際目立て見へしよし」である。併し吉原の町役は市井のことのみではなかつた。それは又營中の「御蝶拂、御煤替に例年人夫出之」こと新舊の吉原を通じての義務であつた。「寛永十六年卯九月、姫君様尾州様へ御入輿の御時」には、百人の人歩さへ吉原町へ仰せつけられた。就中注目に價ひするのは「吉原開基の砌より寛永年中まで、吉原町の役目として御評定所へ太夫遊女三人宛、御給仕に上りし」ことである。道恕の父良鐵の説明に從へば、その理由は、「慥に此故とは申難きことなれど、私に是を考思ふに、扨御奉行と申は、日々に諸方の公事訴を御裁判被レ成、御政務の御事繁く、平人と違ひ年中に私の御暇有之事稀也、然とも遊女などの艶色を御覽の爲にはあらざれ共、遊女はもと白拍子なり、されば御評定所の御台日の節、白拍子などを御給仕に御召あり、公事御裁許以後、一曲ひとかなでをも被二仰付一御慰に備へられん爲に上様より被二仰付一しものか」といふのである。當局が竊に吉原に對して目をかけてゐたことと、吉原がこれによつてその社會的地位を高めることが出來たこととは、玆に説明するまでもないであらう。兎に角「歴史」は當然「法令」に勝さつた。公許の遊廓を一つの社會的勢力となし、其處に特殊な文化を産出しようとする「歴史」の意志は遂に成された。さうして「法令」の代表者までもそのための一つの手足とされたのである。

固より遊女と上流社會との間の特殊な關係は德川時代に始まつたことではない。中古の白拍子や桃山時代の遊女は既にその先驅をなしてゐた。併し德川時代に入つてからは、世の昇平に馴れて、諸侯や士人の「遊女などの艶色を御覽の

ため」に遊里に出入する者が漸く多く、その耽溺が益々深間に陷つていつたことは爭ひ難い。元吉原から新吉原の始めにかけて、遊客、特に太夫買の主なる者が如何なる階級に屬してゐたかは研究を要する問題であるが、大體に於て遊里に於ける士人の勢力が初期に溯れば溯るほど大きかつたことは、ほゞ想像することが出來るであらう。私は歴代の高尾についてこの間の消息を一瞥しようと思ふ。

高尾の問題は遊女研究者の迷宮である。その世代と彼等の傳記については、諸說紛々として殆んど適歸するところを知らない。併し古い傳說を記錄したものとしては、原武太夫の「高尾七代之事」、新しい考證としては京傳京山兄弟の「近世奇跡考」及び「高尾考」と種彦の「高尾年代記」とが比較的に準據すべきであらう。京傳と種彦との考證は一長一短あり、寧ろ種彦の方が精細と稱すべきであるが、今暫く京傳兄弟に從へば、三浦の高尾十一代。初代元吉原時代。二代萬治二年十二月五日歿（「高屛風くだ物語」その他）、三代寛文延寶年間（「袖かゞみ」「しづめ石」）、四代元祿五六年の頃出廓（「絲そろひ」、「草ずり引」）、五代元祿十二年出廓（「元正世記」）六代寶永六七年前後（「大黒舞」、「大白」）、七代正德、八代正德四年出廓（「赤逢染」、「丸かゞみ」）、九代正德五年突出し、（「丸かゞみ」）、十代享保十三四年の間に出廓（「[illegible]」[illegible]「[illegible]」）、十一代享保十九年十月九日突出し（「全盛鏡」、「遊女位名見」）寛保元年六月四日出廓（[illegible]）[illegible]後その誰玉屋の家に出來たといふ寶暦の高尾（武太夫が七代目と呼んでゐるのはこれであらう[illegible]）[illegible]十一代となるわけである。このうち出廓後の消息が全然不明なのは[illegible]と名けてゐることである。この七代のうち、[illegible]屋の高尾は[illegible]すべきである。固より高尾[illegible]

うが、これを仙臺侯の側から考へれば、其敵娼が高尾にせよ薄雲にせよ若くは他の如何なる太夫であつたにせよ、兎に角彼が遊里に出入して亂行があつたといふことだけは動すかことが出來まい。次に武太夫が四代目高尾（京傳の所謂何代目に當るかは不明である）を請出したといふ「三萬石淺野壹岐守」なる人は果して何者であつたか、淺野一家系には壹岐守と稱した人は見出し難く、たゞ池田家のうちに、寛文五年叙任元祿十六年致仕享保七年七十三歳にして卒去した池田壹岐守仲澄といふ人が（この人は三萬石である）私の眼に觸れただけであるが、太田南畝等の「高尾考」に引用された元祿七年板「吉原草摺引」の一節は 京傳の世系に從ふ四代目高尾が諸侯のうちの一人に落籍されたといふ想像を許さなくもないやうに思ふ――「此君いつぞやの忠より古里へ御歸りのよし、内々のおやぢ様に御逢ひの氣詰りにてきよろうなされ候や、おいとしや、和泉屋にておやぢさまおんあいのときは、内外よりかけがねをかけおんあいのよし、扨々御氣詰りも推量致し候、……おやぢさま御歸りの時は、いつも變らぬしふぞめの羽織をめしけるが、誰も知らぬことの今はおやぢさまの方へ行きて、いつもの羽織を此ころはやる手そめのにしきといふ草子を手本にして染めて御ざるものを」――「おやぢさま」なるものが不明、「手染の錦」といふ草子の正體も不明である（恐らくは好色本か）が、兎に角忍んで通つて來る身分の重い窮屈な老人にひかされたことは行間に見出すことが出來る。併し諸侯にひかされたことの最も明かなるは、「拾五萬石榊原式部大輔」が請出した六代目（京傳に從へば十一代目）高尾である。これも「過眼錄」によれば高尾ではなくて薄雲であるが、妓名の如何は差當り吾々にとつて重要な問題ではない。兎に角高尾の請出された寛保元年の十月十三日に、「行跡たゞしからぬ事ともおほかりければ」、榊原政岑（當時二十九歳）が戀々姫路から召出されて御勘氣を蒙り、同年十一月其子政永が高田に移封されたことは「藩翰譜續編」の明記するところである。この間の事情を「過眼錄」によつて考へれば、享保の分限帳を調ぶるところに到るまで、貴族が大名の資格において一つ甚

里に勢力を持つてゐたことは想見されるであらう。廓內の組織そのものが貴族的、階級的であつた理由は、勿論この一事のみによつて說明することは出來ないが、孰れにせよ遊廓が最初から町人對手をのみ目的としたものでないことは記憶して置かなければならぬ。遊廓も亦、當時の支配階級が最初に自ら廓を造つて、結局町人によつて奪はれなければならなかつた組織の一つである。

遊里の貴族的組織に對する要求は、士太夫と町人と孰れの側に於いて最も深刻であつたか。この要求が兩者孰れの方面にもあつたことは明かであるにしても、その深さに於いては士人よりも寧ろ町人の側が優れてゐたと見るのが當然らしく私には思はれる。士人はその日常生活の習慣が此處に來て俄かにその水準を低下せねばならぬことを苦痛とする、この意味に於いて彼等の遊ぶ遊里も亦貴族的でなければならない。併し彼の公的生活及び家庭生活に於ける窮屈の凝りをといて打寬いだ自由を享樂するためには、遊里の貴族主義は必ずしも難有いものではなかつたであらう。遊里に於ける貴族（アーデル）として通用せむがためには、別樣の敎養と習慣とを必要とする。この「約束の門」を通過することが、彼等にとつて容易なものでなかつたことは、その權柄づくな習慣が大門をくぐつても拔けきれなかつたために、彼等の多くが野暮天若くは亂暴者と考へられてゐたのでもかわるであらう。固より階級的貴族の殼を脫いで遊里的貴族に碎けることを得た特殊の通人には、この里に於ける貴族主義の無限の面白さが開けて來るであらう。それは自分が專制的主人であることの寂しさから開放される寬ぎである、自分の周圍に奉仕する奴隸の間から脫出したための自由である、三ツ指をついて自分を送迎し、何事につけても自分の權柄に屈從する女の群を離れて、のどかに人間と人間との交際をすることの

喜び、更に立入つて云へば、太夫の柔かな支配の下に自分自身を投げ入れることの氣持よさである。この點に於いて彼の貴族趣味は、又新たなる形に於て復活する、彼の遊びの對手はこの趣味を充すに足る「色道」の女王でなければならない。併し後の貴族たらむとする意志はこの里でなければ充すの餘地がないといふ譯ではない。貴族であることは彼の憧憬ではなくて事實である。彼は寧ろ窮屈な貴族の事實から脱却するために、一時の自由を此處に求めるのである。

町人も固よりこの里に解脱を求める――一つはその算盤と掛引との煩しさから、一つは「借錢するを厭はぬ」ほどの心の廣さと、誰にも好かれるやうな「底の浮氣」とを持たぬ、又持つことを許されぬ、實用的女房の汗臭さから。家事の整理に堪能な家庭の主婦と、男性を男性として牽引するあらゆる方法について鍛錬に鍛錬を重ねた遊女と、この二つのもの丶間に一種の分業が行はれたことは、一般に徳川時代の女性の不幸であつた。戀と女房とを別々に考へた――從つてこの點に於いて女房に對する義務の觀念の薄い――男達は、「子もちが顏を見ればこけざるのやうに思はれ」、「一寸先は闇、命は露の間、あすをも知らぬ浮世なるに、たゞおせ〳〵とて、友だちをそ丶のかし」（「東海道名所記」）、「鴛衾の衾の下に連理の語らひを」求めて、日本橋の向ふや三谷の奥に出かけて行つたことであらう。併し町人が此處に求めて行つたものは「解脱」だけではない、云はゞ彼等の向上の志が、貴族に對する憧憬が此里にその噴火口を發見した。假令その社會的實力は如何に偉大であつても、政治上法制上殆んど何等の保證せられたる權利を持たず、支配階級の「斬捨御免」の氣まぐれの下に置かれてゐた町人は、貴族に對抗してその痲癡を漏す自由郷を「社會外の社會」吉原に求めずにはゐられなかつた。さうしてせめて其處で手足をのばして自分も貴族らしい心持になりたかつた。故に遊廓の階級的貴族的組織を最も深刻に喜んだものは、士人よりも寧ろ富裕な町人であつたであらう。この間の心理は、彼等自身の自覺は知らず第三者の眼から見れば、可なり悲劇な、同情に價するものがあることを覺える。さうして又おその要

から教育されるやうな意味で、彼等は廓内の貴族「女郎樣」から或意味の人間的教養と品格とを授けられたであらう。「總て女郎買と云ふは、稽古なくては、自分の量見ばかりにてはなり難からん」（「隣の疝氣」）徳川時代に於いては、遊女は當時の社會教育家の一種である。

さうして士人と町人と孰れが遊廓の勝者となる資格を多く持つてゐたか。「やかた者と町の者と、遊び女の逢ひある事は雪と墨なり。女郎樣も凡て町人に多く思ひ付いて屋形者には思ひ付かぬこと、嘘にてならぬことなり。其譯は、屋形者は先第一、手前思ふ樣にゆるゆると遊ぶことならず、四ツ時分に來ては曉七ツ前に歸る故に心せわしく、夜あかしに女郎をねかせず、其上しつこく物云ひかわし、揚屋の男に今は何時じや〳〵と時を聞くもつらし。或はやかたも館によりてゆる〳〵遊ぶ樣成人もあれど、多くはむくつけなり。女郎もどふでも町人程に心安ふない筈なり。尤なり〳〵」（「ひとりね」上卷五十一）――これは、享保のころ、諸侯の一支族柳澤淇園が町人に捧げた敬禮（ホメージ）である。それは貴族の一人酒井抱一が「世の中は團十郎や今朝の春」といふ句によつて、河原者に捧げた敬禮と相並んで注目に價ひする言葉である。まことに屋形者は既にその「むくつけ」さに於いて――換言すれば廓外の武斷的貴族主義をそのまゝ廓内に持ち込むことによつて、遊里的貴族となる資格が町人に劣つてゐるのである。併しこれは猶柄の一面に過ぎない。町人が此處の勝者となる更に重大な理由は、遊里的貴族主義の最後の根抵となる金銀の點に於いて、支配階級は次第に劣者となり、町人は益々優者となつて行つたところにある。固より淇園の云ふやうに、「誠と金銀とは別々」であるが、併し人は誠のみによつて遊里の貴族となることは出來ない。誠があつて金銀のないものは、遊里の外に、「手鍋をさげる人」となつて落伍しなければならない。この意味に於いて金銀は遊里的貴族の Conditio sine qua non である。太夫に品格を保たせるための金銀、自ら廓内で品位を保つための金銀。更に間拔けた大貴族として廓内を風靡しようとすれば「千兩箱

を山のやうに積んで」も到底追ひ附かないであらう。かくて享保の頃に至つて、成金奈良茂紀文の豪が遂に前代に於ける仙臺桜の名聲を壓倒した。名妓が全盛を極める背後には、此等の町人の金力がなければならなかつた。享保十一年三月廿九日、享年廿五で病死した中萬字屋玉菊（山東京傳「近世奇跡考」巻五、山崎美成「遊女玉菊傳」、著者未詳「遊女玉菊考」、岡野知十氏「玉菊とその三味線」等參照）は、病中四花患門の灸治をするとき、「玉菊申すには、灸治のうち半太夫河東兩人の淨瑠璃を隔段に聞きながらすへたきよし、此由を内證へも咄候へば、承知の旨にて日限を極め、摺物等出し、此時家内の女郎總仕舞、仕切／＼も不殘うちぬき、淨瑠璃聞に來る人々へは、吸物酒肴本膳等まで出し馳走ありしなり、誠に貴賤群集して賑々敷事言語に盡しがたく云々」（「江戸節根元記」）と云はれてゐるが、廓内にあつてこれほどあどけなく、鷹揚に、賑かに暮すためには、莫大な金力の背景を必要としたであらう。「江戸眞砂六十帖」にある奈良茂二世の傳には誤謬もあるが、そのうちに「吉原は中萬字屋玉菊に通ひて大酒を呑、玉菊も大酒にて病氣付て次第に重りて、茂左衛門情力を盡し療治申付候が終に病死しぬ」とあるのは、年暦に於いて合はないこともない。「大盡舞」に奈良茂が浦里を身請したと唄はれてゐるのは、玉菊死後のことと考へれば必ずしも玉菊の話と矛盾するとはいへない。兎に角かういふやうな逸話によつて、町人大盡と名妓との應酬はほゞ想見し得るであらう。これに反して寛保元年の柳原高尾以後、私は諸侯又は士太夫で廓内に大盡の名があつた者をきかない、それは恐らく私の寡聞によるであらうが、大勢の推移に關する私の觀察はいづれにしても大過があるまいと思ふ。享保以後、遊廓と士人の關係に於いて吾々の注意をひくものは、四千石の旗本藤枝外記と遊女綾衣との情死（天明五年）の如き事件である。岡崎久彌氏の「江戸軟派雜考」（四四三頁）に從へば、「明和雜錄」には「武州金澤、米倉丹後守殿知行一萬二千石。丹後守殿、江戸吉原土手にて女郎と變死是あり……家老二人切腹仰付けらる」とさへあるといふ。これは戀に懸つて廓に破れたのである。遊里に於ける士人勢力の消長を示す點に於いて、貴家に於ける太夫身請の事實とは決して同日の談ではない。川竹の流れゑたる

につれて、領主も旗本も共にその渦卷の中に卷き込まれて、「金と力とのない」一平民の色男の如く溺れ死んだといふことは、結局遊廓に於ける町人の勝利と武士の敗北とを語るものに外ならないのである。

併し町人の勝利とは必ずしも富裕な町人の勝利を意味するばかりではない。遊廓の階級的、貴族的組織に對して、多數の要求が崩壞的に作用する。さうしてそれは一面に於いては太夫の減少及絶滅として、他面に於いては太夫の權威と勢力との失墜として、若くは太夫以外に於ける新勢力の出現として、あらはれる。享保までの間には、この形勢はまだ著しくあらはれてゐないが、併し吾々は既にこの時代にあつても、かういふやうな事情が下萌えに萌えつゝあつた痕跡を發見することは出來るであらう。

寛永二十年の元吉原細見記「あづま物語」によれば、その當時吉原に於ける遊女、「たゆふ七十五人、かうし三十一人、はし八百八十一人、總合九百八十七人」である。これに對して新吉原にあつて太夫大略二十人を超えなかつたと云ふのは、恐らく太夫の嚴選の結果であつて、遊里平民化の徵候と見るわけには行くまい。「元祿太平記」（同十五年板）の記事を信ずることが出來るならば、當時は更に減じて太夫四人、これに對して格子女郎八十六人、散茶五百一人、うめ茶二百八十人、五寸つぼね四百三十人、三寸六十三人、並局五百人、その他のものをこれに加へれば、「二千に近き首帳」となるのである。享保の初年か若くはそれ以前と見ゆる細見の斷片（「守貞漫稿」）に從へば、當時、太夫七人、太夫格子八十三人、さん茶千二百六十四人、うめ茶四百四十人、五寸局十九人、三寸局二百六十七人。享保十九年の細見には（同書）、太夫四人、かうし六拾五人、太夫さん茶二人、新座敷持二百九十人、ちうや新二十二人、座敷持百二十五人、部屋持三百十八人。享保を過ぎて太夫の影は三浦屋の家運と共に急に薄く、榊原高尾退廓の後には、玉屋に猶一二の太夫名があるのみで、それも寶暦の花紫や高尾を最後として、あとは散茶のみの世界となつてしまつた。寶暦の初年

は享保の末年を去ること僅かに十六年である。以上の人員調べを見るに、孰れの時代に於いても吉原は太夫のみの世界ではなく、大抵の場合中どころに頗る需要の多い一階級があつたことは明かであるが、享保を越えて太夫が存在の餘地を持ち得なくなつたことは、遊里の貴族主義がその大黒柱に於いて蝕ばまれつゝあつたことを證明する。固よりその後に於いても散茶の上位にある呼出し、晝三などを中心として遊里の階級制度は或る意味に於いて寧ろ複雜を加へたとは云へ、遊客の方面から見れば需要が次第にデモクラテイックになつて行くといふ傾向は見のがすことが出來ない。多數が次第に少數を征服して行くのである。

更に太夫の權勢の消長を考ふるに、徳川の初政に當つて彼等がどれほど衆人の崇敬を集めたかは、色々の逸話や評判記の文章などによつても想像することが出來る。彼等は男性をその前に跪かしめた點に於いて、日本の女性としては珍らしい運命を享けた人達であると云つてもよいであらう。固よりその背後には、むづかしい顏をして睨んでゐる堅職の目が光つてゐたとは云へ、彼等を崇拜する男だちは、さういふさかしらを恐るゝことなく、彼女等を瞻仰しつゝこれに戀したらしく見える。特に著しく目に立つのは下郎が命にかへて歌舞の菩薩に捧げ奉つた切なき戀の物語である―元吉原の始、上方から江戸に移る多くの遊女のうち、三島の宿にとまつた佐渡島正吉を見染めてこれに馴染むために虎の子の貯金一兩を投出し、志を遂げてから「正吉樣に逢ひ奉る」有難さ忝さに、あくる日は「御乘物」を舁いで江戸に上つて、そのまゝ三年の間彼女の乘物舁として江戸をめぐつたといふ油賣平太郎の話（「そゞろ物語」）。寛永の頃太夫吉野に戀して、その情あるはからひに預れる翌日、あまりの嬉しさに身を桂川に投げて自殺したといふ刀鍛冶の弟子の物語（「吉野傳」）。下つて享保三年の作と稱せられる近松の「壽門松」の起首、藤屋吾妻の「粋と悧[?]と目の張りに、情こぼるゝ道中」を流[?]に擬[?]して、愛[?]の藤與平[?]「太夫お情」をいただかせようとする[illegible]の[illegible]くしも、たゞとコントラストの

面白さに、當時の人情を無視して捏ね上げた拵え事とばかりは云つてしまへないであらう。さうしてかういふ太夫が大盡の客に逢ふときの權式は、當時から吉原には及ばぬと云はれた上方にあつても、「門口より聲々に申しつぎ、太夫樣御機嫌よく是へ御出と申せば、二つ手燭を先に立て、階子靜に上らせらる、上座の中程に御直りあそばしける、左の方に一家の女郎十一人送りまゐらせて座する、右の方、後より末座まで、鹿戀の女郎十七人、皆緋無垢着並居る、御前に引舟の女郎、禿手つかへて座する」（「好色一代男」卷之八、天和年間）といふ光景である。固よりこれは島原の太夫吉崎が突出しのときの特別な晴がましさであるが、「女郎樣」が「買手共」の上に座する權威（これは形式上ずつとあとまで續いた例へば享和四年板、歌麿畫「青樓年中行事」中初會の圖參照）は想見すべきである。

併しかういふ太夫全盛の時代に於いても、この事態を切崩すやうな事情が潜かに發生しつゝあつた。その一つは正統的太夫以外の新勢力が勃興して遠卷に太夫の權威を脅かすことである。もう一つは太夫自身が周圍の事情に餘儀なくされて自分の權式をおとすことである。これを江戸で云へば、明曆や寛文に、市內の湯女その他の賣女を市中より驅逐してこれを廓內に押入れた事件などはその著しいものである。自力を以てその途を拓いて來た私娼の手どりが、おほこ育ちの「官廓」に侵入するとき、其處に別樣の新勢力を生ずるのは自然の數である。特に丹前風呂以來鳴らして來た勝山のやうな名妓が此里に天降つたときには、生え拔きの吉原つ子も威壓されることを感ぜずにはゐられなかつたであらう。さうしてかういふ事態は直接に太夫の權威を侵かさないにしても、兎に角場合によつてはこれに代り得るものを示すことによつて、間接に太夫の地位を輕くすることは爭ひ難い。寛文年間に流れ込んだ「風呂屋くづれ」の娼樓から始まつて、散茶女郎の勢力が一時に張つたことは、後世に於いて辿らなければならぬ吉原の運命を豫言するものと考へることも出來る。而も格子や局のうちにも相應の遊女がゐて色々の逸話を殘してゐることは、必ずしも散茶の侵入後に限

つたことではなかつた。今寫本「洞房語園」のうちから寛文前後に亘つて格子や局に關する話を拾ひ出せば、正保の昔、馴染客の死に無常を感じて剃髮した格子女郎佐香穗がこと、「一雙玉手千人枕」云々といふ漢詩のこゝろに打たれて「しばし物をも云はず泪ぐみ居たりし」寛文の格子女郎千とせがこと、延寶の頃近江節に譽を得た格子女郎いづみと稻葉とのこと、寛永十五年自分の「紅鹿子の小袖を裏に付たる黒繻子の陣羽織」を着せて宮本武藏を郭内から出陣させたとかいふ局女郎雲井のことなどがある。從つて大盡にあらぬ町人も亦それ〴〵に身に應じて面白い遊びの對手を持ち得たことは想像される。佐香穗や千とせの逸話が暗示してゐるやうに、謙遜な、無常を知る誠は、寧ろこの方に多かつたかも知れない。

又これを京阪について云へば、寛文延寶のころ既に畠山箕山は、「次第々々に世くだり品くだりて、傾國の威もおち侍る上に、この頃は郭中に新法をおきて、買手のゆるさゞるには、座敷の體女郎の心にむかぬとて歸る事叶はず、又貰ひかかりて男のくれぬに、火にして貰ひ行く事もさせず、たゞ籠の内の鳥の如し、かゝれば女郎のはりあひする事もしがたく、云ひ分を募る事も叶ひ難し、昔は傾城の威儀重かりつれば、若し御意にちがひなば如何はすべきと、揚屋などはうろ〳〵として崇敬もおろそかならざりしに、今の傾城は揚屋に對し媚びへつらひ、機嫌をうかがふ事にのみなり下れば、萬事につけて改まるもことはりなり、是傾城の咎ならず、揚亭の咎にあらず、根本は買手の心さし昔とかはり果て、ひすく拙くなりにたれば、それに從ひて物每あさましうなりきたれり、口をしき事ならずや」「寛文式下」）と憤慨してゐる。これは愛惜に基く誇張として、幾分の割引を以てきかなければならないであらうが、兎に角傾城の置かれてゐる位置を撰かにして觀察すれば、「奉公人」であり「賣物」である以上は、太夫と雖もその雇主と客との要求如何によつて、その樣式を下げなければならぬやうになり行く理由は充分に理解することが出來る。

併し上にのべた民衆化の傾向は、享保以前に於いてはたゞ探せば探し出し得るといふにとゞまる。それはたゞ來るべき崩壞の時代を豫告する遠雷に過ぎなかつた。それは未だ地下に洞穴を穿つ隠れた水流に過ぎなかつた。さうして地上には奈良茂紀文の輩が前代未聞の豪遊を試み、玉菊や九代十一代の高尾のやうな名花が咲きこぼれてゐた。特に「極上々吉」九代目の高尾（享保五年板「吉原丸鑑」）の如きは、太夫の末期を飾るにふさはしい、可憐な、愁を含んだ美しさを持つてゐたであらう——「正徳五年に水あげありて太夫の位に備り給ふ。凡そこの廓の内の女郎三千第一の美人なれば、その貌形のすぐれ給ふ事は云はずとも知るべし。道中の裝ひ一きは靜にして、たとへば滿月の雲なき空をゆくがごとし。座付の勿體備りたる太夫職、座頭に足音をきかせても極上々の君とはさとりぬ。物うち云ひたるけはひ卑しからず、一座のけしきは少し氣重に見へ給ふ事あれども、是氣重なるにはあらず、太皷どものそゝりに乘らず、位を重くなし給ふが故なり、あいなれ給ふほどいとしめやかにして、よくうつる御聲もうるはしうて、音曲たぐひなしといへども、馴染ある相方にあらざれば聞たる人すくなし。但し酒まいらぬはたしなみにあらず、生れ付の下戸也。打ゑみ給ふとき唇を少し左の方へ寄する心にて、片顔にて笑顔をつくり給ふ癖あり、其笑顔をたとへて云はゞ東風溫和の氣をうけて南枝花始めて開くがごとし。そのかみ揚屋にてある客衆と口説し給ふ事ありしに、さばかりせき合て物爭ひし給ふ面ざしたけ〴〵しき樣は微塵もなく、御顔ばせ少し紅葉してその美しさ彌增也。その後あまりにせきかねて娟娟たるまなじりに淚を浮べ給ふよそほひ、梨花一枝雨を帶たる風情、かのもろこしの揚貴妃の位顔思ひやられぬ……」。遊里の春がまだ去らなかつたことを思ふべきである。

柳澤淇園はこの頃にその「ひとりね」を書いた。淇園は寶暦八年九月五日五十三歳で歿したと云へば、彼の生れたのは寶永三年、彼の二十一歳の年は享保十一年、江戸では玉菊が「泣くよりほかの琴のねも二十五絃のあかつきに碎けて消」(「水てうし」)えた丁度その年。從つて玉菊燈籠が始めて仲ノ町のうら盆に哀れと賑ひとを添へたのも亦この年に當るのである。「ひとり寢」の大部分がこの年に出來たことは、同書（狩野文庫の寫本による、燕石十種のうちに納められたのは、寫本によれば下の卷第九の途中から以後で、そのあとに八項の追加があるだけである）の序文に

「二十一の夏大和の國にすみ所をさだめて、九條といふ處のかたわら竹の網戸のいとあはれなるにまかせて、ついなぐさみの種とのこしぬ」

とあるのと、下之卷第二十六「甲斐言葉」の條に

「余も生れたる年に甲斐の國にゆき、十四の年より江戸の古里へ歸り、十六の春又甲斐にゆき、其暮に又江戸に歸り十八の暮また甲斐に歸りてまたことし大和へ來りぬ……余が母抔は甲斐に住ぬる時常に猿などに物いふやうに恐ろしく覺へて居しとかや」

と書いてゐるのと（その他にも猶制作の年代を暗示する文句は少くはない）を照合すれば明かである。まことに「あるは青樓の夜のあかり餌き、手管の姿をあらはし、或は花の晨雪の夕暮、眼に見耳にきゝて、五塵六欲の世界に人は虚實の人物、けやけくうかめる雲のたぐひなる事もあり、又はいつはりならぬ事もありて、」もろ〳〵の學術、藝能、人情に對する理解と興味との廣さを見せてゐるものであるが、たゞそれだけではなく、徹せざれは甘んぜぬ穿鑿欲と一種の超脫せる風韻とを兼ね備えてゐる點に於て、二十一歳の青年の作としては寧ろ驚嘆すべきものがあると云はねばならぬ。特に「青樓の夜のあかり餌き手管の姿をあらはし」てゐる部分は、一見すれば巫山戯た猥雜なものであるが、中にはひ

つてその精神をうかゞへば、徳川時代に生れた戀愛哲學（寧ろ「色道」哲學として獨特の位置を占めてゐることを發見するであらう。「遊山観水は學者の一興、何ことか諷といひ舞といひて法の教の道にもれん」と云つてゐる言葉は、彼自身の根本態度を説明するものとして承認することが出來る。徳川時代に於ける無數の隨筆中、文學的な深みと味ひとあるものゝ白眉として、私はこの「ひとりね」を推したいと思ふ。この書は、少くとも、自分の心を種として人生の解釋を求めずにはゐられなかつた一人の青年の手になつたものである。

「今宵はつゝくりと獨灯に向ひて、交せし人のよすがも聞きたう、そなたの鐘の響き來るに、まして軒の風鈴松に答ふるにつけて、何やかやと心の内は色々さま〴〵、扨も〳〵心ほどおかしき物はなし。思ふ人もあり憎い人もあり恨めしいものもありくやしい事もあり。筆の事、墨の事、書物の事。今江戸の事思へば、桑名の七里の渡し、はや石山寺のおかしい石の姿、もはや宇治の河霧など思ひ居れば、源氏が心中して可愛やと思ひ、そしていつともなう昔聞きなれし桐といふ伽羅の匂ひ、いやはや東といふうち西にかはるも獨寝のたのしみ、雲のたゝずまひも今まで龍のやうに見へしものをと云ふにまかせて、小僧あの雲は今何に似たといへば、火燵のやぐらに似ましたと云ふも、少し過ぎぬれば火燵のやぐらも龍も消えて、扇のやうなものも有、たばこ入のやうなもありて、いつともなう失せぬ。げにや……戀しく物疑はしく見る月は月の姿もどこやら水臭いやうに見へ、ゆかしく思ふ折ふし嬉しき便きく時は、鐘の響も物思はじ……など思ひ續けてゐるうちにいつ寝入るともなう夢になりては、さりとも日頃深く心に思ふことを見るといふからは、せめて思ふ人にも逢ふ夢にても見るかは、あられもなき人と物云ひかはし、恐ろしき峯より落つる夢など見、或は偶戀しき姿などに逢ひても、一圓嬉しさうなる顔もせず、あちら向くとこちら向くやうなるすねた姿に逢ひて、ひよつと其姿が男になりたり硯箱のやうにもなりて、夢ほどかはりし物はあらじ」——「ひとりね」の著者がこの隨筆を書くときの内外

兩面の生活はこの一節によつて想見することが出來るであらう。小僧を相手の獨身生活、軒の風鈴、机によつて心の姿を追うて行く孤座の人、その心の中に思ふことは、筆のこと墨のこと書物のこと旅のこと。思ひ、憎み、恨めしさ、口惜しさの交錯せる人事。その中に、昔嗅ぎなれた伽羅の香や傾城の心中などの艶つぽいものもまじつて、恐らく奈良の木辻のあたりに今も馴染の人があることは、「そなたの鐘の響」に心ひかれることによつても想像されるであらう。併し其處には又此等の心の動きを見つめて、ハムレットもどきに、その怪しさ定めなさ面白さを雲によそへて眺めてゐる心のあるじがある。この心のあるじが、氣隨氣儘に、言葉を煉り上ぐる意志もなく、流るゝまゝに書き流したのがこの「ひとりね」である。

「年わかくして色なければ、無骨にしてしとやかならず、老いて色なければ、慳貪にして邪見なり。世に色氣といふは、專愛敬のつやをかねいひて、あながちに婬慾のみにあらず。士として色なければ人なづかず、農として色なければ物育たず、工として色なければ巧みなく、商として色なければ人問はず、天地の間何ものか色なくしは一日も世に立ちがたかるべし。孟子にいはゆる大王色を好むの辨おもふべし」（雲萍雜志）

「人倫の交り戀の心より出ざるときは、仁忠慈孝柔和愛敬、その信こと〴〵く人情なし。親の子をおもふ心、死なんと覺悟したる心、この他は誠なし。此誠心戀慕よりいでて戀情なき時は、不仁の君に忠を致すものなく、不慈の親に孝を盡す者なし、遠くは顔淵の吾豈能せんの詞、近くは右近が忘らるゝの歌おもひやるべし。古歌に

戀せずば人は心のなからまし物のあはれもこれよりぞ知る」（同書）

以上の二節は、同じ人が後年になつて、もつと表向きな、教訓的な隨筆の中に書きつけたものである。「あながちに婬慾のみにあらず」さる色、而も亦若年をして無骨ならしめず老年をして慳貪邪見ならしめざる「愛敬のつや」として婬慾

のうちにも現るゝ色、又必ずしも男女の間にのみ限らざる戀、而も亦女の淫慾を高めて「不仁の君に忠を致しし「不慈の親に孝を盡す」と等しき誠の中に位せしむる戀――かういふ意味の色戀を根本主義としてゐる點に於いては「ひとりね」も亦「雲萍雜志」の前身たるに恥ぢない。青年の元氣を以て、放埒に、無遠慮に、一方に徹底してこの色戀の（固より主に男女間の色戀の）哲學を說けるものは「ひとりね」である。それは儒敎に發して、日本のこゝろによつて轉釋されて、更に德川時代の遊里にはぐくまれた色道觀である。それは士人と學者と町人との敎養が、德川といふ時代色をそのまゝに、最も具象的な性生活の點に於いて綜合されたものである。この意味で「ひとりね」は德川時代に於けるいろ戀の最高の巓を示すものゝ一つであると云つても、決して過言ではあるまい。私は前に畠山箕山の「色道」を考へるとき、その遊女道を說いた「寛文式」を重なる問題とした。これに對して玆では遊客道が――遊客の立場から見た遊びの哲學が、主要な問題となる。これによつて彼を補ふとき、德川時代の遊びは始めてその全景觀を示して來るであらう。私が箕山の遊客道を說く「寛文格」や「心中部」を除外したのは、彼も亦大らかな氣品のある遊びぶりを求めてゐることとは勿論ながら、その主要部分は「それ好色の家にては口中をたしなむこと最上の業なり」、「當道には先づ足を本とす」といふやうな趣味上感覺上の細目から成立つてゐて、遊びの精神に徹底すること割合に淺いことを認めたからである。

固より淇園の好色も亦女性の感覺的な美しさから出發する。醜い、わる臭い――香道の達人なる彼にとつて臭氣が特に問題になるのは、當然ながら又面白い現象である――女は彼の趣味を傷つけて嘔吐を催さしめる。「子の心親しらず」、「親仁欲にて棟高き家の娘」を妻に持たされ、「朝見れば扨も〳〵いやなる貌かなとむつと目につき、夕暮に見ればうたて〳〵の口元やと思ひなば何の樂みかあらむ、一刻も早く往生を願ふべきものか」（上の六）である。又彼は、「東坡先生が云ひし三平二滿とて、鼻と額と頰と同じ如くになり、兩方の喉がふくれて三島おこぜのやうな貌でも」妻とし

ては「同じことなりと云ふは、よく〳〵東坡は出こらえのよき人かな、いかなるよき身に成りても、我等は其の樣な顏を向いて見ることはいやなり、地女の笑ふさへ、美しいと云はるゝ娘にても、胸にこたへてうるさくなるに、況してや況してや」（上の八）と頭をふるのである。余が嫌ひものを云はんに、顏の大きなる、もみあげのなき、はえ際の濃き、鼻の大きなる、唇の厚き、色の黑き、肥りたる、せいの高き、餘り低きたる、物數高く云ふ女、手足の太き。大かたかくの如し。際墨など塗りし女を見ては日に幾度か吐逆せしこと昔はありしなり。顏は成ほど一くらひも格好小さくして、色は成ほど白く、物越やさしく、少しあどけなきやうにて、氣輕くまめやかにやさしき女こそ、仙家の不老不死よりかはゆらしけれ」（上の六）。かくて畫家であり、詩人であり、三絃の妙手であり、香道のたしなみ深き柳澤權太夫は、深く女性の美に誘惑されることをとゞめ得ない。併し彼が女性を享樂せむとするは主としてその眼と耳と鼻とによつてである、最初から肉欲を以てこれに對し、而もこれを滿すに卑しき手段を以てすることは、彼が「いやなり、いやなり」と稱するところである――「余が大きらひ物あり、妻あるものゝ其女房にかくして下女腰元に手を作くる事、いやなりいやなり。妾ならば天下晴れていやとも云はせず、下屋敷にすへ置くか手前に引取るかして、世間廣々として樂みたし、何ぞや下女腰元に女房の目を盜んで戯るゝなど、下卑たる心底ならずや。若しその腰元に氣に入りたるあらば、隨分磨き立て妾といふ綸旨を出し、とりかけぬ前に渡して手をつくべし。：：或は戀は忍ぶが樂しみといふ故事あるからは、隱すが面白しといふ事、文盲の至りなり。抑々この忍ぶといふは、島原に通ふ若武者、親父の手前かなしく、手代の目を盜みて、身を雨露にしほたれ、或は日本堤の名にし椎の木の繁き人の口を厭ひ、編笠いやしく引かたむけて、二挺の鼓にくれ、三浦山口の三筋の色にうかるゝは、晴れて行くより樂深し。何ぞや下女腰元に手を付けて、夜もねき足して鶯の啼とる如くさまよひ、女房にかくしておもしろがる事、筆にかくさへいやらしいと云ふも皆

なり。人のすまじき事、第一後家ぐるひ、隠元ぐるひ比丘尼ずき、とこ好き」(下の三十八)。これがあの時代には特別の潔癖として目立つたであらうことは、燕石十種本の頭注に「この說此書の玉に瑕なり……かくの如き品々のうちに色事の面白き味ひもあるべし、此書は公美が二十一歳の時書きしものなれば、三十歳にいたりては雌黄をぬるべきところ所々あるべし」と、わざ〳〵語るに落ちてゐる人があることを以ても想像し得るであらう。併しこの潔癖こそ淇園の好色を「色」と「戀」との大道を繫ぐ橋梁となつてゐるのである。

とは云へ何故に彼は女性に對する趣味の滿足を「遊女町」に求めなければならなかつたか。「遊女町をくつわといふは、文字に亡八と書けり。所謂孝悌忠信禮美廉恥の道を亡ふよりの名なりといふ說あり。されども遊女町たりとて、中には孝悌のために賣られて、年たけては主人によくつかへ、忠を盡してその家を起させ、信を以てなさけある客と語ひて二つの心を抱かず、慈悲を推して行儀をみださざる時もなきにあらざれば、何ぞ亡八といはんや、實は嘘の與にあり、浮れ女といへども人情は變るべきものかは」——彼は「雲萍雜志」に至つてもかう云つて遊女を辯護してゐるが、若年の著者はかういふ理論の迂路を迴る必要もなく、彼の欲する女と色とがたゞ此處にのみ發見し得たからである。洗煉せられ煉磨せられ、五味を藏して而も平淡に歸せる「平のもの」の味ひを持ち、「音もなく形もなしといふ上天の格」に到つてゐる女性は「女郎樣」の外にないと彼には見えたからである。「地女は熱の物なり」、「地女は濃熱深く、その匂ひいやらしく」、その洗煉を缺く心と軆とを以て、ひたすらに悋氣深く男にからみついて來るのが彼の趣味に合はない。これに對して「そも傾城は、生前も知らず宿もなしといふ山姥の諭の格にして、どなたの種といふも知らず。人買の手より此里に來り、山賤の松露にふすびたる娘の子を磨き立てゝ、柳は綠花は紅の新造となりしなり……地女あれば女郎あり、女郎あれば地女はきたなく見ゆる筈のつもりで、うるはしく拵へたてし物」(下の三十八)であるの

みならず、又その生れ落ちた家の貧しさやは浮川竹の「勤め」のつらさやその間に忍び〳〵に思ひを運ぶ男への誠や、かういふ憂さ果敢さにその心を鍛え上げられ「女道の人參」となつたのである。「都て皆仁義を備へ、辛酸鹹苦澁の五（を備へて平の味なる太夫と成りしは尤もなり、人參は甘辛苦の味ありと注して邪を養ふ名藥なれば、女道のうちにては太夫は人參なるべし……茅亭客語といふ書に、梨子は五臟の刀斧といひしは見たれど、地女を書載せぬはいと口惜しけれ」（上の十二）。かくて太夫は地女の「職がたき」である。或書に云つてゐるやうに「地女は女郎をケセンのバイタのと惡う云ふが、よし及ばずば誹れといふ古言もあれば、切れば彌堅く仰げば彌高くといふ太夫には及ぶ事ならぬ故、あたまから愚をあらはして職仇を云ふがよし」（下の三十八）、而も男の心を捕へる點に於いて、地女は到底遊女の敵ではないのである。

かういふやうな無遠慮な言葉は、單に現代の女性の激怒を購ふべきのみならず、大多數の現代男女にとつては凡そその意味が不可解でさへあるであらう。併しこれ等の男女に味方して故人と論爭するのは固より私の現在の任務ではない。私の欲するところは、此等の言葉をたよつて德川時代の遊廓に對する觀念を理解するにある。この立場から見れば、それは、當時の才幹ある男性が如何に地女によつては充されぬ要求を持つてゐたか、遊女といふものが享保の時代に至つても猶如何に色道の教養を積んでゐたか、さうしてこれ等の事情が多妻主義の倫理觀と結合してどれほど遊廓に半公式の承認を與へてゐたかを示すものとして、吾々に興味ある歷史的洞察の材料を提供する。而も公平に、機微に觸れて考察すれば、吾々の時代が果して充分に「ひとりね」の著者の時代と手を切つてゐるか、疑問の余地はいくらでもあるのである。

併し「ひとりね」の哲學の深さはその遊女賛美のもう一つ先にある。「すべてこの里へ、はまらで通ふ人と、色にて通

ひ浮氣ならぬ人とは、二つ似たやうにて似ぬ事、ちがひ目ある事なり」、淇園の同情は「はまらで通ふ人」よりも寧ろ「色にて通ひ浮氣ならぬ人」の上にある。さうして彼に從へば、男の戀は地女に對するよりも遊女に對する場合に於いて特に深い、而も彼は遊女の戀に迷ひ込む人の「誠」を賛美してさへゐるのである――「むかし吉野といふ太夫に惚れし男、吉野根引に逢ひしと聞いて、一日の内に三人まで亂心になりけりといふこと、戀路には誠にさもありたきものなり。去るもの日々に疎しといふは地女のことなり、女郎を思ひ忘るゝといふこと惚腐りてからはなきことなり」、これは何故であるか。「地女は眞實も眞實、眞赤な眞實なるべき、女郎は夜毎に變り日毎に變る色を商ふ人にどうして戀路は深きぞ」。この發問は意味深き發問である。これに對する彼の答は、一言にして云へば、「嘘の奥にある誠」に釣られてこれを求めこれを樂む奥深さにあるといふのである彼の色道觀の一特色をなす嘘の哲學は此處にその出發點を得る。

固よりこの嘘の哲學は、遊里にのみ適用されるのではない。「雲萍雜志」に記するところに從へば、淇園は江戸にゐる頃、親しく交はる友に雞黍の約を結ぶことを求められてこれを諾して後、其志を試みるために彼に金を借りた、最初二十五兩、その歳の暮に重ねて二十五兩、その友は何も云はずに自分で持つて來てこれを貸した。其後一言もこの金のことを云ひ出さずに愈々親交を重ねたが、その人不慮の禍によつて多くの黄金の入ることが出來たとき、その人の妻は「七とせ過ぐるに返さざるは欺き奪ふ心ぞ」と云つて淇園を恨んだ。併しその友はこれを叱つて、「否とよ、彼人予を欺ぐ心なし、乏しきが故返さゞるなり、刎頸の交情は婦女子の知れるところにあらず、ふたゝび此事をいはば夫婦の緣を絕つべし」と申渡した。淇園はこの事を或人にきいて、無いものは無いもので返せないのが殘念だと、その話を傳へた人に答へた。この話をその人が又先方に傳へたとき、淇園の盟友が答へた言葉はかうである――「人は不實をなしたりとてその交を絕するは、知己親友といふにはあらず、欺くも不實もその折からの是非なきにして、世に始め

より詐僞を構へて人に交る輩はなし、その詐ると欺くとを許さゞれば知己親友とは云ふべからず。洪園はこの話を聞いて、前に借りた金を封のまゝにその親友に返して、その後益々深く交りを續けた。——洪園の試驗の念入りに過ぎることとは暫く論外に置いて、その友の甘んじて不實を受ける心の寛さは、洪園の友たるに恥ぢぬといふべきである。洪園自身が又このやうな人であつたことは、「ひとりね」の中で、「主人の家來に物を與るに、加增にても何にても、思ひ出したら早速遣るべしとなり、いかにと云ふに、其者よく勤る故に物を與へんと思ふなれば早速遣るがよし、遣らゐうちにひよつと其者が惡き振舞あらば、與れんと思ふものやむべし、止みなば初め深奉公せしこと水になりぬべし、人は善惡ある物なれば、善の時は早く善を稱し、惡の時は早く惡を戒むべし」（上の十）といふのでも想像が出來るであらう。この言葉は婢僕に欺かれることについてのモンテーヌの言葉を想起させる。而も後者が自己の心の平靜を主として、婢僕が蔭で欺いてくれることを希望してゐるのに比すれば、洪園が人を信ずるが故に欺かるゝに甘んずる心は、倫理的に見て一層純粹であるといふべきである。

さうして遊里に遊ぶ者にも亦この心が必要である。「女郎は嘘をつくもの」、遊里は「眉毛をよまれに行くところ」、これを覺悟せぬ者は、其處に遊びを發見することが出來ない。而も嘘と知りつゝ嘘に迷ふ面白さ、嘘の奥に變りなき人情を探つて遂に遊女の誠に掘りあてる喜び、遊女が他人に捧げて自分には與へなかつた誠をも惜まずに、彼女を愛する自分の誠をば心の底に持ち續けて失ふところなき信實——かういふ人間らしさの中に眞正の遊びはある。「すべて戀路は、扨も〳〵むごらしひと思ふ不憫の心と、可愛らしいとの二つが先づ大根になる事なり」、更くる夜の身上話に「眞實の泪を流」すほど先づむごらしさ可愛らしさを身に覺えそめ、神かけて書きし誓紙も、大方嘘であらうとは思ひながら、「もしや眞實にてあらうも知れぬ」と思ひかへすところが「ほださるゝ戀路」になつて、「いつぞやから太夫が云ふた所が忝

し、お〻云ふた所が眞じやあらうと思ひ直し、ぼんのくぼの毛の隨分ぬけた狐が、いつ何日に係蹄にかゝりて命をとらるゝといふ事をしりながら、油揚の鼠をやむる事ならぬがごとし」。かくて如何なる學者粋人も「一陣に敗北し、軍法秘術も消え果つるは口惜しき戀慕の闇といふものなり、智慧のある人ほど、發明なる人ほど、此道をたはけになるものなり」。「隨分ぬかつたやうな人にもなき」大盡も、世を忍んで通ふ太夫に自筆の戀文を書き送るやうなへまをしかねない。その文を「太夫は傍輩女郎と寄合ひて笑ひものにもしたり、又深き男に、これ見さんせの、いつぞや云ふた客めがこうした文を呉れをりましたと、客への眞實盡すためにずん〲に引さき、紙縒になひて行燈の火にあてゝ火繩となして、夜ふけの煙草の、かはいや一煙とうちのぼりぬ」といふやうなことにもなるのである。併し「ひとりね」の著者は、その女郎を怪まず、その大盡を笑はない。「尤なるかな、尤なるかな、人たるもの如何にしてあの姿の怪かるべきや、學才ある人ほど色の道ふかし」（下の十一）。恩にかへることが享樂になるのは、底の誠が其處に動き出す機會を與へられるからである。

この誠が心に根を卸して、而も遊女の心が他に動いて歸らぬとき、遊客は失戀の苦を嘗めなければならぬ、而もそれは自分にも許した女なのである——「宿世如何なるゑにしにや、逢ひ染めてよりこのかた、一時もこの太夫のこと思ひ忘るゝことなく、寐ては夢にたち添ひ、思へば面影にうつろひ、戀しゆかし身にしみじみと、少しそむけては寢し髮のかゝり、可愛らしさの眼に遮り、物も心地せぬはいかなるこゝろにや聞かまほしけれ、世に女に限りは有るまじ、幾人も美人はあらんと云ふは拙き心なるべし」。「……思ひかわしても女郎の方より捨果てなば、如何に矢竹に思ふとても、片思にて叶はましや。かやうに心を苦め、人にも云はれぬ下萠にもへて心を惱まし心中立て、外の女の手を握らぬやうにするを見て、愚痴なり愚痴なりと云ふは、戀路を知らぬ人、詩歌に深からぬ心なり」（上の十二）、情痴を解することこそ詩歌に深き心である。「源氏といふ女郎に逢ひし人あり、この人隨分惚れられしにや、其女郎の姿を繪にとめて、常に

に貼りつけられて詠められける……石南といへる者の云ひしは、源氏は心中して死ぬる女郎心得難きと云ふに、其人の曰く、昔が可愛いと答へられし」(上の九、十)、昔が可愛いとは美しい言葉である。さうしてこの變則な日本のヱルテル・ゲーテに滿腹の同情を寄せ得るところに、洪園の通人としての優越がある。

失戀に反して、遂に遊女の嘘から誠を探り出し、これを掌中に握り得たものを待つ將來は何であるか。それは幸福に行けば身請、不幸に行けば情死である。前に云つた源氏が敦賀屋といふ女房子供のある三十男と情死したのは、丁度洪園が「ひとりね」を書いてゐる年の秋であつたらしい。彼がこの情死に下した論評も亦傾聽すべきものがある。彼は世間の輕薄な批評を斥けて、彼等の死の中に籠れる誠を認める――「浮氣々々といふうちに、人の命を捨るぐらひのことなるは、よく〱の上よく〱といふよく〱にあらねばならぬ筈なり、(仲間)女郎の手前親方への意氣張、四角八方とかく源氏が身の上にならねば、よしあしは積られぬ筈のことなり」(上の四十九)。源氏と、敦賀屋とは、敦賀屋が女房を貰はぬ前の馴染で、二人の間には既に夫婦約束があつた。併し彼は親に女房をあてがはれてこれを拒み兼ね、機會を見て離別して源氏を入れるつもりで猶彼女と逢ひ續けてゐた。ところに「花にあらし月に村雲、帶解のなにかしといきばり、ぜひなう命を棒にふりて、いかいたわけのやうに云はれて、今は土と成」つてゐるのである。洪園はこれに對して「つるが屋の心底さりとはさりとは可愛う、身にしみ〱と思ふ」。それは雲萍雜志に所謂「死なんと覺悟した心」の誠があるからである。「その死ぬるといふ心は、あの人さまならば命も欲しうない、あの女ならば此世の思出あらじと、一筋に思ひ入る」信の一字に叶つてゐるからである。併し彼の缺點は、その文盲と懦弱の故に、持つて生れた信を守るに首尾一貫しなかつたところにある。彼が母の意に從つて女房を迎へることはやむを得なかつたにしても、その女房に心底を云ひきかせて、「一つ床にはいかな〱、指でもさゝぬやうに」して、女房にも疵をつけず源氏にも心

中だてをするのが彼のとるべき道であつた。さうした方が、間もなく女房を離別するにも、早く源氏をひき取るにも樂であつたであらうものを、こらへ情なく女房に二人まで子を産ませて「信の一字を取失つた」のが、結句一身の破滅の原因となつたのである（下の三十八）——この批評には流石に幼い理想主義があるが、兎に角彼の遊客道が遂に遊びの範圍を越えて、生死を賭する信義の大道に連る所以を理解することは出來るであらう。「すべて人の見る前にて大事にするはうそなり、女郎の見ぬ所に心底を變らず、幾年經ても、石は石にして、大事があつて遣るは戀路なりとかや、一度云ひかわせし事などありては、首は首、胴は胴となるとても引かぬがよし、大事のことなり」、故に彼は又、人と約してこれを待つために橋下に溺れた尾生の信をも讃美する、「其事を見ては、いかいたわけの樣に思ふなれど、人は右樣に心中がなければ役に立たぬ物なり」（上の十二）。かくて深く掘り野暮に歸るところに、通の通たる所以はあるのである。

併し色は固より身を滅ぼすためにあるのではない。「仕おほせて白髪まで樂む」のは更によきことである。然るに遊女との戀に末遂ぐる者は極めて少く、始め大盡と云はれた人も、女郎を引取るのは十中の三四で、「多くは勘當の山にのぼりて丹波越する」ことに結着するのは何故であるか。それは、一つは、遊女の誠が丁度その時期に近いて本當に熟するからでもある。「女郎が深う來るといふは、丹波越えして勘當に逢はんとする二月前あたりが身にこたへて面白くなる故に、むしやうにのぼりて丹波越もする」ことになるのである。併しもう一つの理由は「惚れし女を人の花にする」口惜しさを分別して、最初から金の遣ひ方を考へて置くことをしないところにある。この點について或人は洪閣に三個一個の秘傳といふものを傳授した。それは、きいて見れば何でもないことで、例へば三萬兩を遣ひ捨てることの出來るものはこれを三つにわけて、「一萬兩は初軍に一手と定め、その太夫の足代、遊びのけはひと定め、二の手の一萬騎は女郎

の眞實手詰の勝負として、本か嘘かの秘術をあらはし、三の手の一萬騎は伏兵となして、太夫根引の術[illegible]本勘助入道が秘密のよしなり」といふのである。洪闌はこの言葉に一面の重要な眞理を認める。併しこれが唯一の解決だとは考へてゐない——「余思ふに、成程小より大をはかる事なれば、千里の行も一足の向きやうに始まるなれば、女郎を買かゝると早合點の入るべき事なれども、思慮分別なく此里に通ふもよし、此里には工夫のつくほど惡しきと思ふが秘事とも云へり、一説何れも理あり」。此處に又、廓の外に誠の戀の安住の地を求める一派と、廓内にあつて、遊びを超えた戀の誠に結局は矢張り遊んでゐる一派とがわかれる。洪闌自身は後派に屬してゐるらしい。彼の知人が豫言したやうに、「三十越して地女が好き」になつたのか、好きな太夫を根引して妾となして樂んでゐたのか、その邊の消息は私にはわからないが、「物縫ふことの人にすぐれた」彼の妻は固より遊女ではなかつたであらう。さうして彼が彼女の「ものの縫ふをひたぶるに愛で賞し」てゐるところを見れば、彼が彼女に對して情の厚い夫であつたことも亦想像することが出來る（雲萍雜志參照）。世間に必ずしもその例が少くないやうに、彼は「遊んで」ゐる間に、寬容な、人情のわかつた夫としての修養を積んで來たのかも知れない。

同樣に遊里はまた優れた細君養成所であると洪闌は考へる。穿鑿欲の強いこの青年は、妻となつた遊女の生活を觀察し、「女郎をもつた心持は如何やうのものぞ」とその知人に根掘り葉掘りたづねて、大體次のやうな結論に到達する——

「誓詞を書くの爪を放つと云ふは、まだ胸に色ある故なり。手前に引とりて女房にして見れば何のこともなし、色の何のかのと云ふ事はすつきり捨てた事の如くなり。女房も髮結はずして左のみ恥かしいとも覺へず、男も髭ぬかずとても少しも厭ふことなし……都て飽るの妨るのといふはずつと初心のことなりとかや……夫となり妻となり一からは、飽り妨る事は少しもなくなりて、さらば[illegible]にたきかといふとき、詩案にも[illegible]にも[illegible]ゐる[illegible]の第一と云ふはこのうちなる

べし」。それは手を書くものが手本によく似せんと思ふ心を離れ、字形のことは少しも思はず、能書かんとも惡く書かんとも思はぬうちに天然の妙を得るやうになると同一である。「天然なる物は剝げることなし」、彼等の戀はこの天然自然の妙に到り着くのである。或町人の妻になつた遊女は、「よろづの鍵を腰につけて中々昔の全盛の姿ありとも見え」なかつた。或傾城買と彼が身請した女郎とは「今は色もなう暮して」ゐた。併し廓を出てから其處に落つくまでには固より夫婦の間に特別な峠がある。「女郎をもつた心もちは如何やうのものぞ」と問はれた男の答は、其道程を仔細に説明する。最初に男は、持つまではなるほど强かつた氣が、女房に持つてからは細くなることを覺える。それから――「女房に定めて引とりてより半年ばかりは、男の方より意地强く、深い男があるであらう、それを隱しておくさうな、包まず云やれ云やれと、めつたと聞くものなり。そしてその上に、とてものことにあの女房は人の肌ふれぬ、手前ばかり馴染んだものならばよからんといふ心が出來るものなり。是は女郎にて人の肌觸れたといふ事は、三つ子でも知るのみか、それがすきで女房にして置いてからに、女房に持つてからは、いやでも千話のあまりには每晩それを云へば、女は、それは知れてゐるのに、むごい事を云はんす事じや、折角引取て、秋風が立つたやら、さりとては恨めしいわ、此身を捨てたことは何故ぞ、勤めの女になつた故ぞと身をかこちて、每晩泪をながす事なり。それも半年までにて、それからは滅多に深うなりて、離るゝことないものと云ふは女郎のことなりとかや」。この深さは何處から來るか。一つは女房が「貧も貧、大切な子を賣に出すほどの」貧家の子であるからである。富家の娘のやうに、その生家を笠に着て夫を凌がうとするやうなことなく、「夫に見捨られてはならぬといふ心があるなれば。心底ふかし」であるからである。二つには、「夫も引とるほどにはまりたる色といひ、引取るほどの事は色のみに限らず不憫なりと思ふ心底が專一なるにより、我見捨てはどうもならぬと思ふより、一しほ不憫をかくること深」いからである。固より、或人の云ふやうに、親方にせぶられた自分

の過去を目下の者に移して、人使ひが悪いといふやうなこともあらう。併しそれも人々の[illegible]ことは出來ない。「まづ女郎は、粋にて可愛らしく、氣に入ること多く、氣に入らぬ事は少き者と心得べし」(下の九、)その通りに心得て然るべきやに就いては色々の異論もあるであらう。併しこれは享保時代の遊女について云はれた言葉である。それが今日の賣笑婦に當嵌らないと云つて、直ちにこの言葉の眞理を否定することは出來まい。

併し遊女を女房にするのは、廓内に發生して廓外に完成する戀の結末である。廓内に於ける遊びは如何なるものを上乘とすべきか。畠山箕山の遊びは、五分もすかさぬ風俗恰好をして、心の底に理智の目を見張りながら、鷹揚らしく上品さうにする遊びであつた。其處からも「問云、男に心中をするに、傾城誠の心ならずしてしるしを見する事ありや否、答云、心中に眞實と不眞實あり、眞實に男に心を移してするは十に一なり、十に八九は眞の懇切にはあらねど、知音となりて我身の上を頼まむ謀にのみする事也。又問、女眞實の心ならずして謀なりと知らば、男これを受けては益なかるべきか。答、たとひ女より謀にするとも先受くる法なり。其期にいたり、眞實にはあるまじきなどとて歎かぬものなり」(「心中部」)といふやうな、嘘の哲學めいたものは發生し得る。又「客の雙六うつ事、男どちうつ事なかれ、たとひ女郎とうつとも、盤をとり寄せてうち初る事なかれ、女郎どちうつに、おしのけて我うたんとしたるはよし、打かゝりは間をあらせず早く石を亂したるよし、其内に目をぬすむ……女郎是を私さんとて改むるに、或はいひまぜ或は爭ひ、手をとり合ひなどするにぞ雙六をうたれたるものなり、傾城の座にて律義にうつは初心のいたり、却て無興の沙汰なるべし」(「寛文格」)といふやうな輕味の說法も其處から生れて來ることが出來る。併し箕山の遊客道は、大體に於いて、氣取つて、堅苦しくて、外部的である。これに反して[illegible]の遊びは主として心法にかゝつてゐる、それは箕山のそれとくらべて

代支那

改造臨時「現

軍閥支那は頻死の狀態にある。文化支那は猛然として新らしい姿を出現した。我國人は往昔の支那を知り現代支那を解せない、往昔支那の哲學文藝を知りて現代支那の文化を解せない。本誌が敢然として此企てをなすに至つたのは亦多大の原因がある。

問話

濟叢書

絹向一件 □茶生糸輪出一件 □西陣高機由記 □桐生市立精華織物之記 □桐生市濫觴及織物出來記 □大意書 □長崎會所五冊物 □長崎會所發端書 □長崎銅買渡記錄 □奥船出所 □南蠻船入津略記 □一致共和策辨 □文化六年大松澤丹宮様江奉申上候書付 □文化十一年大松澤丹宮様御登坂中勤功書上 □事實書 □大阪上書 □出入司職鑑目錄 □御切手會御顛濟一件 □米價記 □大阪町人御用金留 □天保十四年御用金之留 □天明五年御用金一件細書記 □天保要錄 □檢地秘傳訂正御格式 □年々作合正米多少考 □歴代名義考 □田法歩尺精辨 □四田欠借精術 □田法四〇精術 □古傳密要 □古傳秘錄 □御議定錄 □薩藩天保度財政改革顛末書 □薩藩租額事件 □金山萬留 □東行錄 □幣政論 □御鹽方一件 □御鹽方定式留 □御鹽方御觸留 □據遊館上書 □奥村榮通上書

一、**體　裁**　菊判、天金、總クロース、函入、挿繪、圖面通卷數十枚。紙數每三百頁内外。

一、**頒布方法**　全篇十二卷御購入御豫約の御方にのみ頒つものとす。（從て中途御解約は堅く御斷り申上げます。）

一、**刊行期日**　大正十五年六月より毎月一卷宛刊行、大正十六年五月完結す。

一、**申込期日**　豫約御希望者は申込金を添へ（乙種申込は不要）來る五月三十一日迄申込まれたい。

一、**拂込方法**　甲種　每月拂金參圓　每月五日迄拂込みのこと。甲種申込者には申込金參圓を申受く。此の申込金は最終卷の代金に充入す。
乙種　一時拂參拾參圓　申込金不要。

發行所　東京芝區愛宕下町　振替東京八四〇三一　**改造社**

せるのが、此處で彼が發見する樂みである。「女郎買ひて慰むは、水遊びの上もり、世界樂みの極意にして、人間の是より眞の樂みはなし。昔銀座九郎右衛門が云ひし如くに、女郎を買ふて慰む心からは、買はれた心で慰みたるがよし、女郎に買はれてゐる心からは、買て慰めと云ひしよし也。渠も面白う知りたる人物也。東坡が云ひし如く、人墨を磨するにあらず、墨が人を磨するといふた心にて、女郎を買て遊ぶ〳〵といふうち、女郎に買るゝ人になるも惜からぬにや……不立文字教外別傳といふて、文字は乾屎橛の如く皆役に立たぬ、文字の上になきこそ禪家の無乘の法なりなどと云ふも、よく合點して見れば皆無駄な事なり。麻三斤といふごとく、文字を取扱ふ所に大極はありと知るべし。遊ぶ内に戀路はありといふ事、孔子の取て置の大事の説なり」（下の五十四）——これが狩野文庫「ひとりね」の最後の一節である。「女郎」といふ言葉の墮落した今日に於いては、言葉そのものにショックを感ずるほど卑しくきこえるであらうが、淇園の遊びの哲學を結ぶものとして、この一節は重大な意味を有する。自他融合の世界、他に任せ他に從ふことによつて自己を生かす世界——心を放つてこの世界に悠遊自適するところに、まことなる遊び、まことなる樂みの極意がある。この點に於いて、彼の遊びの道は又人生の大道に連ると云つてよからう。「風情は此方より迎へる物か、將向ふより見するか。さらば向ふにありて我方になしと思へば、われにありて又向ふになし。眺めやる雪の山路の朝ぼらけ、何と寐をぬる一つ家のぬし」（雲萍雜志）。功利と實用との外に擺脫する世界、心に自在の翼を生ずる世界に生きることを知らぬものは眞正の「樂み」を知らない。風雅を知らぬものが何のために此世に生きてゐるかは不可解である。彼が「ひとりね」の中で幾度か繰返してゐる風雅を知らぬ者に對する輕蔑は、その根を此處に發してゐると解すべきである。人生全體に對する彼の立場を明かにするために、私はこの節の最後に、「堪忍記」といふ、武人の茶の湯を攻擊した俗書に對する彼の罵倒の言葉を引用する——

一二目とも見ず作者の短才愚蒙を知れり。太平と亂世といふ事を知らぬ故也。成程治まりし代にて亂るゝ事を忘れぬはもののふの習ひ云ふまでもなし。夏は著ねども小袖を設くるが如く、ものゝふの道にて云ふにも足らず、茶の湯をせしとて武の障りになるといふほどおかしき事はなし。狗子佛性あり、庭前の柏樹何事か設けざらん。太平にて文を弄ぶ上に、茶の湯を好み、歌を詠み、傾城狂ひ、揚弓、まり、たちげい、物まね、半太夫節まで、千羅萬象まで面白いと云ふて樂んでゐるがよし。武門に生るゝと、最早主のために命を捨てねばならぬといふ事を合點してゐる上は、武の道にあまりあり……」(下の廿七)。

さうして傾城狂ひも亦この風雅の中に數へられるといふ光榮を有してゐたのである。

洪園の「ひとりね」には、遊里に遊ぶことそのものが、自分の妻であり若くは妻であるべき女性に對して「信義」を破ることになりはしないかといふやうな顧慮は全然その片影をも見せてゐない。又「貧も貧、大切な子を賣るほどの貧」家の子女を人身賣買に供することの可否は、彼にとつて少しも問題にならなかつたらしい。賣笑に伴ふ深刻な倫理上、人道上、社會上の問題が、彼のやうに明敏な人の意識にさへのぼらなかつたのは、今日の吾々から見れば固より不思議である。併し蓄妾が男子の公然の權利であつた時代、貧富が個人の離れ落ちた運命でこれに對する社會の責任は問題外であつた時代に於いては、それは歴史的に當然なこととして理解され得る。たゞ玆に吾々の問ふべきは、このやうにして生じた男子の自由が、何等かの文化的創造を伴ふほど積極的人間的に行使されたかどうかにある。洪園の遊びはこの點に於いて[illegible]であつたか。其の遊蕩はこの天賦の人[illegible]に貴妻と孤獨とを與へた。[illegible]

ればならぬ。吾々が今日彼と同樣に生活することの可否は、勿論全く別問題である。

併し遊廓が——特に吉原が、かういふ教養の機關であり得なくなる時期は、彼のあとから追ひかけて來た。本來不自然な遊廓文化の基礎は、享保の分水嶺を越えると間もなく、その著しい崩壞を見せて來た。泥中の蓮は、その根を養ふ泥の養分が乏しくなるまゝに、その蠱惑的な、幻影的な豐麗を持ち續けることが出來なくなつた。喜見城の背景には、最初からその後ろに口をあいてゐた地獄の影が次第に著しく目立つて來る。享保の頃には、勤めの床のつらささへなければ、不斷廓に居たいといふ遊女は猶多くあり得た(「ひとりね」上の五)。併し廓そのものに內に充實する生氣が缺け、生氣が乏しくなるに從つて外見を張る必要は益々加はり、外見を張つて無理な景氣をつけるに從つて借金が增し、借金が增すに從つて意地と張との自由が日毎に狹められて、勤めの床の苦しみ愈々堪へ難くなるやうな時代にあつては、遊里は言葉通りの苦界となつて、遊女は空にあこがるゝ籠の鳥のやうに、廓外の自由を慕ふこと一日一日と痛切になつて行くであらう。遊廓といふ蜃氣樓の品格と蠱惑とが減少するにつれて、廓內と廓外との差別は魔法的な効果を失ひ、廓內にある籠の鳥は、地女らしい「濕熱」を以て、その不幸な魂の救ひを、色男の若旦那や意氣なイナセな若い衆との戀に求める。從つて、心中や駈落が德川後期の遊廓に於ける代表的逸話となるのは當然である。固より心中は孰れの時代にもあつたには違ひないが、それが時代が下ると共にその數を增し、而もその性質を變じて來るのは注目すべき現象である。上方に於いてさへ、近松が心中物に筆を染めたのは、主として元祿以後、寶永正德享保の時代である。さうして假令同じ心中であつても、享保以前の心中藝術には、後期のやうな豐後節的な頹廢的な憂欝と絕叫とがなかつた。所詮、上方と江戶とを通じて、前期の遊廓を象徵する逸話は「お大盡樣」である。これに配するに後期の心中と駈落とを以てすれば、吾々は德川時代の遊廓といふ溫室の奇花が、如何にして榮え如何にして凋落したかの概念を持つことが出來

るであらう、文化文政の小春も僅かに返り花を咲かせたに過ぎなかつた。その時分には既に「醫者」といふ新しい秋の花が咲き亂れてゐたのである。

私は、徳川時代に於ける遊里崩壞の過程を、大體以上のやうに理解する。その經過の全體を具體的に跡づけることは私の力に餘るが、この變化が最初に目立ち始めたとき、それがどれほどのショックを與へたかは、寶曆明和安永頃の隨筆によつて、歷々として指摘することが出來るであらう。特に三味線の名手原盛和が、寶曆十三年六十七歲のときに書いた「北里、劇場、隣の疝氣」は、この過渡時代の狀態を示す貴重な文獻である。それは老人の癖癖を通じて見た歷史として、幾分の割引を要することは云ふまでもないが、彼がその中に記述してゐる事實は、目擊者の報告として動かすことが出來ないであらう。

盛和は元祿十年の出生である。從つて彼の二十歲の時は享保元年、三十歲の時は享保十一年。縱令「我衣」の著者の說の如く、元祿の遊客は他人百金を費せば我は千金を費し、享保よりは他人十金を費せば我は五金を費して歸るといふやうな氣風は既に始まつてゐたとしても、猶紀文奈良茂の大盡あり九代目高尾や玉菊等の名妓ある時代に靑年と壯年とを送つて、吉原の氣品と格式とがその眼と心とに殘つてゐたことは勿論である。これに對して今六十七歲の老人が眼前に見てゐるものは、既に身體の活力が衰へてカンフル注射に忙しい吉原である。享保の末に始まつた俄は兎も角も、今日まで吉原の年中行事となつてゐる夜櫻や燈籠はその頃新たに案出された客寄せであつた。而も廓內のさびれ方はこれでは救ふことが出來ない。昔は「五節句紋日は言ふに及ばず、平日にても大門より水道尻まで兩側の茶屋の客のなきは珍らしく、左右に女郎[illegible]と並み居、揚屋町は揚屋女郎の道中、茶屋の二階客、女郎酒盛、誠に晴がましかりしに、今[illegible]である。この[illegible]

……に擬して、ガンスル語氣の一種を試みてゐる――「女郎の風俗も昔は紅粉おしろいと言ふものをむさきこととし、揚屋女郎の薄化粧だに、揚屋風とは言ひながら賤しき事に言ひなし、髪は兵庫に引結び、あら櫛にてすき上げ、爪紅爪がくしの草履、地女とちがひ、奇麗なるを女郎とせしに、今の風は髪は油固め、櫛は下駄の歯の如くなるを二三枚さし、笄とて色々模樣をしたるを七八本さしちらし、祭に賣りあるくだしやら、辨慶の人形やら見わけ難し、天氣のよき日も下駄がけ、助六の眞似かと思へば、揚巻が身振して揚屋入と云ふことを知らず、踊子かと見れば小袖の數を着る、夜鷹にして晝徘徊す。……根津品川にしては座敷も廣し、少しはしほらしき處もあるやうなれど、惣體の下卑、せちがらきこなし、風俗の賤しき有樣、音羽町と品川の合のものと見ゆる」、而もこのやうに衣裳を着飾り、櫛一枚にさへ「八九兩十兩又は廿兩」の金をかけても注射の効果は中々あがらない。氣前よく金を吳るゝ客もなければ、內證の苦しさに女郎の張弱くなり、「いやな爺でも、在鄉の客でも、屋形者の野暮な客でも、一町の亭主でも、なるたけはそらしらず、ふるなどと言ふことはかつてなく」なつてゐるのである。昔は全盛の女郎が、身錢をきつて子待己待庚申待などの遊びを催し、花麗な振舞をした。今はそれが絕えて、その代りに廓內に田樂煮染香のもの饂飩などの賣所が出來、買喰ひがはやつて女郎に賤しき所作が多くなつて來た。さうしてこれに對する客も亦、「女郎買は穏便を第一として中ノ町遊びせず、女郎屋へ早く行く」のみならず、その買ひ方さへ「甚不吟味にて」、買稽古に浮身をやつした盛和の青年時代とは、まるでちがつて來てゐるのである――併しかういふ狀態は必ずしも吉原が世間の需要と離れてしまつたことを意味しない。それはたゞ需要の性質が變化したことを、性慾美化の道場としての意義が漸く失はれて、性慾充足の機關たる本來の面目に歸りつゝあることを、示すのみである。「嬉遊笑覧」によれば、享保五年には散茶女郎ばかり二千人に近く、天明六年遊女禿すべて二千二百七十人、享和の初三千三百十七人、文政八年

三千六百人（此時男藝者二十人女藝者百六十人ばかり）、江戶に於ける人口の增加との比率は知らず、その絕對數に於いては、後に至るほど遊女の數が增して來て居るのである。併し仲ノ町遊びする者なきが故に茶屋はさびれ、大盡なきが故に遊女が苦しく、多數の嗜好に迎合するが故に趣味は下り――かくて本當に遊びを樂まうとする者が、次第に岡場所に移つて行くことは如何ともすることが出來ない。固より百年來の傳統は一朝にして滅びず、明和安永以後慶應に至るまで、それは江戶名所の隨一として江戶ツ子のみならず地方人の間にも――（恐らく後に至るに從つて、それは特に地方人に對して意義を持つものとなつたであらう、これは研究を要する問題であるが、文化文政の諧味を喜ぶ江戶つ子の間に、あの野暮にけばけばしい華魁風俗が通用してゐたことは、國貞以後の浮世繪の形式的なゴテゴテ趣味と共に、地方の影響を除外しては說明し難いやうに思はれる）――全國的の意味を持つてゐた。併しそれは文化的創造の力としては、次第に死滅に近づいて行かなければならぬ。今や其處から響いて來るものは、美しい過去を負ひて現在の衰へに呻吟しつゝあるものの嘆き、賣色の苦界に浮沈しつゝ誠の戀に生きむとするものの絕望的な、憂愁に充ちた歌詞や音曲である。併し母體の衰弱と共にこれ等の哀訴の聲もやがてやんでしまふ。後に殘るものは、單に保存せらるべきものとしての形骸である。かくて、遊廓に關する吾々の考察も、漸く一段落を告ぐべき時期に到達した。

從前の踊子の系統をひいて寶曆以來擡頭して來た藝者については、玆では詳しい考察に入ることを避ける。それが私娼として吉原の廓內にも蔓を延ばし、一時遊女の位置を脅かさんとする勢ひさへ見せたことは、寛政七年の「新吉原町定書」の一節によつても想像される――

一、茶屋之內には、客引留、藝者共大勢引招、中には女藝者共客相對など申成し、如何之儀も有之、中宿等いたし、並茶屋へは不相應之[illegible]に有之趣にて、遊女屋渡世之障り、[illegible]茶屋共[illegible]之事に[illegible]、其上茶屋共一統申合、右體如何

就案内差留、女藝者も差留可申事。

一、女藝者不埒之中宿いたし候兩隣之茶屋も申合不行屆儀に付、爲過怠一日商賣爲休可申事。

それが廓内に於いて跋扈するとき、「遊女屋渡世の障り」になることは云ふまでもない。これを禁遏する方針をとつたのは、吉原町としても、吉原町を保護せむとする當局としても、當然の所置である。吉原藝者はそれ以來賣笑の廓に附屬する非賣笑の「藝」者として、最も穢い場處に附設された最も清い遊藝人として、今日まで繼續して來た。併しそれはたゞ廓内に於いてのことである。當局も吉原町も、世間で新しく感じ始めた藝者そのもの〻需要を禁遏する力はなかつた。酒席の斡旋者としての、若くは私娼としての——孰れにしても「遊び」の要求を充す女稼業としての藝者は廓外に繁榮する。それが岡場所の賑ひと吉原の衰微とを伴つて來ることは、自然の推移として如何ともすることが出來ない。たゞこの場合注意して置きたいのは藝者勃興の事實は、吉原といふもの〻根本組織に對する批評を含んでゐるといふことである。その根本組織の中にあつた矛盾、其處から生じて來る内部的破綻、その結果としての自滅と新しいもの〻産出と——かくて吉原のやうな公娼制度も亦その Dialektik を持つてゐたのである。私が最後に一言しようとするのはたゞこの一點にある。藝者そのもの〻發展と推移については、例へば三田村鳶魚氏の「江戸藝者の研究」(中央公論、五月號)のやうなものが出てゐる以上、私のやうな寡聞な者が一言も附加することが出來ないことは勿論である。

然らば德川時代に於ける遊廓の根本組織にある矛盾とは何であるか。それは、前にも云つたやうに、女奴隷が色界の女王に扮しなければならぬところにある。色界の女王として教養されたものが、結局女奴隷の役目をしなければならぬところにある。この間の矛盾をかくすために、賣物買物といふ根本事實を掩ふに色樣々な花を以てして、その花の

さによつて人心を蠱惑しようとしたのは、確かに遊廓當事者の賢いやり方であつた。太夫の品格、太夫の意地と張の色道の錬磨——かういふものは太夫買そのものに既に一種の面目、一種の晴がましさを感じさせた。太夫の意地と張り、嫌な客をふるの自由——かういふことは太夫自身に自分の權威を自覺せしめ、太夫に許される客に光榮と自惚とを感ぜしめた。而も許すことが此里に於ける戀の極致ではない、その許し方、許すことの底にある心の誠の深さ——これを摑むのが、危險と遊戯とを愛する遊客の最後の目標である。さうして最後の目標に對する熱心は、彼女が多くの男に許さなければならぬ「勤の身」であることや、彼女の周圍には多くの競爭者があるといふ事實によつて一層煽られる。

併し遊女が一度誠の戀に到達するとき、女奴隷であるといふ事實は千鈞の重みを以て彼女にのしかゝつて來るであらう。縱令多年の修練によつてその許し方に心の厚薄の差別を見せる術を心得てゐるとはいへ、凡そ「勤め」そのものが彼女にとつて堪へ難い苦痛となることは云ふまでもない。この意味に於いて戀は遊廓と矛盾する。遊廓は、特に德川時代のやうに男女の滑らかな接觸の不自由であつた時代に於いては、戀の發生に對して極めて有力な機會を與へたであらう。併し戀の完成は廓外に出ることによつて始めて可能である。所詮遊廓は、興味から戀愛に到る途中の花野である。

その花野は、其處に人をひきとめて置かうとする限り、魔法的な美しさを以て人を蠱惑しなければならない。併しこの魔法は、これを支持する財力の保護を離れるとき、その保護を離れて多數者から集められた零細な金銀を基礎とする必要に迫られるとき、當然にその眩惑の力を減じなければならぬ。品格、教養、意地、張が失はれるとき、又廓內に充ちてゐた生氣のゆるみが感ぜられるとき、それは女奴隷と人身を買ふ者との裸かな關係として、本來の地獄の相を次第に顯現して來る。併し德川時代に於いては、それは依然として戀愛發生の場處としての特殊の使命を持つことをやめない。而も[illegible]であらう。故にこの[illegible]

望的な、憂愁に充ちたものとなるのは當然であつた。これは「里の掟」に對する反逆として、遊廓の自滅を豫告する現象として、吉原本來の精神から云へば墮落である。併しこれを人間的に見れば、寧ろ不自然に誘拐されていた人間の魂がその本來の自然に還歸しつゝある道程と見ることも出來るであらう。人は、特に誠ある人は、次第に廓の遊びに堪へ難くなつて來たのである。

この時に當つて藝者の一團が、娘の、特に處女の假托を以て出現して來たのは注目に價する。「遊びのうちにある戀路」に洗煉された趣味を持つてゐた當時の通人が、貢物買物の地金を益々露出しつゝあつた遊女よりも、征服の自由と失敗の危險がもつと多いところに、而も田舍向の華麗を離れて新たに自分達の周圍から、自分達の趣味に逢ふやうな扮裝を以て出現した鬪場處に、その遊び場を求めたのは當然と云はなければならぬ。其處は吉原よりももつと隠れるにふさはしく、戀の戰ひと戯れとをするにふさはしく、自分の趣味に合つた家造りや身なりや食物を發見するにふさはしい。故に性慾を充すことを唯一の目的とする者は知らず、「遊び」を求める者が次第に吉原から遠かるのは自然の勢である。

然らば吉原は結局如何なる子孫をも殘さずに自滅したか。否、それは「遊び」の精神を殘した。さうして新しい藝者も亦この精神を繼承した吉原の子なのである。(四月廿八日記)

附記。この稿の前半を發行所に送つてしまつてから、狩野文庫の中に「色道大鏡」の寫本を發見した。これには全十八卷の目錄があり、圖書刊行會本にぬけてゐる數卷の斷片も挿入されてゐる。これによれば全卷の目錄は、卷第一、名目鈔、卷第二、寛文格、卷第三、卷第四(以上二卷不明)、卷第五、廿八品、卷第六、心中部、卷第七、翫器部、卷第八、音曲部。卷第九、文章部、卷第十、定紋部、卷第十一、人名部、卷第十二、遊廓圖上、卷第十三、遊廓圖下、卷第十四、

雜女部、卷第十五、雜談部、卷十六、道號部、卷第十七、扶桑列女傳、卷第十八、無題詩式、陳言篇である。特にこの寫本の面白いのは、實山が自ら跋を書いてその經歷をのべ、この書を成して後、心機一轉「昔の俗書は取集め爐からげにして投げや」つたと語つてゐることである。今實山の人となりを知らせるために、その跋文の始めを引いて置く。

「吞舟軒實山、若年にして父母に後る。身は賤しながら、なまじゐに家督をうけ得て渡世闕なり。永日の春の夕、遊妾の惡風に吹かれて、花輝の色門に入り、これを諫むる人なければ、これを是として年を累ぬ。勿論なるかな、道をわきまへ知るにつけて家を破り身を輕くなす事珍らしからず。悲しいかな、これより心やけになりて、人口をも恐れず、貧窮をも厭はず、當道を孫き道の祖たらんことを思ふ故に、當道の書を著して末世に殘さん意味なり……」

さん堀爺の死

（耽々亭聞書の二）

吉井勇

　さん堀爺は熱に浮かされてうとうとしてゐた。疊も敷いてない板敷の上に、薄汚れた煎餅布團を一枚展べて、そこに仰向けに寢てゐるのだが、もうかうして寢付いてから、三月近くなつてゐるので、背中や腰に床擢れが出來て、ちよつと身動きをしてさへそこら一面、無數の針で突き刺されるやうに痛んだ。それもはつきり目が覺めてゐる時には、總身が縮み上がるほど痛かつたが、かうして熱に浮かされて、じつと目を閉つてうとうとしてゐると、少し位體を動かしても、それほど强くは響かなかつた。はつと思つて目を開いた時には、もう痛みはいくらか薄れてゐた。

　が、さん堀爺には、かうした床擢れの痛みよりも、過去のいろいろの思ひ出のために、どの位心を脅やかされてゐるか分らなかつた。七十九年の長い生涯は、今になつて思ひ返して見ると、唯罪から罪への果しない繋がりに過ぎなかつた。やくざな長い一生は、思ひ出して見るだけでも暗く寂しかつた。

「一體おれは何のために生きてゐたのだ。」

　不圖そんなことを考へることがあるが、それは唯自分の過去の長い月日を振り返つて見て、一層寂しい思をするだけのものに過ぎなかつた。うとうと眠りに落ちたかと思ふと、まるで忘れてゐたやうなことを、まざまざと夢に見るやうなこともあつた。今ではもう夢を見るのも怖ろしかつた。「いけねえ、いけねえ。かうなつちやあおしまひだ。お迎ひの來るのも遠くはないぞ。」

　そんなことを考へるとさん堀爺は、何だかひどく悲しくなつて、じつと天井の雨汚染の痕を見詰めてゐる目には、涙が一杯溜つて來たが、それでも强情に入齒を喰ひしばつて、泣き聲だけは立てなかつた。瞼から溢れ出した涙は、痩せて皺だらけな頰を傳つて、耳の方へ流れて往つたが、それでも唇をへの字な

りに曲げたまま、込み上げて來る嗚咽の聲を耐へてゐた。が、さうしてゐるうちに、如何しても耐へられなくなつて來ると、さん堀爺の歪んだ口からは、誰に向つて叫ぶともなく、「畜生」とか「馬鹿」とか云ふやうな罵りの言葉が、口汚なく吐き出された。さうして怒鳴り散らしてゐると、何時となく悲しさが紛らされてひとりでに涙も乾いて往つた。

しかしさん堀爺は、別に死と云ふものを、怖れてゐる譯ではなかつた。口では怖れてゐるやうなことを云つてゐても、心の中では「お迎へ」の來るのをむしろ待遠しく思つてゐるのだつた。兎も角も七十九年と云ふ長い年月には、この年老いた破落戸も、もううんざりするほど倦き倦きしてゐた。

「長いやうな、短いやうな。人間の一生と云ふものは、ほんとに妙なものだなあ。」

今さん堀爺が熱に浮かされてうとうとしながら、思ふともなくこんなことを考へてゐるところは、小梅ももうずつと奥の方の、汚ない路次のどん詰りにある長屋の一軒で、明石島藏と云ふ、默阿彌の「島千鳥」の中に出て來る人物と、同じ名前の友達の家なのだつた。

向島の土手の方から吹いて來る埃つ臭い風が、穴だらけな障[illegible]

[illegible]

爺は目を閉つて、何時までもうとうとし續けてゐた。

さん堀爺はほんとの名前を徳兵衛と云つて、男がみんな頭の上に、丁髷を戴せてゐる時代には、本所の小梅瓦町のせうさん堀の近くで髪結をしてゐた。そんな譯でせうさん堀の「せう」だけを除つて、今でもさん堀爺と呼ばれてゐるのだが、それと云ふのも何かと云ふと徳兵衛は、髪結をしてゐた若い時分の話を、自慢さうにするからだつた。

「何しろこれで若い時分には腕が利いてゐたから、せうさん堀の徳兵衛つて云やあ、かなり聴こえたものだつたぜ。藏前の札差業なんかは、みんなおれでなけりやあならねえことに、なつてゐたんだから豪勢なものさ。」

徳兵衛の話の中には、かう云つたやうな工合に、きつと「せうさん堀」と云ふ名前が出た。で、「せうさん堀」と云ふ名前が出ると、それからは直ぐに引き續いて、その時分を懐しいやうに目皺を寄せて、いろいろ遠い昔の話がそれからそれへ手繰り出された。源兵衛堀の傍にあつた、源兵衛汁粉の娘から惚れられて、房州の方へ駈落をしたことだの、吉原の素見仲間に異人[illegible]と云ふ男があつて、それと自分とが投節で聲のよさを争つた[illegible]

三の名前で女房がみんなお富と云ふ名前だつたと云ふことだの、そんな話はさん堀爺を知つてゐる人達は、幾度聴かされたか分らなかつた。

「ほうら、その次は源兵衛汁粉だ。」

「ほうら、その次は異人館だ。」

「ほうら、その次は三虎三富だ。」

　さん堀爺の話の中に「せうさん堀」と云ふ名前が出て來ると、聞き手の方ではもうちやんと次には何が話されるかと云ふことを心得てゐて、心の中で註文を附けた。そしてその註文は滅多に外れることがないのだつた。

　かうして今でも時々思ひ出話をして懐しんでゐるやうに、みんなの頭に丁髷が載つて、髪結渡世をしてゐられるうちは、さん堀爺の徳兵衛も、汁粉屋の娘に惚れられて、投節をうたつて暮らして往けたが、そのうち年號が明治と改つて、頭も開化風な散髪になると、もういけなかつた。徳兵衛は髪結の店を閉ぢて、何か新しい商賣を見付けなければならなかつた。

　徳兵衛が酒と博奕と女とに、身を持ち崩すやうになつたのはそれからだつた。髪結の方では腕が利いてゐると云はれてゐるだけに、商賣を變へるのが忌々しく、そのままのらりくらりとした日を送つてゐるうちに、徳兵衛は何時の間にか悪い友達に誘はれて、賭場入りをするやうになつた。丁半やチョボ一の勝負の味が、だんだん身に染み込んで來ると、もう一日でも壺皿から飛び出す骰子の目を見ないではゐられなかつた。盆茣座の前の坐り方が身に附いて來る時分には、イカサマの一手二手は教へられるともなく覺えてゐた。「さん堀徳」云ふ名前は、間もなく遊び人の間に知れわたるやうになつた。

　徳兵衛の暗く長い生涯は、まづかうして盆茣座の前から始められた。が、根が人のいい徳兵衛のことだから、たいした罪を犯すことも出來ずに、イカサマ博奕かモグリ女衒と云つたやうなことが關の山で、それももう年をとつてからは、ここのところ二十年近くと云ふものは、一八(チーハ)の運送をして暮らして來たのだつた。

　一體この一八と云ふのは「一八買ふなら暇下しやんせ、一八ぢや湯錢も殘りやせぬ」と云ふ唄がある位の小遣ひ博奕で、「お寺開くか緋衣着るか、但し高野で味噌摺るか」などと鼻唄まじりでやる、丁半やチョボ一とは、較べものにならない位斉なものだつた。

　抑その商賣の方法は、胴元と云ふ親があつて、それが運送と云ふ、丁半の方で云へば張子にあたる乾兒を使つて、親の發行するフワと云ふ紙を、ツケ紙と一緒に客に渡すのだがそのフワ

と云ふ紙には、「白馬天を行く」とか「親子女郎買」とか、何だか譯の分らない謎のやうな文句が書いてあつて、客はこれから受ける暗示に依つて判斷をして、ツケ紙に書いてある三十六の、いづれかの目に張るのである。そしてそのツケ紙の三十六の目には、それぞれ次のやうな不思議な文字が記してあつて、それにはみんな下の括弧の中に書いてあるやうな意味が含まれてゐる。

占魁（おいらん、むかで、汽車など、すべて長いもの）
板桂（螢、ちやんちやん坊主、泥棒）
榮生（死人、役者）
逢春（雀、蟬）
志高（子供、みみず）
月寶（腹、はらんだ人、舟、五十錢銀貨）
正順（しらみ、猪）
坤山（虎、馬鹿）
漢雲（牛、支那の王様）
江祠（船、風船）
福孫（探偵、犬）
光明（白馬、馬、あたま）
[illegible]（馬、[illegible]）

只得（猫、藝者、くち）
必得（鼠）
茂林（巡査、蜂）
青雲（鶴、雲）
天申（雷、電氣、親分、ごろつき）
良玉（目玉、蝶々）
明珠（酒、よつぱらひ、怪我人）
上招（女郎、酒）
合同（强盜）
三槐（血、猿）
合海（蛙、はまぐり）
九官（鴉）
太平（兵隊、日の丸の旗）
火官（龜の子、火）
日山（おてんと様）
天良（龍、鰻、足、あんま）
井利（鯉、糞）
萬金（金、蛇）
元貴（男のもの）
[illegible]元（役者、[illegible]）

吉品（女のもの）
安士（狐）

で、一つ賭けるのは一錢で、親の大小に依つて、百以上はお斷りとか、五百以上はお斷りとか云ふ極めがあるが、それまではいくら賭けても關はない。當ると三十倍になるけれども、運送にそのうち二錢取られるから、結局一つに付いて二十八錢と云ふものが、客の手に戻つて來るのである。外れたことを「パンを喰ふ」と云ひ、親が破産することを「モウロウする」と云ふ。

徳兵衞はこの一八の運送をやり始めてから、幾度警察に引つ張られて、臭い飯を食ふやうな目に會はされたか知れなかつたが、しかしもう年はとつてゐるし、こんなことをして暮らすより外、何の仕事も出來なかつたので、監獄から出て來るとは、直ぐにもうフヮとツケ紙とを持つて歩き廻つてゐた。かうして徳兵衞は、七十九年と云ふ長い生涯の間には、小さいながらもいろいろと、惡事の數を重ねて來たのだつた。

明石の家に轉がり込んで、どつと床に寢付いてからは、めつきり氣が弱くなつたせいか、不圖目の前にイカサマ骰子が轉げて來たり、直ぐ鼻の先に賣り飛ばした女の顏が重なり合つて見

を行く」と云つたやうな、フヮの謎のやうな文句だつた。それを考へてゐると、ひとりでにいゝ心持に眠くなつた。過去の暗い罪の思ひ出にも惱まされなかつた。

さん堀爺は今もうとうとしながら、「孔明樓上に琴を彈ず」と云ふ、昨日明石から聽いたフヮの文句を、幾度も幾度も思ひ返すやうにして考へてゐたが、そのうち不圖そこにこつちを向いて嘲笑つてゐるやうな、女の顏が見えたやうな氣がして、思はずはつとして目を開いた。

「誰だい。」

壓し潰されたやうな弱々しい、皺嗄れた聲で呼んで見たが、直ぐにそれがいつもの幻覺だと云ふことに氣が付くと、さん堀爺は痩せた頰に、引つ釣るやうな苦笑ひを浮べた。

「はゝゝゝ、何でえ。馬鹿にしてやがらあ。」

心の中で呟くつもりのが、思はず言葉となつて口から出ると、不圖それを聽き付けたやうに、直ぐ足の先の臺所の方から、咎めるやうに訊き直すものがあつた。

「如何したんだい。爺さん。氣味の惡い笑ひ聲を立てるぢやあないか。」

さう云つたのはこの三月位前からさん堀爺が世話になつてゐる明石島藏で、今咽喉を渇かして歸つて來たばかりのところと見えて、手桶の水を柄杓で二三杯呷つてから、のそのそ病人の寢床の傍へ上がつて來た。これはまだ四十四五位の、萎びたやうに痩せ削けた小男で、鼠のやうにおどおどした、臆病らしい目付をしてゐた。胞衣會社のお仕着せ半纏も、その男には大き過ぎると見えて、立つても膝の下あたりまであつた。

「おい、爺さん。如何したんだい。歸つて來ると突然妙な笑ひ聲を聽かせられたんで、おれはもうすつかり脅えさせられちやつたぜ。」

明石はさう云ひながら枕元の莚の敷いてあるところに座つて、べらべら口を尖すやうにして喋り立てた。

「ほんとにお前氣を付けなくちやいけねえよ。近頃時々妙な聲を出したり何かすることがあるからな。あれが如何もおれには氣になつてならねえんだ。ねえ、爺さん。お前は自分ぢやあ分らねえだらうが、そりやあほんとに何と言つていいか分らねえやうな、妙に薄氣味の惡い聲を出すことがあるんだぜ。さうよなあ、何て云つたらいいだらう。まあ、一番分りやすく云へば、犬か豚が絞め殺される時のやうな聲だよ。はゝゝゝ、しかし、[illegible]よ。おれだつてお前に早く死んで貰ひてえと思つてゐる譯ぢやあないんだからな。これだつてかうしてお前をここに置いとききやあ、一日八貫づゝにやなるんだから、なるべく長く生きてゐて貰ひてえや。」

さん堀爺は明石の言葉を、そこまでじつと默つて聽いてゐたが、金の話になると急に暗い目の中に、鋭く嶮しい光を湛へて、詰るやうに訊いた。

「おい、島さん。何だか話が少し違つてやしねえかい。」

「ええ、話が違つてゐるつて……。そんなこたあないよ。何だい。何處が違つてゐるつて云ふんだい。」

明石はおどおどした顏付をしながらも、油斷なく相手の心持を、讀み取らうとするやうな目遣ひをしてゐた。

「はゝゝゝ。呆けなさんな。年はとつてもまだ耄碌はしやしねえぜ。」

「何だい。爺さん。何もお前が耄碌してゐるなんて、そんなことを云つた覺えはないぜ。」

「そりやあさうよ。すきなに耄碌したなんて云やしねえけれど、云つたと同然のことを云つてゐるぢやあねえか。」

「へえ、さうかね。」

[illegible]としてゐる明石の顏を見詰めながら、さん堀爺は[illegible]

れた聲で云ひつゞけた。

「さうかねぢやあねえよ。お前は今おれをここに置いとくと、一日八貫づつになると云つたが、ありやあ何かの間違ひだらう。」

「笑談云つちやいけねえ。ほんとだよ。ほんとにそれは一日八貫しか貰つてゐねえんだ。」

「嘘をつけ。昨日澤田のおけいが來て、一日一兩二分の割で、お前に渡してあるつて云つてゐたぜ。」

　澤田のおけいと云ふのは、さん堀爺の姪にあたる女で、亭主が兜町でやつてゐる仲買の店が、近頃景氣のいゝところから、さん堀爺が寢付いてからの世話を、厭々ながらもしてゐるのだつた。それだから明石も澤田と云ふ名前を聽くと、ちよつと困つたやうに頭を搔いて、いくらか照れたやうな薄笑ひをした。

「はゝゝゝゝ、さうか。澤田の御新造から聽いたのかい。」

「態あ見やがれ。お前のことだからその位のことはしてゐるだらうと思つてゐたんだが、病人の藥代のピンを切るなあ酷過ぎるぜ。」

　が、口ではかう怒つたやうな調子で云つてゐるものの、さん堀爺の心の中では、何と云ふことなしに明石に對して、或る親しみが感じられてゐた。で、直ぐに目尻のところに笑ひ皺を寄せながら言葉を續けた。

「しかし、いろいろ世話になつてゐるこつたしするから、その位のことは當り前だと思つて、今更野暮つ臭く、怒つたり何かじやしねえよ。しかしな、島さん。ものは相談だが、如何だい、ひとつおれの頼みを肯いて呉れねえか。」

「うん、何だい、頼みつて云ふのは。」

「なあにつまらねことなのだがね……。」

　さん堀爺はごくりと唾を呑み込んでから、じつと明石の顏を見詰ながら云つた。

「實はおれは酒が飲みたくつて堪らねえんだ。」

「ええ、酒が………。」

　明石がさう訊き返すやうに云ふと、さん堀爺は目をぱちくりさせながら、ちよつと微かに點頭いて見せた。

「ああ、如何だい、島さん。飲ましちやあ呉れねえかい。」

「うん、しかし醫者は酒だけは飲んぢやあいけねえつて云つてゐるんだぜ。」

「なあにあんな筍醫者なんか、何と云つたて闘ふものかよ。

「しかし體に障るとよくねえからな。」

「大丈夫だよ。酒が障るやうな、そんなやにつこい體ぢやあしねえやな。おれはひよつとすると酒を飲んだら

快くなりやあしねえかと思つてゐるんだぜ。」

「そんなことがあるものか。」

と、さん堀爺は枕に載せて首を振つて、信ずるもののやうに瞳を凝らした。

「いいや、ひよつとしたらぢやねえ。たしかに快くなるよ。たしかに快くなるに違ひねえよ。本人がさう思つてゐるんだから、こいつあ一番慥かぢやあないか。それだからな、島さん、たんととは云はねえ、二合半（こなから）でいいから飲まして呉んねえ。」

「はゝゝ、そんなに飲みたきやあ飲ましてもいいが、しかし爺さん、大丈夫かい。」

「ああ、大丈夫だとも。受け合ふよ。」

「お前が受け合つたところで仕方がねえが、しかしもつと後でいいんだらう。」

「いや、後ぢやあいけねえ。今直ぐ飲みてえんだ。」

さう云はれると明石は、不精無性に立ち上がつて、

「厄介な病人だな。それぢやあ待つてゐねえ、今ちよつと往つて買つて來るから。」

と云つて、のそりとまた臺所の方から出懸けて往つた。

さん堀爺はにやにや嬉しさうに笑ひながら、遠ざかつてゆく足音に、暫く耳を澄ましてゐたが、そのうち[illegible]で來る午後の日射が、障子に映つてゐるのを眺めながら、ぼんやりとした顔付で、何かじつと考へ込んでゐた。

明石が歸つて來たのは、それから一時間近くも經つてからだつた。

「おい、爺さん。弱つたぜ。何しろお前も知つての通り、この近所の酒屋つて酒屋は、みんな借り盡くしてゐるつて始末だらう。それだからうつかり往つて、前の借の催促をされてもうるせえと思つたから、ずうつともう船戸の近くまで往つて、やつと買つて來たんだよ。」

明石はさう云ひながら臺所の方から、のつそり徳利をぶら下げたまま上がつて來たが、さん堀爺が目に一杯涙を溜めてゐるのを見ると、見てはならないものを見てしまつたやうに、少し周章てどぎまぎしながら話し懸けた。

「ねえ、爺さん。お前はやつぱりお燗をした方がいいんだらう。」

と、さん堀爺は徳利を見ると、ちよつと舌舐めずりをしながら首を振つた。

「ううん、お燗なんざあしなくつたつていいや。」

「しかし[illegible]ちやねえんだから、冷でやつちやあ毒だらうぜ。」

「なあに毒なこたあるものかな。」
「さうか。そんなら一杯だけ冷でやつてゐるがいいや。そのうち火を熾したり湯を沸したりしてお燗を附けるから、後はお燗を附けたやつを飲みねえ。」
　明石は枕元に置いてあつた湯呑に一杯酒を注いで、それをさん堀爺の手に持たしてやると、直ぐに臺所の方に往つて火を熾しにかかつた。焚木代りに壁の羽目板を、めりめりへし折つて七輪に投げ込んで、凸凹だらけの藥罐をその上に懸けると、明石はそのままさん堀爺の寢床の傍に來て、髯だらけの顏を覗き込むやうにして訊いた。
「如何だい。爺さん。うめえかい。」
　が、さん堀爺はこれには何とも返事をしずに、まだ半分ほど飲み殘してある湯呑を、じつと痩せた手で握りしめながら、不圖思ひ出したやうに云つた。
「ねえ、おい、島さん。お前は源兵衛堀の傍に、源兵衛汁粉つて云ふのがあつたのを知るめえな。」
と、明石は思はず笑ひ出して、冷やかすやうな調子で返事をした。
「はゝゝゝ、また源兵衛汁粉か。その話ならおれはもう幾度聽いたか分らねえぜ。」
「さうかな。おれはもうお前にそんなお話をしたつけかな。」
「爺さん、少し如何かしてゐるな。」
　さう心の中で思ひながらも、明石は何となく胸が迫つて來るやうな心持になつて、まだ涙の乾き切つてゐない、さん堀爺の潤んだ目をじつと見詰めた。
「何だらう、爺さん。その汁粉屋に娘があつて、そいつに惚れられたつて話だらう。」
「ああ、さうよ。よく知つてゐるな、お前は。」
　さん堀爺は自分がこれまでに幾度となく、いろいろの人に話したことも、もうすつかり忘れてゐると見えて、びつくりしたやうに目を睜つた。
「はゝゝゝ、そりやあ知つてゐるよ。お前の口から幾度聽かされたか分らねえんだもの。」
「さうか。おれはまた誰にも話したことはねえと思つてゐたんだが……。」
　さう云ひながらもさん堀爺は、何か遠いものでも見詰めてゐるやうな目付をしてゐた。が、手に持つた湯呑に氣が付くと、殘りの酒をぐつと一息に飲み乾してから、いくらか元氣付いたやうに言葉を續けた。
「ところがね、島さん。さつきお前が酒を買ひに出て往くと間

もなくのことだ。その汁粉屋の娘のおせんが、おれを訪ねて來たぢやあねえか。」

「ええ、笑談云つちやいけねえ。」

明石はその言葉を聽くと、思はずぎよつとして、脅えたやうな目付で、四邊を見廻しながら云つた。

「だつてお前、その娘はお前と駈落をしてから間もなく、病氣になつて死んだつて言ふぢやあねえか。今頃になつてお前を訪ねて來るなんて、そんな馬鹿な話があつて堪るものかな。」

「うん。しかし、たしかにやつて來たのには違えねえんだがな。」

「そんなこたあないよ。そりやあきつと夢か何か見たんだ。」

「成程な。さう云やあ夢かも知れねえが、如何しておれは今時分、あんな女の夢を見たんだらう。」

「そりやあやつぱり始めての女だから、いくら年をとつても忘れられないんだね。」

「はゝゝゝ。」

さん堀爺は急に寂しさを紛らすやうな笑ひ聲を立てたが、もうそろそろ暮れかかつて來てゐる、仄暗い淺間の中で聽いてゐると、明石の耳にはかへつてそれが、妙に不氣味に響いて來た。

た、[illegible]

「ああ、もう雷燈が來てゐるだらう。」

と呟くやうに云ひながら、足を爪立てるやうにして、雷燈の方へ手を延ばした。

さん堀爺は久しぶりでその晩、三合あまりも酒を飮んだ。病氣で體の弱つてゐるところへ、三月近くも廢めてゐた酒が入つたので、さん堀爺はひどく醉つ拂つてしまつて、床の上に仰向きに寢たまま、昔流行つたと云ふ投節を、皺嗄れ聲でうたつたりした。

「おい、爺さん。いい機嫌だね。」

これも一緒にちびちび飮んでゐた明石がさう云ふと、さん堀爺はぽおつと仄紅く醉の出た顏を歪めるやうにして笑つて、少し呂律の廻らなくなつた聲で云つた。

「はゝゝゝゝ、島さん、濟まねえ。おれはもう近頃になくいい心持に醉つ拂つてしまつたよ。」

「さうか。そりや結構だ。」

さう云ふとさん堀爺は明石に向つて子供のやうに他愛のない調子で強請つた。

「ねえ、島さん、醉つたことは醉つたが、おれにはまだもう少し

[illegible]

「なあに、もう、それだけ醉やあ澤山だよ。」
「だつて、お前、もう少し位いいちやあねえか。」
「ほんとに、爺さん、もうお止しよ。さつき貰つて來た酒は、もうすつかり飲んぢまつたんだから。」
「さうか。それぢやもういいや。また貰ひに往つて貰ふのは氣の毒だからな。」
　さん堀爺は諦めたやうにさう云つたかと思ふと、またうつとりと目を閉つた。が、間もなく誰かに呼び起されたやうに目を開けるときよろきよろそこらを見廻はしながら、
「おい、今誰かおれの名前を呼びやあしなかつたかい。」
と、怪訝さうな顏付で訊いた。
「ううん、誰も呼びやあしねえよ。」
　明石はさう云つてから、氣味惡さうに少し後退りをするやうな恰好で訊き返した。
「如何したんだい。誰かお前を呼んでゐるやうな聲が聽こえたのかい。」
「うん、誰だかおれの名前を呼んだと思ふと、よくもパンを喰はせやがつたなつて聲が聽こえたんだ。」
「さうか。そいつは面白いぢやあねえか。」
「面白かねえやな。」
　さん堀爺は忌々しさうに舌打をして、寢返りを打たうとすると、床擦れの痛みに體中が顚へ上がつた。
「あ痛てえてえてえ、畜生、體中にこてえやがらあ。」
　と、明石も氣が付いたやうに、劬はりの言葉を懸けながら、蒲團をそつと懸けてやつた。
「ああ、動いちやいけねえ、動いちやいけねえ。じつとしてゐなくちや駄目だぜ。」
「うん、うつかり床擦れのあることも忘れて、寢返りを打たうとしたもんだから、酷え目に會つちまつた。」
「はゝゝゝ、折角いい心持に醉つたのが覺めやしねえかい。」
「うん。」
　さん堀爺は顏を獅嚙めながらさう云つて、じつとぼやけた電燈の灯を見詰めてゐた。
　晝のうちはかなり強く吹いてゐた風も、夜に入つてからはばつたり歇んで、四邊はしんとした靜けさの中に寢鎭つてゐた。遠くの方から汽車の笛らしいものが響いて來たが、それも直ぐに聽こえなくなつた。そのうちぽつりとトタン屋根に何か落ちるやうな音がしたと思ふと、だんだんそれが激しくなつて、しまひにはざあつと瀑のやうな音を立て始めた。
「ああ、降り出したな。降りさうな晩だと思つてゐたんだ。」

さん堀爺は心の中で雨が降るのを待つてゐたやうに呟いてから、じつと徐かに目を閉つたが、雨の音を聽きながらうとうとしてゐるうちに、今度は深い眠りに落ちてしまつた。

翌くる朝もやつぱり雨は降り續けてゐた。

さん堀爺は目を覺ますと、何時になくにこにこした顏付で、起きて顏を洗つたばかりの、明石の方を向いて話し懸けた。

「ねえ、おい、島さん。昨夜おれは面白れえ夢を見たぜ。」

燐寸を擂つて、バットに火を點けかけてゐた明石は、そのまさん堀爺の方は、見向きもしずに訊いた。

「ふうん、どんな夢だい。」

と、さん堀爺は病み耄けた髯だらけの顏に、やつぱり嬉しさうに笑みを浮べながら言葉を續けた。

「それがね、お前、全く不思議なんだ。かうやつて生きてゐるのに、死んぢまつてからの夢を見たんだからね。おれはちよつと夢とは云ひながらも妙な氣がしたよ。」

「へえ、死んでからのことを……。」

明石は縁起でもないと云つたやうな面付で、鼠のやうな目をぱちくりさせたが、さん堀爺は如何してだかひどくいい機嫌で、おれの[illegible]夢の話を始めた。

「何しろそれが可笑しいんだよ。一番最初往つたところが、何だか昔のお白洲のやうなところでね、名前を呼ばれて入つて往くと、一段高いところの鞘形の襖の前に、お奉行様のやうな裃を着た男が坐つてゐるのさ。ところが入つて往つてひよいとその男の顏を見ると、さすがにおれも驚いたね。ねえ、おい、島さん。お前はこの男を一體誰だと思ふ。」

「さあ、何しろお前の見た夢の話なんだから、おれにはさつぱり分らないね。」

と、さん堀爺はにやりと笑つて、少し前よりは聲の調子を高めながら云つた。

「それがお前あの異人館なのよ。異人館のやつ何時の間に出世をしたのか、裃なんぞ着やがつて澄ましてゐやがるんだから、おれは早速ふき出しちまつたね。と、館公のやつにこりともしねえで、いろいろおれの名前を訊つたり、ところを訊いたりしてから、傍にゐる書き役の方を向いて、何か云つたかと思ふと、もう立つて往つちめえやがつたんだ。如何も今から考へて見ると、このお白洲のやうなところは、死んだやつが調べられるところらしいんだね。」

さん堀爺は[illegible]ちよつと息が切れたやうに言葉を途切らす

と、明石はいくらか膝を乘り出し氣味に訊いた。
「ふうん、それから如何したんだい。」
「それからおれは軍鷄籠のやうなものに乘つけられたんだが、それが早いの早くないのつて、まるで飛んでゐるやうな早さなんだ。おや、何處に連れて往かれるんだらうと思つてゐるうちに、どんとそこに投げ出されたので、籠の中から這ひ出して見ると、驚いたことにはそこら一面、ぼうぼう火が燃えてゐやがつて、まるで足の踏み場もありやあしねえぢやねえか。」
「へえ、大變なところに連れて往かれたんだね。」
明石が感心したやうに合槌を打つと、さん堀爺はちよつと點頭いてから言葉を續けた。
「うん、全く大變なところよ。それにお前その火つたら、赤い色なんぞしてゐねえんだぜ。さうさなあ。何て云つたらいいだらう。まあ、ちよいと水晶見てえに、透き通つて奇麗な色をしてゐるんだ。おれはこいつあ助からねえから逃げ出さうと思つてゐると、誰だか知れねえが、突然おれの髷を引つ掴んで、その火の中に投げ込みやがつたぢやあねえか。ところが不思議なことにはその火つてえのが、ちつとも熱くも何ともねえんだ。」
「ふうん、それやあお前火ぢやあなかつたんだらう。」
「うん、たしかに火には違えねえんだよ。しかしね、その火つて云ふのは、何でも人間の罪を淨めて吳れる火なんださうで、それで今云つたやうに、まるで水晶のやうに透き通つた奇麗な色をしてゐるんださうだ。」
「成程、それでお前の罪も淨められたつて譯だね。」
明石がさう云ふとさん堀爺は、晴々とした顏付で點頭いてから、ひどくほがらかな調子で云つた。
「さうよ。それから間もなく夢は覺めつちまつたんだけれども、何だかおれはひどくせいせいとしたやうな氣持になつたよ。」
「しかし、爺さん。お前の見たのは夢なんだぜ。」
と、さん堀爺は急に怒つたやうに口を尖らして、
「何云やがるんでえ。夢だつてこと位知つてらい。」
と荒々しく云ひ返してから、不圖思ひ直したやうに、歎息するやうなしめやかな調子で云ひ續けた
「しかしな、夢でもおれは嬉しいんだ。七十九年の長い間、いろいろやつて來た惡いことが、あの火で淨められたかと思ふと、おれは夢でも嬉しいんだよ。昨夜は酒を飲ませて貰つた上にこんな嬉しい夢を見せて貰つたんだから。おれはもう思ひ置くことは何にもねえよ。」
さん堀爺はさう云ひながら、目を繁叩いて涙を零した。から

して涙の流れるのに任せてゐると、だんだん胸がすがすがしくなつて、このまま極樂へ往つてしまはれさうな氣がした。

さん堀爺の容態は、急にその日の午頃から惡くなつた。明石からの知らせで、姪のおけいが驅け付けて來た時には、もうまるで正體がなく、夢中で譫言を云ひ續けてゐた。

しかし譫言でも、「源兵衛汁粉」や「異人船」や「三虎三富」などと云ふ、昔のことを云つてゐる時分はまだよかつた。そのうち如何してだか一八のことばかり云ふやうになると、さん堀爺の衰へた顔には、だんだん死相が現はれて來た。

かうしてこの年老いた破落戸は、その日の夕方に、

「ああ、火だ、火だ。」

と云ふ一句を最後の言葉として、七十九年の暗く長い生涯を終つた。

息を引き取る時分には雨が霽れて、空には美しい虹が、色鮮やかに懸かつてゐた。

(終)

論語の講義（二）

武者小路實篤

（自分は前にも云つたが、漢文の力は實にないのである。たゞ孔子の實感が、自分に感じられる點に自信があるだけだ。そして自分の漢文の智識のない所は他の人の論語の講義におそはることにしてゐる。自分は本は皆新しき村において來たので、始めこの講義（？）を始める時、近かくの本屋から小宮水心と云ふ人のポケット論語新釋と云ふ本を買つて來て、それですませやうとしたが、どうもその本の解釋には時々腑に落ちぬ處や、反對したい所があるので、不安心になつたので、又或る日本屋に行つて簡野道明著論語解義を買つて來た。之は痒い所に手がとゞいてゐる本で、安心してその解釋に從へさうに、今迄の所思ふ。教はる所が多い。それで僕が何か云つた風な字の説明をつける場合や、その他學者らしいことを云つた時は、この本によつたと思つてほしい。又この本には參考としていろ〳〵の人の註がついてゐるのも便利である。自分が物知りらしいことを必要にせまられて云ふ時、この本によつて教へられた通りを云ふつもりだ。又むづかしい字のつかつてゐる處はなるべく日本風になほして、假名でかかうと思ふが、それもこの本によつて、あとは全體の精神を見て僕が至當だと思へる今の日本語になるべくするつもりだ。簡野氏は僕に利用されるのは好まれないかも知れない。僕は氏については何にも知らない。しかしこゝにこのことをはつきりかいて氏の本を賞讚し、自分のより所をはつ切りする。そして許してもらへば氏にお禮を云はして

もらう。これだけ云ひわけしてあとは本文に入る)

三の一

今度は八佾第三と云ふ篇だが、この篇には人類的な言葉は少ない。當時の孔子の位置として發せられた言葉が多いだから今の我々には緣の遠い言葉が多い。始めさう云ふ言葉はぬかさうと思つたが、孔子の人となりや、孔子教にたいする今の若い人達の不服な處なぞをはつ切りするのも、無意味とは思はないのでかくことにする。

孔子が季氏を評して、八佾(天子の舞)庭(家廟の)に舞ふ、是を忍ぶべくんば何づれをか忍ぶべからざらん」どうも日本語にしてしまふのも不安心なので、棒よみにした。

季氏は魯の大夫で陪臣の位置にありながら一佾(舞樂の行列)八人で八八六十四人がならんで舞ふ天子の舞をさせてよろこんでゐるのを孔子が見てなげいたのである。(諸候六佾で大夫は四佾ださうである)

自分達でもそんなことをしてよろこんでゐる季氏を見たら、馬鹿な奴だと思ふだらう。まるで王仁三郎のやうな奴だと思ふだらう。むしろ滑稽に思ふだらう。だが孔子には滑稽事ではなかつた。そんな心がけでは何をするか知れないと思つた。國の秩序を重く見る孔子がさう思ふのは無理がない。

しかしもう亂れてしまつたのを元へ戻すことは困難だ。孔子がいくら非難したつて季氏の心はなほりはしまい。季氏の心がなほつたにしても、天下の亂は中々なほらない。たゞ歎じてその救ひ道を與へないこの孔子の言葉は、消極的な言葉であつて、積極的な言葉ではない。反省をうながしたり、批評をしたりするのは悪くはないが、其所から建設は生れない。孔子は未然に人物がどうなるかを見通すことをせず、過去に[illegible]意見を認め、過去に人物を[illegible]してしまつた

樣にとられやすい言葉を出したのは、孔子の長所だとは云へないと思ふ。この孔子の季氏を評した言葉は恐らく當つてゐるであらう。孔子にとつて不名譽な言葉ではないであらう、だが同時にこの言葉は孔子にとつて名譽とするに足りないと思ふ。かう云ふ言葉は孔子でなくも出せる。たゞさすがに孔子だけに、何處かに權威が感じられる。がその權威が姿をあらはせずにゐるのが物足りない。そして進歩的な言葉とは云へない。又今時にあまり通用しない言葉である。

次ぎも魯の大夫の三家が天子の宗廟を祭る時歌ふうたを自分達の家廟の祭りに歌つたことを非難して、その歌の意味が天子にして始めて意味をなすことを痛快にするどく皮肉つてゐるが、自分達には緣がない。

しかしこの世の秩序を重じ、萬事が秩序を得て、皆が分に安じることが出來ればそれは美しいことにちがいない。自分は平和な一人の國民として生活出來ることを一番よろこぶもので、天子の眞似をしたがつたりするものとは緣が遠すぎるから馬鹿だなと思へばすむやうなものゝ支那と云ふ國に生れたら、馬鹿な奴ではすむまい。今でも支那の王さんになりたがつてゐる人間が何人かゐて、隨分皆閉口してゐるやうだ。今世界で支那は一番野蠻國だ。(いつか一番進んだ國になるかも知れないが)そして孔子のかゝる教に今の支那を導く力はない

日本に萬世一系の天皇がゐまし、それを犯す者がないことは平和の民のよろこびだ。自分は大統領を撰ばなければならない國民をあはれむものだ。だが國民全體が平和をよろこびすべての人が自己の生命を眞價のまゝに生かせる時代を早く日本にこさせたいものだ。

日本がその最初の國になることを望んでゐる。上を犯すことを好むものを多く持つ世界はうるさい。うるさい。自他の生命を本當に愛するものこそ讃美すべきである。

次ぎに孔子の「人にして不仁ならば禮を如何せん、人にして不仁ならば樂を如何せん」と云ふ言葉が出て來る。

尤の言葉である。だが尤もなことが實行出來ない時代には、尤なことが云はれなければならない。そしてあまりにあたりまいのことは反つて人は疑ひ、又無視したがる。

すべて聖人とか、神の如き人とか云ふ者は「なくて叶はぬ一つのこと」を會得してゐる。そして孔子もそれを最も強く會得してゐる一人であつて、それを孔子は仁と云ふ言葉であらはしてゐる。釋迦はそれを慈悲と云ひ、耶蘇はそれを隣人への愛、又神への愛と云つてゐる。皆同じもとから出てゐる。自分はそれを人類的愛と云つたり、自他共に生き、全部の生る世界への愛とも云ふ。

禮とか、樂とか云ふものゝ價値は人間の心を調和させるためにあるもので、仁のあらはれにすぎない、だから仁なしに禮や樂が生れるとすればそれは源を忘れた、不愉快なものである。心なき一部の人をよろこばしてもそれは不幸の種をまくにすぎない。

人間は枝葉に進めば進む程元を忘れやすい、しかしその時罰を受けないことはむづかしい。

次で林放が禮の本を問ふたのに對しての孔子の言葉が出てゐる。

孔子は林放の問ひの大なることを云つて、そして「禮は奢侈に流れるよりは寧ろ儉約に、喪は形式を整はすよりも寧ろ心でかなしむがいい」ことを說いてゐる。

孔子の言葉をかくのに論語は二つの方法をもつてしてゐることは今迄でもわかつてゐることゝ思ふ。則ち相手の人の名を出してそれに孔子が答へ、或は問題する形でかいたものと、たゞ單に誰に云つたと云ふことなしに、孔子の言葉をかいたのとある。

名をあげてゐる個人にたいする孔子の言葉をかいた時は、一般に向つて孔子の云つた言葉とはちがつて、相手を見て

法をといてゐる場合が多いやうに思ふ。だから相手を知つて孔子の言葉を見ることが、必要の時が多い。こゝでも孔子は特に林放と云ふ魯の人に答へてゐる。この答へは禮の本をといてゐると云つても、儀式のやり方のより所をといてゐるので、禮の本をといてゐるのとは少しちがいそうに思ふ。

少くもこの答へはまちがいのない答へにはちがいない。そして天理教のお直婆さんの四十年祭の話なぞ聞いても、今でもこの孔子の言葉はすたらない言葉と思ふ。死人にたいする祭りの奢侈なのは利口な感じのしないものである。生てゐるものが幸福になり切れた時代は別として、ともかく死人にたいしての禮は心の方を主にして祭りは質素にして、それだけ生れる同胞のために死者の遺志を生かすやうにしたいものである。

次ぎに「夷狄に君有るは、諸夏（中國）の之なきに如かざる也」と云ふ孔子の言葉が上げてある。これは孔子の言葉としては大膽な言葉である。だから程朱は如かずを、似ずと云ふ意味に解して「夷狄すら君長あり、諸夏の僭亂て反りて上下に分なきが如　らざるなり」と云つたさうだが尤らしい處である。だが孔子は程朱よりはずつと本當のことに忠實な人間だつたやうに思ふ。本當のことを云ふのに臆病でない。

之は禮樂の君長よりも大事なことをといた禮樂を讃美した言葉ととる方が本當と云ふ說に自分も賛成する。野蠻國に君主があつても人間は生きない。中國には君主なくとも禮樂があるから人間は比較的美しく生られる。之は事實について見ても事實と思ふ。だが禮樂の眞にある國は今何處であらう。

自分達は何處の國に生れたら一番仕合せか。何處の國が一番國民が全部的に生きられる國か、人間として尊重されて相和して生きられる國か。

自分は日本と云ひたい。だが日本の內でさう云ひ切ることは日本にゐて生活に逐はれすぎて自己を生かすことの出來

ない人々にたいして遠慮なしければならない。

三の二

一つとばして、次ぎに子夏が孔子に問ふて、かう云つたことが出てゐる。「巧笑倩たり、美目盼たり、素以て絢と爲す、（巧みに笑ふ口元にはエクボ生じ、美しき目は黒目と白目あざやかにわかれ、白粉を麗しくぬりたり、）とは何の意味か。」孔子はそれに簡單に答へた。「繪をかく時あとで白をぬる。」其處で子夏は「禮もあとか」と聞いた。孔子は「私に氣がつかなかつたことを知らしてくれた。尚、お前も始めて詩の話が出來るやうになつた」

この譯は甚だまづい。論語の本は何處にでもあるから、譯が下手でもかまわないであらう。（いゝ日本譯をその内誰かしてくれることをのぞんでゐる）。

詩を一々倫理に應用すると云ふことはあまりほめたことゝは思はないが、しかし自然や、人事から暗示を得て、道徳の本を知ることは美しいことにちがいない。子夏は禮のことを考へてゐた故に、この事實をたゞかいてある詩から、禮の起る源を知つた。今迄禮に就てのいろ／＼の言葉が出てゐたが、この言葉こそ禮の源をほりあてた言葉と云つていゝであらう。つまり禮は人間の自然性を美化して、そして人々の心に美しさを與へるものである。

人間の心の内の最も美しいものを、最後になほ美しくしたものだと云ふことになる。かゝる禮がこの世にあり得れば、それは美しいものにちがいない。

宗教心なぞは人間の心の内で最も美しいものであらう。それを更に美化し、具體化した所に禮の最大たるものが、生

じたと見てい〻と思ふ。しかし禮といふものは型になりやすく、借り着になりやすい。だから借り着にならないことが必要だが、それはむづかしいことだ。だから本心を忘れて虚禮になり易い。

次ぎに虚禮の事實をあげて孔子がそれを非難してゐる文句が出るが、今の我々にはあまり緣がなさすぎる。

禮は美しいものと思ふ、だが本心はなほ美しいと自分は思ふ。自分は孔子が今時の人間と思へない點は、當時の禮を重じすぎる所にある。ソクラテスは平民的である。耶蘇も平民的である。釋迦も孔子に比較すると、もう少し平民的だつたかと思ふ。このことについては又あとで云ふ時があると思ふ。

三の三

次ぎに祭りについて孔子の云つた言葉が出てゐる。孔子の人となりを知るのには無視出來ない言葉とも思ふが、自分とは緣がなさすぎてぴつたりしない所があるから、ぬかすことにして次ぎの王孫賈との問答について云ひたい。

王孫賈が孔子が何處でも用ひられないのに同情してか、衞國に孔子が仕へる秘訣を暗示するために孔子にかうたづねた。

「奧に媚びるよりは寧ろ竈に媚びると云ふのはどう云ふわけですか」

孔子はそれを聞いて王孫賈の厚意は感じたらうが、媚びると云ふことは孔子には許されないことだから、孔子はたゞ

「そんなことはない、罪を天に獲れば禱る所は無い」と答へた。

孔子は天意に背くことを第一に恐れる。孔子が官に仕へたいのも天意を行ひたいからにすぎない。孔子が今日なほ我等に尊敬される資格をもつのは實に天意を知り、それを貴んだからである。孔子は君主に禮をつくすことはい〻こと〻

思つてゐたらう。しかし媚ひてとり入ることは是認出來ないことだ。君主に媚ひることも大臣に媚ひることも、そしてうまくとり入ることも孔子には出來ないことだ。その點孔子は所謂政治家ではない、天意を人に知らせ、人道を人に敎へる聖人である。

聖人と云ふのは天道に背くことの出來ない人と云つてゐゝと思ふ。孔子も五十以上天命を知り、六十位いから聖人になれた人と思つていゝと思ふ。

こゝの禱るは、祀の意味で祈るの意味とはちがうのは云ふ迄もないと思ふ。

又少しとばして、

「子曰く、君に事へて禮を盡せば、人以て諂と爲す也」

之ははつ切りしてゐると思ふ。自分の尊敬するものを尊敬しても諂ふととる人がよくあるものだ。媚ひるのはよくないが、禮を盡すのは誠意から出るのだからいゝ。

その一つ前に

孔子と子貢の問答がある。之も自分はあまり孔子の言葉に興味がもてないので、ぬかして見たが、孔子らしい所があるので、すて去るのも惜しいので、追加する。

「子貢告朔の餼羊を去らんと欲す。子曰く、賜や、お前は其羊を愛む、我は其禮を愛む」

この言葉は實にぴたりとした言葉で、子貢も一言もなかつたらう。

たゞ自分には告朔の祭と云ふものがぴつたりしないし、羊を生贄にすることにあまり興味がもてないので、子貢のおに加勢したい氣で何造かにする。禮と云ふ言葉を出されては子貢は參つたと思ふが、自分は羊の生命を愛むのならわかる

いことゝは思はない。四人の聖人の内、動物の生命をも愛したのは佛陀だけかと思ふ。少くも佛教の殺生の戒めが自分の心にくいこんでゐるからかと思ふが、生きものを殺して天に罪をまるで得ない、反つて天がよろこぶと云ふ考へは少し同感出來ない。だからこの孔子の言葉もぴつたりしない。子貢が惜んだのはムダな費へだと思つたからかと思ふ。それなら子貢にも贊成は出來ないが。

三の四

「子曰く、關雎（詩經周南の首篇）は樂みてしかも淫せず、哀みてしかも傷らず」

これは孔子らしい批評の仕方と思ふ。そしてその批評は簡單にして要を得てゐる。一言にして盡すと云ふことは孔子の得意な所である。そして之は批評のための批評ではなく、人間が樂しむ時、又悲む時に、どうすればいゝかを圓曲に敎へてゐる。孔子が人類の敎師としての立場を如何にしつかりつかんでゐるかは之を見てもわかる。

哀公が宰我に、社を立てるのはどう云ふわけだと聞いた。宰我は答へて、「夏后氏は松を植え、殷人は柏を植え、周人は栗を植へました。栗を植えたのは民を戰慄させるためです」と云つた。この答へは三家の潛上なのを哀公が怒つてのぞかうと云ふ考へのあるのに贊成して三家を誅することを暗にすゝめたのださうだ。孔子がその宰我の答へをきいて、かう云つたさうだ。

「成事は說かず、遂事は諫めず、既往は咎めず」

之は孔子の言葉か、俚言にさう云ふ言葉があつたのか、知らないが、調子のいゝ言葉である。そしてこの答へ方は賢いと思ふ。

實際すんでしまつたことを、あらいざらいしたり、そしてそれを忠告したり、咎めたりするのは愚かな場合が甚だ多い。すんだことはすんだことである。ただそれを注意することが將來の爲になる場合はまた別である。すんだことはすべて咎めていけないと云ふことはない。たゞ無意味に、又どうにもならないことを、やかましく云つて未來に生る生命の力をそぐのは馬鹿氣てゐると思ふ。

しかし後悔は先に立すと云ふ言葉があるが、本當に後悔したことはあとのために役に立つものである。だから後悔させることも時には必要である。たゞその時は後悔させるために後悔させるのではなく、愚かさを再びさせないためである。だから孔子のこの言葉はこのさいには實に適藥であるが、いつも適藥とは云へない。

次ぎに管仲が陪臣の身をもつて諸侯のやうなふるまいをしたのを非難してゐる言葉が出てゐる。しかし自分にはあまり用がない。だが人間は自分の生命に益のない贅澤は今の世ではしないやうにすることが、一人の人間として禮に叶つてゐると思ふ。

身の程を知ると云ふこと、少しひかへ目にすることは必要なことである。今後益々人間は他人と不調和に贅澤することは許されなくなるであらう。先づ自他の生命を尊敬することが必要になるであらう。

次ぎに孔子が音樂について魯の大師をつかまへて氣焔をあげてゐる。「樂は知るべき也。始めおこすに翕（合）如たり。之をはなてば純（和）如たり。皦（明）如也。繹（聯）如たり、以て成る」

自分にはよくわからないが、大事なことをちやんとつかんだ人の言葉と思ふ。

儀の封人（衛の邑の國境を掌る人）が孔子にあいに來て云つた。君子がこゝにおいでになる時、いつもお目にかゝらないことはないのです。孔子についてゐる人が孔子にあはせると出て來て云つた。「あなた達夫子の官をうしなつたのを

心配される必要はない。天下に道のないことは久しいが、天は夫子をもつて木鐸（政教を施る時振りて衆を警むるもの）としやうとしてゐる」

之は孔子にとつて知己の言であらう。

之は孔子が今に仕官して天下を政めることを豫言したのだが、あたらなかつたと云ふ説がある。事實儀の封人は孔子が仕官すると思つたのかと思ふ。だが木鐸と云ふたとへをとつての豫言はあたつたと見ていゝと思ふ。

「天我をすてず」と孔子が云つたことがあとで出てくるが、天が孔子に位を得させなかつた天意を孔子自身も中々氣がつかなかつた。他の人はなほさらであらう。

孔子は又韶（舜の樂）について云つた。「美を盡せり、又善を盡せり。」武（武王の樂）について云つた。「美を盡せり。未だ善を盡さざる也」この評もあたつてゐると思ふ。そして樂の理想を簡單明瞭に云つてのけて、すましてゐる所又孔子らしい。そして樂の理想は又人間の理想である。美を盡して善を盡さずと云ふ意味はどうか。自分の考へでは善をつくすことはすべて人間の生命を愛することである。つまり仁である。美をつくすことは個人的になりやすく、又少數的になり安いが善は一部の人にとゞまるわけにゆかないものだ。なぜ美をつくすのは個人的になりやすいかと云ふと、人類の力がまだ貧弱ですべての人が美をたのしむわけにゆかない。だから美をたのしみたい人は他の人の資をも奪ふ傾があるから。だが美の本質は人類的なものであり、衆とたのしめるものである。たゞ人類がまだ貧弱なのが困るのである。又趣味のよくないのも困るが。しかし自分は美も盡し善も盡した戯曲をつくれたら隨分幸福だらうと思ふ。

孔子は云ふ。「上にゐて寬ならず、禮をなして敬せず、喪に臨んで哀まず、私はそんなものは見たくない」

同感。

四の一

今度は里仁第四である。今度は仁が多くといてあるから。今の自分達も教はる處が多いと思ふ。

孔子は云ふ「仁にすむを美となす。擇びて仁におらずばどうして知たるを得ん」と。

仁に叶ふことを美とする。自由意志で仁に叶ふことを撰擇しないものは、知と云へやうか。かう云ふ意味と思ふ。自分達が何かものを考へる時自分の都合のいゝことを考へる時は、本當のことを考へた時ではない。本當に賢いことを考へる時にはすべての人を愛する處から出發しなければならない。この心がけは必要と思ふ。このことは佛陀もよく知り耶蘇もよく知つてゐたと思ふ。そして東洋では孔子が實によくこのことを知つてゐる。

自分達もよくこのことを考へ又、反省することが必要である。自分や、自分の黨派の利益許りを考へてゐるものに本當のことがわかるわけはない。ずるい人間は知者ではない。

孔子云ふ。「不仁者は久しく約におるべからず、長く樂におるべからず。仁者は仁に安んじ知者は仁を利す」

論語解義には約を貧賤困窮のことで、樂は富貴の樂みのことだとかいてある。それは學問的には本當かと思ふが、約は謹みにとり、樂みを普通の意味のたのしみにとつた方が自分にははつ切りする。しかしつまりは同じことになるかも知れない。

つまり不仁なる者は、心におちつきがないから、貧富に安じることが出來ず、謹みも守ることが出來ず、樂しみにもおちつきがない。仁者は仁におちつき、他のものに動かされない。知者は仁におちつかなければ人間の心が安心を得られないことを知り、仁の價値をよく知る。だから仁者にならうとする。仁に安しない迄も。仁にゐないと不安なのであ

る。

孔子又云ふ。「仁者のみ能く人を好み、能く人を惡む。」

この能くは適當にと云ふ意味だと思ふ。多くの人は好んではならない人を好み、惡んではならない人を惡む。だがこの言葉は誤解されやすい。仁者はよく人のいゝ所を認め、あしき所を認める。惡むは相手の生命を否定するのではない。相手の生命を害するものを惡むのである。能くは相手を生かすやうにとればいゝわけかと思ふ。それなら贊成である。

孔子云ふ。「まことに仁に志せば惡きことなし」

本當に仁を志すことが出來た時の心のやすらかさ。其處から惡は生れない。惡は仁を志さすことの不足の時人心にしのびこむものである。

孔子は又云ふ。

「富貴は人の欲する所だが、其道（仁）をもつてせざれば、之を得るとも處らざる也。貧賤は人の惡む所だが其道（不仁）を以てせざれば去らざる也。君子は仁を去つていづくにか名をなさん。君子は終食の間も仁に違ふこと無く、造次（倉卒）の間にも必ずこれにおいてし、顛沛（倒れ伏す）にも必ず是においてす」

君子はいかなる時も仁からそむくことをよろこばない。その點耶蘇がどんな時でも天父の御心をたつとんだのと同じである。この境に達することが出來たら聖人であると云つていゝであらう。其處までゆかない間は、死に打ち勝てないことは甘受するより仕方があるまい。だがこんな君子には中々お目にかゝれない。だがそれを目ざしてゆきたいものである。どんな時でも仁を志すことはたしかに美しいことである。

だから次ぎに孔子の次ぎに言葉が出てくるのはよく考へてゐると云つていゝと思ふ。

「我未だ仁を好む者、不仁を惡むものを見ず、仁を好む者之に加ふることなく、不仁を惡むものも又仁をなす也。不仁をして其身に加へしめず。よく一日其力を仁に用ゆる者あらんか、我まだ力の足りないものを見ない。蓋し之あらん。我はまだ之を見ざる也」

（漢文、殊に論語の文章は實に簡潔無比である。日本文になほすと力がなくなる。思ひ切つてなほせば又いゝかも知れないが、その自信がまだない。）

仁を好むものは人間として完全したものだ。その上をのぞむことは出來ない。だが不仁をにくみ、不仁なことをきるでしないものは仁をなすものと云つていゝ。だがそんな人を見たことはない。一體仁と云ふものは一日でも志させばすぐ實行出來るもので、力が足りない人と云ふものは見たことはない。そんな人もありさうに思ふが、そんな人を見たことはない。

自分も亦さう云ふ人を見たことはない。そしてさう云ふ人を見ないことを孔子程、悲しみもしない。しかし自分は之から少しづゝでも仁を志して進みたいと思ふ。又さう云ふ人の出てくることを望んでゐる。しかし仁と云ふ言葉では自分はぴつたり感じられない。神の御心のまゝに生るとか、隣人の愛を生かすとか、人類的愛とか、全體にたいする愛とか云ふ言葉の通が、いくらかわかる。

孔子の教への仁の上に立つことを自分は讃美するものだ。その上に立たない教は決してすべての人を導く力はない。

「人の過は其黨に於てす、過を觀てこゝに仁を知る」。孔子のこの言葉をこゝに持つて來たのは矢張り賢いと思ふ。

仁には黨派的根性はない。だから黨派的根性や、黨同根性の恐ろしさをとくのは仁の明斷をはつきりすることである

る。人は仁によつて過はしない、黨によつて過をする。過の元因を見ると仁の缺乏から出てゐることがわかる。だから過をよく觀察すると仁を知ることが出來る。

自分にはさうとるのが、この言葉の位置で自然のやうに思ふ。しかし普通は、「人はやゝもすると親愛する所において私をするの過あり。だがその過つ所以を究めると則ち仁愛から出てゐる。故に過を見ても仁の人の心に根ざすことを知ることが出來る」とといてゐる。しかし人間の過は我利々々や、我慾から出る場合がないか、不仁から生ずる場合がないか。不仁から出るのは罪で過ではないかも知れない。過は仁愛の心がありながらつい過つ場合をのみさすのか。それにしてもこの解釋では腑におちない處がありはしないか。

自分の解釋はこぢつけかも知れない。しかし仁をほめたあと、黨派根性をいましめる言葉がくるのは至當と思ふ。

「過を觀てこゝに仁を知る」は普通の解釋にしたがう方が面白い場合もあると思ふ。

實際その人の過ちの内にその人の仁のかけらを見ることがあるから。

しかし要するに仁は不仁ではなく、黨は不仁である。反對黨から罪人を出すのをよろこぶなぞは不仁である。

四の二

「朝に道を聞いて夕に死するとも可なり」

この言葉は權威がある。道を知るのはいかに生くべきかを知り、又如何に死ぬべきかを知るためだ。道を知つて他の人に傳へたく思ふのはいゝが、他の人に傳へなければ道を聞いても仕方がないと思ふものは愚である。孔子の言葉はあたりまへのことを云つたのであるが、權威がある。

「士道に志して悪衣悪食を恥づる者は未だともに議するに足らず」

自分は少年の時中學一年の時この言葉をきいて發奮したことは今でも忘れない。もし人間が仁に志させば志さす程美衣美食が得られるものなら、悪衣悪食は耻づべきことだ。又けちんぼのために悪衣悪食するならば、それも耻づべきことであらう。だが道徳的に少しも耻づべき事のないのに悪衣悪食を耻ぢるものは他人の思はくを氣にする獨立的精神の不足したものだ。そんな人間には自分の考へと云ふものはない、他人の思はくをのみ氣にするにちがいない。だからいろ／＼のことを相談する資格のない人間だと云つてゐる。

又耻づべきことゝ、耻づべからざるものゝ區別を知らないものだ。人間の耻づべきことは自分の内心のことで、外見のことではない。今の世に貧しきことは耻づべきではない。耻づべからざることを耻ぢるのは奴隷人である。獨立人ではない。

奴隷人は自説を持つことは出來ない。

だが悪衣食を見せびらかすことは勿論いゝことではない。それは又た乞食のすることだ。「君子の天下における、適（親、偏愛）なきなり、莫（疎、冷淡）なきなり、義とともにす」

我々には傾よりがある。親疎がありやすい、好嫌によつて屁理窟をつけたがる。それは君子として耻づべきことにちがいない。

しかし好嫌を一概に否定しろと云ふのではない。公平に公明に大に尊敬するものは尊敬し輕蔑すべきものは輕蔑し、愛すべきものは愛し、憎むべきものは憎むのはいゝ。たゞ義に反してはいけない。之に我々の反省すべきことである。

孔子は我等に正しきより所を與へる。

人はすべての人の生命を先づ愛し、それを正しく生かすために、正義によることが必要である。正義は偏愛によつてまげるべきものではない。

「君子は德をおもひ、小人は土（心身の便安する所）をおもう。君子は刑（典刑禮法）をおもひ、小人は惠をおもう」

君子は德をしたい、小人は安逸をしたう。と云つてもいゝかと思ふ。少くも君子は德のことを常に心にかけるが、小人は德なぞは眼中におかないにちがいない。しかし君子は刑をおもうの刑は自分には少しはつ切りしない。

君子は自分の行ひの正しからざるを常におそれい、小人は常に得することを考へてゐると云ふならわかる。

「利によつて行へば怨み多し」

利益を多く得ることは他人に怨まれることは當然である。資本主義の缺點はこの怨みを他人におこさせる處にあると云つてもいゝ。存外それが強いと思ふ。マルクスの學說を知らないものも、この怨によつて生命もいらない所までおいやられることはあり得る。

孔子はすでにこのことを知り。又憂いた。

四の三

孔子は又云ふ。

「よく禮讓を以て國をおさめればなんでもない。禮讓をもつて國がおさめられないならば、そんな禮はなんにもならない」

嘘だと思ふならやつて見るがいゝ。しかしやつて見ることは出來ない。しかし一人の力で國をおさめることは段々出

は又普通の人の缺點をもつてゐたにちがいない。そしてその缺點を外見的にかくすのでは
から、底の底からなほさうとしなければ何にもならない。そして孔子はそれから根本的に超越出來た少數の中でも少數の一人である。たえず自分を鍛えぬいてゐた人だと云ふことは、一言一句にまざ〳〵と生てゐる。

孔子又云ふ。

「父母に仕へてはほのかに諫む。志（父母の）の從はざるのを見る時は又敬してたがはず。勞して怨みず」

之は父母にたいしてのみではなく友人にたいしてもこの通りでまちがひないと思ふ。勞して怨む位いなら諫めないがい〻。いく度も諫めるのはい〻。しかし喧嘩したり、怨んだりして面白くないのは親にたいして許りではない。この親にたいする心をもつて、友にたいすればまちがいないと思ふ。

四の四

次で孝行についてといてゐる。中々親切で耶蘇なぞとは隨分ちがう。そして其處に孔子の生活の平和さの秘訣がある。平和な時にあつたつて孔子の孝についての言葉は尊敬してい〻と思ふ。

「父母ゐませば、遠くあそばず、あそべば必ず方向をかへない」

いつも父母の處にとんで歸れる用意が必要だと云ふのだと思ふ。

「三年父の道を改むることなきは孝と謂ふべし」

「父母の年は知らざるべからず、一には則ち以てよろこび、一には則ち以て懼る」

孝は少しくかたすぎるが、孔子の孝心がよくわかる。子として親を思はないことは不自然であり、又い〻ことでは

ない。

たゞ子は親の爲のみに生てゐるのではないから、他にいろ〳〵しなければならないことがある。何をすてゝも孝行しろとは云へない時がある。だが平和な時は、出來るだけ孝行するのがいゝ。自分の天職を果すのを邪魔されない場合は。

「古人がおしやべりをしないのは、實行の及ばないのを恥たからだ」

今の政黨屋に實に痛快にあたつてゐる。實行の及ばないのを恥てゐたら一體彼等はなにをしたらいゝのか。だがあまり臆面のないのは不快である

「約をもつて之を失ふものは少し」

ひかへ目にすればまちがいがない。だがまちがいがないのは最上の美徳ではない。安然第一は進歩の敵の時がある。

「義を見てなさざるは勇なき也」である。だがつまらぬことに謹みを忘れるものは愚である。謹しむことは大事である。だが臆病になることはよくない。

「君子は言に訥に行ひに敏ならんことを欲す」

孔子の時も口許りの人間が多かつたと見へる。

「徳孤ならず、必ず隣あり」

自分はこの言葉を愛する。

之は光明ある言葉である、他人に知られないことを患へない孔子は、友が遠方からくることをよろこび、又徳の孤ならざることを信じて力を感じた男である。

耶蘇は自分の眞理をのべつたへて聞かない町の人を痛快にやつけてゐる。呪咀に近い言葉さへ出してゐる。孔子は同

じ事實にあつても、「己を知ることなきを患へず。」とか「德孤ならず。必ず隣あり」なぞと云つてすましてゐる。

孔子は東洋人であり、又平和人であり、中庸を失なはない男である。

他人に强いない。

おもむろに眞理を示して、人のゆくべき道、立つべき所を示す。權威はあれども、强いない。

子游曰く

「君に事へて數々すれば辱めらる、朋友に數々すれば斯にうとんぜらる」、

强いてはいけないことを云つたのだが、「辱めらる、」「うとんぜらる」は少し意氣地の無い云ひ方だ。辱められたつてうとんぜられたつていゝではないか。惡いのは他人が食傷してゐる食ひものをなほおしつける愚かさにある。

（前號に出した所一枚原稿がぬけてゐる所があつた。大した所でもないから、本にする時かき加へる。何處になくなつたのか。僕の不注意かとも思ふ、それだつたらあやまる）

笑話二つ

網野菊

イズム

「網野さんの書くものは何イズムに屬するのですか。」と、二月、桃山のN先生のお宅に伺つた時、N先生が戯談にお訊きになつた。

「さあ。」と私は笑つてゐたが、其後、或批評家が私のことをトリヴイアリズムにとらはれてゐると評したことがあつたので、それから後に再びN先生御夫婦にお目にかゝつた時、そのことを申し上げたら、

「ホー、到頭イズムがおつきやしたか。」と云つて、奥様はお笑ひになつた。

美人

以前、學校の寄宿舍にゐた時、一人の友達と近所のお蕎麥やへ行つた所、二階には盲學校の生徒が三四人來てゐた。そのお蕎麥やは盲學校の生徒がお得意であつた。お蕎麥やのおかみさんが注文を持つて二階へ上ると、一人が、

「おかみさんは中々美人だね。」と云つた。

「へえ、どうしてそれがわかりますか？」

「だつて聲がいゝもの。」

盲目は盲目らしい美人の標準をつけると思ひ、階下で聞いておかしかつた。

其後、別の友達と、矢張り近くの氷屋へ行つた。私達の卓と別の卓に盲學校の生徒がまた三人ばかり來てゐた。一人の若い丸髷に結つたおかみさんがはいつて來た。やゝ肥つてゐて、見るからに元氣のよささうな女の人であつた。

「氷水を三杯願ひます。」氷屋のおかみさんに注文する其聲が、如何にも綺麗だつた。

「きつと、あの盲目の人達は、あのおかみさんのことを美人だと思ふだらう。」いつものお蕎麥やでのことを思ひ出し、たう心の中で考へ、おかしがつてゐたら、そのおかみさんが、盲人達に聲をかけた。

「オヤ、皆さん、おそろひですね。」

聲をかけられた盲人達は見えぬ眼を上げ、おかみさんに向つて答へた。

「あゝ、お蕎麥やのおばさんか。」

しづかな別離其他

小家素子

（一）

心が足踏みをして長く一つ處に止つてゐる時は、周圍のもの丶成長が殊更目立つのか知れない。暫く澱み、春を見向かうとしなかつた私の心だのに、この春ほど、若葉の生育の早さに驚いたことはない。花が散る頃からの若葉の育ち方は實にめざましい、私は自分の家の小さな庭の若葉の伸び方に、殆んど壓倒されさうな氣がする。一つぱいに陽の光を浴びたその若葉を見てゐると、枝は爪立ちをし、若葉は頸を伸して、伸びるが上にも伸びやうとしてゐる。眺めてゐると、その力が胸にせまつて來て、自然その力の方向へと、上へと目を導かれる。その時、初めてのやうな驚きで、春の空のかゞやかしい力が私に感じられた。この輝かしさが若葉を育てる。春の空と若葉とは同じ故郷を持つてゐる。さうしてたしかに、春の空は若葉の戀人に相應しい。それが驚きと共に感じられた。

（二）

私はかつて、秋の靜かな別離を見た。

赤く紅葉した木が、黄い秋の陽の中に立つてゐた。梢は十分に色づいてゐて麗しく照つてゐた。その梢に透された薄紅色の陽が、幾つもの小い丸窓に滿ちてゐた。地の上では一羽の雀が、左右に忩はしく頸を振り、赤い落葉を啣へ、また地に置きなどして遊んでゐた。やがて枝から、一枚の赤い葉が、靜かな陽ざしと空氣の中をゆるやかに舞つて、地に落ちるのを見た。美しく靜かな別離、樹木は別離の悲しみを知らないのか?と、この時私は感じた。

然し今思へば、春をあくまで春らしく、若々しく生き盡くす樹木には、生き殘された春はあるまい。更に、殘りの生命を、美しい色に染めつくして、靜かな秋の空に美しく死んでゆく樹木の葉は羨しく思ふ。

私には青春が無かつた。けれど美しい秋だけは、私にも來らせたいと思ふ。

或る夜電車に乘つてゐた。郊外のことで外はさ[illegible]番前の席に座つてゐたので、行く[illegible]面を見てゐると、電車の前燈に白く照し出されたレールが、實際は電車が向ふへ動いて行くのだのに、道のほうが向ふから此方へ走つて來て、電車の下に消えるやうに見える。一條の白い線が闇の中から、あとからあとからと、續いて顯はれ、電車の下に消えてゆく。暫く見てゐると、その樣がいかにも果敢ない。一條の白い線は何か生き物のやうに、光りに吸ひ寄せられては消え、吸ひ寄せられては消え、消えるあとから新しいのが吸ひ寄せられる。さうしてその上を鐵の車輪が重い車體を載せて、無慘にふみ躁つて行くのだ。私は、遂に平氣でゐられなくなつた。この大きな一つ電燈の飽くことのない吸引力は餘り殘酷だ。この電燈はこんなに夥しい犧牲が要るのか。それなしでは生きて行けないと云ふのか——然し、これからのお互に離れられない運命に氣が附いたとき、苦しい氣持にたつた。

名譽慾

杉浦翠子

「歌を熱心にやると、どうも學校の方がうまく行かないし困るけれど、責めて僕も一生涯に一首位、世の中に殘るやうな歌をつくつて見たいよ」

と、斯う云ふ聲は、度々歌作りの青年子女たちから洩らされる。今日「×の×」と云ふ女流歌人の雜誌を見ると「この雜誌を創刊するとき、凡て女ばかりで仕様と皆で覺悟を定めてから、……H大學の教授夫人を訪問した。夫人は女流文壇の第一人者として自他共に許してゐる方である。少時話をしてゐる中に夫人は、杉浦さんや岡本さんのやうになりたいのかときかれた……云々」と書いてあるのを見ても、歌人と云ふのには、始終名譽慾と云ふ念が離れない。猶その雜誌にも「人間が亡びざる限り、藝術は殘る」とある。高柳某は世人に一萬圓の利殖法を教へた。世の中には色々の方面に事業家があつて、歌壇にも年刊歌集と云ふものが出版される。曰く「この集へ選ばれしものは一首と云へども、後に傳ふるに足る」と書いてあつてまだ歌集を有たない無緣の佛に似たあはれな歌人たちの名譽心を慰めて居る。歌人は世に歌集さへ出版して置けば、永久に存留するものと信じて、現世で不遇の士は百年の後の知己を俟つと云ふのである。かう云ふ人の心を「時」は嗤つて居るのである。歌をつくるのは、「一の信仰であり、ともに人格の向上であり、物の哀をより深く知らんが爲め」と敎へて呉れる人は誰もない。故に自分の地位と名譽擁護の障害とあらば、十年の知己を絶交して憚らない。そして、それは「道の爲めだから」と云つて居る。

或日遲く歸宅して來た私の夫が

「どうもひとつの團體を作るのも中々骨が折れるよ」

と、云つて集る青年藝術家達の感情を話した。私は

「然し、名譽慾ぢや厭ですよ。使命だと思つて遣つて下さい。名譽慾になると氣に入らないお弟子を追ひ出したくなりますよ。あゝ厭だ。私なんかの歌は名譽慾で作つて居るのぢやないのよ。愚痴ですよ。

愚痴をこぼして人に同情して貰ひたいの。女郎の身の上話程度なのよ。私のこれから書く小說でもみんな然うよ。名譽慾事業慾大嫌ひ。私の兄も若い時にはほのぼのとした美男子だつたけれど、電氣王と云はれるやうになつてから、嫌味がついて威壓的の人相に變つてしまつた。」と、云つてみた。

國語を愛せよ
外語を排せ！

永井郁子

民族を離れてほんとうの藝術の花は咲きません。

×　　×

けれども、我國の音樂は、現代と人情風俗に大徑庭のありました德川末期の頽廢的氣分の横溢してゐた時代に、主に花柳界に發達したものでありますから、したがつて其歌詞に猥りがましいところが多く、また旋律が短調から成立つて居ります。短調はつまり悲哀調で、悲哀調は亡國の民の間に愛誦される約束のもののように存じます。

×　　×

ゆえに、日本の傳統的音樂の中に、美しいもの、永遠のものを見出す一方、泰西名曲中にも亦、わが國民性にふさはしい或ものを得ようとの心願は、心ある方々のこゝろではないでせうか。………

たゞ遺憾に堪えませんのは、少數者を除いた我一般音樂者達の態度であります。邦樂家は未に長夜の夢から醒めず、洋樂家は自國憎悪のコスモポリタンに成濟まして、母語日本を眞に見詰めようとはいたしません。

×　　×

私の譯歌詞提唱を目して、眞實の藝術に精進する意氣に欠乏した結果、一種の偷安的氣もちから出發したのだらうといふような説をなす方もあるそうですが、それは違ひます。私の譯歌詞提唱は、自分の藝術に對する內省と批判との結論と、前陣の理由とから生れたものです。若し私が、外國へ行つて本式に勉强でも[illegible]たなら、一月も居らません中に、外[illegible]か、或は洋樂を廢棄してしまふて[illegible]何故なら、全然異つた環境にはぐまれたものが、他の國の藝術を全くわがものにしようなどとは、絶體に不可能なことなのですから……。幸にも、私は譯歌詞提唱以來、自分の行くべき途を探り求めました。すなはち、今後の私は『國語を愛せよ、外語を排せ！』と、あらゆる迫害と中傷とを覺悟して、此主張を機會のあります度に、なるべく全國的に高唱宣傳して、一生を捧げたいと存じて居ります。

×　　×

遠くはシルレルの國語國粹運動、近くはムソリニの外國歌曲禁止命令。……それは見ようによつては排外的狭量とも思へますが、實は日本のいはゆる國粹者流の履違ひではなく、人類の[illegible]を知るもの－平和的[illegible]ではないでせうか。

花魁春駒のこと

柳原燁子

この間雨のどしや降りの日、吉原から逃げ込んで來たおいらんの春駒、帶もしめない伊達卷姿のしどけない有樣が、斯うした周圍に少しもふさはないで、雨に濡れそぼちてしよんぼりとした小鳥のやう、馴れぬ邊りのけしきに、あはれ細々とした胸は動氣うつてゐるのが目に見えるやう、「もう心配おしなさるな」と云つても、まだ何やら追ひかけてどもくるかのやうに、きよろ〳〵とそこら邊りを見廻すあはれさ、「生れは高崎、父を亡ひ母や兄妹たちの爲めに賣られました身で御座います」と恥かしさう、「一體君達は一晩に何人位客をとらせられるんかね？」とSさんの訊ねるに、こちらが顏が紅くなつてその答へはきゝともない心地。

芝居で見る高尾、揚卷、小紫は昔のこと、今は情けを賣るのではなうて、唯もう器械になつてゐるばかり、「考へても御覽遊ばしませ、電車の中で醉ひどれが、一寸肩に障られただけでも身の毛がぞつと致しませう。それに私等は體をまかせるので御座いますもの」春駒の聲は悲しさうにふるへる「一體樓主は君達からどの位搾取するかね？」とSさんがきけば、「一圓がものなら二十五錢は私のもの、その內十五錢は借金の埋め合せにとられ、手に入るのが十錢だけ、あとの七十五錢は樓主のもの、稅金だつて私共の手から出すので御座います。食事は一日二食だけあとは御客樣に養つて貰らへとの事で御座います」「ぢや君達は高い間代を拂つて稼いでゐるやうなもんぢやないか。どうだい一つ吉原に一軒家をこしらへて、君達皆して聯合して、番頭だ下足番だと皆して交代で仲よくつとめてやつて見給へ、儲けはみんな君達のものだぜ、忽ち金持ちにならあ、何とうまい工風ぢやないか？」春駒もこゝへ來てから初めての笑顏を見せる。そしてめい〳〵の國の母さん妹や弟なんかを呼びよせててんでの部屋で一軒づゝの家族が出來たらどんなに嬉しからうとも考へてゐるらしかつた。

卷煙草の吸ひさしを一本火鉢の灰の中につきさしたSさんは、眞面目な顏して「どうだいもう一つ眞劍の事を敎へてやらうか、君達が一勢に自覺して吉原中の娼妓が皆あの仲の町の本通りに整列してさ、堂々と隊を組んであの大門から自由廢業の旗押し立てゝ練り出して見給へ、誰が止めるかい、誰も手も出せまい。それでいゝのさ、吉原はあしたから全滅さ、それつきりの話よ」

奈良に居て

池田小菊

ある夕方のことでした。八歳になつた隣の子供と、私は春日野を歩きました。東向を通つて歸らうとして、大軌電車の終點までくると、そこは恐ろしい人群で蒸せてゐました。奈良の春は毎年斯うですが、改札口から續いて、構内から街道へ、そして道路へ、はみ出された列の長さは一町餘もありませう。そんなのが三列も重なり合つてゐて、列に餘つた雜香は顔ばかり構内に盛上つてゐました、私は雜香に疲勞を感じ易い性なので、人込みをかきわけて通るよりは、離れても道をかへた方が樂だと思ひましたから、さう子供にすゝめました。見慣れてゐても、其日の雜香には子供も驚いたのでせう。あの人達はどこへ[illegible]

づねました。「月の出ないお國から月を見に、お花の咲かないお國から花を見に」といつた意味の話を、道々私は話してやりました。そんな國があるのか、それはどこなのかと、あこがれの崩れた樣な目附で、子供は話込んで來ました。「大軌でだつたら大阪へかへるんでせう。内の祖母さんは、大阪は怖いからつて、ちつともいらつしやらないんですよ。私も大阪はきらひ。行つて來ると鼻の孔が眞黑になるでせう。迷ひ兒にならないかと一日中心配ばかりしたから、朝飯が少いのだ。弱蟲だからだつてお父さまがお笑ひになるのですもの」と、子供は話しました。

道によつて、この出來事を西洋文明の沒落、東洋文化の勃興だと意味づける人もありませうし、[illegible]文明の人間讚美だと禮讚する人もありませう。奈良の人に[illegible]

牛骨細工の正札をはりかへ、大軌の會社は臨時電車の増加を大びらで廣告して待ちかまへます。

子供、そして老人の住み切れないといふ國。その國の人々に對して、私は何を祈つていいのでせう。

奈良は大佛の國ではありません。むろん、春日野でもなければ猿澤池でもありません。歷史の國のみでもなければ宗教の國のみでもない。それは確に來世紀の女性を意味した國であると、私の目にはうつります、奈良の藝術、奈良の自然、それそつくりが當に來世紀の女性の姿でありさうに、さうなければ本當でない樣に、私の目にうつります。「婦人問題の問題」をかいた私の思ひ感じも、さうした言葉からでした。[illegible]、今日野に溢れる[illegible]、來るくる人々の心持を[illegible]

自身の行手に、しみ〴〵涙ぐましい感がいたします。

見てゐると、兒童から學生まで、修學旅行の一度はきまつた樣に奈良を日程に加へてゐる樣です。春秋の奈良はそれ等の人々で埋ります。しかし、不思議にも奈良はそれ等の人々のためには大した混雜をいたしません。

汽車から下りて三條通りを眞直ぐ、猿澤池と五重の塔を左右に見て、說明が終ると春日の參詣路へ、裏門を出て嫩草山の麓を、八幡、二月堂、それから大佛へ、そして疲れた顏をして歸つて行くのが、修學旅行だからでせう。旅行の路はそれ一本きりないのです。それ以外には

(101頁へ續く)

が、今の教育だからでせう。猿澤池のそばでの引率者の說明も、嫩草山麓での讚美の言葉も、簡單な反覆と繰返しで、事がすんで行くのです。

空地の多い、住宅に豐富な奈良で、鳥籠のような一軒家を借りて住んでゐる一人者の私に、所得稅も來れば、縣稅市稅も來ます、それだから私も選擧權をよこせといふのではありません。さうして事細かにしぼり上げた金は、さうした修學旅行にも多分につかわれてゐるのでせうが、それでもいいのでせうか。いいとしたら免稅方法を考へない者は馬鹿、といふことになる樣な氣がいたします。

階の樣な建物を、五つも造くれば市民はみんはいつて終ふでせう。電車はエレベーターに代り、街は見渡す限りの良田となるでせうね」と、ある兒童が話したと、大阪にゐる友人が私に聞かせました。

童話の樣な夢想をゑがいて、少年少女、青年男女が、今、盛んに太りつゝあります、私は誰よりも若い人々を信賴いたします。その一人一人が、たしかな獨立人として育ち上つてくれたら、夢の五十五階には、どんなに力强い協力生活が實現されるでせう。

しかし、今の社會では、教育者はどの階級人よりも後れてゐるのださうです。考へて見ると、腹立たしくていら〳〵せずにはゐられません。

苦しみを浴びて

佐久間　千代

遠くに見ゆるポプラ並木の下に、眞黒い鴉がをりて啼いてゐる。

枯れたポプラのその枯に、すうつと靑みが添つてぐん／＼と芽立つてゆき、途の下草が鮮やかに蘇がへつてゆけば、さうしてもう春だなあと空を見上げる時には、思はずも深い吐息が洩れる。

春が來ても春が過ぎても地面の中に、重い黑い土を被つてゐる惠まれない貧しい芽の上を、種の上を考へると、心は限りもなく暗く淋しくなつてゆく。

都合の好い人達は、貧乏といふものを運命だと思つて居る。それは決定的な約束で[illegible]として、動かす事を爲さないで居る。然し、金の爲に人間が作られたものか人間の爲に金が作られたものかを考へるなら、生れてみたら片眼が無かつたといふのは運命で、金の無いといふのは人間の仕組んでゐる魔術だといふ事は忽ちに解る事ではあるまいか。

してみれば、世の中に、生れて來た子供の貧乏位不公平なものはない。貧乏であるから金が無いから、それだから學校へは行けず技藝を修得する事さへも出來ない人間には、唯默々と鞭打たれ墓場まで働かなければならぬといふ必然的責苦が考へられてゐるのみである。

然も勞働する事に依つてこの社會を泳ぎ切らなければならぬといふ事は、實際に[illegible]が年若い女性の場合に於て、恰んど不可能と云ひたい程に至難である。働けば働く程惠まれないといふ法則は、女性の世界に最も明瞭峻酷に作用してゐるからである

まして若し彼女が、彼女の良心に踏み止まつて、その僅かなる勞賃と、疲れ果てたる身體の睡眠時間の幾分とに依つて知識慾とを滿足せしめて行かうとならば、そは實に極みなき苦痛そのものである。

目標の山の峯は、遙か遠く彼方に嘲笑ふが如くにも聳え、彼女は打ちのめされた血みどろの歩みをばあえぎ／＼唯とぼ／＼と夜も晝も這ふが如くに運んで行かなければならないであらう。飽ます、[illegible]

時には眼のみを光らせて、我々の前にか丶る苦しみを浴びた人々を思ふ……彼等は一体何處へ行つて了つたのだろう？戰ひ疲れて倒れてその苦しみと共に墓場へ入つて行つた姿を思ふ時、現在苦しみを浴びつ丶ある者の全身には不思議に新しい血潮が漲ぎつて來る。苦痛は決して滅亡ではなかつた――。

生きる爲に……生きる爲に人間は如何に苦しんでもいゝ。彼は魂を持つてゐる筈だから。彼は創造を持つてゐる筈だから。彼は意志を持つてゐる筈だから？

人間の心臓に深く喰ひ入つた苦しみは學問知識と同等に共に、個々人の、從つて無産階級全体の健全なる成長へのなくてはならぬ肥料である。

知識を求めて眠れる彼等の食卓の下に、犬の如くにそのこぼれくずを拾ふ時涙と共にそれは頭の髓にまで骨の芯にまで沁み渡つてゆくものであつた……永遠に滿腹を知らぬ者にとつては、そのこぼれくずは常に必要と美味を教へ、其處には初めて望みがあり明るみが見出される……

街頭に立つて表面のみを眺むる人々は、この穏かなる平和なる經濟組織を是認して、禮讃して、胸を張つて北叟笑むであらう。時々の爭議など彼等の眼には消えて無くなる波紋にすぎないであらう。

けれどもその波の底には搾取と苦痛とが依然として充滿してゐるのである。深い土の中には芽がある。小さくとも貧しくとも、何時かは生ひいでなければならぬ芽がある。種がある。

穏やかである事はいゝ。音の無い事はいゝ。穏やかに音もなく默つてゐる事は、その事自體に於てすでに哲學であり組織である。搾取の中にこそ苦痛の中にこそ、見えぬ思想の殿堂はひとりでに編まれひとりで工事が捗つてゆく。

むくれ上つた芽が種が土を破る事は容易であり、築き上げられた殿堂がひとりでに波の上に浮びあがる事は、よりよき間道ではあるまいか――。

それこそは地中深く取り殘された芽の如き種の如き働く者苦しめる者達に、ゆるされたる唯一のあたゝかいほゝ笑みではあるまいか――。

すつかり若葉に茂つて空を向いてきらきらと、風に光るポプラ並木の下に、眞黒い鴉がをりて啼いてゐる。

初めての美容術

三宅　やす子

或る晦日の朝早く、私は都下で知名な美容院に行つた。私は皮膚が弱いから、それに人並に化粧の出來る顔でないから美容術など受けて、お化粧をして貰はうなどゝ思つた事はなかつたが、旅に出て汽車の中で髪を梳かすが厭で結髪をして貰ひに行つた序に、顔の垢も取つて貰はうかな、と思つたのは、もう人に肌を荒されても別に苦にもならなくなつたといふのと同じ事だつた。

入口で、先づどぎつい海老茶のカーテンが私の眼を射た。寝亂れた歐風髪に濃い白粉を殘した女達の働いて居るのと、ピカ／＼光る店の飾ピンがついで私の眼にきつく映つた。

「どうぞこちらに」「え、お身體をも少しうしろに」

私は默つて眼をつぶる。油みたいな香ひのヌル／＼したものを塗りつけては拇指と人差指でこすつて居る。重たいタオルが顔に載る。蒸すのだらうが熱くてうるさい。又ヌル／＼したものをなすり込む。

「ひどい刺戟だな、これは米國人にするのをならつて共通りしてるのだらうか」

――上瞼の上をこすられるとうつとり可い氣持になる。人の肌に許り手を觸れて居る女の指先は滑らかで可いなと思ふ。だがだん／＼頬がビリ／＼し初める。

こんな強い刺戟に――私だけが強いと思ふのかも知れないが――慣らされるから、若い女の人の風俗や表情や、欲求が強烈になるかな、と感心して居るうちに、「ブンブーン」と蜂の群のうなるような音がして、私の顔の上には電氣の何だかが邊で廻されて居る。ひどく不愉快な音だ。耳の近所をやられると思ふとガンとする。瞼の上なんぞうるさくてやり切れない。

又油を塗り込む。マツサージをする。

やがて「薄く」と私の注文通り粉化粧といふのをして頬紅をはいてねかした椅子を起してくれると、見違へる程奇麗に白粉を塗つた私が、鏡の中で苦笑をした。

化粧は翌日になつても崩れなかつた。私は恐くなつた。私の顔と首の肌はこんなにいためられたのだ。そんな事にはかまはず商賣人は一圓五十錢だけの勞力に對する施術をしてくれた。でも私は二度とあんな事をしようとは思はない。

「自分の肌を大切にするものは此不器用な自分の他にないのだつた」

私は本式化粧なんぞ要らない只の女なのを有難いと思つた。全くそれは嬉しかつた。だが又、

「でも今度生れ代れるなら、第一にもつと皮膚の丈夫な、それから化粧の効果のある顔に生れて來たいものだと思つた。

二つのメトロポリス

猪俣ベル

◇紐育の美は、ハァキュリーズ張りの力の美だ。傲然と立並ぶ建造物のひとつひとつが耐久性其物のやうに存在を主張する。その聲を、人はすべてから聞くことが出來る。頭上のエルは、脚下のサブは、寧ろ喚めいてゐる。そこに紛れもないメトロポリスがある。太陽がある。

◇東京は村である。エヴァー・グリーンの門に發見するバラックは――いやバラックに限らず――サムソンの怪力ならずとも擔り倒せさうな飯事式のものばかりだ。それでゐて、比較を許さない獨自の魅力を東京は有つ。たそがれに、高みから眺めるがよい。と有らゆる物が、あなたに囁きかけるだらう……ひんがしの都はいまや尨大な幻想と化し、ライラックの色の靄の中へ刻々と融けて、融けつく

[illegible]に行くと、ほ、空の朧つで微笑んでゐる。

◇紐育の街は截然と上下に分かれてゐる。上へ行く者は上へ行き、下へ行く者は下へ行く。上へも下へも行かない者は、上へも下へも行かないのだが、氣の利いた紐育ツ子にそんなのは少ない。氣の利かないのが、お巡りさんに道を尋ねたとする。彼は侮り難い廣がりを有つ其のお尻ほどに廣大な笑顔をもつて、そして聞手の頭ではとても追付けない速さをもつて、上でも下でも教へてくれる。そして、有難うを投げる暇も與へずに、そこらのバーへ姿を消す。

◇東京を歩く者は循環論法に陷つた形だ。何處へ廻つても、同じ樣な路次と交番とどつちつかずの角とにぶつかる。ロあけて人を見上げる子供の群もその一つだが、彼等の鼻の下が エヴアー・グリー

[illegible]巡さんを煩さうものなら、彼は尋ねる方にまづ尋問し反問する。それ程にして取入れる智慧を何處へ藏ひ込む心算か疑ふ者は、袋の樣にだぶ／＼な彼のズボンに氣付かぬからであらう。

◇紐育は、時間と距離と遲延とを撤廢した。東京では、時間には悠久で、距離はあなたのスピード次第、遲延に就いての意見はまち／＼である。

◇紐育では酒が、東京では接吻が、國禁沙汰…… 紐育の男は砂糖で丸められる野熊だといふ。女の前でライオンを氣取る東京の男が砂糖でないと誰が言へやう。――さア、西の國、東の國の若き女性達!?

三圓の相對性

ささきふさ

彼女は三圓の切符を取りに來るのは三圓以上もする菓子折を持つて來た。切符代の三圓をしまふが早いか彼女は逃腰になつた。私は紅茶を入れてゐるから、と止めた。

「まう結構。子供が待つて居りますから――あら、お笑ひになるの？これでもよい母ではあるつもりですのよ。」

では停留所まで送つて行かう、と私も立ち上つた。往きに迷つたと聞いたので。

「いいえ、車が待たしてございますから。」

「おやおや、大變な切符賃ですね。」

「え、時間を節約する爲にね。」

そして彼女はほほと甲高に笑つた。彼女が笑つてゐる際に私は、[illegible]になる

宮の自動車を門前まで引つぱつて來てくれとうちのものに賴んだ。だが彼女はうちのものが庭から出て行くのを見付けると、それを追ひ越すつもりらしく、急にあたふたと駈け出した。

庭の向ふは開け放しの野道なので、車を捜しに行くうちのものと、それを拔かうとあせつてゐる彼女とが影繪のやうに動いて見えた。ヴエランダでそれを見送りながら私は考へたことである――貴婦人の仕事なんて皆こんなものなのかな。三圓の切符以上もする菓子折、それに往復の自動車賃――だが彼女は貴婦人と呼ばるべき女性だらうか。彼女の夫の月收は高く見積つても今日の出費の十倍以上とは思へない。貴婦人でないとすると――彼女はヴアンプと呼ばれ得る資格はありすぎる美女だつた。現に彼女は……そのとたん、野道の一角から一臺のオプンが背の高い[illegible]せた、車と[illegible]うちのものと

運轉手に何かいつて車に乘つた。乘ると車は細い道の中で無理に方向を變へ始めた。彼女は車と一緒に身をはずませながら、ヴエランダの私へ切りに挨拶を送つてゐる。

「後戻りなさらないでも、そのまま出られる道がありますのよ。」

私は大聲でいつたが、車の中の彼女は首をかしげるばかりだつた。で私は車のゐる所まで走つて行つて丁寧にその道を敎へた。

「でもあの、伴れが――」

私はそこそこに退却するより外なかつた。なるほど車が細い道の中でまだ廻轉しきらぬうち、小野の向うから氣取つた一人の青年が間の惡さうな樣子で歩み出て來た。

「では切符代は半額でもよかつたのだな」と私は苦笑せずに居られなかつた。

男になりたい

吉屋信子

今日は五月五日、男の子の祝祭日なり、天空にうそぶく五月の鯉の勇しさ、菖蒲湯の匂ひのすが〱しさ、よくぞ男に生れけりと誰やらの句の如く、男は羨やましい。此の間本郷森川町秋聲邸の二日會の集まりにて、「男に生れたかつた」と申せしに男の方達反對する人あり、「そんなら貴方がた女になつたらいゝと思ふ」と反問すれば、仰せらく「一日ぐらいなら一寸なつてもいゝが、一生はごめんだね、」と、「なぜ」と伺へば、「だつて君、やつぱり男は我儘が出來ていゝものさ」と、文人よく男性の我儘を肯定し給ふこと殊勝也。

小さい頃から、「女の子だから、そんなおてんばをしてはいけません」とよく言[illegible]はれ兄さん達が勝手に遊んでゐる時、私だけは母の傍で働らかされた、あの時母が私に自由を與へ、もつと讀書の時間を與へたら、私は今頃利口になつてゐたのに……女の子だからと女學校だけで十分とされてゐるのに、頭の惡い不勉强な男の子が大學のなんのと親の學資を使つて遊べるのを思ふと、やつぱり羨やましいにを通り越してその不公平に義憤の感が湧く。だから私は小さい頃から男になりたかつた。そして男に生れたら、冒險がしたかつた、赤い帆の密獵船、オーロラ輝く北洋を漂よつて海の果まで波風と戰かつてゆく！さう思つて胸躍かした、江田島の海軍兵學校や越中島の商船學校に入れる男の幸ひな運命を思ふと泣きたくなつた。それはわが十二三歳の夢なりき。

十六七歳の頃、學校の上級生に美しい〱ひとが居て、その人を憧れ慕ふまあ[illegible]時自分が男になりたかつた、そしてその人の騎士となり、膝まづいて愛を乞ひ、競爭者に打ち勝つて、その佳き人の良人になりたかつたもの。しかし、遂に私はやはり男ではなかつたから、仕方がない、それで小説をかく者になつてしまつた。小説の中でゝもせめて美しい久遠の女性と戀をしたいと願つて。しかし、それもむづかしい、何故なら、女性は男性の前には誰でも久遠の女性めきし貴き善きものを示し得る、だが同性の前では久遠の競爭者となり油斷出來ざる裏切者とのみなるのだから、女性である間眞の女性を知る事も出來ない。

おゝ呪はれしわが女性よ！（自らの女性といふ意味也）黑髮長きも何の爲、われに甲斐なし、だからかんしやく起し切つちまつたの。母上許させ給へ

京都人の生活

中條　百合子

都會が、いろ〳〵な特色をもつて居る。面白いことゝ思ふ。京都などこれまでちつとも知らず、近頃たまに來て、まだ馴れないよその人の目で見ると、感じ方が、その土地で暮して居る者とは違ふ。京都人の日常生活の細やかさ、手奇麗さなど、風景でも大ざつぱで野趣のある關東から來た人は、唯でも賞め、價値を認める。全く或點よい。だが、其なら京都の人は本當に情趣豐かな風流人かといふと、さて、と思ふ。面白いことに、生粹の京都生れ、京都暮しの女性を見て居ると、彼女は本當によい色彩で着物を選び、家の隅々まできちんと行き屆いた生活ぶりでやつて居るが、しんに迫つて見ると、たゞ慣習の力で自然にさうやつて [illegible]

電車にのつて見て受ける第一の印象が東京などゝ違ふ。女の人は皆よそゆきで、とりすまして居る。東京のやうに、活動を運搬して居る激しさがない。外へ出るに、今頃は此服裝でなければは見つともない。さういふことを、女のひとは念頭に置かないで暮せないらしい。外見は、物靜で、ちんまりして居るけれど、內部で、さういふ些事に勞する神經は並大抵でないらしい。なか〳〵窮屈なことゝ思ふ。

女の人が、總体經濟家で、きれいずきで、家政的に育て上げられて居るのは、一寸傍から見れば、共に生活する男の人の幸福のやうだが、右を向いても左を向いても、母、妻、姉妹皆同一の型でちんまり纏つて居るとうんざりと見え、京都の男は遊ぶ。

[illegible]

べる場處にする丈、遊び熱が、京男に強いと云へよう。心理的に原因をさがすと、家庭の女性が餘りドメステイケートされすぎ、極端に云ふと永代女中頭みたいな點。都市の活動が緩慢で、時間と精力にゆとりがある故。——全く少し感情の強い現世的な人間が、あの整つた自然の風景、靜かな平らな、どこまでも見通しの利く市街、眠たい、しきたりづくめの生活に入つたら、何處ぞでグンと刺戟され情熱の放散を仕たいと切に望むだらう。さういふ超日常を欲する心を、一いきに、古都の質である藝術鑑賞にむけるだけの精神力の活潑さは概して失はれて居るらしい。京都人は男も女もリアリストと思ふ。

現代ソヴェート文學と其特質

ボリス・ピリニヤーク

概して藝術の目的、特に文學の目的が人間情緒の具象化にあるといふことは、地球上何處でも同じことであるが、その具象化の方法、手段、原理はいろ／＼異つてゐる。例へば私が日本で見た藝術、殊にクラッシック藝術は、我我ヨーロッパのそれと比較して全く別な原理の上に築き上げられてゐる。日本の藝術のうちには、私に取つて多くの奇異な不可解なものがあつた。それと同じく、我々の國で作られ、隨つて我々には數學の公式のやうに單純に思はれる多くのことが、日本の讀者には奇異に且つ不可解に感じらるゝであらう。然しそれでも私は兎に角自分の主題を、自分が接觸してゐる時代と場所と地方とに限らなければならぬ。そこで私はヨーロッパ文學を標準として、現代ロシヤ文學の主なる特徴とその特異性とに就いてのみ語るであらう。それでも私は先づロシヤに於ける文藝論の本質に就いて數言を費すの必要を認むる。恐らく私は日本に來るまではそんな必要を感じなかつたかも知れないが、今はそれを痛切に感ずる。といふのは、現在私が日本の藝術に於て見てゐるところのことが、是迄私が不變の眞理と信じてゐたことの必ずしも絶對的でないといふことを示して呉れたからである。

先づ最初の問題は、文學は如何なる手段を使用するかといふことである。それは言ふまでもなく、形象に具現され又は形象を具現するところの言葉である、句、節、章の中に綴り込まれる言葉である、言葉の藝術、言葉の神秘、言葉を

驅使する能力、それが凡て文學の手段となる。西ヨーロッパに於てもロシヤに於ても文學の形式としてはロマン、小說、短篇、ポエーム、バラード、詩等が認められてゐる。若し言葉は文學の手段であるといふことが眞實であるならば、小說の內容を初めその他のものは皆要件である。小說の形式、內容、題材等皆要件である。そして是等の要件は凡て變遷する。言葉でさへ永久的でない。時代によつて或はその內容を改め、或は意味を變へる。多くの言葉は死滅し、之に代つて多くの新しい言葉が生れる。時として全體の言語構成が死滅することすらある。例へば舊劇のみで使はれてゐる日本の古語の如き、又は古いロシヤの寺院スラヴ語及びピョートル大帝以前の古語の如きそれである。然し言語構成が死滅し得る以上、それは當然新たに生れ出づべきものである。國語は國民によつて創造され、文學によつて構成される。一體文學者の技術なるものは、言葉と小說の形式とを利用し得る能力如何に存する。小說の形式は優良な機關車のやうに複雜なものである。若し機關車が機關車となるまでには、蒸汽でなく牛に牽かるゝ單純な荷車からだん〳〵向上發展して來た長い道程を經過したとすれば、小說の形式も矢張り絕えず發達し向上し成長しつゝあると言ふことが出來よう。それが即ち作家の技術であり、その勞作である。そして小說の荷車を完成して機關車の程度にまで押し進めて行くのが作家の義務である。新しい階級を社會性の方向に押し出してゐる時代は、今のロシヤに見るが如く、その當然の結果として文學上の技術の新しい理想を提供する。

そも〳〵文學とは何であるか。西ヨーロッパ、特にロシアに於て、文學のビオロギイは如何に理解されてゐるか。

藝術の世界は人間の認識の獨立的な領域である。此處では情緒により、形象により、幾多の創作によつて、人間の精神、人[illegible]

世界、それが藝術の世界である。

ロシアはその歷史の特殊の事情により、また非常に殘虐な君主國であつたといふことによつて、以上の定義に更に一つの規範を加へた。「文學は社會的でなければならぬ」といふことがそれである。是れはロシア文學の汚點である。その美しい特質であると同時にまたその美しい畸形である。既に知らるゝ通り、帝政時代のロシアには苛酷極まる檢閲があつた。社會思想は單なる評論の形では本のページを覗くことすら出來なかつた。斯うした歷史的事情によつて、ロシアの社會思想は文學の假面を被らなければならなかつた。それ故にロシア文學は常に社會的であり、社會主義的であり、また常に社會的原動力であつた。今でも然うである。苟もロシア文學を語る場合、我々は常にこの事情を記憶しなければならぬ。

ロシヤ文學は常にロシヤ社會の優良なる分子の氣分の反映であつた。そして社會生活と共に、革命的事件と共に、相提携して進んだ。プーシキンから初まる全ロシヤ文學史は私の思想を證明するであらう。プーシキンが十二月黨と關係のあつたことは隱れもない事實である。即ち一八二五年十二月十四日ロシヤ軍隊がニコライ一世に對して反抗した時の最初のロシヤ貴族革命運動、ロシヤ社會性の最初の社會性の最初の革命的發動と彼は關係があつた。爾來ロシヤの社會思想乃至革命思想の發達は次第に民衆化しつゝ、ロシヤ社會の凡ゆる階層を貫通した。上流貴族より普通貴族を經て、雜階級及び知識階級に傳はり、遂に現代の勞農民衆に浸潤した。この長い歷史を通じてロシヤ文學が常に社會性と相提携して來たことに就いては、前世紀の我が偉大なる文豪レルモントフゴーゴリ、ベリンスキー、オガーレフ、ゲルツエン、ツルゲニエフ、トルストイ、ドストエーフスキを初めチエーホフ、ゴーリキイに至る諸文豪の著作や歷史を引用するまでもなく、日本の讀書界によく知られてゐる事實である。

文學の使命が人間情緒の具現である以上、文學者は常にその社會的空氣と接觸してゐなければならぬ。是れがロシア文學の考へ方である

ロシヤ文學の斯かる通俗化の經路はその當然の結果として、文學の使命と現實描寫、實生活の描寫、單に有るがまゝ見たまゝの事實の描寫にまで單純化したばかりでなく、更にそれに相當した思想を加味しなければならぬことになつた。が、斯かる判斷の道程は誤つてゐる。何故なら作家はその社會性と接觸しつゝ、それを政治家又は社會學者として知覺するのでなく、藝術家として知覺する。つまり作家は社會性と藝術の形に於て形象として情緒的に受け入れつゝ、一旦自己の個性によつて屈折した上、更めて作品の上に現實を還元するのである。政治は政治其物としては決して作家の材料とはなり得ない。さういふ場合、作家は藝術家ではなく、社會評論家であり、政治家である。作家のビオロギイと政治家のビオロギイはおのづから違ふ。藝術の武器を政治の武器に變へた作家は最早作家たることを止めたのである。

作家の社會的職能が、文學の目的に關するロシヤ的理論によつて解釋される通りのプランに於て、即ち作家は何を描いてゐるかといふことによつてゞなく、如何に描いてゐるかといふことによつて、凡ての作家はその社會的職能を遂行してゐるものと、私は考へる。作家は主題の選擇に於て全く自由である。たとへ前々世紀のことを描いても、兩極の生活を描いても、或は今迄に全く無かつたやうな生活を描いても、作家は自己の社會的使命を全ふすることが出來る。主要の問題は、作家がその材料を如何に利用し、如何に處理してゐるか、また何處へ引張つて行くかといふことである。

[illegible]

ロシヤ文學が常に社會性と密接に繫がつてゐたことは前に述べた通りである。ロシヤには最近一切の古い社會性を掃蕩し、一切の舊い生活様式を破壞した大革命が起つた。そしてこの社會性の尺度がロシヤ文學を二つの陣地に分裂させた。

舊時代の作家の大多數、たとへばブーニン、クープリン、メレジユコーフスキイ、ギツピウス女史、フイロソーフオフ、チリコフ、スルグーチエフ、スキターレツ、アルツイバーシエフ、故人アンドレエフ、シエストフ、ザイツエフ、ステプン、其他二流どころでは無數の作家がロシヤを見棄てた。そして歸國の望みは永久に絶えてしまつた。彼等は革命ロシヤを辭して、何等爲すこともなく外國に亡命の生活を送つてゐる。彼等は作家のビオロギイを政治家のビオロギイにおき替へ、社會評論家となつて、藝術家たることを止めてしまつた。彼等のことに就いては、私は茲に何にも書かないであらう。

以上掲げた舊時代の作家達は今のロシヤとその政治とを呪咀して祖國を逃げ出した連中である。隨つて今日ロシヤに殘つてゐる作家達は新しいロシヤと新しいロシヤの社會性とを完全に承認したばかりでなく、ロシヤに於ける今の社會性が政治と密接に關係してゐる限り今の政治をも承認した人々である。このことは、ソヴエート文學のことを語る場合常に記憶しなければならぬ根本の事實である。

さうかと言つて、今日のロシヤ文學者が悉く共産主義者であると考へてはならぬ。何故なら、今日ロシヤに於て構成されつゝある社會性はまだ〱、ロシヤ政治の舵を執つてゐる共産黨によつて確立されてゐる譯ではないからである。今日ロシヤに見るところの複雑な團體的及び階級的關係の中にあつて、共産黨は單に一個の凝結力となつてゐるに過ぎない。文學者は今日有るがまゝの新ロシヤとは結合してゐるが、黨派とは關係が無い。

ロシャ文學の道程を知らんがためには、革命時代にソヴエート社會性が多……ければならぬ。

先づ第一に注意すべき最も主要なことは、ロシャの新社會性の支配者及び完成者が新しい勞農階級及び多少遲れて勞農側に味方した知識階級であつたといふ點である。一九二一年までの革命の初期數年間は、啻に經濟的計畫に於てばかりでなく思想的方面に於ても、舊制度の破壞、舊生活の撲滅、一切の舊いものから解放といふ旗幟の下に通過した。この破壞の數年間工場は沈默し、随つて勞働者は經濟的に無力であつたし、それに本來がロシャは農民國であつただけに、ロシャ革命は農民革命、百姓一揆の旗幟の下に行はれた。概してプロレタリヤ革命に取つては豫期しなかつたことであるが、その當時ロシャには民族的思想が勃興した。西歐文明からの解放、機械からの解放といふ思想が妙に發達した。それには國内同胞戰の際、西歐の凡ゆる文明國がロシャに侵入し、ロシャは第一着手として農民軍によつて之を防禦しなければならなかつたといふ事情が、斯かる氣分の醸成にあづかつて大に力があつた。國内戰の時代、戰時共產主義の時代は、ロシャの國民哲學、異端主義哲學、農民一揆の哲學と共鳴するところが多かつたのである。實際當時多くの人々はプロレタリア革命の哲學を百姓一揆、農民革命の哲學に置き代へて考へてゐた。斯うした世界觀は極めて多くの詩的な美しいものを與へた。

實際は勿論然うではなかつた。革命はプロレタリア革命であり、都會革命であり、インターナショナル革命であつたり戰爭と破壞の時期にはこの事が分らなかつたが、戰爭が終ると明白になつた。即ちロシアの社會性とロシアの政治とは、都市の道程、機械の道程を辿つてゐることこそ、れもヨーロッパの道程でなくアメリカの道程を辿つてゐること、こしーロシアに於ける時局の支配者はプロレタリアであることが明白になつた。これと同時に新しい國家は、啻に新しい社

合主義的法律や、國民財産の新しい分配によつてばかりでなく、更に機械と電氣と智識とに依る勞働の新しい組織によつて、世界改造に躍進するであらうといふことが明白になつた。この新しい國家は國際的であり、その哲學も亦國際的（インターナショナル）であつた。而もそれは紙の上に造られたのではなく、實生活の上に創造されたのである。今や農民一揆の哲學、トルトトイ流の勞働の歌は漸次減少して深く村落の中に姿を消してしまつた。國家の樞機に參したばかりのこの新しい政治は、戰線から歸つたばかりのプロレタリアで固めてゐたから自然戰鬪的であつた。同時にまた世界を政治的に感得し思考する人々を自然のフルイにかけて精選したのだから、當然政治的にも敏感であつた。ロシアを經濟的復興に導いたのも是等の人々であつた。

一九一八年、舊作家達がロシヤから逃げ出した時、全ロシヤの上に大砲が轟き、騎銃や機關銃の彈丸が響いた時、工場が閉鎖され印刷機が沈默した時、ロシヤ中が饑へ凍へ戰つた時、その時は全くロシヤには何の藝術も文學もなかつた。偶々書いても印刷が出來なかつた。文學物は一年に一冊づゝしか出なかつた。それですら空中にぶら下つたきゝ誰も讀みてがなかつた。一旦革命の雷と煙の洗禮を受けた新しい讀者は舊い本では滿足が出來なかつたらうし、第一あの場合讀書どころの騷ぎではなかつたのである。

文學者はやがて戰爭終了の直後に當る一九二〇年に對する準備をし初めた。多くの文學者が四方八方から出て來た、國内の隅から現れた。その多數は文壇に於ける全く新しい人々であつた。小數の青年文學者、例へばマヤコーフスキイ、エシエーニン及び私は既に世界大戰時代に書き初め出版し初めたが、革命時代には革命のために文學を放棄しなければならなかつた。フシエヴオロード、イヴアーノフはシベリヤからペテルブルグのゴーリキイの許へ數千露里を徒步

大隊から文壇に現はれ、セルゲイ・エシエーニンは畑を耕してゐた鍬を棄てゝ村から出て來た。私は農村の無政府主義自治團の圖書館係と水運び人と云ふ妙な職業に從事してゐたが、やがて機關銃の猛火で其處から追ひ拂はれた。マヤコーフスキイは革命の初期にはロスタ通信社に坐り込んで、頻りに宣傳ポスターを書いてゐた。

我々は皆眞つ裸かな荒野に現れた。我々は皆百姓一揆の思想に煽られて來た。我々は皆藝術家として、言ひ換へれば世界を政治的にでなく、情緒的に形象として知覺してゐる人間として文壇に現れた。我々は小說と詩と物語とを書いた。農民のこと、村落のこと、曠野、耕地、農村革命、百姓一揆のことを書いた。我々は皆民族的革命氣分に充たされてゐたたとへそれがプロレタリヤ革命の耳にはどんなに異樣に響かうとも。我々は我々のクラッシックから承繼いだ言葉や文學的武器庫が、我々の體驗したばかりの嵐に取つて、不適當なものであることを知つた。そこで我々は極めて熱心に新しい文學の形式を探すことに取り掛つた。我々は舊い小說や物語の要件を斥け、その緩漫なリズムと虛僞な筋の發展とを拋棄した。我々は革命によつて生み出された新しい言葉を注意して拾ひ上げた。實生活は任意の題材よりももつと筋だつてゐた。實生活の記錄（ドキユメント）は任意の空想よりももつと幻想的であつた。新しい概念や新しい情緒は任意の個人的體驗よりもヨリ良くあつた。革命は革命前期の作家達の舊い主題を無用のものとして拋棄した。戀愛の主題、「彼と彼女」、「私と神」、「私と永遠」、「私と善と惡」といつたやうな主題を反古にした。その代り革命は新しい主題を提供した。「我々と我々」、「私と我々」、大衆と個人との葛藤、ロシヤ社會史上の主題等を提供した。我々は是等の主題を採用し、新しい言葉と新しい概念とを拾ひ上げた。私は是迄に多くの版を重ねた小說『裸かの一年』を書いたが、是れは本來小說と名けらるべきものではない。是れは私が見たり聞いたりしたことのスケッチを集めたものであり、新聞とポスターとか

ら採つた實生活の萬花鏡（カレイドスコプ）である。この小説には筋は無い。筋の代りに實生活がある。作家的要件は全く放棄されてゐるか、でなければ漫畫（カリカチユーア）になつてゐる。革命の音樂とリズムと歩調とは、句の構成上、記述の構成上新しいテンポを私に齎らした。（この論文に接する日本の文學者は容易に私の言を諒解するであらう。といふのは日本語に於てもロシヤ語に於けると同じく、『彼は速く歩いた』といふことゝ『速く彼は歩いた』といふことゝは全く同一ではなからうと思ふからだ。この句に於ける言葉の配合法は言葉の意味を變へないまでも、種々の濃淡と種々のリズムとを與へる。若しそれが言語の移動から來るとすれば、文學上に於ける各時代の移動には幾許の濃淡があることだらう。）私の小説の各章は皆別々なリズムで書かれてゐる。私はそれ程長く自分の小説の上に腰を据えた。私の文學上の同僚も矢張り私と同じ仕事を仕遂してゐたからだ。我々の作品は非常な騒ぎで迎へられた。獨りロシヤに於てばかりでなく、西ヨーロッパに於ても、毀譽褒貶共に嘖々たるものがあつた。私はフランス、ドイツ、イギリス其他の外國新聞雜誌に於て、今日のロシヤ文學を極めて高い地位に評價してゐる幾多の論文を個人的に知つてゐる。このことは現代ロシヤ作家の個人的才能によつてゞなく、當然今日のロシヤ生活、ロシヤ革命の天才的力によつて説明されるものであると、私自身は考へたい。

こゝで私は現代ロシヤ文學の第二の傾向に移らう。

私は先に我々の作品が毀譽褒貶まち〳〵に迎へられたと言つた。實際我々は自分の祖國に於てさへ誹謗の聲を聞かなければならなかつた。我々は農民一揆の煙に咽びながら文壇に來た。我々は丁度都市とプロレタリアとが農村を支配した時期に文壇に現れた。我々は、前に述べたロシヤの革命的社會性の發達の第二期に、文壇へ入つた。我々は、世界

を、隨つてまた文學を、政治的に知覺してゐる社會性とぶつかつた。が、我々は政治的には無關心であつた。我々、民革命の疑惑を抱いて文壇に現れた。ところが都會的機械的意力の感激に陶醉した社會性が我々を迎へた。我々は破壞者であつた、我々を迎へたのが建設者であつた。

けれども我々は敵に迎へられたと考へてはならぬ。我々は、同じ言葉で話しながら、而もその言葉の中に別な概念を含めてゐる。同じ一家族の兄弟達に迎へられたのである。彼等は我々を稱して「ポプッチキ」(政治家から我々に與へられた政治的術語で、革命の道伴れの意)と言つた。又は「ムジコフストヴーユシチイ」(我々の作家的社會的本質を定義した術語で、百姓式に考へる者といふ意。)と呼んだ。特に文學の形式と技術とに多くの注意を拂つてゐる文學者は「形式派」と名けられた。(私はこの三つの何れにも屬するものとされてゐる。)我々の作家團體と對立して、一方にはプロレタリヤ文學者團體、都會作家、機械の歌ひ手、インターナショナルの詩人等がある。新文學の原理に關する問題を中心として熱烈な爭論が燃えさかりそれは我々の偉大なる指導者や社會的活動家達も全部參加した。この爭論は今でもまだ解決されない。餘程眞劍な勝負と見られてゐる。

私は、ロシヤの社會性にはロシヤ文學にかけるが如く二つの生物學的力が衝突し合つてゐるといふことを決定するのが、我々の爭論に於ける最も根本的な問題であると思ふ。二つの力とは何であるか。一つは自然、野原、野花、戀愛、出生等を第一義的のものとする生物哲學で、一つは人間と勞働と、自然を征服する機械とを第一義的のものと思惟する生物哲學である。今日ロシヤでは機械の哲學が勝利を占め、人間の支配權が世界の上に出てゐる。この爭論は實生活の如く殘忍である。全世界は數ケ月前首を縊つて自殺したセルゲイ・エシエーニンの訃報に接した。エシエーニンは勿論革命家であつた。彼は現代社會に受けられなかつたとか竄逐されなかつたとか言つて苦情を述べることは決して出來な

い。彼は常に生活の安定を保障されてゐた。彼はロシヤの大なる指導者達に親近であつた。それにも拘らず、彼が自殺したのは、つまり都市の哲學、機械の哲學を受け入れることが出來なかつたからである。玆にはその單純さに於て最も天才的な、エシエーニンの詩の斷片を引いておく。

『君は見たか、鐵の足をした列車が、
鐵の鼻孔を鳴らしながら、
湖水の霧に隱れながら、
どんなに曠野の上を走つてゐるかを。

その後から大きな草の上を、
勇ましい競爭の祭でゞもあるかのやうに、
細い足を頭越しに擧げながら、
赤いたてがみをした子馬が驅けつてゐる。

可愛い可愛い可笑しな馬鹿者よ、
何處まで彼は、彼は何處まで追つ驅けるのだ！
鋼鐵の騎手が生きた馬に勝つたことを
彼は知らないのか。

ところが運命はいつか
鐵の軋り音で呼び覺まされた我等の平原を一變した。
そして一千プードの馬皮と馬肉で
今は機關車を買つてゐる……』

ニシエーニンは『可笑しな馬鹿者』の運命と安協しなかつた。彼は生活から遁れ去つた。我々生存してゐる文學者は、生活を逃避するか若くは機關車の折學を承認するか、その一つを選ばなければならぬ。是れは人間の壓迫によつて出來るのでなく、歷史の車輪の壓迫によつて出來るのである。若し我々が、ロシア革命の提供した課題に打勝ち得るならば(曾て我々が打勝つたやうに)、我々は屹度まだ世界に無かつたやうな文學を創造し得るであらう。是れが現代ロシア文學が我々に提供したところの課題である。

我々「ムジコフストヴーユシチイ」や「ポプッチキ」と對立して、ロシヤにはプロレタリヤ文學者が起つた。是れは當然然うでなければならぬやうに思はれてゐた。が、實際は單に形式的區分に過ぎないことが分つた。といふのは我々今日生き殘つてゐる作家團體(ポプッチキ)は更生の力を自身のうちに見出したからである。藝術戰線は例によつて一つであり、文壇の支配權は例によつて我々の側に殘つてゐる。

次に私はプロレタリヤ文學の問題に就いて述べやう。私は前にも言つた如く、作者がこの藝術の世界に於て、都市と農村との文學とに支配權を對照する場合の主要なイデオロギイを論じてプロレタリヤ文學に考へる。私は以下述べる文

公平であらんがために、この問題がロシヤに於て如何に論議されてゐるかを言はなければならぬ。ある者は率直に、プロレタリヤ階級出身の人によつて作品が書かれる時初めてプロレタリヤ文學なるものが有り得ると考へた。他の者は作家が勞働者の生活と美學と精神的欲求とを描寫する時、初めてプロレタリヤ文學なるものが起り得ると考へた。第三の者は社會主義的共產主義的思想を藝術的に表現することを使命とする文學即ち共產黨文學をプロレタリヤ文學だと思つた。敍情詩がプロレタリヤ文學の本體でなく、またさうで有り得ないことも言はれた。エドガー、ポーやホフマンや今日ロシヤで活動してゐるカヴエーリンやの作品構成上における幻想も放棄された。之等の無邪氣な肯定に對して私は別に反駁するの必要を認めない。之等の肯定は單に探究的思想が迷ひ込んだ小徑としてのみ注意に價する。本論の前半において私は、創作とは何を描いて居るかと云ふ事に成り立つて居るのでなく、如何に描いて居るかと云ふ事に成り立つて居ると云ふ事を述べた。同時に亦作家のビオロギーが藝術家のビオロギーであり情緒のビオロギーであることも述べた。作家は決して政治家ではない。假りに此處に政治家と音樂者と作家との三人を引きだして見よう。そして此の三人は彼等の傍を通つてゐる五月一日の勞働者の示威運動を見るとする。その際政治家は論理的推論を下して勞働運動の發達を思ひ出し、音樂者はこの示威運動のテンポと音響とを傳へるマーチを作曲し、作家は詩的藝術品を創作する。かくして三人の人は別々にこの示威運動を受け入れるのである。そして政治家の理論と作曲家の音樂と文學者の作品とは第四の人に働く事になる。第四の人物は三人の作を受け入れて、示威運動に關する三つの異つた觀念を構成し、又それによつて三人は互に補足し合ふ事ができるのである。

　現代ロシヤ文學が提供して居る問題は概して文學の使用して居る樂器によつて、現代のロシヤ社會性が歌ひ且つ呼鳴つてゐる合唱と音響とを捕足するといふ事に成り立つて居る。言ふまでもなく人間と勞働とによつて世界征伏の勝利の

詩を世界に高調せんが爲に、ロシヤの民族的境界線の上に高まらうとするのが現代のロシヤの社會性である。此の新しい機械的なロシヤ文學の道程が今日熱心に探求されて居るのである。そしてその第一着手として小説や物語や概して文藝品の新しい形式を創造する事に熱中してゐる。之等の形式が果して如何なるものであるかは今日豫言する事ができない。唯我々の社會性が記念碑的の偉大さにならうとしてしきりに努力して居る事は事實である。それが爲我々の社會性は肯定と建設との靈感によつて、樂觀主義によつて一貫されてゐる。そこで文學は之を形象に、小説に、物語に具現しなければならぬ。之がロシヤ文學に考へられた現代ロシヤ社會性の課題である。

私はこの論文を日本のクラシック藝術に就ての言葉を以て、又それが私に何を示したかと云ふ事を以て始めた。日本のクラシック藝術は今迄私に絶對的のものと思はれて居つた一切の事が、相對的のものに過ぎなかつたと云ふ事を示して呉れた。

實際この世界に於ける一切の事は相對的である。私はヨーロッパ藝術の發達の道程に於ける消極的方面を知つて居る。又私は若い日本の文學が西ヨーロッパ藝術の道を辿つて來たことも知つてゐる。日本の藝術は西ヨーロッパの藝術が向つてゐる處へ進んで居るが、然しその手段は異なつてゐる。日本のクラシック藝術は現實と實生活とを根底から放棄した。そして一切は要件と美との内にある。日本のクラシック藝術は單に相對的に作られた形象にのみ重きを置いて居る。そして此の形象だけで人間心理を具現して居る。日本のクラシック藝術は要するに時代を超越した藝術である。

然るにヨーロッパ藝術はあまりに時代とつながり、餘りに時代的である。日本のクラシック達には、英國のクラシックやルネッサンス時代のヨーロッパのクラシック、例へばペトラルカやダンテ[illegible]、[illegible]

シエクスピヤに見るが如く、藝術の秘訣なるものがあつた。それが彼等に總ての時代、總ての國に於いて永久に新しい、永久に香り高いものとなつて殘つてゐる不朽の藝術品を作る可能性を與へたのである。此の藝術の秘訣は餘りに時代と接觸し過ぎてゐる今日のヨーロッパの作家達には失はれてゐる。彼等は結局時代と共に老い時代と共に忘れられて行く。多くのロシヤの作家達で例へば前世紀のツルゲーネフ、ゴンチヤーロフ、グーゴローウイッチ等が此の運命を預つてゐるばかりでなく、今世紀に於てつい最近迄有名であつたアルツイバーシエフ、アンドレーエフ、クーブリン及び其他の作家も今では殆んど讀まれて居ないばかりでなく、若い人達には全く忘れられてゐる。

私は現代ロシヤ文壇に於ける私の總ての同僚に就て評る權利は持たないが、然し自分の事に就ては最后に一言を附け加へて置く。私はクラシックの秘訣を認識する爲に、又自分の時代の爲に書く事を自得する樣に、つまり時代以外に立つて時代を超越せんが爲には、私はどんなことでもするであらうと云ふ事を。(一九二六年五月八日東京に於て)

自然科學

第二號出來

第二號

（定價壹圓送料十二錢）

創刊號

（定價壹圓三十錢送料十二錢）

改造社發行

最新刊

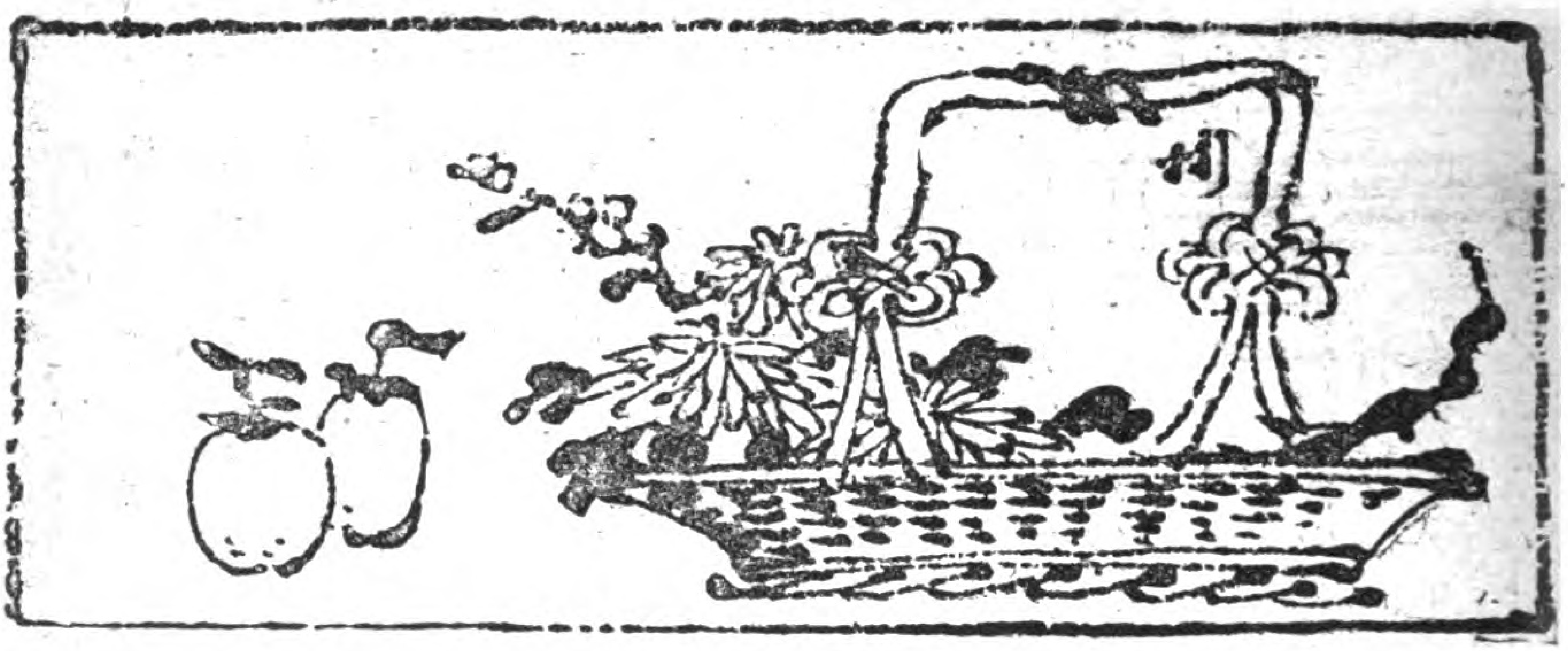
言葉・言葉・言葉

岸田國士著

價壹圓八十錢
送料金二十錢

近代的感覺とラテン流のユウモアスと、之れに加ふるに纖細微妙な筆致を以て、新鋭文壇に耀ける著者が、過去數年間に物されたる隨感隨錄二十八篇を蒐めたものである。旅の憂鬱では、あの頃あの聲の追憶に耽り、言はでものこと、言ひながら、藝術論に言葉言葉を重ね、或は幕間に演劇を論じ、或は生活を語り、廣汎多岐に亘つてゐるが、全篇悉く珠玉の如く滑かにそして華かである。新人の若々しさ、鮮かさに充ち充ちてゐる。

發行所 東京市芝區愛宕下町 振替東京八四〇二 **改造社**



犠牲（五幕）

藤森成吉

第一幕

人物

石川謙造　著作家、四十五歳
母　六十三歳
雪子　長女、十一歳
欣一　長男、八歳
女中　二十歳位
中村十吉　農場監督、四十三歳
片山千代子　新聞記者、三十歳

時

現代、五月半ばの午后

所

石川邸書齋

舞臺

西洋間。右手前面に大きな玻璃窓二つ。一つひらき、一つ閉まる。そとの植ゑ込みの新緑の光が、美しく映じ、又射し込んでゐる。微風に白い薄い紗のカアテンが飜る。その前手に、ドッシリと大きな書き物卓一臺。卓上には、書物立てに何冊かの本が並び、暗紅色の紗のかかつた卓燈や、インキ壺、ペン置き等が備へつけられ、原稿紙が散らばつてゐる。その奥に、斜め前手へ向つて寫眞立てが置かれ、やや大きな亡夫人の寫眞が挾んである。卓の前に廻轉椅子一脚。舞臺中央に小テーブル一つ。まはりに、長椅子や普通の椅子が程よく据ゑつけてある。窓の奥から正面へかけては全部高い書棚。ギッシリ和漢洋の書物が詰つてゐる。左手半分ばかりの壁には、上に油繪や古い版畫などの額二つ三つ。奥手にドア。

幕開く前から、蓄音機のレコオドが聞えてゐる。物は、チャイコフスキイのピアノ曲（ラハマニノフ彈奏）「トロイカ。」――幕あくと、長椅子の奥に雪子、それと並んで石川が腰かけ、次の一人分の椅子に欣一が乘つかつて、テエブルの上の蓄音機をたのしそうに聞いてゐる。

石川。三匹の馬の鈴の音だよ。

欣一。ア、そうか。馬の足音と一緒に聞えるんですね。

雪子。欣ちやん、默つてらつしやい！

　たしなめられて、欣一おとなしく默り、一心に聽く。音ぱたりと聞えなくなる。

欣一。あらツ、どうしたの？（又父親の顏を覗き込む。）

石川。（やはらかく）靜かにしておいで。

　又音始まる。

石川。また始まつたらう。

　欣一、わかつたやうにうなづく。やがて、音次第に遠く幽かになり斷れる。

石川。（盤をとめて）面白かつたかい？

　雪子、欣一、一緒にうなづく。

石川。あなたがたには、あんまり面白くなかつたかも知れないね。

欣一。お父さんは面白かつた？

石川。面白かつたよ。すつかり北海道を思ひ出しちやつた。

雪子。北海道ぢや、やつぱりあんなに馬が鈴をつけて走るんでせう。

石川。そうだよ。雪が一杯つもつてる時はね。（泌々追懷するやうに空間を見る。）

欣一。僕も行つて見たいなあ。そして橇に乘りたいなあ。

雪子。（姉らしい口調で）欣ちやんは、レコオドのあひだに口ばかりきいて、仕方ない人ね。

石川。（父らしく笑ひながら）はははは、……もう少し大きくなつたら、みんなで冬一度行かうね。

雪子。あらうれしい。そしたら、わたしお父さんとお母さんと昔住んでらしつた御家を観に行きますわ。ね、観られるんでせう？

石川。いくらでも見せてあげるよ。

欣一。（手を叩いて）うれしいなあ、うれしいなあ。

石川。（慈愛をたたえて頭を撫ぜてやりながら）それには、早く大きくなつて、もつと、もつと、丈夫にならなくつちやいけない。

欣一。なります。だから連れてつてね。

石川。よし、よし。

雪子。お父さんは、長アく北海道にいらしつたんですか。

石川。そうだよ。あなたがたの生れる前の、前の、ずうつと前ツから。

雪子。そうそ。お父さんは札幌の大學をお出になつたのね。

欣一。馬鹿だね、姉ちやん。お父さんは、札幌の先生をしてたんだよ。

石川。（笑ひながら）生徒もしたし先生もしたんだよ。

雪子。お母さんと（寫眞の方を見やつて）――あの、初めてお住みになつたのも北海道ね。

石川。さうだよ。

雪子。わたしも北海道で生れたんで
う。

石川。よく知つてるね。

雪子。何だか、わたしまだ北海道のことを、少うしおぼえてますわ。お母さんの白いお顔と一緒に、白い雪が一ぱい降つてて、男の人が赤アい毛布をかぶつて……。

欣一。赤い毛布なんぞかぶつてるの？お父さん。

石川。かぶつてるんだよ。雪ちやんは悧巧だから、ほんとにおぼえてるのかも知れない。

欣一。僕も、ちや、行つたらかぶるよ。そして橇へ乘つて、チンチン鈴を鳴らして、お父さんの住んでた家へ行くんだ。

雪子。そこの家に、お母さんが待つてらツしツたらどんなにいいでせうね。

石川。（思はずギクリとしたやうに）もうそんな話はよそう。死んでしまつた人の事なんか、あんまり子供は考へるもんちやない。それより、元氣よく大きくならなくちやいけない。

その時、ドアをあけて母親が入つて來る。上品な切り髮の老婦人。

母。おや、どこにゐるのかと思つたら、お父さんと蓄音機を聞いてたの？

欣一。今ね、おばアちやん。北海道の橇のレコオドを聞いてたんですよ。

雪子。あらちがツてよ。欣ちやん。ロシアちやないの？

欣一。（氣がついて）そうだツた。北海道の御話をしてゐたから、まちがへちやツた。（頭を搔く。）

そのおどけた恰好に皆笑ひ出す。

母。それはよかつたのね。（欣一の傍の椅子へ腰かけ、石川の方を向いて一寸言葉を變へて）新しい盤を買ひなすつたの？

石川。いゝえ。友だちに貸して貰つたんです。

母。（淋しさうに）さう。（しばらく間を置いて）蓄音機も、賣り立てに出すんですか。

石川。いゝえ、――さうしやうかと大分考へましたが、取り除けにしました。日本では、やッぱりこんな物でも無いと、音樂を欲しい氣もちがどうも滿たされませんからね。

母。畫の方だッて同じ事ぢやなくッて？

石川。それはちがひます。畫は、美術館へ寄附して大勢に觀て貰つたり、寄附出來ないやうな物は賣り拂ふのが當然でせう。

母。みんな始末して了ふんですね。

石川。いゝえ、――それも、二三枚は殘して置きたいものがあります。人から貰つた記念の物で、心もちから云つてどうしても手放せませんから。

母。わたしから云ふと、今まで代々傳はつたり、お父さんが丹精してお集めになッたものは、やッぱりみんなそんな氣がしてならないんですよ。

石川。（歎願するやうに）お母さん。どうぞ僕を苦しめないで下さい。それを考へればこそ、今まで十年間も、自分の氣もちを押へて來たんです。――然し、矛盾はたしかに矛盾です。（決然として）もう御座んす。ぢやあ、畫も蓄音機も賣り拂ッちまひませう。

母。（おどろいて）まあつい餘計な事を云つて。勘忍して下さい。年を取ると思はず愚痴になつて。——人並みすぐれた藝術家で、又藝術好きなあなたですもの。此の後の仕事の爲めにも、藝術的な足しになるやうな物は、どうか取つておいて下さい。蓄音機なんぞ安いものだし、子供達にもどんなにいいか知れないんですから、この人達の爲にも殘しておいてやつて下さい。

子供達。お父さん。お父さん。誰にもやらないで頂戴。

石川。（くぢけて）そうですか。ぢややツぱり取り除けませう。（獨語的に沈鬱に）全くのプロレタリアになると云ふ事は、やツぱり夢か？　考へ始れば、端から矛盾だらけだ。

母。（氣づかはしそうに）だツて、そう急に何もかも棄てて了はうと思へば、人間は自殺でもするほか仕方ありません。今のあなたの決心でも、どうして容易な事ぢやありません。あとはだんだんにしなければ——。

石川。（沈鬱に）だんだんに、か。そうどんなに思ひ、又どんなに堪らなく思つてるでせう。今度もやつぱり「だんだん」だけの事か。——（急に明るく。快活に）いや、それでいい。それよりほか解脱する途はないんです。お母さん、あなたのいい言葉に禮を云ひます。僕はお蔭で又自信を得ました。いつかは、きつと充分強い人間になつてお目にかけます。

母。（しみじみと）ほんとに、此の世へ苦しみに生れて來たやうなあなたですね。

石川。決して。——ほかの、ほんとに生活に苦しんでゐる人達の事を考へれば、そんなお言葉は當らなすぎます。（氣もちを變へるやうに）で、お母さんは。この家を賣つて了へば、僕の借家の方へ來て下さいますか？

母。そうするつもりです。

石川。さうして下されば、どんなに僕も、子供達も、うれしいか知れません。でも、かう云ふ自分一人の決心で、この上あなたに御迷惑を掛けることは忍びません。急に生活を變へるなんてことは、僕のやうなまだ壯年の者に取つては、決してむづかしい事である筈がありません。然し、お母さんのやうな御年になつては、……むしろ出來ないのが當然だと思ひます。僕は、御存じのとほり、自分の考へを人に押しつけるのは大ッ嫌ひな性分です。いくら主義でも、人にはめいめいの立場があります。もし少しでも苦痛と思召すやうなら、どうか弟の家へなりと、又べつに家を御持ちになるなりと、御氣の向いたやうになすつて下さい。さうすれば、此の後のくらしの爲めに、決して御不自由ないだけの物はあげますから。

母。あなたさへ邪魔に思つてくれなければ、わたしはいつまでも一緒にゐさせて貰ひます。今までゐたからばかりぢやなく、わたしには、やツぱりあなたが一番たよりになる人ですから。

石川。さうですか。(感動して)勿體ない御言葉ですが、實際くらして御覽になつて、もし御氣に入らなかつたらいつでも……。

その時、ドアを開けて女中が入つて來る。

女中。あの、お電話で御座います。

石川。僕に？　お母さんに。

女中。旦那さまで御座います。

石川。どこから？

女中。伺ひましても仰いません。ただ、「先生と申て頂ければわかりますから」と仰つてらつしやいます。

石川。妙だね。（立つて出て行く）

あとドア開いたまゝ。そこから、やゝ隔たつた電話の應待が聞えて來る。

石川。もしもし、僕石川ですが、あなたはどな？………ああ、片山さんですか。——「犠牲」の校正のこと？………それにありがとう。——さあ、今ちよつと用がありますが、——いや、べつに來客があるわけぢやありませんが、——然し、今少し——ああさうですか。……えゝ、（思ひ切つたやうに）ぢや構ひません。——どうぞ——。

母、子供達と一緒に、そのあいだテエブルの上の、オペラ解説の繪入り本なぞをひろげて見てゐる。やがて電話を切るベルの音がして、ドヤを閉めて石川戻つて來る。やや當惑した顔色。長椅子に腰をおろす。

母。（その樣子を見て）片山さんてかた、いツらしやるんですか？

石川。えゝ、校正の用で是非會ひたいつて云ふんです。

その時、又女中入つて來る。

女中。あの、只今農場の中村さんがおいでになりました。

石川。おお、さう。——すぐこツちへ通して下さい。（思はず獨語的に）もう少し早く來てくれればよかつたに。

女中去る。

欣一。（うれしさうに呼ぶ）中村さんて、あの北海道の、ヒゲの（兩手で、すつきりとほそい頬つぺたから顎へかけて恰好して見せながら）眞つ黑に生へてるおぢさんでせう。お父さん？

石川默つて何か考へてゐる。

母。（代つて）ああ、そのヒゲのおぢさんだよ。

雪子。わたし、あの熊のやうなおぢさん大好き。

欣一。僕もさ。丁度いいや。一緒に樵の話を聞きませう。ね、姉ちゃん！

雪子。えゝ。（云ひながら、默つて考へに沈んでゐる父親を氣づかはしさうに見る。）

母も同じ樣子で眺める。その時、女中の案内で中村がドアから入つて來る。眞つ黑く日や雪に焦けた顏。蓬々とした漆黑の鬚髯。が、割合眼が小さくやさしい。まるで五十幾つの人間のやうにフケて見える。如何にも北海道の原野で働いてゐるやうな用介風な洋服。脚へはカアキイ色のゲートルを卷きつけてゐる。

子供達、「おぢさん！」と呼びながら兩側から飛びつく。

中村。（ニコニコ笑ひながら）これは孃さんがた。――よく覺えてゐてくれましたね。……ぢやあ、御褒美をあげなくッちやあ。（毛だらけの、眞ッ黑な手を片方のポケットへ入れて引ッ掻き廻して、きたない手袋をつかみあげる。慌てもとへ入れて、他方の手で別側のポケットを探り、白い紙へ包んだ棒狀の物を取り出す。それをひらくと、中からアイヌ細工のペン軸とナイフが出て來る。白木へ朱を入れたペン軸の尻ッぽには、くり拔きの四角な環が一つ嵌まッてぶらぶら搖れてゐる。ナイフの白鞘には、アイヌ模樣が墨で彫り拔いてある。それを、二人に一つづつ分けてやる。）

雪子。どうもありがとう。

欣一。ありがとう。――これ何アに？、おぢさん。

雪子。ペン軸よ。欣ちやん。

中村。さうだす。[illegible]つてえらい。

欣一。(負けずに)これはナイフだらう。

中村。そうぢや。えらい、えらい。(頭を撫ぜてやる。)

子供達、両手に振りかざしながら父と祖母の方へ飛んで來る。

母。いいものを貰つたねえ。(立つて、中村へ向つて)どうもありがとう。

中村。いえ、どうしまして。………皆さま、御變りも御座えませんで何より。

母。ありがとう。

石川。(同じく立つて)ありがとう。――君んとこもみんな丈夫だつてね。

中村。えゝ、お蔭さまで。

石川。さ、そこへ掛けてくれ給へ。よく早く出て來られたね。

中村。いや。もつと早く出なけりやアなりませんでしたが、つい手間取れましこ。

欣一。(父親の膝へすがつて)お父さん。僕にペン先きと紙を貸して頂戴。――書いて見たいから。

石川。あそこの机の上にあるからお使ひ。だが、お父さんの原稿へ書いちやアいけないよ。

欣一。うん、僕、新しい紙へ書くの。………そうだ。お母さんを寫生しやう!(よろこんで卓の方へ飛んでゆく。)

雪子。わたしは、お父さんの鉛筆を削つてあげますわ。(ナイフをかざしながら、つゞいて卓の方へ行く。)

石川。鉛筆の代りに、手を削つちやいけないよ。

雲子。大丈夫。

母。ほんとに、手を切つちやいけませんよ。(心配してついて行き、紙や鉛筆を手傳ふ。)

女中、そのあいだに茶を運んで來、めいめいに置いて去る。

石川。（茶や菓子をすすめながら、氣にかかるやうに）で、小作の人達の意嚮はどんなふうだね。

中村。（茶碗をすすりながら）それがです。いい鹽梅に、この頃あ大分みんな、旦那さまの氣もちがわかつて來たやうです。

石川。みんなへ共同に貰ふ、なんて事は、貰はないも同じこつた、なんては云はなくなつたかね。

中村。もうそんな事を云ふ者アなくなりました。ただでやる、ツちうお話が新聞へ出たもんですから、初めのうちア、みんなただ地面を分けて貰へるのか、と思つて、勝手な胸算用をしてゐたとこを、ただアただでも、別々に分けるぢやアねえつてわかつたもんですから、一時そんな馬鹿を云つた小作人もあつたわけです。でも、その後だんだん話して聞かせましたら、大抵飲み込んで來たやうです。何しろ、今まであんまり類のねえ事ですから、みんなが見當が附かなかつたも、無理アねえ事もねえです。

石川。別々になんぞやツたんぢやあ、切角僕が親ゆづりの財産を棄てても、又新しく私有財産を作つてやるだけのこツたからね。それぢやあ何にもならない。そりやあ、少うしやあ生活の足しになるか知れないが、そんな地面は、いづれ飲み潰すか、借金のかたに取られちまふか、先きが見えすぎてるからね。

中村。そうですとも。此の事の初めツから、私だけにやあ、あらまし旦那様の氣もちアわかつてました。

石川。全く、君がシツカリしてゐてくれるから、僕アどんなに賴みになるか知れない。ぢや、まア、みんなよろこんでゐてはくれるね。

中村。とてもよろこんで居ます。これからア、同じ働くにしても張合が違ふつて、云つて居ます。　　ですね、

まはりの農場の持主達ア、今でもやつぱりいい氣もちを持つてません。さういつちやあなんですが、旦那樣が餘計な眞似をなすつたからこつちへ飛ばツちりがかかつて、迷惑で困る、つてこぼしてゐます。そればつかりならですが自分達の小作人が此の頃急にぐづぐづ云ひ出した腹いせに、何とかして旦那樣の計畫をぶつこはして、蔭で笑つてやらうつちう腹で、表裏からいろいろこつちの小作人へ惡智慧を吹つ込むんでやり切れません。御承知のとほり、生憎また近所に惡い地主が揃つてますからな。中にやあ、農場が旦那樣の手から離れた曉にやあ、うめえ工合に根こそぎふんだくつてやらうと、今からいろいろ法律をしらべてゐる手合ひせえあります。つくづく世間は怖えもんだと、此の頃思ひます。

石川。（陰欝な調子で）さうかね。きつとさうだらうと、僕も思つてた。内憂外患こもごも到るつてとこだね。それつて云ふも、日本の法律が共有財産を認めてゐないからだ。少くとも、決して保護しやうとしてゐないからだ。實際かう云ふ事件にぶツつかつて見ると、如何に現在の法律ツてものが、私有財産制度を基礎にして作られてゐるかに、おどろかされるね。

中村。さうでせうな。

石川。例の、札幌大學の農業經濟の教室へ頼んでおいた組織案が、やつとせんだつて出來て屆いたがね。それを見ると、あの四百五十町歩の地面を小作組合の共有にするつて考へは、ほとんど出來ない相談らしい。共有にすることが出來なければ、財團法人にするか、組合組織にするかだがね。法人組織にすると、專制政治のやうなものになつて、とても共有的精神に訓練して貰ふことは出來ない。組合組織にすればしたで、また利益金の分配なんぞが馬鹿に面倒になつて、いろんな矛盾が起きて來るんだよ。そこを散々頭をしぼつて作つてくれたらしいんだが、やつぱり小作株

つてものを持たす事になるやうだよ。と、名儀は公有でも、私有財產見たやうなもんさ。僕は、なほもつと自分でも考へ、人にも考へて貰つて、自由な共產的な規約を作くるつもりだが、どんなに完全に行つても、とても限定の「共產農園」なんて名前はつけられそうもない。まあ精々「共存農園」とでも、曖昧に呼んでおくよりほか仕方ないらしい。

中村。法律つて、實際うるせえもんですなあ。

石川。こんな、餘計なうるさい物はない。ところが、今の社會で仕事をするにやあ、やつぱりそれに賴るより仕方ないんだから笑止だ。藝術家肌の人間に取つては、特別たまらない。かうしやうと思つたら、純粹な動機である限り、誰も、又何物も干涉する權利はない筈だ。僕が農場や財產を抛棄しやうと思つたら、ひと思ひに、思ひどほりにさせてくれたらどんなにいいだらう!。

中村。まつたくママにならねえ浮き世です。

石川。だが、こんな事あ愚痴で、君なぞから見たら、むしろおかしいかも知れないね。――いくら不滿足な結果にならうと僕はもうこれ以上農場を持つてはゐられない。僕は、決して農場の將來を樂觀しちやアゐないんだ。君の云ふとほり、まはりにやあ狼のやうな資本家が眼を剝いてる。小作人達は、訓練も豫備知識もない。だからいつかは又、チリチリバラバラになつて、資本家の手へ土地が入るかも知れないことを、……いや、きつと入ることを、僕あ覺悟してる。今のやうな、四方非共產的な社會ぢやあ、どんな××な生活を倒したつて×××。要するにただ一つの試驗さ。いや、僕の氣もちの滿足だけかも知れない。將來の事に考へないつもりだ。考へたら、今の×××××××××ない。

中村。（それまで、時々菓子を食べたり茶を喫んだりしてゐたが）そりやあ、この先きどうなるかア人間の考えにやあ及びませんが、私あ、この後もみんなと一緒にあそこで働かなけりやあならねえ身體ですから、始終仲間の衆にその話をして聞かせませう。まはりの地主や商人の手に乘せられりやあ、やつぱりみんなの損は目に見えてるですから。――今まで長えあいだ、散々御先代や旦那様の御世話になつて來た御禮に、私の力の及ぶ限りの事アするつもりです

石川。（質朴な調子によろこばされて）ありがとう。監督なんて云ふと、どこの農場でもみんな小作人苛めばツかりして、人間として隨分いやな者が多いんだが、君達親子のやうないい人を見つけて、開墾の初めつから二十何年間も世話を見て貰つて來たなあ、ほんとに僕達の幸福だつた。僕は心から君に御禮します。

中村。勿體ねえ。……今まで、ほかの農場に較べてどうにか無事にやつて來たも、みんな御先代や旦那様に思ひやりがあつたからのこんです。そうでなかつたら、とても私達もかうしちやアゐられません。

その時、又女中ドアから現れる。

女中。只今、片山さんがお見えになりました。

石川。（當惑したやうに）そう。――お通しして下さい。

女中會釋して去る。子供達、繪を置いて祖母に見せたりして片方ではしやいでゐたが、その時母親が寫生帖を持つて石川の方へ來る。

母。お父さん。御らんなさい。これがお母さんの顔ですつて。

石川。（受取つて）なるほど、これがお母さんか。うまい――と云ひたいが、一寸人間の顔より馬の顔見たいだね。

母。おやまあ、馬の顔だつて。

中村。どれ、どれ。（覗き込む。）

　石川見せる。

中村。（大聲で笑ひ出しながら）うむ。こりやあ面白い。そう云へば、うちの馬の顏に少うし似てゐる。坊さん、これがふんとにうまいだ。

雪子。おぢさん。それシャレ？

石川。おぢさんのシャレは、あんまりうまくないな。

　皆々哄笑する。――そこへ薄い、ピンク色の、氣の利いた派手な洋裝で、刺繡したオペラバックを持つた千代子が、ドアから現れる。輝く美貌。コケツトリイと眞面目の奇妙に調和した印象。片手に、咲き誇つた、そとが赤く中が白い、大輪の八重にちぢれた芍藥の何本かの花を、輕く白紙につつんで持つてゐる。一寸一座の團欒の空氣に不似合な、闖入者の恰好。默つて挨拶する。

石川。どうぞこつちへ。

千代子。お邪魔では御座いませんか？

石川。いや、どうぞ。

　千代子椅子の方へ進んで來、めいめいに一渡り挨拶する。

千代子。（又石川へ向つて）「翼」の校正で、どうも私にわからない所が御座いますもんですから……。

石川。これは、わざわざ御苦勞さまでした。

千代子。あの、これ（片手の花を指して）早咲きの、あまり奇麗なのがありましたから、（一寸云ひ淀んで）奥さんの御

寫眞のところへでも……。（紙のまゝ、母の方へテエブルの上へ出す。）

母。ありがとう御座います。（丁寧に紙を拂つて）まあ、何て美事な花でせう。（皆に見せる。）

石川。どうもありがとう。

雪子。大きな芍藥ね。

欣一。うちの奴は、まだ小つちやな蕾だけだよ。

千代子。あら、さうですか。

母。ぢや、早速活けて來ませう。（飾り棚の上の空いた花瓶を取つて、出て行かうとする。）

欣一。僕達も行かう。

雪子。行きませう。（二人飛びすがる。）

中村。ぢやあ私も、あつちで少し御隱居樣と話をさせて頂きませう。

母。さアいらつしやい。

石川。どうか、ゆつくり休んでくれ給へ。長い汽車で、さぞ疲れたらう。丁度時候もよし、ゆつくり泊つて遊んでつてくれ給へ。

中村。ありがとう御座えます。ふんとに、北海道たアえれえちがひです。あつちぢやあ、まだやつと根雪が解けたばつかしです。

母、石川。さうだらうねえ。

四人、相つれてドアから去る。女中が千代子の茶碗を持つて來、會話のあひだに置いて去る。

千代子。お客さまでしたのね。
石川。あなたの電話のあと來てくれたんです。
千代子。（疑ふやうに）そうでしたか。（ふと、テエブルの上の盤を見つけて）トロイカを掛けてらつしやいましたの？
石川。えゝ。
千代子。きツと、北海道のスウヴエニイルに御かけになつたんでせう。
石川。まアそんなところです。
千代子。わたしも、このラハマニノフは大好きですわ。だんだん、蹄や鈴の音の消えて行くとこなんか、如何にもロシア獨特で御座んすわね。
石川。あなたはレコオド通で、おまけに音樂が出來るんだから羨ましい。
千代子。あら、あんな事を——。
石川。いや、實際です。僕はまるで出來ないんだから。……僕はこの頃、藝術のなかで一番純粋なものは音樂ではないか、と思へて仕方ないんです。音樂の次は詩だと。
千代子。今度の「翼」にも、そんな事を御書きになりましてね。
石川。そうでした。
千代子。詩も拜見しましたわ。
石川。遠慮ない批評を聞かせて下さい。
千代子。わたしには、批評なんか出來ません。先生の物は何でも好きで、それにあんまり近すぎますから。……これよ

り、わたしに校正をさせて下さるんで、誰より先きによめるのがうれしくつて仕方ありません。

石川。(當惑したやうに話を變へて)あなたは實に校正が上手ですね。

千代子。えゝまあ、——社でもみんなさう云つてくれます。……でも先生。わたしあの藝術純粋論には少し意見がありましてよ。

石川。どんな？

千代子。もし、生意氣を云つてお怒りになつたら困りますけど……。

石川。そんな人間だとお思ひですか。

千代子。いゝえ、——ぢや申しませう。純粋つて云ふ言葉からして、如何にも潔癖な先生の仰りさうな言葉だと思ひましたわ。でも、さう云ふふうに、端的に、直覺的に、とばかり御考へになれば、おしまひには何にも書けなくおなりになりませんか。何か、今先生は藝術上で迷つてらつしやるやうな氣がしますわ。

石川。さう思へますか。

千代子。思ひます。藝術家には、何度もさう云ふ時機が來るさうですけれど、先生は——御免下さい、——今或る行きづまりへ來てらつしやいません？

石川。(感心して)そのとほりです。あなたは鋭い。

千代子。あら、當りまして？

石川。實際僕は苦しんでます。その爲めにも、早く今の生活を切り換へたいと考へてるんです。生活が中途へ引ツかかつてる爲め、藝術まで駄目になるつてことを、この頃痛感します。今まで、それほど突きつめて來なかつたうちは

よかつたんですが、もうから考へて來ちやツては、ほかに僕の藝術を救つてくれ
は隨分のんきな方だつたんですが、この頃それやこれやで、農場や財産の整理が捗らないのに少し焦立つてます
千代子。よくわかりますわ。
石川。一つには、こんな個人雜誌なぞ始めたのがいけないんですよ。いや、だから反つて早く行きづまりへ來てよかつた、とも云へるが。……「銀」も、やつぱりあなたの云ふ僕の純粹慾から考へついた事です。それが、出し始めてまだ何號にもならないのに、もう行きづまりへ來てゐるんだから滑稽だ。
千代子。でも、生活革命さへお濟ましになれば。
石川。それが、なかなか簡單に進まないんで困るんですよ。もつとも、今までの罰ですがね。いよいよ書けなくなれば、「銀」もやめるつもりです？
千代子。で、また一般の新聞雜誌へ御書きになります。
石川。それよりほか、生活の道はなくなるわけです。書く書かないは別として。——そこまで來て、初めて人並の生活がひらけるのかも知れませんね。これも今僕の迷ひです。
千代子。でも、そう云ふ悩みや迷ひの中から、きつと新しい生活がひらけますわ。たとへ「銀」が死んでも、トロイカが先生を運んで行きませう。ゴオゴリの小說の中の言葉のやうに。
石川。こう。昔僕を鍛えた北海道の自然が、この頃不思議と胸へ浮んで來ますよ。時々鬪ひに疲れて萎えそうになると、奇妙にあそこを思ひ出します。そして、なに負けるもんかつて氣になります。
その時ドアをあけて、雪子、さつきの芍藥を活けた花瓶を兩手に持つて入つて來る。

石川。（立ちあがつて受け取つてやりながら）御苦勞さま。重かつたらう。

雪子。いゝえ、

ニツコリ笑つて、ちよツと千代子の方を見て、又ドアから去る。石川、花瓶を卓上の寫眞の手前へ置き、又もとの座へ戻る。

千代子。（その樣子をじつと見て）先生は、ほんとにお子さんを可愛がつてらツしやいますのね。先生のやうなお父さんを持つたかたは、まつたく羨ましい氣がしますわ。

石川。母親がないと、不思議と父親がその分まで受け持つんですね。やつぱり自然法則でせう。

千代子。お祖母さまもいらつしやるんですから、やつぱり先生のやさしさからですわ。

石川。か知ら。

千代子。（やや躍氣になつて）ですとも。――奧さんがおなくなりになつてから、もう七年も經つのにまだ結婚なさらないのも、子供を繼母にかけるのが可愛想なからだ、ツていつか仰つたぢやありませんか。

石川。そんな親ごころは、誰しも當然でせう。

千代子。（唇を嚙んで）ぢや、もう一生結婚なさいません？

石川。しますとも。今迄だつて、いい人があれば幾らでも結婚してゐたとこです。殊にこれからは、もう子供達も大きくなつて、だんだん親の手から離れて行くから、親も益々氣らくになるわけです

千代子。先生には、澤山女の愛讀者や崇拜者やお知り合ひがいらつしやるんですから、いい人なら幾らでもありませうに。

石川。ところが、向ふがよすぎてこつちが釣り合はなかつたり、こつちが少しいいかと思つたり、仲々思ふやうに行か

なくて困ります。

千代子。そんな事を仰つて、やつぱり前の奥さんがお忘れになれないんでせう。……あんなに御病氣になつて、親切に看病なすつて、そのうへ坊ちやんが生れて間もなくおなくなりですもの。惹かされてらつしやるのも當り前ですわ。

石川。あなたまで、そんな事を云ふんですか。――なるほど、僕は邦子のことを忘れはしません。然し、まあ出來るだけの手は盡したんですし、今更それにこだはつてゐるもんですか。男の心つてものは、みんなかなりドンジュアンですよ。いや、全くドンジュアンかも知れません。なくなつた人の爲めに、いつまでも不自然な獨身を守るなんて事は、僕は人にも勸めず、自分でも決して主義にしてゐません。

千代子。でも、純潔と殉情が自然のやうな先生の場合には？

石川。純潔つて言葉を、それだけの言葉に取りたくはありません。

悩ましさうに、フイと立つて歩き出す。卓上の花の傍まで行つて、又戻つて來る。往復を繰り返す。千代子、その恰好をじつと見てゐる。

石川。（二度目に歸つて來て、立つたまま、思ひ切つた調子で）千代子さん。

千代子。はあ。

石川。「疑」もどうなるかわかりませんし、今まで御厚意にあまへてすつかり校正をやつて頂いてましたが、これからは、僕自分でやる事にします。

千代子、彼の顔を黙視する。

石川。今までの御情は述べ切れません。ありがとう御座んした。（軽く頭をさげる。）

千代子。先生。それは又なぜでせう？なぜ、「襲」をおやめになるならなるで、その時までやらせて頂けないんでせう？

石川。それはそれとして、これからは何もかも、自分の手でやつて行かうと考へます。

千代子。（立ちあがつて）そんなうそを仰つちやイヤです。

石川ギクリとして、長椅子の背に手を置いてうなだれる。

千代子。（朗かな笑ひ聲を立てゝ）うそを仰りつけないから、先生はほんとに下手ですわ。

石川。（赤面した顔をあげて）濟みません。——でも、あなたに校正をやめて頂く氣もちはうそぢやありません。

千代子。（狡く、嬌艶に滿ちて）それより、わたしから遠ざかりたい御氣もちがほんとでせう。

石川。（ハッキリした調子で）さうです。それがなぜかは聞かないで下さい。ただ、あなたのせいぢや決してありません。

千代子。僕が弱いからだ、と仰るんでせう。

石川。（再びたぢろいて）そのとほりです。あなたは實際怖いところがある。

千代子。わたしその事は、もう電話で御返事を伺つた時からわかつてましたわ。

石川默つて、長椅子のもとの座へ腰をおろす。千代子も、斜向ひにもとの椅子へ掛ける。

石川。（眼を伏せて）あなたの頭はいい。邦子などとは段ちがひだ。それに——。

千代子。まあ、何を仰るんですの？先生。

石川。丁度、あれのなくなつた年とあなたが同い年だから、比較したくなるんです。……正直なところ、さう云ふあなたに始終接近してゐるのは僕に取つてかなり危險です。僕は、一方ひどく弱いところのある人間です。あくまでも強い人間なら、どんな人が傍にゐたつて大丈夫です。が、そんな自信はありません。藝術家に取つて、さう云ふ自信が

賞めたものかどうかは別として。――又、僕が立派な藝術家かどうかは別問題として。……もし、どうかした拍子に、その持ち前の弱さに負けたらそれこそ大變です。あなたに取つても僕に取つても、取りかへしのつかない事になります。僕達二人の爲めに、今お附き合ひを斷るのが當然です。いや、失禮ですが是非斷らなければいけません。

千代子。（大膽に、又戯談らしく）ツてお仰るのは、わたしが結婚してゐながら誘惑するからで御座いますか？

石川。（たぢろいで）それも一つです。いや、一番大きな理由かも知れません。

千代子。そんなら、私は夫から離れても構ひません。

石川。（おどろかされて）何を仰るんです？――あなたは、今まで始終、片山さんを愛してゐるツて仰つてたぢやありませんか。又、御二人とも身寄りもなく、あいだに子供も御ありにならないから、片山さんもあなた一人をたよりに生きてらツしやる、ツて仰つてたぢやありませんか。

千代子。それはそうです。でも不思議と、わたしは一向片山を世間の夫のやうな氣がしませんの。……それより、もつとからプラトニックな、いい兄のやうな氣もちばかりしておりますの。片山の方でも、やつぱりそう云ふ氣もちだつて云つてますわ。それが、結婚の初めつから、九年も經つた今日まで同じ事なんですの。

石川（訝しそうに）そう云ふ夫婦關係もあるもんでせうか。

千代子。少しわけはちがひませうが、アナトオル フランスの物なぞにもそんなのが御座いませんか？

石川。あつたやうですね。――でも、それにしたところで、もしあなたが分れ話を持ち出したりなんかなさつたら、片山さんはきつと不承知でせう、たとへ承知されたにしても、ぢやあ、まるで片山さんを殺すやうなもんぢやありませんか。

千代子。いゝえ、そうも思ひませんわ。片山に、もし外にほんとのわたしの愛を求めてくれたら、きつとさつぱり[illegible]

つてくれませうと思ひますわ。(秘密をかくすやうに)それにはわけもありますの。………そして、分れたあとでも、きつと兄のやうに氣もちよく附き合つてくれると思ひますわ。淋しいことは、どうせ昔つから淋しい人ですから。

石川。(じつと彼女を眺めて)どうも、僕にはよくわかりません。御事情も知らず、片山さんも、ただあなたの御話で伺つて、さぞいい方だらうと思つてるきりですから。

千代子。でも、先生はさつき、奥さんの爲めに結婚を避けはなさらないつて仰いましたわね。

石川。云ひました。

千代子。そして、生きてらしつたあいだは、隨分奥さんを愛してらしつたんでせう?

石川。(やや當惑したやうに)まあ普通だけには愛してゐたつもりです

千代子。そんなら、わたしの氣もちだつてわかつて頂ける筈ですわ。

石川。(苦笑しながら)相變らず、あなたのディアレクチツクは鋭い。然し、現在生きてゐる人と、死んで塵になつた者とのあいだには、決して差別がないとは云へませんからね。

千代子。(半ば戯謔するやうに)先生は、今は宗教を信じてらつしやいませんからね。

石川。あなたは?

千代子。(微笑しながら)わたしも。

石川。あなたは、一方かなり淋しい、眞面目なことを待つてゐられながら、一方では隨分自由で奔放ですね。

千代子。さぞ變な女だと思つてらつしやるでせう。わたしも、時々自分ながらよく自分のわからない事がありますわ。無暗におシヤレをしたり、と思へば亂暴にやりつ放しをしたり、沈むかと思へば、すぐキヤツキヤツと浮き立つて見

たり、自分でもどうする事も出來ない時がありますわ。

石川。僕なぞとは又ちがつた、時代の悩みを受けてゐられるのかも知れませんね。

千代子。ちがつてるやうで、おんなじかも知れませんわ。

石川。(きつぱりした調子で)いや、ちがつてます。もしその點で僕の氣もちに合つて下されば、どんなにいゝか知れないが――。(再び立つて歩き出す。)

千代子、默つてその姿を凝視する。

――靜かに幕

第二幕

人物

石川謙造　四十六歳

片山千代子

野口新作　石川の友人、

女中

面會人大勢(そのうちに尾崎、林等)

時

五月下旬の午後（石川の面會日）

所　石川邸應接室

舞臺

西洋間。油繪の額一つ位。調度類は、大抵賣り立てに出した爲め無い。右手隅に大きな暖爐（マントルピース）が切つてあり、床（ゆか）一面に薄綠のカアペツトが敷きつめてある。中央に、緣にヅローンウワークした白い卓布（テーブルクロース）のかかつた大テエブル一つ。杜若を活けた中花瓶が、その眞ん中に置かれ、茶碗や菓子鉢や煙草入れ（シガレツトケース）やインキ壺やらが出てゐる。

石川、前幕と同じ和服姿で右手の椅子に腰かけ、大勢の面會人に應接してゐる。面會人は、官私の大學制服を着た學生五人ばかり。女學生三四人。新聞記者雜誌記者各一人。地方の文化團體幹事二人。その他、和服姿の男二人。

學生の一人。みんな、是非先生の御講演を聞きたいツて云つてます。どうか叶へてやツて頂けませんか。

石川。あツちこツち、もう學校では散々やらされましたから、何もお話する事がありません。

學生。おんなじお話でも結構です。

他の一人。農場の解放についての御考へを伺へないでせうか。

石川。それも、もう散々、（記者の方を向いて）記者諸君にしぼられたんです。

記者達微笑する。
初めの學生。僕達のほうは構ひません。
石川。僕のほうがいやです。
學生達。（當惑したやうに顔を見合はせて）
困つたな。
困つたねえ。
地方文化團體幹事の一人。わたくし共のほうへは、是非おいで願へませんでせうか。
石川。どうか勘辨してください。東京の諸君にさへ、かうしておことはりしてるんです。地方へなんぞ、今とても出かけてゆく暇がありません。
幹事。お暇のない事は重々承知しておりますが、切角總代に頼まれて、かうして出京しましたんですから——。
石川。どなたへも御免ねがつてるんですから、どうか——。
他の一人。（あきらめたやうに）ぢや、その代り、何か一つ記念に書いて頂けませんでせうか。
石川。僕のやうな悪筆は、悪紀念になるツきり能がありません。
幹事。どう致しまして……。
石川。揮毫も、もう尠くとも當分、どちらへも絶對御免蒙る決心です。
女學生の一人。（恐る々々）先生。わたくしの愛讀しております先生の御本に、一筆御署名下さいませんでせうか。（膝のうへの赤い風呂敷包みを無意識に解きはじめる。）

石川。（當惑して）弱るなあ。どうもそうあらゆるかたから攻められたんぢや。

女學生。ホンの、ホンの一寸、ペンでゞも走り書きして頂ければ結構で御座います。

友だち。（傍から）このかたは、ほんとに先生の物は何でもよんでらツしやいます。私達の仲間でも評判の、先生の崇拜者で御座います。

石川。（顔を赤くして）穴へ入りたいやうです。僕なぞの物を御よみになツたら、反つて悪い影響がありはしないかと怖れます。

前の女學生。（頑とした調子で）いゝえ、いゝえ。

座の人達、みなその様子に微笑する。石川も思はず顔を崩す。

女學生。（その様子を窺ひ見て）あらツ。（いそいで袂で顔をかくして友達の肩へ押しつける。）

雜誌記者。全く先生もかなひませんね。そういろんな注文を持ち出されちやあ。

石川。（決心して）切角持つておいでになつたんなら、ぢやあ署名しませう。（活花へ目を移して）杜若の御禮かたがた。（片手を出す。）

女學生。まアうれしい！（驚喜して、いそいで包みの中からフランス風假綴の本を二册出す。）

石川。どうか、一册だけにして下さいませんか。

女學生ひどく迷つて、やがて一册を持つてゆく。石川ペンを取つて署名する。

他の學生達。（その様子を羨ましそうに眺めて云ひ合ふ。）わたしも書いて頂きたかつたわ。

僕達も持つて來ればよかつたな。

石川。どうぞ。（本を女學生に渡す。）

女學生。ありがとう御座いました。――まあ何てうれしいでせう。（雀躍してもとの席へ歸る。）

友達。ほんとに羨ましいわ。（引ッ張り合つて署名を眺める。）

前の友だち。あなた、私に御禮仰いよ。

女學生。いくらでも云ふわ。ありがとう、ありがとう……。（頭をさげる。）

皆又笑ひ出す。

新聞記者。先生。面會日にはどの位いつもやつて來ます？

石川。お客さんですか？

新聞記者。えゝ。

石川。平均四五十人は見えます。

記者。その話を一寸聞いておいでになつたんぢや、仲々大へんでせう。

石川。隨分疲れます。夕方になると、もういつでもグッタリします。――政治家や實業家になりやあ、それッ位の人に會ふなあ毎日の事でせうが、僕達のやうに、藝術でもたのしんでゐやうッて種類の人間に取ッちやあ、全く大ごとです。

記者。さうでせうなあ。それに、藝術家のところの訪問者は種類もちがひますし。

地方幹事。（立つて）どうも、長いこと御邪魔しました。では、又いつかお暇の時おねがひするとして、殘念ですが今度はあきらめます。

石川。どうもすみません。

幹事。では御機嫌よろしう。(二人頭をさげる。)
石川。さようなら
二人ドアから出て行く。二人の學生も立たうとしたが、囁き合つて又腰を落ちつける。
その時、默つてゐた大學生の一人急に口を切る。
學生。一つ質問させて頂けませんか?
石川。どうぞ。
學生。先生が財產や農場をお棄てになるのは、プロレタリアになる爲めの行動ですか。
石川。(惱ましげな表情になりながら)最初はそのつもりでした。
學生。(訝しげに)と、今はその御つもりぢやないんですか。
石川。今も、出來る事ならそうなりたいと思つてます。が、なれるかどうかはわかりません。いや、此の頃は、とてもなれそうもない氣がします
皆緊張して耳を澄ます。
學生。どうして、なれそうもないと御考へですか。
石川。それは、今一口には云へません。——が主な點を云へば、今までの自分の階級的地位に對する認識です。考へれば考へるほど、階級的差別ツて奴は、人間のすべての精神の方面に大きな影響を及ぼしてます。一ぺん或る階級に生れつけば、容易な事ではその階級の考へ方や感じ方から拔け出られるもんぢやありません。考へ方はとにかく、無意識的な感じ方に至つては、おどろくべき力を持つてますよ。殊に、敏感な發達の途中の少年時代や青年時代を、ずつ

とその階級の中に生きて來た者に取つては、その力はほとんど不可抗力です、いくら退治したつもりでも、よく見れば反つて自分の手を怪我してゐる位が、關の山です。

學生。と、財産拋棄位では、とても自分のブルジョア根性から解脱は出來ない、ツて仰るんですか。

石川。簡單に云つて了へばさうです。嚴密に、又正直に云つて、僕の全精神がブルジョア根性かどうかは云ひ切れませんが。

連れの學生。先生は、決してブルジョア根性なんかではないと思ひます。そんなら、どうしてあんなにプロレタリアの問題に動かされ、又お惱みになるんでせう？それが何よりの證據です。

石川。何よりとは云へないが、一つの證據にはなるか知れません。然し、プロレタリアに共鳴したり同情する事と、プロレタリアと同じに感じたり考へたりすると云ふ事とは、いきなり同じとは云へませんからね。

前の學生。（あとの學生へ向つて）そりやあ、大いにちがつてると僕あ思ふな。

あとの學生。だが、所謂ブルジョア根性とも云へないだらう。

前の學生。云へる事もある。たとへば、慈善だの協調だのつて氣もちは。

あとの學生。然し、先生の場合はさうぢやない事はわかり切つてるぢやないか。

石川（微笑して）すくなくとも、僕は決してブルジョア組織や文化の、肯定者や保持者ではないつもりです。いや、その否定者で、又その崩壊を固く信じて疑はない者です。崩壊はただ時の問題です。そして否定者なら、出來るだけその崩壊を早く來させるやうに願ひ、又努力するのが當然でせう。僕は、ただこれだけの作用をする譯です。一疋の蟻の力は、てんで取るにも足りないのはわかり切つてますが、でもどれほどかの力にならないとは云へません。僕は、歴

史的必然の中の、ただそれだけの任務で淋しく滿足するつもりです。

前の學生。ぢや、財産を抛棄なさつたのも、云はばその資本組織の自己崩壞作用ですか。

石川。（苦笑して）或はそんな事かも知れません。

前の學生。大へん追窮するやうで失禮ですが、ぢや先生は、御自分ではどう考へてそう云ふ事をなさるんです？財産を棄てたとこで、どうせプロレタリアになれない事はわかつてらつしやるとすれば。

石川。僕の氣もちとしては、たとへ結果はどうであれ、もう此のうへ親讓りの財産を持つてはゐられなくなつたんです。そんな事をしてゐれば、自分の精神も生活も窒息する。一生の仕事のつもりの藝術も行きづまりになる、つて事が、あんまりハツキりわかつて來たからです。

あとの學生。それは、即ちプロレタリア意識にほんとに眼ざめてらしつた事ぢやないんですか。

石川。（淋しく笑つて）であれば、こんな愉快な事はありませんが。――僕が、も少し自分の心を反省する癖をやめられたら、きつとそう云へるでせうが。……然し、社會意識に眼ざめたとは云へますね。そして、そいつに眼ざめれば眼ざめるほど、僕の階級的地位に對する不安も強くなつて來ます。――ブルジョア階級の根性とは云へないまでも、とにかく知識階級の根性からは容易に脱けられません。誰も脱けられないとは決して云ひません。が、すくなくも僕だけは、今までのいろんな事情から云つて、一生かかつても出來るかどうかわかりません。これは非常に悲しい事です。又殘念な事だ。が、事實である限り、無視するわけにはゆきません。

あとの學生。知識階級つてものは、そんなに所謂プロレタリアと矛盾するもんでせうか。

石川。絶對に矛盾するとは云へません。が、差別のある事は事實です。知識階級は、プロレタリア×××××××××

×者にもなれます。自分それだけの事は出來ます。が、どんなに自惚れても、×××××××するのはプロレタリアです。新しい文化を作つてゆく者もプロレタリアです。又それであつてこそ、初めて獨特のプロレタリア文化と云へるでせう。

前の學生。と、先生の御考へは、大分悲觀的ですね。

石川。そうかも知れません。自分に關してはね。

あとの學生。先生の反省と謙遜の氣もちはよくわかりますけれど、そんなふうに御考へになるのは、あんまり消極的ぢやないでせうか。

石川。自分でも、もつと樂觀的に、もつと積極的に、もつと勇敢になりたくて仕方ないんです。然し、どんな場合にもまづ「おのれを知れ」です。僕は自分を見つめる限り、これ以上の事は云へません。

新聞記者。ぢや、今まで僕達や……一般の世間が先生の氣もちを想像してゐたのとは、大分ちがつてますた。

石川。（又淋しく笑つて）そうでせうか。――かも知れません。

雜誌記者。先生。それを、一つ僕の方の雜誌へ載せて頂けませんか。

石川。僕は、自分の文章は「實」へだけ發表する事にしてゐますから………。

雜誌記者。それはよくわかつてます。ですが、談話筆記として書かせて下さいませんか。

石川。あなたがおまとめになるんですか。

記者。えゝ、……そして、あとで持つてまゐりますから、一つ御面倒でも見て頂けませんかな。

石川。（當惑したやうに）困つたな。

記者。どうぞ御ねがひします。（いきなり立つて御辭儀する。）

石川。咳唾珠をなす、ツて云ふが、現代の記者諸君にかかつては何でもかんでも記事になつて了ふんだからかなはない。――（思ひきつたやうに）よう御座んす。

記者。ありがたう御座います。ぢや、これから早速歸つて書きませう。――（新聞記者へ向つて）君はまだゐるか？

新聞記者。いや、ぢや僕も失禮しやう。（立つて石川の方へ向いて）御邪魔しました。

石川。失禮しました。

それに促されたやうに、女學生組と男學生の組が立つ。

女學生達。どうもありがとう御座いました。

男學生達。ありがとう御座いました。

石川。御免下さい。

みなゾロゾロと立つて、ドアから出てゆく。石川、疲れてガツカリしたやうな様子でそれを見送る。

石川。（やがてあとに殘つた、さツきから何も云はずに客煙草を吹かしてゐた二人連れへ向つて）失禮ですが、あなたがたは何の御用事ですか。

男の中の一人。べつに大した用でもありませんが、少しお願ひしたい事があるんです。

石川。何ですか。

男。實は、僕達無政府主義者の仲間で、宣傳のパンフレットを出したいと思つてるんです。――が、例の資金がまるで缺乏してゐるんで、少し寄附して頂きたいと思ふんです。

石川。(テエブルの上の何十枚かの名刺を探してから)あなたは何と仰つたんでしたツけ?

男。尾崎銀太郎ッて云ふんです。

傍の相棒。僕、林周一です。

石川。そうですか。(一寸頭をさげて)初めて伺ふ御名前ですが、いつ頃ッからそんな運動をしてらッしやるんです?

尾崎。二三年前からです。

石川。その前は?

尾崎。林。(昂然として聲を揃へて)勞働者です。

石川。そう? 失禮ですが、どうしてそれをおやめになつたんですか?

尾崎。見す見ず資本家に搾取されるのが馬鹿らしくなつたからです。

石川。で、無政府主義者におなりになつたわけですね。

尾崎。そうです。

林。(あとから)働きやあ働くだけ、ただ資本家を肥やしてやるやうなもんですからね。

石川。なるほど。――然し今の世の中ぢやあ、そう云ふ潔癖はとほらなかアありませんか。

尾崎。いくら通らなくッても、一旦自覺したからにやあ、僕達はそんな馬鹿々々しさや屈辱は忍べません。

石川。が、食ふ爲めに働かれないとすると、くらしの方は?

尾崎。(押し太い調子で)それは、あなたがたのやうな同志から扶助して貰はなくちやアいけません。

石川。(微笑して)と、あなたに僕にパンフレットの金を出せッて云ふんですか、……しかしお金を取られるつて云になるん

ですか。

尾崎。（同じく微笑して）どツちも願ひたいです。

林。（その尾について）第一にパンフレットの金。それからくらしの金。

石川。ふむ。いいお考へですね。が、僕から御貰ひになるにしたところで、やつぱり一度資本家の手をとほつて來た金ぢアありませんか。

林。ブルジョアの餘計な金は、僕等は出來るだけ取り返す權利がある。

尾崎。（彼を制して）餘計な事を云ふな。――（石川へ向つて）然し、僕等はあなたから同志として貰ふんです。同志の金は潔白です。

石川。なるほど。然し僕はあなたの同志で、又、あなたは僕の同志でせうか？

尾崎。これはおかしい。あなたは同じ無政府主義者でせう。

石川。さうは云へるか知れません。

尾崎。そんなら立派に同志でせう。

石川。けれども、無政府主義者と云ふ言葉は、決してただの合言葉であつちやアならないと僕は想ひます。どんな人間でも、僕は無政府主義者だ、とだけは云へるでせう。然し、そんな言葉には三文の價値もありません。

尾崎。（やや景色ばんで）ぢやあ、あなたは僕等をまがひ者だと仰るんですか？

石川。まがひ者か、さうでないか、何しろ今日初めてお目にかかつたりお名前を伺つたりしただけですから………。

尾崎。（言葉を遮つて、荒々しく）君は、世間的虚名で人を見分けやうつて云ふんだね。

石川。決して。……僕はただ、藪から棒に同志だ、同志だ、つて云はれるのに當惑するだけです。
林。（こらえかねたやうに）君は、何とかして金を出すまい出すまい、と思つて、いろんな小理屈をつけて逃げ廻つてるんだ。おれにやアすつかりわかつてる。

石川、不快に堪えないやうに、默つて横（看客の方）を向く。

尾崎。（言葉を柔らげて）だが石川さん。あなたは今財産を整理するとか何とかつて、大分新聞なぞに廣告してるぢやアありませんか
林。（傍から）そうよ。ウンと馬鹿記者どもに太鼓を叩かせて、うめえ儲けをしてゐるぢやアねえか。
尾崎。（再び彼を制す）君は默つてろ。（石川へ向つて）世間ぢやあ、まアそんなふうに考へてる者もあります。僕達は、決してあなたが賣名の爲めにそう云ふ事をなさるたア思ひませんが、とにかく財産をお棄てになるなら、つまらない所へ寄附したりするより、少しでも僕達の運動を助けて下さるといいと思ふんだが。
石川。（彼の顔を凝視して）決して、つまらない所へ寄附してゐるとは思ひません。勞働學校の基本金やら、ＲＫ會の運動資金やら、セツツルメントの援助やら、そんな金はみんな無駄でせうか。
尾崎。いや、決してそうは云ひません。だが、そう云ふ金のホンの一部分を、僕達の方へ分けて頂きたいんだ。
石川。（苦痛を面にたたへて）僕は、正直なところ、少しばかりの金にこだわりたかアありません。又そんな人間でもないつもりです。それに元來弱氣な性質（たち）です。金が要るから、つて縋られると、見す見す馬鹿げた助力だと思ひながら、今までいくら出して來たか知れません。そう云つちやあ何ですか、面會日ごとに、あなたがたのやうなかたがどつさり來られるんです。面會の半分はこうだと云へます。この十、騎の人を、誰がほんとにどれだけ要るんだね、又どん

なに有用な金だか、神さまなら知らず、人間の、然も見聞の淺い僕にわかりッこありません。執ッこく云はれれば、それだけでもう根氣負けがして、早く面倒な問答から逃れたいばッかりに、大抵、……十のうちの七八までは承知して來ました。ところがいろいろあとから樣子を見ると、出した金の大部分ははまづ無駄のやうです。中には、僕の家を、いや此の室を出ると一緒に、赤い舌をペロリ出す人も澤山あるふうです。そう云ふ人が又友だちを誘つてやつて來る。ひどいのは、僕から無理矢理貰つて行きながら、その金で或は蔭で、或はおほッぴらに、僕をやッつけてる人さへあります。……どんなに人から馬鹿にされたところで、構ひません、が、自分の馬鹿らしさと煩さには、つくづく愛想が盡きます。そう云ふ煩ひから自由になりたい爲めにも、僕は——正直なところ——今度の財産拋棄の決心を固めたんです。そんな餘計な物があるからの利子だ。もと金さへ奇麗さッぱり棄てて了へばそんな苦痛からも逃れられる。いや、すつかりらくになれないまでも、尠くとも今見たいな事はないだらう、と考へたんです。ところが、世の中の事はなかなか思ふやうにやあ行かないもんで、もう夙に片づいてゐる筈の此の家でさへ、不景氣で未だに賣れず、借家へ移つて新しい簡易な生活を始める事も出來ず、相變らずかうして諸君の御訪問を受けてゐる次第です。

林（長い告白に倦き々々して、不作法に）何が何だか知らねえが、おれ達にや金がねえ、あなたにやあ金がある、とわかッてたら、ほんとの無政府主義者だつたら、いくらでも融通するが當然だらうがなあ。

石川。理屈はそうだ。が、世の中は、なかなか理屈どほりにや行きません。（又尾崎へ向つて）仕方がないから、僕は近頃かう決心してるんです。自分の心に染まない金は決して出さないと。——言葉を變へれば、自分に確信の出來ない金は一文でもあげない、ッてです。確信て云つたところで、實際の知識やら、藝術家的直覺やら、まあ云はば自分勝手に定めるんですが。

尾崎。で、僕達に對しては、その確信の寒暖計はどうです？

石川。（やや躊躇してから）残念ですが、どうもあんまり高く水銀があがりません

その時、ドァが少しあきかゝつて、チラと女の着物が見える。入らうとして躊躇してゐる樣子。が、誰も氣づかない。

林。（尾崎に）くれねえつて云ふのかい？

尾崎。うん。（立ちあがつて、石川へ向つて荒い調子で）いろんな事を云つて、よくもおれ達を侮辱したね。今日の君を、よく覺えてるがいゝ。

石川。もし、あなたがたに失禮な言葉を使つたのなら、いくらでも御詫びします。

尾崎。今になつて卑怯云ふな。

石川。これが卑怯だらうか。

林。腰拔け野郎！

石川苦笑してじつと見てゐる。

林。（虚勢を示して）一つ喰はせてやるか！

その時、びつくりしたやうにドァをあけて、一見千代子が踏み込む。今日は和服。やつぱりかなり派手な服裝。音はしない。石川氣がついて彼女を見る。

尾崎。よせよせ。こんな侮辱者をなぐつたつて仕樣がねえ。それより、あとで目に物見せてやるから。――（石川へ向つて）さよなら。

石川。（靜かに）さやうなら。

林。ぢやあ此の次まで貸しといてやる。忘れるな！

二人一緒にドアの方へ行きかかる。その時、初めて千代子に氣がつく。二人やや面喰つたやうに立ち留る。

尾崎。（やがて）ようブルジョア婦人！こんちは！

千代子默つて傍へ寄る。

林。（その樣子を見て）何てえ澄ましてやアがるんだ。チエツ、おれ達にやあ御挨拶なさるも勿體ねえんだそうだ。何の川だい？え、おい、あいつに？

千代子怒りに滿ちてキツと見る。一種精神的な美。

尾崎。嫉くな林！（千代子へ向つて）どうぞ御ゆつくり。（ドアから去る。）

林。（まだ未練そうに振り返りながら）畜生ツ！（去る）

千代子、あとを見送つて、ドアを閉めて靜かに石川へ向つて頭をさげる。

石川。（傍の椅子を指して、ゆつくりした口調で）どうぞ。

千代子默つて會釋してそつちへ行く。その時ドアがあいて、又女中が名刺を持つて入つて來る。

女中。あの、かう云ふかたが又御二人お見えになりました。

石川。（よみかける）暴力對抗聯盟幹部……（再び顏をくもらせて）大へん申しわけありませんが、今日はもう疲れておりますから、どうか御容赦下さい、ツて云つて下さい。

女中。かしこまりました。（去る。）

千代子。まあ何ていろんな人が來るんでせう。
石川。どうせこれも金です。(半ば自嘲するやうに)まるで、僕を銀行の監査役か貯金局の役人のつもりでゐるんです。
千代子。(同感するやうに)ほんとですわ。(再び怒りを感じ返したやうに)そればかりか、あんな失禮な。
石川。あなたまで亂暴な言葉をかけられて、ほんとにお氣の毒でしたね。
千代子。いゝえ。わたしなんぞは云はれるのが當り前かも知れません。けれど先生へ向つて……(キッとした調子で)なぐるとか何とか云つた時は、わたし思はず、自分が罵られたやうにカッとしましたわ。もし先生に失禮な眞似でもしやうとしたら、默つてはゐないつもりでしたわ。
石川。ありがとう。(笑ひながら)然しあなたに何か云はれたら、きつと餘計困つたでせう。
千代子。(眞面目に)わたしこれでも、腕力ならあんな人達に負けない自信がありましてよ。
石川。ほん氣ですか。
千代子。えゝ。わたし、二三年婦人體術を習つたことがありますの。
石川。(ややおどろいたやうに)ほう。あなたは、まツたくいろんな事が出來ますね。
千代子。(氣もちを變へたやうに)一體先生がよくないんですわ。あんな似而非主義者の、ごろつきや強請のやうな者に、いくらでも相手になつておやりになるから、きりもなくつけあがつて來るんですわ。
石川。(苦笑して)僕もさう思はないことはない。——然し、僕は性質として、無暗に人を疑つたり傷つけたりすることは大嫌ひです。そのくせ、人一倍疑つたり傷つけたりしてゐるのかも知れませんがね……そして、何度引つかけられても裏切られても、ほんとに[illegible]ない人[illegible]には[illegible]ないことが必要です。こんな人に、[illegible]少しにきこつ

こますが、でも無いとは決して云へません。ゐるとすれば、そして力になれるとすれば、ムザムザその人の運命に狂はせたくありません。その爲めには、外の苦痛もやむを得ない氣さへします。人間の力で、その苦痛から逃れられそ方法がないとすれば。

その時、又女中が入つて來る。石川達そつちを見る。

女中。あの、おことはり申したんですけれど、是非一目でもお目にかかりたいつて仰います。面會日だそうだからわざわざやつて來たんだ、それを會はないなんて不都合だつて、こはい權幕で云つてらつしやいます。

石川。（やや腹立つた調子で）だから、丁寧に詫てるんぢやないか。（女中のおそれてゐる様子を見て、急に思ひ返したやうに）何と仰つても、疲れてお目にかかれません、御用を云つて下されば、あとで御返事は差しあげますから、つて、氣の毒だがもう一度云つて下さい。

女中。はい。（去る。）

石川。（あとを見送つて）女中まで可愛想な。

千代子。（よろこんで）面會日だつて何だつて、そう云ふ風に、これからは、會ひたくないかたはドシドシおことはりなさいましよ。

石川。（苦笑して）そうなれば、僕は今誰にも會ひたくない。僕は、もう誰にも會はない事にしやうかと時々思ふんです。

千代子凝然として彼を見る。

石川。僕は、今ひどく厭人的（ミサンスロピック）になつてます。きつと疲れてるからでせう。（目を伏せる。）

千代子。（同感したやうに）全く、何もかもひとりで切り廻してらつしやるんでは、お疲れになるのも無理ありませんわ。おまけに、そんなデリケエトな氣もちで人に對してゐらしつたんでは。

石川。なに、もう少し强くさへあればいいんですが。——（無理に笑はうとしながら）あなた一人でさへ、僕の思ふやうになつてはくれないんですからね。

千代子。（强い調子で）どんなに先生が仰つたつて、嫌はれたつて、わたし決して離れませんわ。

石川。あなたが離れなければ、僕の方から逃げなければいけない。正直なところ、あなたも今僕には煩はしさです。僕はあなたを尊敬してゐる。好いてもゐます。が、それと一緒に嫌つてます。輕蔑さへもしてゐます。——そう云ふいろんな氣もちがこんぐらかつて、隨分な僕の煩ひになつてゐます。嫌ひなところでさへ、一種の魅力になつてるんだからかなはない。

千代子。（一種眞面目な調子で）それはわたしの罪ばかりとは云へませんわ。先生だつて、强い……あんまり强い魅力を持つてらつしやるんですもの。勿論、先生の魅力の中には、わたしに嫌ひなものは一つもありませんけれど。——わたしだつて、どれだけ先生から離れやうと、……自分の爲めばかりでなく、先生の御氣もちの爲めにも……今迄して見たかわかりませんわ。

石川。默つてテエブルに頰杖を突いてゐる。——その時、ドアをあけて又女中が入つて來る。

女中。やつとお歸りになりましたが、何か御書きになつて、おやアこれを御渡ししてくれ。誰にも見せちやアいけない、つて仰いました。（手に持つた、封をした西洋封筒を石川へ渡す）

石川。ありがとう。もう今日は、[illegible]

女中。はい。（去る。）

石川。（封を切つて、鉛筆の走り書きを默讀する）馬鹿な――。（ビリビリと引き裂いて、テエブルの上へ投げ出す。）

千代子。（心配さうに）何で御座いますツて？

石川。なに、やつぱり金ですよ。（口をつぐまうとしたが）明後日までに無條件で二千圓くれ、その使ひ途は、今或る計畫の爲めだときり云へない、だが、やがて大事件として知つて貰へるだらう、……つて云つた文句です。

千代子。まあ。――で、ちつとも御存じないかた？

石川。無論。

千代子。そんな强請がましい事を云つて、餘計な面倒を先生にお掛けするなんて、何て憎らしい人達でせう。

石川。その憎らしい人達が、今日もこれで二十人ばかり來ました。

千代子。まあ。――それだけでも隨分お疲れでせう。

石川。疲れますとも、一番疲れるかも知れない。おまけに憂鬱になる。面會日のあとでは、いつもきまつて二日ばかりも憂鬱がつづくんです。當分、まつたくニヒリスチツクになりますよ。こんなくだらんことで、いくら馴れても馴れても、どんなに僕の人生を見る目を暗くするか知れない。――（急に決心したやうに）移る！　きつと移る！

千代子。（おどろかされて）移る？！

石川。貧れやうが貧れまいが、もう今月限りこの家を出ます。……明日からでも、大いそぎで小さな借家を探す。さうだ、そして氣持ちを切換へるんだ！（急にクラクラと眩暈を感じたやうに、頭を兩手で押へて仰向くと、バタリと腕を下にテーブルの上へ突つ伏す。）

千代子びつくりして、いそいで椅子から立つて傍へ寄る。

千代子。どうなすつて？　先生！

返事がない。

千代子。先生！

無言。

彼女一瞬時胸へ兩手を當てたが、思ひついたやうに、すぐ袂から柔かい薄紅色の絹ハンケチを取り出して、茶瓶の冷えた茶を注ぎかけて、ちよつとしぼつて、石川の前頭部へ押しつける。そして、彼の身体を横から抱きかかへるやうにしながら、又「先生！」

石川。（やがて、氣力を引き立てるやうに唸る）うむ！

千代子。お醫者さんをお呼びしませうか。

石川。（なほ兩手で顔を押へながら）いや、結構です。――もういいんです。

千代子。（彼の額をなほハンケチで押へながら）大丈夫でして？（兩手の下をのぞき込むやうに、顔を彼の顔へ觸れるほど近づける。）

石川。（靜かに）大丈夫。

やがて兩手を離す。そして、眠りから覺めたやうな眼を、心配さうにしてゐる彼女の眼とピタリ見合はせる。十秒間ばかり。――どちらからともなく顔が近寄つて、ぴたり唇を合はせる。千代子につづいて、石川の方からも××

××××××××××××

三十秒ばかり。……石川、急に×××××を離す。

千代子。（なほ縋りつきながら、顔を曲げてじッと石川の顔を覗き込んで）わたし、わたし、……ほんとに××××××××××××××ひませんわ。

石川。（苦しさうな聲で）濟みません。ゆるして下さい。（彼女を押し遠ざけやうとする。）

千代子。何が濟まないんです？　わたしこそ、どんなに××××××××××××××××××××××××か、る。」

石川思はず抱きとめる。

千代子。（顔をあげて）先生！　××××××××（歎願するやうな眼つき。）

石川しばらくその眼を見返して、×××××××××××××××××。彼女、××のあまり××とする。又十秒間ばかり。

その時ドアをコツコツ叩く音がして、

聲。おい石川君！　ゐるか？

石川びつくりして彼女の身體を押し離す。彼女やむを得ず離れる。

石川。（やや嗄れ聲で）誰だ？

聲。野口だよ。入つてもいいか。

石川。（いそいで彼女に眼くばせして）ああ、いい。

野口、ドアをあけて現れる。背かなり高く、瘦せながら肩の張つた、どこかゴツゴツした恰好。頑固さうな顔。和

服姿。

野口。やあ、誰もゐないのかと思つたら、まだゐたのか。

石川。(當惑したやうに瞬きながら) ああ。

野口。女中にきいたら、もう今月は誰にも會はんとかツて云つてたが、僕なら多分よからうと思つて――ハツ、ハツ、ハツ、ハツ。(高い聲で笑ふ。)

石川。無論差し支へない。

野口。さうか。――や、せんだつてぢうは、たびたび見舞ひに來て貰つてありがとう。

(頭をさげる。)

石川。いや。……隨分長くかかつたね。どうだね、退院後の工合は?

野口。うん、大いにいい。今日は、まあ足試しかたがたやツて來た。

石川。そいつは結構だ。――(少し離れて椅子へ掛けた千代子の方へ眼を向けて) ちよツと紹介して置かう。これは、東京新聞の學藝部の片山千代子さんだ。

野口。ああさうか。「襲」の校正を、いつも君が賴んでゐるとかツて婦人か。

石川。さうだ。(千代子へ向つて) 友人の野口です。

千代子。始終先生から御話を伺つて、いつか是非お目にかかりたく思つておりました。

野口。や。――あんまりお目にかかる價値のない人間です。ハツハツハツ。

石川。まア かけたまへ。

野口。うん。(千代子とのあいだへ腰をおろす。その時。ふと足もとのハンケチに氣がつく。)おや。(腰をかがめて拾ふ。)

千代子、思はず石川の顔を見る。石川も眼を合はす。

野口。(拾ひあげて)何だ、馬鹿に香水くさいハンケチだな。(ふとその端の縫ひ取りに目をつける。)

石川。(思ひ切つて)それは千代子さんのハンケチだ。

野口。ア、そうか、これは失禮。(そのまま彼女の方へやる。)

千代子。濟みません。(默つたまま、たたんで袂に入れやうとする。)

石川。(辯解するやうに)今、僕があんまり疲れて眩暈を起したんで、千代子さんがそれで頭を冷やしてくれたんだ。

野口。どうしてそんなに疲れたんだ?例の面會人攻めでか?

石川。そうだ。

野口。いつかも君はそんな事があつたね。……(揶揄するやうに)財産を整理するの何のつて事をきいて、近ごろ餘計大勢押しかけて來るんだらう。

石川。そのとほりだ。

野口。君は一たい馬鹿正直すぎる。一つは自業自得さ。

石川。(おとなしく)そうかも知れない。

野口。(千代子の方をジロリと見て)僕あ又、あのハンケチは、誰か君の崇拜者の女でも君に贈つたのかと思つた。

石川。(不審そうに)どうして?

野口。IKなんて縫ひ取りがしてあつたからさ。(又千代子の方を見る。)

彼女思はずうなだれて唇を噛む。石川困つた樣子。

野口。いや、これは失敬。どうも僕は生れつきの野人で、すこぶる不遠慮な質ですから惡しからず。ハツハツハツハツ。

石川。（場をつくらうやうに）まつたく、君の不遠慮と毒舌は、昔つから有名すぎるからねえ。

野口。だから、君の外には古い友人は一人もないんさ。

石川。僕に取つても一番古い友人だから不思議だ。

野口。（話題を轉換させて）ところで君。「毀」のこの次の原稿はかなり出來たかね。

石川。いや、まだまるで出來てない。

野口。（詰問するやうに）もう月末ぢやアないか。そんな事を云つてると、又〆切りに間に合はなくなるぞ。

石川。間に合はなくても仕方ない。

野口。（強く）戯談ぢやない。君は仕方なくてもいいか知れないが、發行者の僕はどうする？

石川。いよいよ書けなけりやあ、休刊して貰ふつもりだ。

野口。そんなにのんきに構え込まれちやあ困るよ。僕あ………。

石川。決してのんきぢやない。

野口。それはそうか知れんが。———創作はとにかく、感想位なら何とか書けるだらうぢやないか。

石川。書けるだけは書いて見る。（急に言葉を變へて）それよか君。どこか至急借家を見つけてくれないか。

野口。借家？

石川。うん。僕はもう、出來るなら明日からでもここを出たい。とにかく新しい生活を初めたいんだ。自分でも無[illegible]

すが、君の店の方に手が空いてたら、一つ骨折つてくれ。

野口。よし。ぢやあ探させる。

千代子。(その時立ちあがつて)あの、失禮ですけれど、わたし、これでお暇させて頂きます。

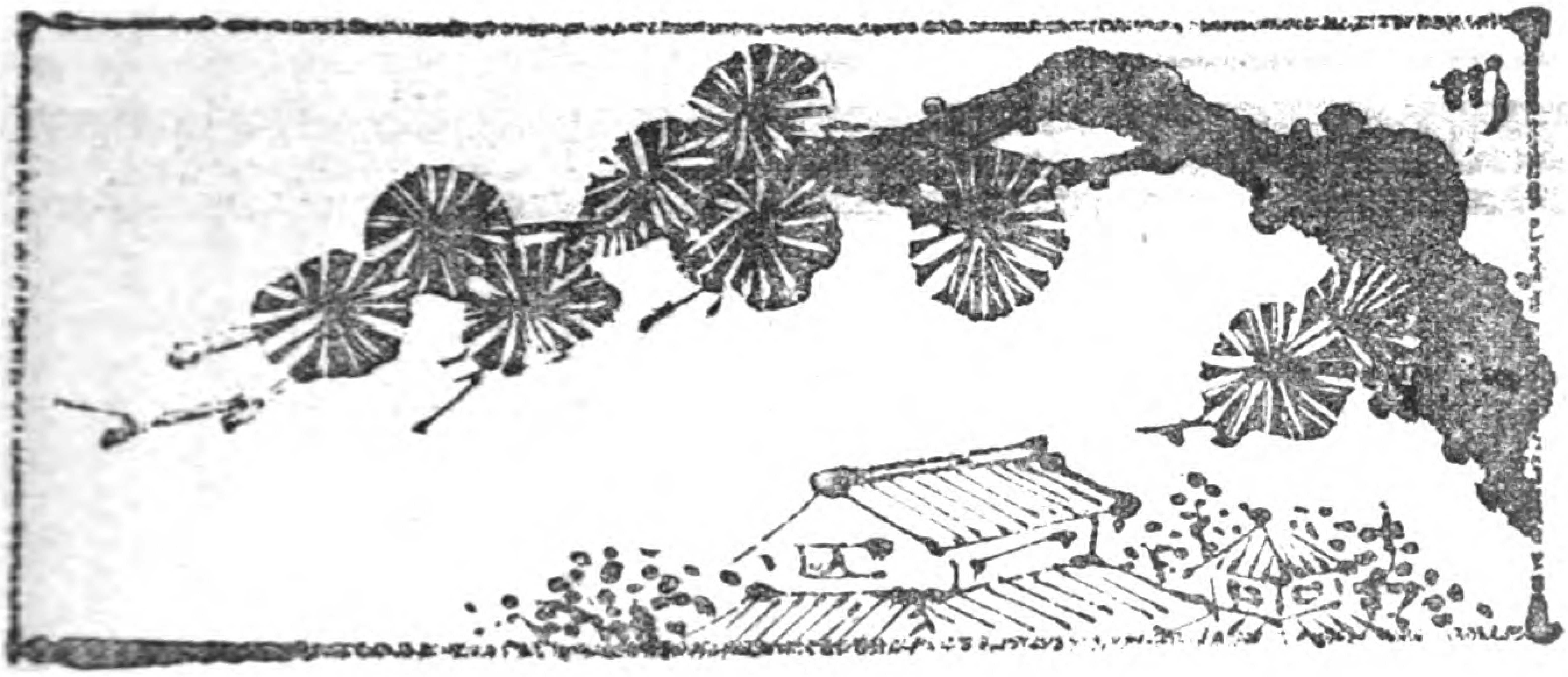
石川。そうですか?――(思ひついたやうに)いろいろありがとう御座んした。(同じく立つて、複雜な氣もちをこめて彼女を見る。)

彼女も見返す。

千代子。(次に野口へ向つて)失禮いたします。

野口。(ぶつきらぼうに)失禮。

彼女ドアの方へ行かうとする。石川と野口、べつべつな態度で立つたまゝ目送する。――キツカケに幕



影

佐佐木茂索

三村があまり默つてゐるので、細君が饒舌になつた。
「ほんとにくたびれてゐらつしやるのね。」
「あ。」
「頭が痛いのぢやない？」
「うん、まあ。」
「アスピリンでも召し上つたら？」
「うん、そんなでもないよ。」
彼は傍らの湯呑を口に持つて行つた。
「あら、そのお茶もう冷えたでせう。紅茶入れませうか。」
「ああ。」
細君が側の鐵瓶を沸くやうにし、紅茶の仕度をしに退くと、彼はほつとし、一度やめかけた茶を飲んだ。茶は冷く、喉に快かつた。

彼はさつき疲れた顏付で歸つた來た。玄關で帽子と外套を細君に渡すと、默つて書齋に入つた。ついて來た細君が茶を入れて話しかけた。

「今日は何處へ行らしたの？」

「方方散歩して來たよ。」

「さう。で、くたぶれた顏してゐらつしやるのね。方方て、何處へ行らしつたの？」

「竹中の所やなんか。」

その拍子に彼は細君をぎろつと見た。

「竹中さんとこ？　さう。何か變つたことあつて？」

細君から目をそらせて、三村は默つてゐた。それで細君が饒舌になつたのだ。

紅茶の仕度をして來ると、まだ細君は饒舌だつた。ねぼりはぼりするやうなのが三村をだんだんいらだたせた。しまひに彼はいつた。

「あまりしやべらないでくれ。」

それだけいふと次の言葉がむつと口をついた。「書齋は默つてゐる所だ。」

細君は不意打ちに、急に泣きさうな顏になつた。そして默つて次の間へ退いた。三村はちよつと耳を澄して、細君が泣いてゐやしないかと思つた。が泣聲は聞えなかつた。暫くして細君が雜誌か何かの頁を繰るのが聞えた。

三村は自分で紅茶をついで飲んだ。

その晩中、彼は書齋に籠つて、長い手紙のやうな、或は小說ともつかぬものを書き出した。書き終つたら彼はそれを

細君に見せる決心だつた。細君の讀み方一つで、彼は竹中にも讀ませる覺悟だつた。恐らく竹中にも見せるとになりさうな氣がした。

細君に讀ませる時に、かう注意するつもりだつた。

「これは竹中から俺宛に來た手紙だ、そのつもりで讀むのだよ。いいか。」

――書き上つたのは、次のやうなものだつた。

此間は失敬。その挨拶は君の方でも或ひはするかもしれないが。

此間僕が書いた紹介狀は、まさか使ひはしまいと思ふ。よしどのやうに必要でも、もう君には僕の書いた紹介狀など使ふ氣はないだらう。君の歸つたあと僕の家でどんな事が起つたか、それはもとより君の知る筈のないことだ。だがその起つた事も、あのあとの君の心の中の變化よりはずつと輕いものだことは僕も知つてゐる。それくらゐの推察は僕にも出來る。しかし一應は僕の心の中で起つたことと、並びに僕の家で起つたことも、君に知つておいてもらはうかとも思ふ。がそれを知らせる前に僕は先づ最初、こんな話をしたいのだ。話の中のBは君で、Aは勿論僕、かもしれない。

先づしたい話の大略は

かうだ。

BがAの所へかねて賴んでおいた紹介狀を貰ひに行く。

Aは將棋をさしてゐる。定跡の本を見て熱心に稽古をしてゐる。Bが入つて行つてもやめない。Bの話を上の空で聞いてゐる。Bが「此間賴んでおいた紹介狀を貰ひに來た」といふと、Aはやはり將棋をさしながら「あゝさうか、明

來てゐるから持つて行かうかと思つてゐたのだ、つい序でがないから失敬してゐたのだ、此紙入に入つてゐる筈だ、持つて行つてくれ給へ。」さういつて將棋盤に氣をとられたまま、大きな紙入を懷中から出し、Bに渡す。

B紙入の中のものを盤の上に出す。そのとたん、紹介狀だの手帳だのの間に、挾まるやうにひつかかつてゐた女持の腕時計が落ちる。「や、壞れはしなかつたかしら。」B思はずさういふ。同時に、ある氣のついた顏をする。それで、「あとは要らない返すよ」と紹介狀だけ取つて、紙入をそつくり、その中に時計も入れてAに返す。

A時計の落ちたとたんに、將棋盤から目を離してひよいと見る。險惡と困却の混つた表情。その顏はBも見る。傍にゐたAの細君も見る。Aの細君、ついと立つて部屋を去る。

A、Bの顏を見ぬやうに部屋を去る。便所に行つたらしい。Bも廊下へ出る。

暫くしてAが部屋へ歸つた頃Bも別の廊下から便所へ行く。便所の中で思案する。

その歸り、部屋の前を通りながら、BはAに「さやうなら」をいふつもりになる。そして中からも「さやうなら」とおとなしく返事をしたら、「失敬した」と詫びて、「いや」とでも返事が聞えたら、默つて歸るつもりになる。

Bはさういふつもりに便所の中でなるが、しかし、さやうならといふとたんに、中から「莫迦」と怒鳴るかもしれない氣がして來る。「莫迦」といはれたら、「失敬」とはいへなくなる。くわつとしてあやまれなくなるかもしれない。で、「さよなら」の代りに、「失敬した」といはうかしらと思ふ。それでも「莫迦」と怒鳴るかしら。さう怒鳴りさうにも思へ、怒鳴らなさうにも思へて、Bはちよつと迷ふ。結局默つて歸らうかとほぼ決心する。

だが部屋の前を通りすがりに、BはAの返事の待てない速度で、「さよなら」といひ棄てて歸つてしまふ。

Bは迂闊でAを信じ、A夫妻を全然そんなことのない夫婦と信じてゐたので——まるでそんなことは考へてさへもゐ

なかつたので、こんな芝居をしたのだ。多少考へてでもゐたら、手早く時計は隠し、Aの細君に見せなかつたに違ひない。
――これがざつとした話だ。だがこれを讀んで君は、何をいつてゐるのだと嘲くかもしれない。君が何をいつてるんだと嘲くことは、此際は一先それでいいとして、僕はも一つ、今度はお伽噺を君に見せやうかと思ふのだ。何故僕が次のやうなお伽噺を書く氣になつたかは、あの日君の歸つたあとで、妻の誕生日が明後日だつたといふ事に偶然氣が付いた結果なのだ。お伽噺と書いたが、勿論これはお伽噺にはなつてゐない。お伽噺のやうに、目出度し目出度しとは行きさうもないからだ。大人が見ると何處か莫迦莫迦しいやうなところが、或ひは幾分お伽噺の資格を備へてゐる點かもしれない。ともかく王様と女王様とを出して來やう。

これがお噺だ。

むかしむかし王様が女王様を悦ばせやうとして、時計を買つて歸りました。不意に見せて悦ばせやうと、王様は時計を紙入にひそめて置きました。ところが或る日隣りの國の王様が遊びに來て、紙入をひつくりかへして、時計を落つことしました。側で見てゐた女王様は、女王様の知らない女持の時計が王様の紙入から飛んで出たので、顔色を變へました。

女王様は王様の計畫を知りませんでした。王様が自分を悦ばせる爲にそつと買たものだとは知りませんでした。それで腹を立てて隣りの國の王様が歸つてから、王様に訊ねました。

「さつきのは何でございましたか。」

「あれはあなたの誕生日のお祝ひです。」

「こんなことおかしいには極りません。お祝物が何故殿下紙入の中に入つてゐるのでせう。」

「それは差し上げる前に私の愛情を時計に移しておきたかつたからです。」
「まあ、ずうずうしく御辯解なさいますね。」
「さう誤解されては閉口です。明後日はあなたの御誕生日ぢやありませんか。その日にちやんと函に入れて、美しく飾つて差し上げやうかと思つてゐたのです。」
「それでは今函を見せて下さい。」
「函ですか。」
「ええ、函です。」
「函はありません。私が自分であなたの手に飾つてあげたかつたからです。その方が近頃の流行です。」
「ほんと？」
「信じて下さい。」
「では信じますわ。」
「ではといはずに信じて下さい。」
王様はやつとほつとしました。函に入れるといつたり、自分で直接腕に飾つてあげるといつたり、王様はしどろもどろでした。その度にかいた汗を王様はそつと拭くと、王様はやさしく女王様に囁きました。
「どうですか。これからシネマでも観に行きませうか。」
「まあうれしい。」
女王様はもう薔薇色の頬をしてゐました。

——これも何を莫迦なと、君は吐き出すかも知れない。實際僕にしても、何を莫迦な、だ。女王樣が果してさう信じたかどうか、それは王樣にも分らないが、だがこんなことは分つても分らないでもいいのだ。その場がそれで過ぎてさへしまへば、それで充分なのだ。王樣と女王樣との間の事なのだから、さういふ性の爭ひは、とにかく過ぎてしまへば、それでいいのだ。

こんなお伽噺はこれだけにしておかう。これ以上續けると君が腹を立てて、この手紙を破つてしまひさうだ。でお伽噺の代りにAの獨白といふのを君に聞かせてあげやう。

以下は獨白だ。

困つた事だ。妻の前は何とでもいへる。おそらく妻は自分の辯解を信じてくれるだらう。信じなくつてもかまひはしない。信じた風をしてゐてさへくれればそれでいい。萬一信じた風さへしてくれないでも、それでもかまはない。妻は信じてゐると自分で信じて居ればそれでいいのだ。

妻は何とでも片付く。だからそれはそれでいい。だが困つたことは、それを第三者が見てゐたことだ。第三者の目にとめてならないことを第三者が目にとめたことだ。あの男は何と思つたらう。それが知りたい。それが唯一の心配だ。あの男はあの時確かに顏色を變へた。だがさう思ふのは僕の迷盲だらうか。僕が狼狽しすぎて見そこなつたのだらうか。さうでないやうな氣もし、さうであるやうな氣もする。

實際僕は狼狽した。思ひがけないものが飛び出したので驚いた。どうしてあんなものが入つてゐたのだらう。あの人がそつと入れておいたのだらうか。そんな筈は決してない。何のはずみで入つたのだらう。それが分らない。だから不意を打たれて僕は狼狽したのだ。出來るだけ落ち付いてゐたつもりだが、あの男は僕の表情をよもや見落さなかつただ

らう。

誰でもないあの男の前であつただけ弱つた。あの男は僕や僕の妻を信じてゐる。それはあの男があの男自身とあの男の妻とを信じてゐることによつて分る。

信じることの篤かつただけに、何故あれが紙入の中に入つてゐたかと考へ出したら、あの男はおそらくその疑ひの中から一生抜け出さないだらう。そんなところのある男だ。偶然何かのはずみだつたと考へてはくれさうにもない。どうしたらその考へをひるがへさせることが出來るだらう。

こんな困つたことはない。

――君にはこの獨白は不愉快かも知れない。おそらくさうだらう。勝手なことをいつて、而も何處となく寛恕を乞ふやうな調子がたまらなくいやかもしれない。君はいちづに此獨白は卑怯だと退けさうに思へる。さうだらうか。さうでないだらうか。

では僕も君のやうに正直にならう。あの日君が部屋の外でさよならをぶつつけて歸つてしまつた以上、僕も君が時計を見た瞬間、驚くべく顔色を變へたことを見たと告白しやう。あの瞬間の君の顔色はいつまでも僕の限に烙きついてゐる。それ故にあの顔色の裏を僕が説明することは充分必要なことに違ひない。

次はBの心持の

推察だ。

Bに見覺えのある時計だ。見覺えがある以上の時計だ。どうしてそれがAの紙入に入つてゐたのだらう。この小さな腕時計がいつも何處にあらねばならないか、それはBの知りすぎてゐるところだ。人もあらうにAの紙入にまぎれこん

影

でゐるといふのは、何といふ意外な——

Bはこの可愛らしい時計一つで何を考へることでも出來る。それがAの紙入から出たからは、猶更考へなくていい事たで考へられる。

B「これは妻の時計だ。大事にしてゐる時計だ。」

それがAの紙入に入つてゐたのは、どういふ機會に入つたのだらう。腕時計を外す機會——それはいろいろある。腕時計を外してそれがAの紙入にまぎれ入る機會、それはどんな機會だらう。

腕時計を外すからは、おそらくもつともつと他のものも外したに違ひない。足袋のこはぜも外したらう。帶止のぱちんや？、それから——？

こんなことを考へてもいいのだらうか。

BはAの側に一瞬もゐられない心持になる。Bは息をはずませて歸る。歸つたら妻を散歩に誘つてみやうとBは考へる。ちよつと服裝をととのへる必要のある散步、例へば芝居でも觀に行くか、御飯でも喰べに行くか、さういふものに誘つてみやうと考へる。BはBの妻がさういふ外出の時に必ず腕時計をすることを知つてゐる。妻は果して腕時計をするだらうか。腕時計をしてくれればいい。だがしてくれなかつたら、——

Bは考へる。若し妻が腕時計をしてゐない時、その時の自分の態度はどうであるのか、それが定らなければ、試みることはあまりに怖すぎる。

といつてぢつと默つてゐられるかどうか。

Bはひよろひよろと歸宅する。そしてBはどう決心していいかその晩中考へる。多分はその翌日も考へる。

――以上の話はどうだらう。相變らず面白くないかも知れない。たかをくくりすぎてゐるから讀む者の、つまり君の腹を立てるかもしれない。しかし同時にこの通りの經過をとつたと君は苦笑するかも知れない。

苦笑するかも知れない？――確かに君は苦笑したのだ。苦笑したからこそ僕は次のやうな事を君に述べることが出來るのだ。そして今日この手紙を君に送るのだ。この手紙があの日直ぐ送られずに今日書かれたといふことは、勿論昨日次のやうな話があつたからであり、その話が生れたのは、君の苦笑が豫見出來てゐたからだ。

僕は昨朝ゑる子さんの里を訪問した。さうして、ゑる子さんのお母さんに面會を求めた。ゑる子さんに就ての火急の用事だと云つたら驚いて直ぐ會つて下すつた。

僕としては隨分困つた話だつたが、正直に一切をお母さんにお話した。僕は面罵を覺悟してゐたが、愚痴らしいものもお母さんは洩らされなかつた。で、僕は力を得て云つた。

「ですから事は急です。どうか病人になつて下さい。」

「病人に？　と、申しますと？」

尋常の手段でゑる子さんを呼出さうとしても、君がゑる子さんを出さない事は分り切つてゐる。だから僕はお母さんに病人になつて貰つたのだ。そして、お母さんの手紙を、あそこの女中に持つて迎へに行つて貰つたのだ。あの女中は、君も見知つてゐるし、從つて、まさか假病だとか、こんなからくりがあらうとかは思つてもみないだらうから、一番安全な名手段だつたのだ。果してゑる子さんは直ぐ驅けつけて來た。ゑる子さん自身、本當にお母さんが急病だと信じて驅けつけて來た位だから、君は今でもまだ謀計だつたとは考へないだらう？　君のやうに、ぢつと一つの疑ひに凝り固る男を相手には、こんな事も必要だつたのだ。

かうして僕はやつとゑる子さんに會ふことが出來。どうして急に會ふ必要が生じたかを告げることが
る子さんは、時計の話をすると全く色を變へた。時計を君が見たのだと云つたら、――

まあそんな事は、どんどん端し折つて行つてもいい。

ゑる子さんは、時計を何處かで落したもの、紛失したものと思つてゐたさうだ。君から貰つた時計だけに、隨分氣にはなつたが、そのうちに君に落したと告げるつもりだつたのだ。まさか僕の紙入れに飛び込んでゐやうとは――――君は勿論、僕も、當のゑる子さんさへ、氣がついてゐなかつたのだ。恐ろしい偶然かも知れない。さう、偶然だらう、それ以上に意味はつけたくないのだ。――

ゑる子さんは、お母さんの看病の名で、今日も實家にゐる筈だ。だが明日は何處にゐるか、それは此手紙を今日君が讀むゆゑに、告げるわけには行かないのだ。

話は飛ぶが、ゑる子さんのお母さんは、事穩便にといふお願ひだつた。そしてそれは、恐らく君の肚でもありはしまいか。さうだらうと僕は推諒するのだ。が、それなら、何故君を焦らだたせるやうな手紙を書いたのか。或は敵にせずに濟むかも知れない君を、無理にも敵にせずにはゐたいやうなことをしてしまつたのか。それは勿論ただ僕の君に對する不思議な憎惡からだ。ゑる子さんを許さうとする君の態度、――ひいては僕を不問に附さうとする君の態度、そんなものが、やけに僕の反感を呼んだのだ。誰が許されてやるものか、といふ氣に嫌でも僕はなりたくなつたのだ。同時に、嫌でも君が許し兼ねるやうに仕向けてしまひたくなつたのだ。その心もちが、僕をして、もうゑる子さんを君のところへは歸さない決心にしてしまつた。さうとなると、君の態度も一變しやしないか。寧ろこれを此際は望むのだ。

さうさう、僕は昨晩こんな夢をみた。もう此上夢の話なんか澤山と云ふかも知れないが、夢の話だつて何だつて、僕はしたい話しをするのほかはないのだ。

夢の話だ。

……闇の中から松の新芽が匂つて來た。

木立の向うに自働車が待つてゐた。その灯を目あてに玄關を出て來たのだが、僕と彼女は途中で横へそれた。肩に松葉が擦れた。

「なぜこちらへお曲りになつたの？」

「何故てこともないんですけど、ま、もう少し歩きませう。」

松林を出ると、顏に痛い砂埃りが吹きつけて來た。砂に顏をそむけた拍子に、二人はまた松林の中へ引返した。

「ぢや歸りますか。早く歸つてお母さんを安心させた方がいいでせう。」

「ええ。――あまり安心もしないでせうけど。」

「さう、およそ安心とは反對なもの――」

僕は突然現れた君の鼻先へ、ゲンコを突き出した。

「これが僕のテーマだ。」と云ひながら突き出したのだ。すると君がカミを僕の鼻先へ突出した。

「これが俺のテーマだ。」と云ひながら突き出したのだ。と、今度は僕がハサミを突出す。君がゲンコを突き出す。僕がカミを突出す。君がハサミを突出す。僕がゲンコ、君がカミ、僕がハサミ　君がゲンコ、――

僕がもどかしがつて、ピストルをいきなり机の上へごとんと抛り出したのだ。そして叫んだ。

「俺のテーマだ。」

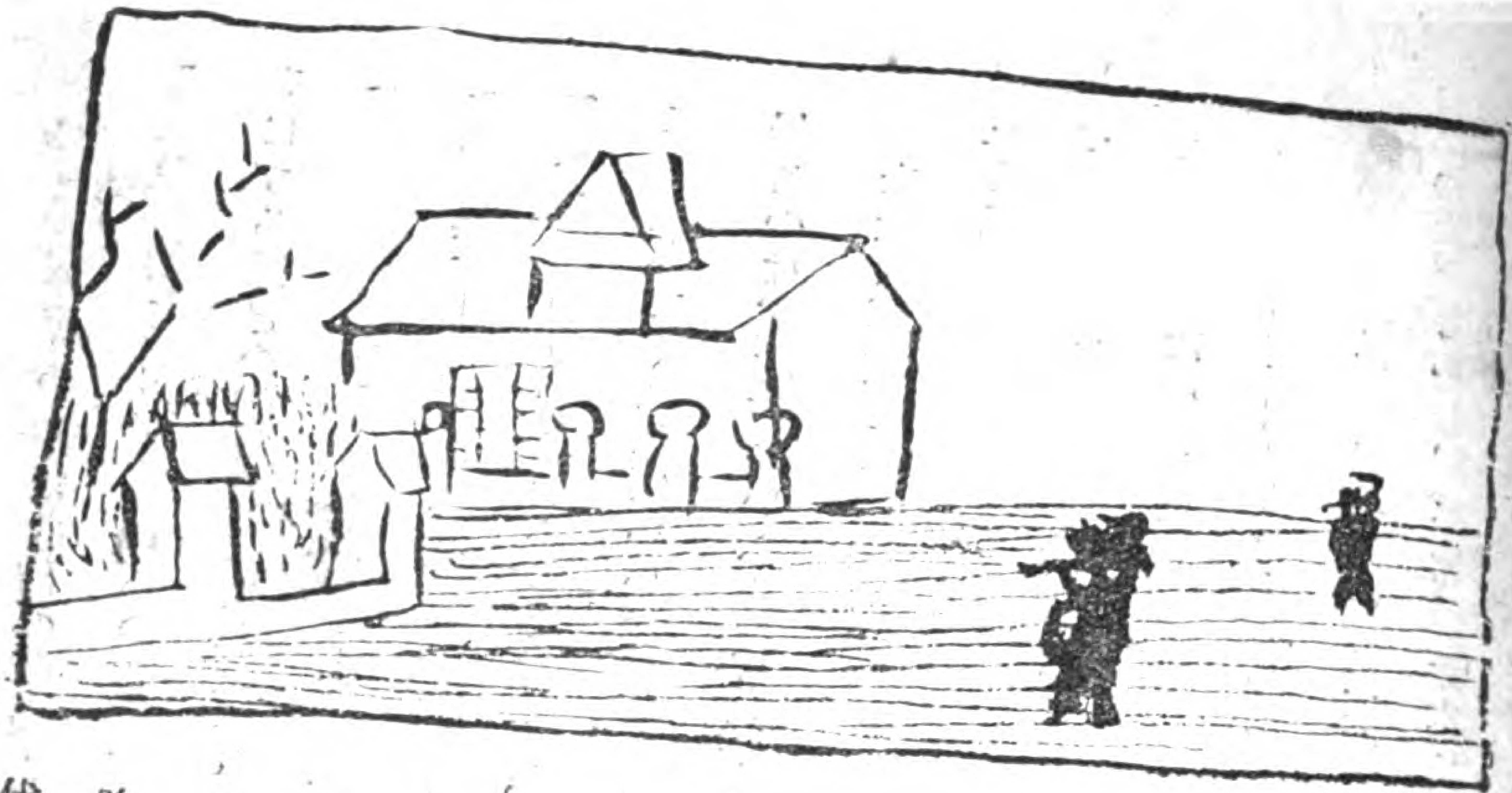
同時に君もピストルを抛り出して、怒鳴つた。

「これが俺のテーマだ。」

――そこで目が覺めたのだ。が、必ずしも、そこで目が覺めなくてもよかつたのだ。君がピストルを握り直し、僕も握り直したところで、目がさめてもよかつたし、兩方で引き金に指をかけたところで覺めてもよかつたのだ。が、本當は、そこで覺めてもよくなかつたのだ。指をかけただけでは、ゲンコがカミになりカミがハサミになるのと同じで、結局勝負はない譯だ。引き金を引き切つてしまはなければ、――それでなければ、目が覺めても仕方のないことだつたのだ。

では引かうか。ではさよなら。

――五、十、――



この三つのもの

佐藤春夫

一〇

○停車場から出た赤木清吉は、もうほどその案内を知つてゐる道を、北村の家へ急ぎつつあつた。それを待ち兼ねてゐる筈のお八重に對して、北村の返事を傳へてやらなければならない役目を彼は果さうとしてゐた。

くつきりと晴れ渡つて風もない小春日の路には彼と一緒の汽車を下りた人の二三の俥が彼を追ひ越した外は殆んど人通りもなく、こののんびりとした路の片側には、昨日もそれを見て樂しんだ古城の石垣と濠とがある。さういふ平靜なところを赤木は平靜な氣持で歩いて行つた。寧ろ輕快な足どりであつた。一つにはこの天氣のせゐでもあつたし、また一つには永い間、その胸に蟠つてゐた美代子との問題も昨夜でどうやら埒がついたからでもあつた。それは兼ねて清吉が豫想したとほり、美代子は既にその決心でゐたのだから、只、双方で言はないでゐたことを改めて言葉に出しさへすればいいやうなわけのない自然な經過で進んだ。どちらにも大した未

練も執着もなかつた。ただ悔恨に似たやうな心持と切なさとはあつた。さうして彼女も彼もその爲めに眠れなかつた。しかし、彼等の間には何の問題も殘つてはゐなかつた。ともかくも一とほりの事情を述べた上で彼女の家に預けてある彼の荷物を引取るぐらゐの仕事が殘つてゐるだけである。それとても半分以上は彼女自身で計らふのだから、彼には苦にするほどの問題ではなかつた。彼女は困つた不しだらな女ではあつたけれども、ぐづではないだけにさういふ場合には普通の女よりてきぱきしてゐた。さういふ點が、頼もしいところでもあり、また哀れでないがために未練を起させないのだ――赤木は、美代子をさう考へながら、同時にお八重のことを思つてゐた。北村の返事がお八重にどんな心を與へるだらうかといふことである。激しい驚愕と悲歎とでなければいいが。北村のいふとほりわけなくあきらめて運命に屈從してくれればいいのだが。赤木自身のためにさうしてお八重の爲めにもそれを希望した。北村のそばにお八重が居るのは、北村のいふとほり決して幸福なこととは思へないのである。

赤木は漠然とした感じを抱いて、それ以上には深く考へなかつた。考へることが出來なかつた。彼はその前夜は美代子との會合のために、前々夜にはお八重に呼び起されたが爲めに、一晩ともほんの朝二時間ほど眠つたばかりで、その上に休まるひまのない物思ひをやつと解決した彼は、齲齒の痛みが治りかかつた時のやうな安慰と疲勞と、また物憂い快感に似た心持とを持つてゐた。その快感は、彼がお八重を幸福にすることが出來、またお八重が彼を幸福にすることが出來るだらうといふ朧ろげな前途の希望につながつてゐるのも爭ふことは出來ない。

赤木自身は、北村の言ふが如くにお八重が彼を間もなく愛するだらうとは思はなかつた。それほど強い自惚れはなかつた。しかし、平常、赤木を親しいものに思つてゐるお八重が、赤木といふ人物を何かと相談相手にしてゐるうちには、時を經て自づと彼に多少の愛を感じて來るだらうと思へた。さうして彼の來訪を。この時。[illegible]

疑問であつても多分拒むことだけは無いだらうと思つた。またそれを拒みさへしなかつたならば、更に歳月を經過するうちには全く彼を深く愛するやうになるだらうとも信ぜられた。それらの事を赤木は別に詳しくは考へてみたのではないが、赤木の心臓にそれだけのことが自然と湧いてゐた。さうして赤木は、北村がお八重と別れて、しかし當分お八重のためにこの町へ家を一軒用意してやるといふならば、赤木も北村の勸めるとほりこの町に來てお八重と近いあたりに住んで、朝夕親しむといふことはいい方法だと思つた。北村もやはりここに住むといふし、また大野がここにゐるのだし、それにお八重が好きだといふのも尤もなほどここは靜かないい町である。

赤木は改めて路の周圍を見た。いつの間にかあの廣い濠端の路は通り過ぎてゐて、屋敷町に來てゐた。樹の多いこのあたりの庭には折からの好晴に人を怖れない小鳥が來てゐて、ふと赤木が見上げた時には、何か茶つぽい鳥が大きな欅の樹の枝に遊んでゐた。一瞬間赤木は、かういふ靜かな庭を持つて、そこでお八重と一緒に年老つたならば幸福だらうと思つた。くつきりと道に落ちてゐる自分の影を見つめながら、その時、赤木はふと父の鐵吉からの手紙を思ひ出したので、ポケットへ手を入れてみた。やつぱり忘れずに持つて來てゐたが、それは美代子の家へ宛てゝ清吉に寄せたものである。手紙には、大阪からの清吉のハガキを見て海を渡つて先づ故郷へ歸ると思つた息子がそのまま上京したために、鐵吉は殘念がつてゐる。

――その地には諸友人及び美代子も居ることとなり、久々の對面にて定めし樂しからむと存じ候。然し、故郷には老父母さびしく待ち居り候。道順ゆゑ先づ一度この地へ立寄るものと思ひ、それならば天氣變らず浪靜かなるうちと思ひ電報をうたせ候ところ、宿よりの返事にて上京の由を知り申し候。そのまゝ東京に居つかず、なる可く早く是非一度お歸省の上面白き旅行談聞きたくと老爺初め皆々待ち佗び候…………

とあるのを、昨夜、美代子の家で開封して讀んだ時には清吉は、父に氣の毒に思つた。先づ[illegible]事ばかりではない。そのうち再び歸省した時に、先づ聞かせるものは樂しい旅行談ではなしに、美代子を離別したといふ報告でなければならなかつたからだ。それもただ離別したのではない。最も話しにくい理由で別れなければならなかつたのだから。さうしてその理由といふはきつと父の鐡吉には他人事ならず感ぜられるに違ひない：：………

赤木の輕快な氣持は、彼の手がその上衣のポケットのなかの父の手紙にふれた時にいつの間にか失せてしまつた。赤木は急にその考へから逃げるやうに急ぎ足になつたが、北村の門が見えるあたりに來た時に氣づいた事には、彼はお八重に傳へるべき返事を、どういふ風に言ひ出したがいいかをまだ考へゐなかつたのである。それは有の儘をいふより外はないのだけれども、それを出來るだけお八重の胸に强烈な刺戟にならないやうに取次ぎたかつたからである。しかし結局は有の儘を述べるより外にはないのだ。

ガラスの這入つてゐる格子戸を開けて

「御免」

と言つたまま、しかし別に取次も待たずに、赤木は靴を拔いで玄關へ上つた。慌てて出迎へた小さい女中に赤木が、

「奥さんは？」

と尋ねると、彼女は默つて二階へ上つて行つた。そこにお八重がゐることがわかつたので、赤木もつゞいて階段を上つた。――氣のせゐか、この家全體に氣が滅入つてゐて、女中もその空氣に感染してゐるやうなのを感じながら。

お八重は赤木の聲を聞きつけると立上つた。赤木は階段の中ほどから、廊下を歩いてくるお八重を見た。お八重は立ちとまつて赤木と顏を見合せた時、笑顏をつくつた。

「日向ぼつこをしてゐたんですねえ」
赤木は廊下のやや奥の方に一枚待ち出されてゐる座布團に目をとめてさう言つた。
「ええ」
お八重はうなづいて活潑げに答へた。さうしてその座布團を座敷へ運ばうとするのを、赤木は制しながら、
「そこにゐらつしやい。」
赤木は自分でも座敷の座布團をとつて、お八重のゐる日向の方へ運ばうとすると、女中はそれを受取つた。お八重は自分の敷いてゐたものを一層奥の方へ引き直すと、女中の持つて來た別の一枚をその向側に並べた。さうして自分で立つて煙草盆と煙草とをそこへ運んだ。それから自分で下へおりて行つて茶を用意して來た。彼女は赤木が案じたやうに默然としてゐるやうには見えなかつた。
彼等は座に落着いたけれども、しばらくふたりとも何も言はなかつた。
「赤木さん」お八重が口を切つた「わたし、何もかもわかりましたわ。ほんとうにわたしは馬鹿だつたのです」
赤木は默つてお八重を見た。お八重は平靜な顏つきをして笑つてゐたが、その口もとが酸つぱいやうな表情に見えた。
「わたし、あれからずつとひとりで考へてみたんです」
お八重はつづけてさういつた。お八重はやはり笑顏をしてゐたけれども、赤木は顏をそむけながら言つた。
「さうですか。然うです――やつぱり……」
「さうして結局どうなるんでせう。北村は何か言ひましたか」

「え。いづれ、今に一汽車ぐらゐおくれて來て自分で詳しく話すさうですがね。……駄目なのです。お雪ちやんのことはともかくとしても、どうしてもあなたとは氣が合はないから、今のままではお互に不幸だと北村は言ひ張るんです。氣に入らないところがあるならいくらでも直すと言つたと言つても、直させるやうな點も別に無いと言ふし、氣の毒だとは思はないかといふと、それは氣の毒とは思ふけれども、どうも仕方がないといふのです――奥さん。今だから言ふが、許して下さいよ。僕はね、お雪ちやんと北村との事は、もう先から知つてゐたのです。そいつを貴方には言はずにゐたのです。しかし北村と一緒になつてあなたに隱してゐたと思はないやうにして下さい。僕はね、……ただ、そんなことがあなたにはいへなかつたのだから。一昨日それをあなたが尋ねた時には、僕は随分困つたのです。隱したくはないし、言ひたくはないし、あなたが自分で氣がつくなら仕方がないがと思つて僕はあんなあやふやな、一時のがれな事を言つたのです。知つてゐながら僕はシラを切つてゐたのだから、北村の味方をしてゐたと思はれても仕方はないのだが……」

「そんな事を思ひはしませんわ。誰だつてそんな事が言へるものぢやありませんもの。――今から考へると、私に氣がつくやうに、氣がつくやうに言つて下すつた方が外にも随分あるんです。それをわたしが馬鹿でみんな氣がつかないのだから、そのことを考へるとわたし皆さんにもほんとうにきまりが悪いのですわ」

見るともなしに窓の外を見つめてゐた赤木は、お八重がいかにも面目なげにさういふのを聞いてお八重の方に眼をうつした。彼女はまるで彼女自身が恥かしい行ひをして今それを詰られてゐるかのやうに、端然として首を垂れてゐた。

「馬鹿な！」と赤木は言つた「君がそんなことであなたを笑ふものか！　そんな事は氣がつかない方がいいんですよ。夫を信じてゐたことが何で恥しい事なものですか。信じられてゐるのをだましたながか恥しいのですよ。――それや北村

も そんな事を言つてゐた。あなたには氣の毒で濟まないつてね。」

北村は實際は赤木にそんなことを言ひはしなかつた。しかし、赤木はお八重の爲めにさういふ一語を言はずにはゐられないのを感じた。お八重が返事をしないので赤木は言ひつゞけた――

「それに北村は、あなたにはお禮も言つてゐた。お八重がゐなかつたならばおふくろやおやぢだつてあれほど手篤く介抱はして貰へなかつたらう。この點は重々感謝してゐるんだと――さう北村は言つてゐましたよ」

お八重は赤木の顏を見上げた。彼女は疑ふやうに赤木の顏を見上げた「本當に北村はそんなことを言ひましたか」

赤木は、北村のその言葉に反つて感謝してゐるらしいお八重を心持のうつくしい女だと思ひながら、同時にお八重の語氣や句法が子供じみてゐるのを感じた「本當も噓もあるもんです。ハ、ハ、ハ。だつて北村が言はなけや、そんな事を僕が知つてゐる筈はないさ」

「噓です――わたしには何にも出來やしないのです。ことにお母さんの時などは北村がさせてはくれないのです。でもわたし北村のお母さんや、お父さんは好きでしたわ。」

お八重はさう言つてその時、始めて涙が出たらしく鼻をすすり上げた。

赤木はもうどう言つていいかわからなくなつてしまつた。さうしてやつぱり北村に早く來て貰ひたいと願ふばかりであつた。

お八重は言ひつゞけた「わたしはもうひとりで考へて、覺悟はしてゐるんですわ。北村がいやだといふのなら別れるつもりです。わたしは本當に北村がいつもいふとほり馬鹿なのだから、考へればそれでもよく我慢をして北村が今まで置いてくれたと思ふ程なのです」

「お雪はそれぢや、あなたより賢いだらうか」赤木はお八重を慰めるといふよりは、寧ろ座にゐない北村に對して怒りを感ずるのであつた。

お八重は赤木の言葉には答へずに、膝頭へぽたぽたと涙を落した。さうして別にそれを拭はうともしなかつたが、しばらくすると彼女はほとんどふだんやうに氣輕な句調になつた。

「それや、お雪は氣に入りですもの。きつと氣が合ふのでせう。それにお雪はわたしよりずつと賢いんですよ、第一、そんな事があつてもけぶりに一つ見せはしないぢやありませんか。それがわたしにはどうしたつても判らないのですわ。もし、そんな事でもあるのなら、少しは氣が引けてわたしにだつて遠慮をしさうなものぢやありませんか。それが少しもないのでせう。わたし、それを考へると、北村よりはお雪の方がずつと憎らしいのです。かういふのが嫉妬といふのかも知れませんけれど。そこへ行くと北村の方はわたしにもわかりますよ、お雪とそんなことになつてゐるものだからわたしが嫌いなばかりではなく一つはそれで氣がさして、わたしに口を利かないのでせう」

「さうだ――北村は、そのことは自分でもそのとほりに言つてゐましたよ」と赤木はお八重の句調がいつものやうになつたので話しやすくなつた。

「それに」とお八重はだんだん口輕になつて來た「わたしにはわからないことがもう一つあるのです。お雪にはちやんと橋といふ人があるぢやありませんか。それを北村が知つてゐるぢやありませんか。わたしも今までに本當は、時々お雪と北村との事を考へないではなかつたのです。それでも橋さんのことを考へると、いつも打消してゐたのです。それぢや、お雪は一たい橋さんのお雪ですか。北村のお雪ですか。わたしにはどうしてもわからないのです」

「僕にもわからない。多分、兩方のお雪でせうよ。世の中はあなたにはわからん事だらけだ」

赤木はやつと重苦しい言葉つきから脱れて、日ごろの自分の言葉になれるやうな氣がした。
「お雪はそんなにひどい女でせうか！」お八重は驚きの目を見張つた「わたしは、自分の妹ながらあきれてしまいます。そんな妹を持つたのも耻しいようですわ」
赤木はお八重といふ女を今まで以り更に珍らしい人に思ひ出した。これだけに己の感情をあけつ放して端的な言葉でいふことを、普通、女はしないものである。それにお八重の話しぶりのなかには遊里で育つた人が、仲間の情事を噂するやうな好奇的で氣輕な自由な調子と、同時に世間知らずの單純とが綯ひ交ぜになつてゐた。北村は飾氣のないお八重のかういふ一面を、或は馬鹿だとも、薪雜棒のやうに粗野だともいふのだなどと赤木は思ひながら、それが却つて赤木には眞實で可憐に響くのであつた。
暫くの沈默の後にお八重は言つた「さうして、北村はどうしてもお雪とは別れられないといふのですか」
「それがです。お雪のことはともかくもとしてどつちにせよ、あなたとは別れるといふのですよ」
「どういふ點が、それぢや、わたしが惡いのでせう」
「それが」言ひかけて言葉につかへた拍子に赤木は血の氣が顏にほてるのを感じた。彼は以前に時々、不意に顏が赤くなる癖があつた。その癖をしばらく忘れてゐたと思つたのに、今突然、北村と彼とが昨日語つた性的生活に關する論題を思ひ出して、それはお八重に傳へることが出來ないと思つた瞬間に、思はず顏が赤くなつたのである。ほんの一瞬間ではあつたし、それにさういふ點にかけては觀察の鈍いお八重が別に見咎めもしないと思ふと、赤木は急いで後を言ひつゞけた「それが僕にもよくわからないのです。君にも解るまいと言つたきりで北村も深くは言はないのだから──今に、當人が來たら、あなたが直接聞くのがいいでせう。──ただ、あなたが惡いのではなく、北村自身が惡いやうなこ

とを言つてゐました。北村は一たい、あなたの惡い事の理由は殆んど何も言はないので……だし
い點もよく知つてゐるんだ。それでゐながらあなたとは氣が合はないといふのだから、その一點張りなんだから
の事困つてしまふんです。」

「ほんとうに」お八重はさう言ひかけて、赤木の顔を見上げた。眼にはまた涙が浮いてゐたが快活さうに笑つて、それからまるで他人ごとのやうに言つた「ひどくまあ嫌はれたものですねえ。お八重さんもまるで台なしだわ」

「フ、フ、フ」自分の悲しみと闘はうとしてゐるお八重の努力に對して酬ひるつもりで赤木も、仕方がなしに笑つてから「さうさう。何でもあなたがひどく忘れぽくていかんやうなことは言つた」

「さう？それは本當なのですよ」お八重は急に眞顔になつて素直にそれを承認したが、「わたし、どうしてだか何でも忘れてしまふんです。その上がみ〳〵言はれたり叱鳴られたりすれば、も二そうろたへてしまつて、なほのこと解らなくなつてしまふのですしねえ」

「それはさうでせう。……」

「……さうして北村は、わたしをどうしようといふのです。――わたしは、つまりどういふことになるのでせう」

「別れるといふことにして、北村のいふにはです、當分の間は、あなたには別に家を一軒持たせて、子供の世話をしてゐて貰ひたい。自分も子供の父親としては時々出かけては行く。しかし夫婦といふ關係はきつぱり打切つてしまひたい。その方が却つてさつぱりとして、あなたともつき合へる。さうしてあなたの友達にも相談相手にも、それは喜んでなるといふのです。――尤も、あなただつていつまでもさうして居るわけに行くものではないから、その點はゆつくり考へる、といふのが先づ北村の希望なのです。しかしあなたも北村のいふことばかり聞いてゐなけやならない事はない

と僕は思ひます。今にもうすぐ北村も自分で來るといふのだから、さういふ事に[illegible]」

「だつて、わたしは北村とは何にも口を利けないのです。北村だつてわたしには何も打解けては言ひませんよ」

「それは今までの事です。この場合になつては北村も何もかも充分よく言ふでせうし、あなただつても思ふだけの事は北村に言はなけや……」

「さうね……」

お八重は考へ込んでしまつた。それから再び獨言めいて言ふのであつた、

「北村の言ふとほり、きつぱりさういふ風にきめてしまふ方が、今のやうなことをしてゐるよりは、それやずつとさつぱりしますわ」

赤木が返事をしなかつたので、お八重はまた暫くしてから同じく獨言めいて言ふのであつた、

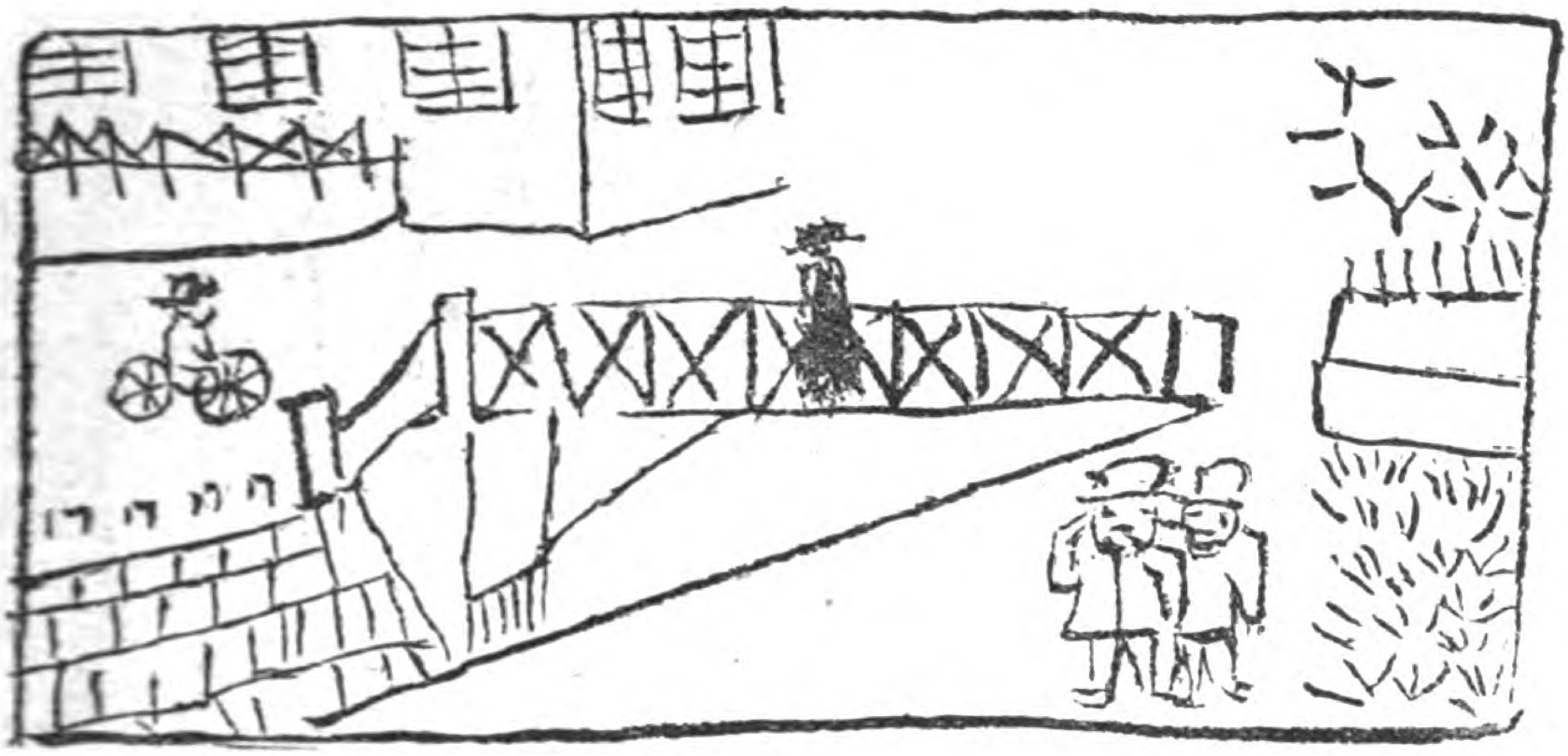
「ただ、わたしは百合子のことを考へるのです。でも北村が追ひ出しさへしなければいいのでせう。わかりませんわ。考へて見て下さいまし。赤木さん」

お八重は顏を上げて赤木を見つめた。わたしは、今は別にもう北村とどうしても一緒にゐたいとも思ひはしなければ、やつぱりこのままここにゐるやうな氣もするんです。一たいどうす

重は目を細めて眩しさうにそれを避けてゐる。

昃が動いて今まで柱の影にあつたお八重の顏には、斜に日が射してゐる。お八

そのお八重の顏を赤木は先づ凝乎と見た。



秋の一夜

廣津和郎

多分羅紗でも擔いで賣り歩く、と云つたやうな事をしてゐる露西亞人に違ひなかつた。大きな體軀をして、毛もくじやな顏の中に、人なつこい、無邪氣な眼を光らせながら、蜜柑をさかなに日本酒を飲んでゐた。露西亞人なのに日本酒を飲んでゐる、而も蜜柑をさかなにして、といふ事が、正吉の眼をへんに引きつけた。恐らく、それ程金を持つてゐないのだらう。その時分は革命で露西亞から逐はれた人々が、日本に澤山流れ込んでゐた頃だつた。先づ日本に來て、それから亞米利加に——彼等はそんな順序を取つてゐたらしい。けれども、日本まで來て、亞米利加に行く資力を失つてしまふものは、横濱あたりの勞働街にごろごろしてゐるといふやうな事を、正吉は新聞や雜誌で讀んで知つてゐた。そしてさういふ事が、正吉に一層この露西亞人に對する好奇心を持たせたのだつた。

酒の飲めない正吉はその露西人からさう遠くない、片隅のテーブルに腰をかけて、珈琲を飲んでゐた。珈琲を飲みながら、彼はその露西亞人の方を、始終注意し

て見てゐた。指の背にポツポツと毛の生えてゐる、肥つて丸つこい大きい手で、不器用に蜜柑の一袋づゝを、口に持つて行つて、ちゆうつと汁を吸つては、その後からぐいと日本酒を飲む、といふよりも呻る。そして周圍のテーブルにゐる日本人の方を、人なつこい眼でちらりちらりと見てゐる形が、大變孤獨さうに見えた。

正吉の後の方のテーブルに、彼がこのカツフエでよく見かける野幇間（のだいこ）の清幸がゐた。頭をくりくりに剃つた四十五六の、如何にも幇間らしい様子をした男で、この近くのK花柳界で、相當の評判を取つてゐた男ださうだが、酒の上で始終客をしくじつて、今は座敷にも出られないといふ噂を、正吉は誰からともなく聞いてゐた。

『へい、今晩は。旦那、好い御機嫌ですな』そんな事を云つて、このカツフェエに這入つて來ては、少しでも顏見知りの客のテーブルに行つて腰をかける。――そんな風にしてまでも、酒の香にありつかずにゐられないと云つたやうな男らしかつた。

清幸はその晩は酒を飲ませてくれさうな客の顏が見つからなかつたものか、ひとりで卓子に腰をかけて、ちびりちびりやつてゐたが、うつかりして正吉がそつちを振向いた時、

『旦那知つてますぜ。旦那、あの節は。……へへへ、どうもすつかりお見それしまして、どうも』

そんな風に正吉に聲をかけた。酒の飲めない正吉は、にこりともしないで、そのまゝ面をそむけてしまつた。

『へへへ、すつかり白ばくれていらつしやいますな。知つてますぜ、旦那、例の何でげせう。そら、地内の、ほら、あすこをかう曲つて、右に行つて、何でさあ、あの妓（こ）が……旦那、どうもすつかりお見限りで……いや、どうも知らぬ欄八は恐れ入りましたな』

それから清幸は同じやうな事を繰返し繰返し正吉の後から呼びかけてゐた。――顏見知りの客のゐない時には、そん

な風な調子で、誰でも構はず話しかけて、結局振舞酒にありつかうといふのがいつもの

は、腹も立たずに苦笑してゐたが、併し同じ事をいつまでも繰返されてゐると、『僕は君を知りやしないよ』そんな事を一寸云つてやりたいやうな氣にもなつた。が、默つてゐた。

そこにどやどやと二三人の番頭風の客が這入つて來た。

『おや、これはお珍しい。お揃ひで』

清幸の鋒先はその新來の客の方へ向つて行つた。

『しやうがないな。又近頃しくじつてゐるんださうぢやないか』客の一人は、併し如何にも客らしい臆揚さで、清幸の言葉に應じた。『どうも君は酒の上がいけないよ』

それに力を得た清幸は、椅子を新來の客のテーブルの方へにじり寄せたらしかつた。

『えへへ、どうも。……』

それから何か大きな聲で、氣焔を揚げ始めたらしかつたが、正吉は別段聞いてもゐなかつた。

正吉はその晩雪子をたづねようかどうしようかと考へてゐた。

夕方、彼女から電話がかかつて來た。

『來て下さいます、今日？』

『ああ。――大概』

彼は一週間ほど彼女と會ふ機會を作らなかつたといふ事のために、彼女からの電話が重かつた。それで優しい言葉で返事をしたいといふ心持が一杯なのに、口から出る言葉は却つてぶつきら棒に不機嫌になつた。

『あのう……』雪子は一寸何か云ひ足りなさうで言葉を切つたが、『ぢや來て下さいますわね、屹度！』

『ああ。——大概』

『大概——は心細いのね』彼女は不服さうに云ひかけたが、どういふものか、そこのところで、『ほほほほ』と笑ひ聲を出した。

『どうしたんだい？』さう云ひながら、彼もその笑ひに感染して、何といふ事なく笑つた。

『では』

『ああ、それでは……』

それで電話が切れた。——彼は何かあつけらかんとした氣持だつた。が、自分よりも雪子の方が尙あつけらかんとした氣持がしたに違ひないと思つた。

それで暗くなると、外に出たのだが、併しそのまま足が雪子の家の方へは向はなかつた。正吉は神樂坂通の雜閙の中を、二度ほど往復した。十月末で、外套を著ないで出た彼には、少し空氣が冷つき過ぎた。それで肌のうそ寒さが少しづつ遠ざかつて行く事が兩方で解つてゐる女の家へ行かうか行くまいかと云つたやうな不決斷に迷つてゐる彼の心持を、稍感傷的にした。

彼は歩いてゐても仕方がないので、行きつけの今のカツフェエに這入つて、珈琲を飲みながら、兎に角時間をもう少し空費してゐたいと思つたわけなのである。

彼は先刻の電話で、雪子が急に笑つた事を思ひ出してゐた。不平らしい言葉が出かかつてゐるのに、急にそれを止して笑ひ出してしまつたところに、彼女と自分との心持の距離——そんなものを、彼女がはつきり感じてゐるところがあ

る。情熱的な言葉で不平を云ひかけて、ふとそれがもう何もならないのだといふ事に氣がついて、思はず笑ひ出したところに、物事が自然にこんな風になつて來てしまつてゐるといふ事をよく知つてゐる女の淋しみがある。

正吉はその淋しみがそつくり解る氣がした。彼は彼女といふ人間を好感をもつて、靜かに心の中で眺めるやうな氣持になつてゐた。始終心に疑惑をもつて、彼の一擧一動を推しはかつてゐるやうな性格の彼女には、戀愛は息苦しい苦痛そのものだつたのだ。

『ねえ、僕は前もつて云つて置くがね。お前の疑惑は或は何かを生み出すかも知れないよ。——人間といふものは、さうなつてから後になつて、やつぱりさうだ、自分の疑つてゐた通りだつた、と思ひたがる。併し人と人との心持の問題では、事實の豫感が疑惑を生むのか、疑惑がその疑惑通りの事實を生むのか、解らない場合が往々にしてある。往々どころか、始終ある。——お前が僕を試すやうな心持でゐるのと、試さないで信じてゐるやうな心持でゐるのとでは、僕の心持に與へる結果が非常に違ふ。試され疑はれてゐれば、試され疑はれたものは、信じられてゐるものとは違つた心的事實を經驗する。——そこはデリケエトな問題なのだ。刻々さうした心的事實を經驗してゐれば、時の重りの後には、はつきりした形の上の事實を生み出さないとは限らない』

『ええ、解つてゐてよ。でも……』雪子は輪郭の正しい、整つた顏の、若しその眼がもう少し頭腦の曖昧さか朦朧さを示してゐれば、女らしい美しさ、尠くとも柔さによつて、彼女の全體を魅力あるものにするに違ひないのに、餘りにはつきりした、人の心の底を覗くやうな鋭さを持つた眼であるがために、彼女の美人型の容貌全體を、固い感じにしてゐる——その眼で、じつと正吉の眼を見つめたが、——でも、仕方がないのかも解らないのね。氣がついてゐても、どうしてもさうなる性質なのね』

そんなやうな會話が時々繰返されて、そしてその會話のやうな事實が、だんだん二人の間に介在するやうになつてきた。三年の間に徐々にである。二人は聲を大きくして爭つた事は一度もなかつた。そして又正吉は彼女以外の女に心が移つて行つたといふわけでもなかつた。それだのに、次第に遠ざかつて行く心持を、彼女に對してどうする事も出來なかつた。

『先生、おい、奴さん、ひとりで淋しさうだね。えツ、先生奴さん』

おどけた聲で、さう云つてゐるのに、氣がついて見ると、番頭連のテーブルに腰かけて、大分さつきよりも醉のまはつて來たらしい清幸が、例の露西亞人の方へ向つて、しきりにこんな事を云つてゐた。

『お前さん、羅紗は賣れるかい、え、先生、ははは、日本語を御存じねえな。お前さん、蜜柑をちうちう吸つて、ひとりできこし召してるなんざあ、乙なもんでげすな』

その言葉に、その邊の客がどつと笑つた。テーブルの横に立つてゐる女給達までが、エプロンで口を押へて笑つた。露西亞人は何を云はれてゐるか解らないらしかつたが、清幸の表情や言葉の調子や、それから周圍の日本人達の笑ひ聲やで、兎に角からかはれてゐるといふ事は解つたらしかつた。人なつこさうな單純な眼を、少し嶮しくして、清幸の顏を見てゐたが、何も云はなかつた。

『先生、お前さんはひとり身でげすかい。今時こんなところに來て、ひとりぽつかり蜜柑をさかなに酒を飲んでゐるのは、この清幸と同じに宿なしなんだな。ははははは』

それ程惡意のあるといふ程の物の云ひ方ではなかつたけれども、彼の言葉に人々がどつと笑ひ、それにつれて、何を云はれてからかはれてゐるのか見當のつかなさに、次第に不愉快な表情になつて行く露西亞人の樣子を見てゐると、正

吉は清幸の方を振向かずにゐられなかつた。

『止し給へ。下らぬ事を云ふのは』

低い聲だけれども、舌打するやうな調子だつた。

『おや、いけませんかね。へえ』

『氣の毒だから止し給へ』

そのまま正吉は又もと通りに、向き返つてしまつた。

『おや、叱られた、おや、叱られた』

へんに調子を取つて、おどけた調子で尚も清幸がさういふと、番頭連の一人が、彼をたしなめるやうに云つた。

『ほんたうに下らない事はもう云ふなよ。ほんたうに氣の毒だよ、お前。たつたひとりであゝやつてお酒を飲んでゐるのは、どんなに淋しいか解りやしねえや』

『へえ、へ』

ぴしつと音がして、みんながどつと笑つたのは、多分清幸がへいつくばつた恰好をして、その坊主頭を自分の平手で叩きでもしたのだらう。

酒場の上の時計が十一時を指した頃、正吉は『さて』とひとりで呟いた。『さて』と呟いたけれども、それからどうしようといふ事は未だ心に決つてはゐなかつた。カツフェエを出て、雪子をたづねるのは、やつぱり心が重い。と云つて、そのまゝうちに歸つてしまふのは、雪子に對して、又別な意味で心が重い。

遠場に居た酒飲人が、テーブルを叩いて、女給を呼んだ。そして何か云つてゐたが、女給は勘定書を持つて行つた。[illegible]

西亞人は不機嫌な顏をして、又何か早口に云つたが、その言葉が相手に通じないので、そのまま默つてしまつた。そして勘定書をじつと見つめて、別段立上る樣子もなかつた。――『金がねえんぢやねえか』誰かゞそんな事を云つた。何となくさうらしいやうな樣子にも見えた。

酒場の男も女給達も、やつぱりさう思つたらしい表情で、少し緊張して來た。

『三圓七十錢ばかりなんですよ。困つちまふわね』係の女給は、他のテーブルの客の間にさう答へて、眉をしかめて、鉛筆で紙の間を搔きながら、苛々した表情をした。

正吉はその女給の名を呼んだ。そして彼女が近づいて來ると、小聲で、それを彼の勘定書の中に一緒につけて置くやうに命じた。

女給はうなづいて、露西亞人の側に行き、

『あのう、お歸りになつても、よろしうございます』と耳に口を寄せるやうにして、優しく云つた。

『…………』露西亞人は早口で再び何かを云つて、女給の顏を見てゐたが、急にその眼を正吉の方へ向けた。露西亞人の人なつこさうな眼は、正吉と眼を見合はせると、にこにこ笑ひ出した。正吉もにこにこ笑ひ出した。

『おう』そんなやうな大聲を出して、露西亞人はいきなり立上つて、正吉のテーブルの方へ來た。

『眼、よろしい。あなた、眼よろしい』

片言の日本語でさういひながら、彼は毛のボツボツ生えた人差指で、正吉の眼を指さした。

『これ、よろしい。あなた、眼よろしい』

突然のこの露西亞人の興奮した振舞に、正吉は少々狼狽し氣味だつた。彼は露西亞人の心持を掴まうとしてゐるんで

る中に、露西亞人は指で差してゐるだけでは物足りないやうに、いきなりその大きな兩手を正吉の頭にまはして、彼の眼を接吻した。その力の強い把握と、髯の感じと、酒臭い息とで、正吉は息づまるやうな氣がした。

『やあ、もう解つた解つた』さう云つて押し退けようとしても、大人に摑まつた子供のやうに、どうすることも出來なかつた。露西亞人は二三度眼に接吻を繰返して、それからやつと手を放したが、尚も、

『あなた、眼よろしい、眼よろしい』を繰返した。

正吉は多分、先刻彼が幇間を叱つたのと、それから時々露西亞人の方を見る彼の眼が、或同情に溢れてゐたのとで、淋しい露西亞人が、急に喜びに感激して來たのだと思つた。――彼が異邦人のために金を拂はうと申し出たといふ事いためではないといふ氣がした。

『ビール、ビール！』

露西亞人はテーブルを叩いて叫んだ。

『いや、僕は酒がのめないんです』

それだけの日本語が露西亞人には解らないらしかつた。

『金、ある、金、ある』

さう云つて、彼はポッケットから蟇口を出して、正吉の前に開いて見せた。何でも五圓札や十圓札がかなりの厚みに束になつて這入つてゐた。――正吉は自分のおせつかいが急に恥しくなつた。

『ビール、ビール』

『僕は飲めないんです、飲めないんです――これだけ止めようとする正吉の言葉に露西亞人は首を振つて――。

「金、ある、金、ある。――ビール、ビール」

女給がどうしませう、といふ顔付で、正吉の顔を見た。

「持つて來給へ」彼は云つた。

言葉が全然解らない露西亞人は、持つて來られたビールを二つのコップに注いで、その一つを正吉に渡した。

「僕は酒は飲めないんですよ」

正吉はそう云つても、言葉が相手に通じないでもどかしかつたが、構はない、飲んで見ろ、さう云つた氣が急にむらむらと湧いて來て、相手の突き出したコップに自分のコップを突き合はした。そして相手がぐつと飲んだ通りに、彼も一氣に飲んだ。

「ビール、ビール」

空になつたビール壜の底でこつこつテーブルを叩いて、新しく持つて來られたビールを、露西亞人は再びなみなみと正吉のコップと彼自身とのコップに注いだ。――構はない、飲んでやれ。正吉は相手のコップにコップを突き合はせて、再び一氣に飲んだ。

そんな事が續けさまに繰返された。飲めない正吉には、ビールは苦かつた。そればかりでなく、醉が直ぐまはつて來て、心臟が苦しくなつた。――彼は自分がどうしてこの露西亞人と急にこんなにしてビールを飲み始めたか、その心持が自分でも解らなかつた。彼は酒好きの友人を幾人か持つてゐた。さうした友人達と相對した場合でも、彼はいつでも彼等の盃を受けなかつた。それだのに、今はかうして、このひとりの異邦人から突きつけられたビールを、飲むといふよりも、呷ると云ふのが適當なやうに、後から後からぐい、ぐいと飲干してゐる。何杯のんだか、恐らく五六杯は飲ん

だらう。

體格の好い、酒ずきの異邦人は、殆んど壓倒的と云つたやうな態度で、後から後からとビールを注いだ。——頭が痛んで、醉のまはつて來た正吉は、テーブルの上に瞬く間に四五本空になつたビールの空罎を數へて、我ながら、その夜の現象が不思議だつた。——同情からか好奇心からか、ついうかうかとこの孤獨な異邦人の相手といふよりも、異邦人の心持のままに、自分の氣持を壓倒させてゐるといふ事が、へんに苦々しくさへなつて來た。

愉快になつて、何か矢鱈な感激に燥ぎ始めた露西亞人は、ひとりで歌を歌ひ出した。何かわけの解らない、濁聲(だみごゑ)の歌だつた。指でテーブルの端をぽんぽんと叩いて調子を取りながら、大きな身體を搖つて、髯の間から赤い口を開いて歌ふ。——熊が歌つてゐると云つたやうな感じだつた。

その歌が高潮して來て、もう唯夢中で彼が歌つてゐる際を窺つて、正吉は便所に行くふりをして座を立つた。——もうこれ以上のつき合ひは堪らない。さう云つた氣がしながら。

戸口のところで、目分量で金を摑み出して女給に渡すと、彼はそのまま往來に出た。十二時近い往來は、もう大分寂れてゐた。彼は生れてからそんなにアルコール性のものを飲んだ事はなかつた。彼は醉つた心持は、頭が朦朧となるもののやうに想像してゐたが、實際はその反對だつた。——その癖彼は足がふらふらしてゐた。そして『どつこいしよ、よう、どつこいしよ』そんな言葉が、いつの間にか自分の口から洩れてゐるのに氣がついて、苦笑した。

彼はふらふらした足取りで、どつこいしよ、どつこいしよ、と云ひながら、うちの方へ歸りかけた。早く歸つて寢床の中に潜り込みたいと思つた。

ところが、うちの門の前まで行くと、彼は再びふらりふらりとした足取で、今來た道を引つ返し始めた

『やつぱり雪子に合はなければ……』

そんな氣が急にし始めて來たのだつた。

『やつぱり雪子に會はなければ……』

彼は神樂坂に近い或屋敷町の、その附近に盛り場があらうとは思はれないやうな森閑とした町を、そんな風に口に出して呟きながら歩いて行つた。

『どつこいしよ、よう、どつこいしよ、やつぱり雪子に會はなければ……』

歩くにつれて、醉は益々まはつて來た。彼は十丁ほどの淋しい屋敷道を、最早ひよろひよろと云ふよりも、ころげるやうにして歩いてゐた。

雪子の部屋は玄關の直ぐ側にあつて、而もその室貸主の家の者達とは大分はなれてゐるやうな位置になつてゐた。往來に向つて窓があり、その窓には格子がはまつてゐて、そしてその窓の下に小さな溝がある、と云つたやうな位置だつた。

『落ちやいけない、落ちちやいけない』そんな事を呟きながら、彼は定まらない足許に氣をつけて、その小さな溝の向う側に、片足を跨いで、閉つてゐる窓の戸をこつこつ叩いた。

『どなた?』

『僕だよ、僕だよ』

『あら、あなた?』

直ぐに玄關の方へ立つて行くけはいがしたので、正吉も格子戸の前へ歩いて行つた。

『やあ』

雨戸が開けられると、彼は態と大袈裟にこんな聲を立てゝ、玄關に飛び込んで行つた。

『まあ、どうなさつたの？』

彼は返事をしないで、直ぐ彼女の部屋に行つて、そこの疊の上に突つぷした。

戸締りをした彼女が這入つて來ると、彼は『うん、うん』と唸り聲を出した。

『どうなすつたの、まあ、眞赤な顏をして……』彼女は彼の顏の側に鼻を持つて來て、『まあお酒をお飲みになつたのね？』

『ああ、露西亞人に會つたんだよ。僕が同情したんでね、露西亞人が感激したんだ。そ[illegible]も感激したんだ。――それで飲んじやつたんだよ』

おどけたやうに、こんな風に物の云へた事が、正吉には嬉しかつた。雪子に會ふ事の重[illegible]といふ[illegible]子に會ふ事の重さを彼女がすつかり知つてゐるといふ事を、更に再びこつちで感じなけれ[illegible]重の重[illegible]が夕方以來彼の足を鈍らせてゐたのだが、こんな風にして、遇然な事で、彼が醉つ拂ふ事が[illegible]、そん[illegible]風な重い氣分の關門を、輕く無事に通過させてくれたので、彼には嬉しかつたのである。

『水が欲しいな』

彼は一杯の水を飲んで、それから更に露西亞人の事、幇間の清幸の事をおどけた調子で喋つて、そして彼女を卷き込まうとしたが、ふと雪子を見ると、彼女は彼の心をためすやうないつもの眼で、彼をじつと見て[illegible]女が彼の話を少しも聞いてゐないといふ事がその眼で解つた。

『いけない、いけない』

彼は [illegible]

た。

[illegible]

『やあ』

雨戸が開けられると、彼は態と大袈裟にこんな聲を立てゝ、玄關に飛び込んで行つた。

『まあ、どうなさつたの？』

彼は返事をしないで、直ぐ彼女の部屋に行つて、そこの疊の上に突つぷした。

戸締りをした彼女が這入つて來ると、彼は『うん、うん』と唸り聲を出した。

『どうなすつたの、まあ、眞赤な顏をして……』彼女は彼の顏の側に鼻を持つて來て、『まあ、珍らしいわね。あなたお酒をお飲みになつたのね？』

『ああ、露西亞人に會つたんだよ。僕が同情したんでね、露西亞人が感激したんだ。そして露西亞人が感激したら、僕も感激したんだ。――それで飲んじやつたんだよ』

おどけたやうに、こんな風に物の云へた事が、正吉には嬉しかつた。雪子に會ふ事の重さ――といふよりも、彼が雪子に會ふ事の重さを彼女がすつかり知つてゐるといふ事を、更に再びこつちで感じなければならない二重の重さ、それが夕方以來彼の足を鈍らせてゐたのだが、こんな風にして、偶然な事で、彼が醉つ拂ふ事が出來たと云ふ事が、そんな風な重い氣分の關門を、輕く無事に通過させてくれたので、彼には嬉しかつたのである。

『水が欲しいな』

彼は一杯の水を飲んで、それから更に露西亞人の事、對川の淸幸の事をおどけた調子で喋つて、そして其の笑の中に彼女を卷き込まうとしたが、ふと雪子を見ると、彼女は彼の心をためすやうないつもの眼で、彼をじつと見てゐた。彼女が彼の話を少しも聞いてゐないといふ事がその眼で解つた。

『いけない、いけない』

彼は心でひやつとしたやうな氣持でさう呟くと、醉つた紛れのやうな形をして、彼女のからだに武者振りついて行つた。

『僕は倒れさうになつたんだよ、途中で』そんな事を云ひながら、彼は彼女に接吻した。

『まあ、それだのによく來て下さつたわね。――お慈悲でせう』

彼女は意地悪な微笑を浮べて、彼の耳もとで囁いた。

『何故そんな事を云ふの。何故。――』正吉は彼女を突つ放しながら、持つて行きどころのない苛立ちに、吐き出すやうに云つた。『何故そんな事を云ふの。云つてはならない事を何故云ふの？――さういふ言葉の影響で僕の氣持がどうなるか、そして又さうなつた僕の氣持の影響で、お前の氣持がどうなるか、それが何故解らないの。――莫迦、莫迦、莫迦……』

正吉はその一夜、非常な努力をしてゐたやうな氣がした。非常な努力で、こはすまいこはすまいと骨を折つて、やつと保つてゐたものを、その甲斐もなく、いきなり叩き壞されたやうな氣がした。腹が立つよりも、がつかりした、と云つたやうな氣がした。

『御免なさい。――解つてゐるわ。あなたのお氣持は解つてゐるわ。――でも』雪子はさう云つて、一寸默つたが、併し直ぐに笑ひ顔をして、『もう止しませうね、そんな話』

二人は喧嘩にはならなかつた。互に憐むやうな優しい顔をし合つた。

そして暫く何も云はなかつた。

『あたしね、母にいろいろな話をしたのよ、一昨日。――ほれ、あなたにお話ししてゐたでせう。母が上京するつて。一昨日母が上京して、本郷の親戚に來てゐるのよ。それであたしいろいろお話をしたの。この前の結婚の話だの、あなたの事だのを。――そしてあたし自分の身體の事も話したの。さうしたらね、三十を越して見なければほんたうの事は解らない、つて口では云ひながら、あたしの顏を不安さうにじつと見てゐるのよ。――そしてやつぱり第二の母だわね。今日手紙を寄越したんですよ。その中に、母は結婚しようかと思つてゐると書いてあるの』

『結婚をしようかつて?』

『ええ』雪子は底光のする眼の底に、一種絶望的な笑を浮べて、『あたしにはその氣持がよく解つたのよ。――今度母は上京したら、あたしと一緒に住はうなどといふ相談があつたの。つまりあたしに引取られようといふ相談が。――ところが、あたしの身體の事を聞いて、急に不安になつたんですよ。不感の女は男に愛されない、母はさう思つたのよ。…それで、母はあたしに賴つてゐられなくなつて、自分の身の始末を考へ始めたんですよ』

『…………』

『あたし第二の母だけれど、割合に大事にしてゐたのよ。今後も大事にしようと思つてゐたのよ。――でも、この世の中で、又夢がひとつ消えたわ』

さう云つて、雪子は靜かに笑つた。別段ヒステリカルな笑ではなく、おちついた笑だつた。併しおちついた笑だけに、それが正吉の胸にはぐいぐいと迫つて來た。

『莫迦だなあ、そんな事をお母さんに云ふ奴があるものか』

『さうよ。云ふ必要はなかつたのよ。――でも、たつた一人の慰め手と思つたんですもの、女の中で、母が』

『…………』

正吉はこの現實的な問題に、面と向つて、自分の心を裸かにして對させた。彼は彼と彼女との心持のかけ離れて行く事と、彼女の肉體とを關係させて考へるのが厭だつた。彼は他にその原因を見つけ出さうとしてゐた。けれども、他に原因があるとしても、併し何の理屈もなしに、彼女の女としての魅力が彼から消えて行つたといふ事の底には、この問題が一番深く横たはつてゐたに違ひなかつた。彼女の熱情的でありながら、溶け込むやうな氣持を經驗した事がなささうな性格、彼女の始終相手の心をためすやうな眼付、彼女の充されざる不滿から、苛立たしい氣分を相手に働きかけて來るあの感情の動き……それ等は今までも彼に取つて解つてゐない事ではなかつたけれども、併し何の繕ひ隱す事なく、それ等の原因を探つて見れば、彼女の肉體の缺陷といふ事にあるに相違なかつた。

正吉は今眞正面からその事實を見つめなければならなかつた。

『氣の毒な女だな。淋しい女だな』

二十七である彼女は前にも一度結婚したが、そしてそれは男からの熱烈な戀愛で彼女が動かされて結婚したのだつたが、間もなくその男と別れてしまつた。――それの原因もやつぱりそこにあつたのかも知れない。

餘り露骨な母親の態度は、彼女の口から聞くだけでも、不愉快な話ではあつたが、併しこの現實的な事實は、雪子に取つては、正吉などの想像以上に、致命的なものなのかも知れない。――女が男に從屬してゐる今の時代では。

彼は彼女の見てゐるうつろの底が測り切れないと云ふ氣がした。

その晩正吉は心の底から雪子を慰めなければならないと思つた。併し、情熱の瞬間に『やつぱりあなたはあたしのもの、やつぱりあなたはあたしのもの』と云ふ、追ひすがるやうな彼女の叫びに、彼は同じ言葉をもつて答へる事が出來なかつた。

彼が答へられたのは、彼の手の握力だけだつた。併し彼女の手を握りしめて、彼女がそれに取りすがるやうに握り返して來るその懸命の努力に對して、彼は唯のうつろを與へてゐるといふ自責の念を、どうする事も出來なかつた。

（五月十一日）

編輯だより

◇さしもに全世界の視聽をあつめた英國總罷業も、十三日の形勢ではどうやら妥協が成立するらしい。英國人は英國人以外の人々の想像の出來ぬ傳統の力が根強く動く。

◇文相は徹底的に思想を取締る。其第一歩として個人としての讀物までも文部省で定めてかかる。そして不良分子の一掃につとめるそうだ。歷代文相中、尤も反動的で、尤も時代錯誤の現文相は天下萬人の見て不良文相とする所、お自身はどう處決なさる。

◇東京市議總選擧に對し後藤子の一派が理想團とかを組織して市政革新に當るそうだが、それは見當違ゐであらう。今更市內策家の個々と結托するのは時代錯誤の太甚しきもの、金權の代表者、老人閥の代表、タマニーの別働隊と見られても辯解の辭があるまい。憲政會を中心とする市政革新聯盟一派も舊時代の論客のみ、空論家のみ、市民の要求を箝實に處理する誠意も手腕も毫頭ない。又、學者連の理想團も實力なくして一向まとまらない。もうすこし市民の信用ある、そしてブルジョアでない市政擁護の鞏固な團結が出來なくては駄目である。市民が信用しない。選擧を前にしての卽席團結では市民が信用しない。第一に打破すべきは今日の市議選擧法である。一級選擧なぞは一日も早く撤廢すべきだ。市民の負擔の大部分の市費は皆一級選擧民——特權階級者のために浪費されてあるのだ。歷代の市長に中產階級以下を標的とした計畫を誰が立てた。阪谷、奥田、後藤、中村、永田の總てが皆富豪の傀儡ではなかつたか。

◇福田德三氏は六月廿六日箱崎丸にてマルセイユ發八月二日神戸着の豫定。長谷川如是閑氏は五月十五日發大連、北京へ講演へ出かけた。

◇本社記者上村淸敏は北京、天津を經て目下上海へ滯在中である。

◇本社の電話は今後銀座四五五八番に變更しました。本社は小屋新築のため六月十五日までは京橋區南鍋町二ノ一（電話銀座三六八四番）の馬小屋みたいな所に移轉します。

◇本月本社より發行さるる圖書はマアシャル著大塚金之助譯第一卷「經濟學原理」。堀江歸一著「貨幣銀行外國爲替」下卷。菊池寬著「文藝當座帳」。武者小路實篤著「文學に志す人へ」。三宅やす子著小說「奔流」。鈴木斐子譯ヴィルドラック著「みつけもの」。故持地六三郎博士遺著「日本植民地經濟論」。長田新著「現代に於ける教育哲學の根本問題」。岸田國士著「言葉言葉言葉」。プハリン原著「唯物史觀」。谷崎潤一郎著「赤い屋根」

◇自然科學第二號が出來しました。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八拾錢	貳錢
半ヶ年	五圓六拾錢	但大號共 郵稅不用
壹ヶ年	拾壹圓廿錢	但大號共 郵稅不用

弊社改築中六月十五日迄京橋區南鍋町二ノ一（電話銀座三六八四番）にて執務致候

大正拾五年五月廿日　印刷納本
大正拾五年六月一日　發行

（價八拾錢）

東京市芝區愛宕下町一ノ一
編輯兼發行人　山本三生
東京牛込區市谷加賀町一ノ一二
印刷人
印刷所　秀英舍
東京芝區愛宕下一ノ一

發行所　改造社
振替東京八四〇二
電話銀座四五五八